# 女性改造

大正十[illegible]年十月一日發行
大正[illegible]三年九月[illegible]第三種郵便物認可



十月號

## 最新刊

# 舞踊理論

フランク、ティス著
永田龍雄氏譯

四六判特製頗美本函入
挿畫◆コロタイプ圖十二葉 ◆寫眞版圖五十六頁
定價四圓五十銭(送料二十七銭)

『泰西舞踊十二講』が緯度ならこの『舞踊理論』は經度である。西半球の舞踊の世界がこの二書に據つて始て東邦のキモノの踊の島人に紹介されるのである。新しい舞踊運動が各自に革新の烽火をあげやうとしつゝある今日舞踊藝術の秀でたる如斯き一學問は我等の學ばねばならぬ所である。譯文流麗、此の難解なる原文を璧の如く磨して些の遺憾なし。加ふるに艶麗豐富なる挿畫は惑瞑殊に深かるべし。新秋舞踊季節に入らんとする際、この書に依つて豐富なる人生の肉體運動の批判を養ふて置くことは、人生を愛し、藝術を慕ふ新人に缺くべからざるものである。

### 內容要目

第一部 藝術的基礎
1 舞踏と現實
2 限界範圍(彫塑術、繪畫、音樂、身振狂言)

第二部 舞踏美術の範疇
1 運動と韻律
2 重きものの克服
3 精神的舞踏の表情
4 三個の装飾問題

第三部 美學的原理の應用
1 美と醜
2 内容と形式
3 樣式

## 最新刊

# 泰西舞踊十二講

永田龍雄氏著

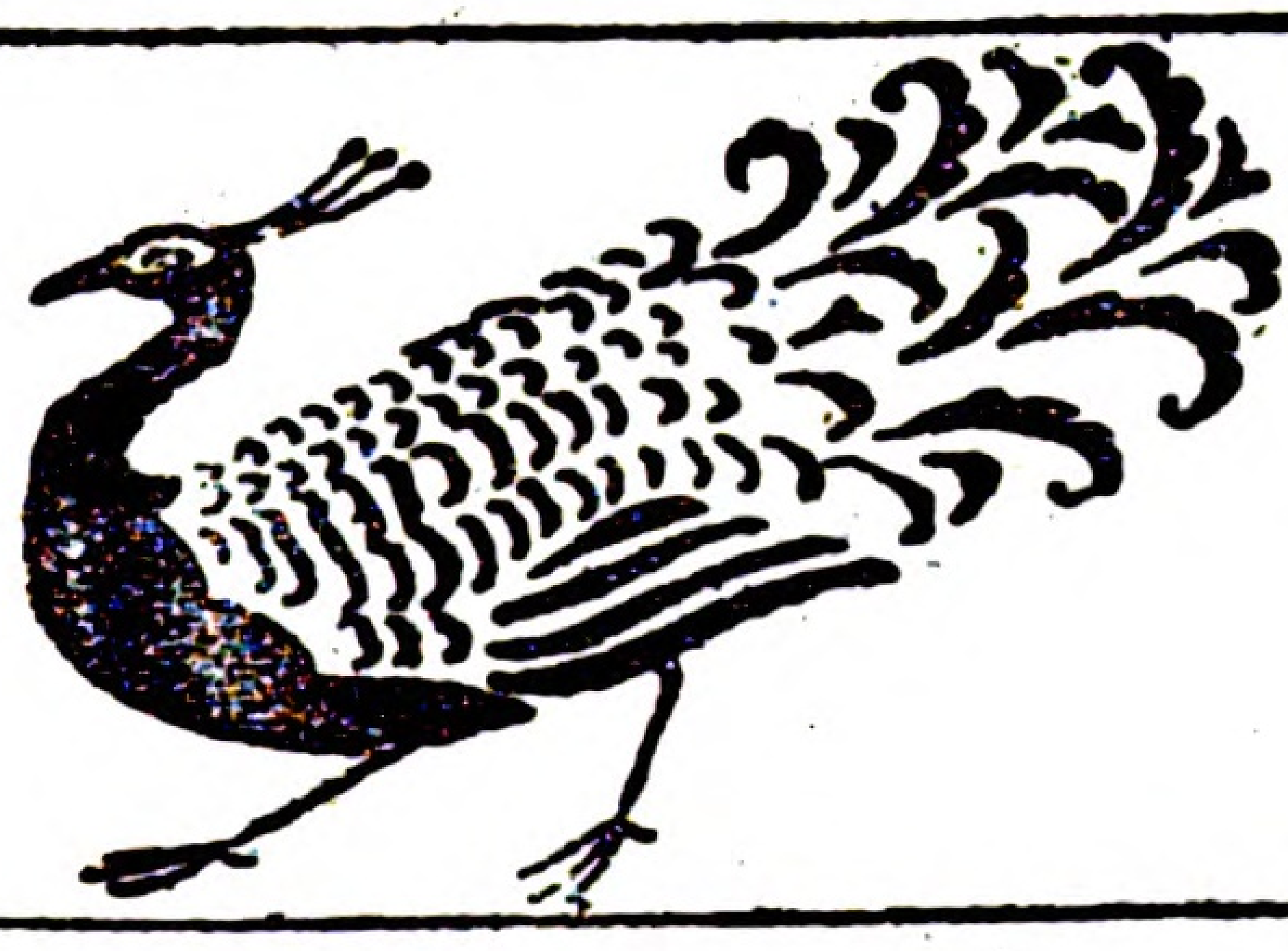
四六判特製頗美本五百頁函入
挿畫原色版一葉寫眞版三十二頁
定價四圓五十銭(送料二十七銭)

総ての世界に於ける舞踊藝術を網羅して美の認識の下に審かに、世界各國の特質の舞踊を描寫し、新しい舞踊の見方と味ひ方とを書いたのが本書の目的である。と同時に肉體の動く建築の釋明を企てたものなのである。藝術を愛さるる人々、その鑑賞家、泰西劇の研究者にとつては一讀缺くべからざる唯一の新著である。

### 內容要目

◇古エヂプト及ギリシヤの舞踏。◇ローマの舞踏。◇中世紀及び文藝復興期。◇舞踏の黄金時代。◇スペイン舞踏。◇イタリー舞踏。◇歐羅巴の民衆舞踏。◇東邦舞踏。◇暗黒時代の舞踏。◇ロマンチツク改革。◇露西亞帝室舞踏と其の事業。◇舞踏のテクニツク

發行 東京市日本橋區大傳馬町二丁目
振替東京一二一四六番
電話大手二七七五番
內田老鶴圃



# 女性改造十月號目次


□表紙　ジンニア……安井曾太郎
□口繪　モレーの秋……正宗得三郎


## 忠義孝道の新らしき觀念

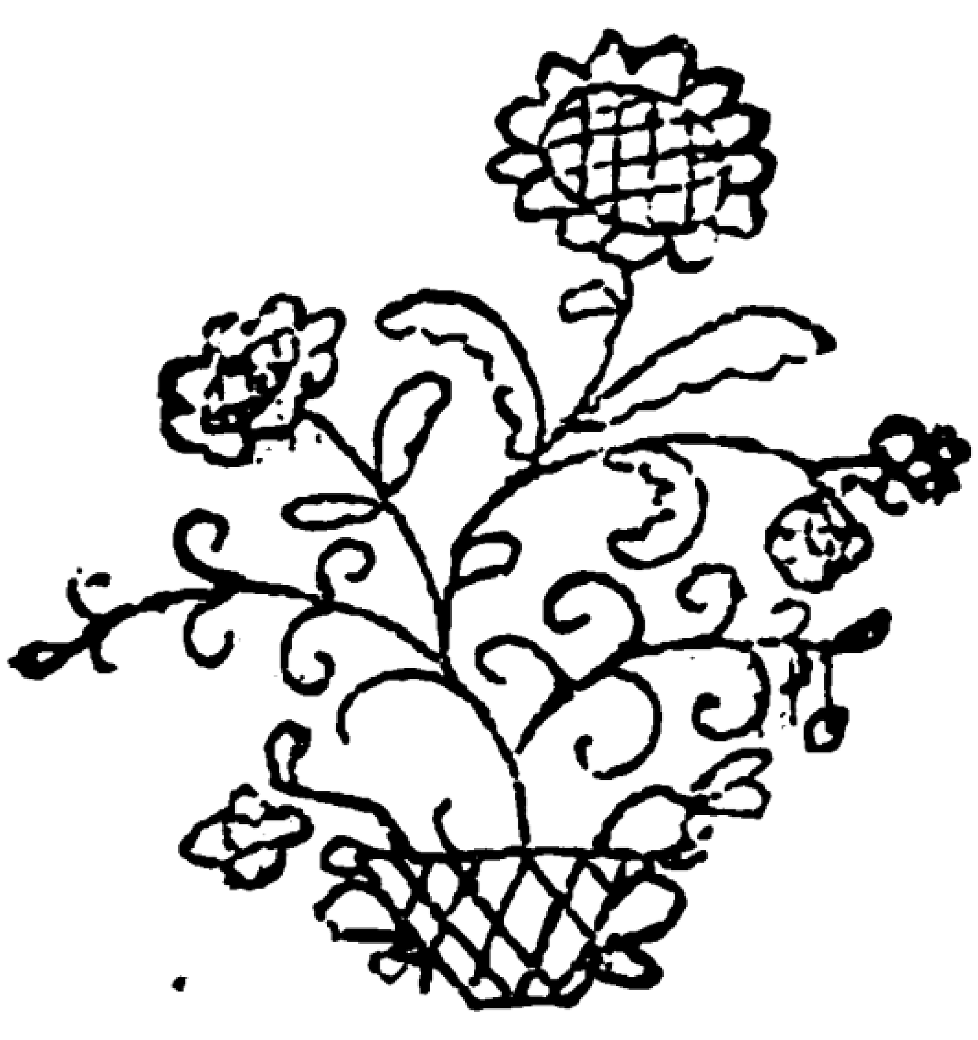

對人的忠義と社會的忠誠……長谷川如是閑…一
自律的要請としての忠義と孝道……土田杏村…一五


現代文明批評


母性禮讃……野口米次郎…二二
「重大なる結果」
婦人非解放論の淺薄さ……山川菊榮…三五
財政及行政整理の根本趣旨……高橋龜吉…四七


## 美術の秋


美術觀照の態度……中川紀元…五四
彫刻の觀照に就いて……朝倉文夫…五七
畫壇ギルド……木村莊八…六〇
日本に於ける洋畫の過去現在未來……山下新太郎…六五
現代日本畫の傾向……平福百穗…七〇





モレーの秋　　正宗得三郎



# 忠義孝道の新らしき觀念

## 對人的忠義と社會的忠誠

長谷川如是閑

總て生物が一つの集まりを成すと、その集まりは、必ず何かの刺激を受けて色々の運動を起す。蚊の集つた蚊柱を見て居ると、何百といふ蚊が空中に一團を成して、何かしら猛烈な運動を起してゐる。そして その一團が、塊りを成して、あ

ちこちと移動してゐる。これは、既ち、生物の集りが、各自の氣儘な運動に依らずに、互ひ互ひの、關係を以つて、群的に運動をしてゐることを示すものである。もつと大きい動物になつても、集團を成して生活してゐるものが多い。野飼の馬でも、やはり群をなして歩いてゐて、夜になると、輪を成して集り、周圍の敵をさうして警戒をするといふ樣なことがある。猿の類は、數百の群を成して、旅行をするといふことである。

蚊柱が移動する場合に、渦を成して飛んでゐる有樣を見ると、その運動を魁する小數の蚊が居る。即ち、一部が一方に移動すると、全體がそれを追つて集まる。羊や馬の群も、一二頭が一方に移動すると、全軍がそれを追ひ馳けて移動するのである。犬の群のやうな少數の群を見ても、全體が氣を揃へて、同時に同一行動を起すといふことはない。必ずその中の一つか二つが、或る運動を起すと、外のものはそれに雷動するのである。況んや數百の猿の群が、旅行する場合に、何か刺激を受けるにしても、全體が一時に、その刺激を感ずるわけはないから、先づ少數のものが刺激を感じ、それに依つて或る行動を起すと、他のものは、それに雷同するのである。さうすると、總て群生活をしてゐるものは、その一部に或る行動が起ると、全體が、それに雷同する性質を持つてゐることがわかる。大震災當時の、逃げ惑ふ群集を見ても、そのことは、よく判つた。方向に迷つてゐる群集の中から、一人二人、或る方向に、突進するものがあると全體は、喊聲をあげて、そちらの方に走つて行く。

そういふ風に、群が群的に行動を起す場合に、必ず少數のものが、特に一種の行動を起し、外のものは、わけもわからずそれに雷同すると云ふことは、恰度、蚊柱の行動に似てゐるのである。何うして、そういふ現象が起るかに就いては、群的性質の行動を考へて見なければならない。

もともと生物が行動を起すのは、生きやうとする努力であつて、單獨でも、無論さうであるが、群的の行動の場合も、

亦、群として生きて行くに缺ぐ可からざる行動をとるのである。元來、生物が、孤獨の生活をしないといふのは、卽ち、生きて行くには、一人で生活するよりは、群をなして生活する方が遙か有效だからである。弱い少い動物程、だから、多數が、群を成して生活する。强い大きい、動物でも、全く、孤獨で生活してゐるものはない。象の樣なものでも、獅子の樣なものでも、鰐魚でも、膃肭臍も大小の差はあるが、兎に角、群を成してゐる。ゴリラ等は、最も孤獨な生活をしてゐると云ふことだが、それでも、或る時機には家族的の群を作つて生活する。外界の境遇に、抵抗し、順應する爲には、群的に、組織を造らなければ、生存は六敷しいのであるから孤獨の生物は、外界の刺激に堪へられないので、早晩亡んで了ふのである。今日、生存してゐる生物が、悉く群的であるのは、そのわけである。

群を成して、生活をする時には、右に云つた如く、必ずその群の中の少數が、全群に先だつて行動を起すといふことがあるのは、その少數者が特に、外界の刺激に對して、まつ先に、ある反應を起すのである。牧場の馬が、夜、圓形を形造つてゐるのは、四方から、同時に來る敵を防ごうといふのではなく、寧ろ、どちらか一方から現はれた敵を、圓形の構に依つて、何時でも、どちらから來ても、直ぐと、感知することが出來る爲である。從つて、その場合には、敵が東から來たとすれば、その方向に立つてゐる馬が第一番にそれを感知し、その刺戟に依つて、直ちに反應を起し、まつ先に、逃げ出すのである。そうすると、外の方向を向いてゐた馬共は、敵の來たことは知らなかつたのであるから、無論、逃走しやうとする樣な、反應を、敵の爲に起すことはないのだが、同類の馬が逃げ出したのを知つて、わけもわからずその跡を追ふて逃げ出すのである。然かも、勝手な方向に逃げ出すことをせずに、必ず第一番に逃げた馬の跡を追ふのである。そこで全群が總て、一團を成して、安全な方向に逃げ出すのである。

若し、此の場合に、一二の馬が、同類の逃げるのに無關心で、ぼんやり、立ち止まつてゐたり、又は狼狽して、反對の方向に逃げ出したりすれば、その馬は必ず、敵の爲に滅ぼされるのである。つまり、初に反應を起した方向に、盲從する

ことが全軍にとつて尤も安全な生存法なのである。

即ち、行動は生存の方向に副ふものであり、郡的行動は、その尤も安全な組織の結果である。全體が一つの秩序だつた運動をとることの出來るのは、既ち、右の樣な、組織に依るのであつて、それは、既ち少數の最も早く刺戟を感じたものの行動に副ふて、多數が、盲從的に、行動を起すのである。「秩序」とは、即ち、さういふ郡的の法則を意味するのである。

秩序とは、それ故に、郡の行動を生存の法則に副ふて、進行せしむる組織である。支那人の「忠」といふ思想、西洋人の「義務」といふ思想は、共に此の秩序に忠實であることを指すのである。

然しながら、時々の組織の關係から、その忠なり義務なりが、右に述べた樣な、本來の性質に、遠ざかつたり、逆いたりすることがある。それは、つまり、その時代の組織が、本來の、社會的生存の秩序とは別な約束の下に組立てられてゐるからである。さういふ間違つた組織も、やはり、本來の社會的組織から出てゐることは、云ふまでもないが、それが變質して、反社會的となり、遂には崩壞しなければならない運命にあるやうな組織となるのである。

日本の忠義の觀念の如きも、變質的な組織の影響を受けて、その本來の性質とは、餘程變つたものになつてゐる。日本の忠義の觀念を、分析して見ると、色々の要素を含んでゐる。第一は、服從である。第二は、勇敢である。第三に、克己である。

服從、勇敢、克己といふことは、傳統的の觀念に依ると、それ〴〵絶對的の命令として、そのこと自體が、主權的に人間を支配する力の淵源であると考へられた。何に依つて、さういふ行動をとらなければならないか、といふ理由を求めることは、已にそれ自體服從の命令に反すると考へられた。一定の命令が先天的に人間の頭の上に、君臨してゐて、それに

盲從することだけが、人間的道德であると考へられた。今日でも、殆ど、その通りで、國民敎育といへば、或る無上命令を掲げ、それに絕對服從することを精神的に强制する方法である。

それは、恰度、南無阿彌陀佛又はアーメンといふ一種の護符を、何遍か唱へることに依つて、人間的理想を實現せしむるといふのと同じ樣に、忠とか、孝とかいふ、言語それ自體が、一種暗示的に支配してゐるのである。

斯樣な支配は、初めに述べた、服從乃至盲從的行動が發生した事情を見れば、その意味が理解される。群が行動する場合に、先づ刺激を受け、第一に行動を開始したものだけが、自覺的行動を起すのであつて、他の大多數は、無自覺に盲動するのであるが、その盲動が、少數の自覺者の行動に、雷同することに依つて 群的、即ち、社會的であり得る、といふ事情がある。此の事情は、實際、群の行動が、それに依つて、安全を得るといふ生存上の事實に立脚してゐるのであるが、生物の間に、さういふ運命の繰返へされた結果 一々の場合に於いては、必ずしも 生存の法則と合致しない事實として現はれることがある。例へば、前の馬の類でも 或る場合に 圓形を成してゐる馬の一頭が、病的妄想を起して 俄かに走り出して 反つて敵のゐる方に向つて行つた場合にも、全軍は必ずその跡を追ひかけて、群的に危地におち入るに極つてゐるのである。斯樣な場合に、他の少數の馬が、第一に走り出した馬は、病的妄想を起したのであるから、その跡を追つてはならぬと感じて立ち止つても、最早、全群は、その馬と同じに立ち止ることをしないで、依然として、前の運動を續けるに極つてゐる。從つて、若しこの場合に、馬に人間的意識があつて、全群に或る虛僞の暗示を與へて、それを一定の方向に導かうとする馬があれば、その馬は自分の思ふ通りに、全群を盲動せしむることを得るのである。

人間の社會に於いては、意識が特に少數の人間の間に、著るしく發達する結果、その少數人は、自己の意識に依つて、全群を盲動せしむることを得るのである。セーキスピアの劇で、アントニーが、ローマの市民を、自由自在に動かすとい

ふのもその一例である。昨年の震災で一部の人々の間に起つた鮮人來襲の虚僞の暗示が、關東地方の全人民を盲動させたのも、それである。

それらは、皆、一時的の例であるが、そういふことを、組織的に、秩序的に、やりさへすれば、そういふ盲動が、稍高級的の組織として成り立つのである。(無論、永久には成り立たないが。)古來、時々の社會が、それ〴〵いろ〳〵の暗示に依つて指導された盲從的行動の上に、組織の秩序を保つてゐたのは、その故である。

封建制度の如きはその顯著の現はれである。

日本でも、西洋でも、所謂、中世紀と歴史家の呼んでゐる時代に、封建制度といふ特殊の制度が成り立つた。これは、民族的の、稍大きい範圍の支配が崩れて、各地方の豪族が、武力に依つて、それ〴〵小さな獨立國を造つたのである。これは、各國共、極めて有力な組織として、可成り長い間、續いたので、その惰力が、今日に於いても、各方面に殘つてゐる。殊に道德や政治の方面に於いては、甚しくその餘波が響いてゐる。

この封建制度に依ると、社會の組織は、極端に變質的となり、封建國家といふ組織が、全く反社會的の基礎の上に組立てられてゐるのである。それは、恰度、一地方の山賊の組織が、その地方の百姓の組織と、全く違つた基礎の上に成り立つてゐるのと同じである。封建國家は、だから、往々、さういふ山賊が、膨張してそれを作つた例も少くない。

さういふ組織の下に於いては、道德は全く二つに別れる。一つは、封建國家の道德、即ち山賊的道德であり、他の一つは、社會的道德、即ち、百姓の道德である。

封建國家は、社會的生活の組織、即ち、生産生活を基從とした生活組織を持つてゐないものであつて、唯、全く戰爭と掠奪の組織を持つたものである。百姓の社會はそれと正反對に、生産の生活を基礎とした組織は持つてゐるが、戰爭と掠奪の組織を、全く持つてゐないのである。そこで、封建國家と、百姓の社會とは、生活の氣分と約束とが、全然、異つてゐ

る。前者は、社會的生活の根本であるところの、生產生活を、全く知らないで、唯、生產の社會から、生產物を取り上げる方法を、組織的に心得てゐるのである。だから、その組織の氣分は、少しも、生產的ではなく、全く、消費的で、物を作るために働かうといふ氣分は全くなく、他の社會が、働いて作つたものを、どう、享樂しやうかといふ氣分のみがある。從つて、その組織の約束——道德——は、掠奪の道德であり、又、享樂の道德である。「切り取り强盜は武士の習ひ。」といふのは、それを、極端に云ひ現はしたものだが、その組織は全く、さういふ意味で、成り立つてゐるのである。

掠奪の道德は、積極と消極の二面がある。積極的には、服從、勇猛、果敢等の、掠奪行爲そのもの丶道德である。消極的には、掠奪行爲を、餘りに破壞的の結果から、遠慮させる支配の態度、經國濟民等といふ道德である。德川時代の末期に、封建國家の浪費の結果、百姓が、非常に、疲弊して、至るところに、百姓一揆が勃發したが、その時に當つて、國家の側に、種々なる經國濟民の議論が起つた。そして、盛んに、封建國家の道德が鼓吹された。が、その道德は、決して、百姓の組織を、百姓自體の生活組織の上から、見たものではなく、恐く、封建國家が、いかにしたならば、百姓から豐かな收獲をとり上げることが出來るかといふことを講じたものに才ぎない。それは、恰度、養鷄家が、無暗に鷄を殺しては、玉子が獲られない。玉子を獲る爲には、鷄を保護する必要があると云つてゐるのと同じである。

今一つの戰鬪の道德は、更に徹底的に封建時代の、支配階級の間に成立したのである。それは、畢竟、社會生活から、一際の根本的なるもの——生產生活に關聯する總てのもの——を、捨て去り、その以外の生活の中で鬪爭行爲に關聯する一切のものを支持する道德である。

この道德は、世界の總ゆる國に於いて、民族國家が、崩壞して、或ひは併合的の帝國國家となり、又、分割的な封建國家となつた時から、非常に完全に成り立つてゐる道德である。その中でも、支那の儒敎は、その最も完全なものとして知

られてゐる。

孔子の道德は、一方で、誠に立派な人間的要素を含んでゐ乍ら、全體に於いて、孔子の時代の軍國國家の約束を基調とし、百姓の社會の道德とは、全く異つた、所謂國家道德から成り立つてゐる。百姓の生活を、禽獸に等しいと云つて見たり、農業を學ばうとする弟子を罵しつて小人と呼んだり、肘を枕にしてゴロ〱寢てゐる生活を賞讃したり、享樂生活が、小笠原流に發達した形式生活を賞讃したり、全然、享樂階級、消費階級、即ち、軍國々家的文化階級の意識に支配されたのである。

封建國家の忠義なるものは、已に西洋の學者も云つてゐる通り、一種の對人契約である。「私はあなたの家來になる」といふ場合に、相當の條件をもつて、約束する服從である。即ちそれに對して、主人は一定の生活上の保障を、家來に與へねばならぬ。この保障が與へられなければ、家來は、この契約を解除する權利があるのである。「君、君たらざれば、臣、臣たらず」とは、即ち、その意味である。

斯樣に、對人的道德の成り立つたのは、即ち、封建國家といふものは、極めて、不安なもので、土地と國家との關係が、全く薄弱で、今日は或る國を支配してゐても、他國に攻め立てられて、其處を追ひ拂はれると、何處か、他の國を攻め取つて自分の國家を、その遊つた土地の上で持續せねばならぬ。從つて、封建國家は、軍國的遊牧民であつて、軍隊組織の人間丈けが、一つの國家を成して居つて、土地は、常に移動してゐるが、又は、移動しても少しも差し支へないのである。

從つて、封建國家の道德は、土地―自然―と人間との執着又は人間社會の組織そのものよりも、寧ろ、個人同志の關係を、約束してゐるのである。だから、德川氏が三百年江戸を支配してゐても、江戸の土地、並びにその土地に定着してゐる町人と、德川氏とは、毫も必然の關係はなく、德川氏そのものは、一個の、軍隊的團から成り立つた一つの國家にすぎな

いのである。從つて、その國家の道德は、その軍國々家以外の人々を少しも拘束することは出來ない。

日本の現代に於いては、未だ封建道德が、强く在存してゐる。忠といふことが色々な意味で解かれるが實際に行はれゐる場合は、全く個人關係である。

政治家といふものは、支配階級の人々であるが、軍國々家の政治家は必ず個人的關係に於いて、忠義であらねばならなかつた。家康の家來である政治家は他の封建國家即ち大名諸侯、又は百姓の社會を眼中に置かずに、或はそれを破壞しても、家康の爲に忠實でなければならなかつた。さうしないと彼は謀叛人と云はれ、裏切者とよばれた。

さういふ關係が、今日の政治家の間に存在してゐる。色々の國家機關、又、公共機關等に働いゐてる人々も、決つして、その組織の生存事實に依つて行動しないで、自分達が互に關聯し、關係してゐる個人を目標として、行動する。それは官僚政治家でも、所謂、政黨政治家でも、皆、同じで、誰は誰の子分といふ關係なしでは、政治家として生命をつぐことは出來ない。

政治界のみならず實業界でも、教育界でも、甚だしきは學問界に於いてさへも、個人關係が命の綱であるといふ風が甚だしく存在してゐる。或る人が、それ〳〵の社會に、發展すると、しないとは、その人が何人の系統に屬するかに依つて定まるといふ樣なことが、到る所に在る。

忠義といふことは、かういふ時代に於いては、對人的である。Aといふ人の系統に屬する人間は、如何に全體の組織に對して忠實であつても、Aといふ個人に忠實でなければ、不忠者と呼ばれる。それと同じく、Aといふ人に忠實でありさへすれば、全體の組織を如何に傷つけても、忠義者であることに、差支ない。

これは封建道德の名殘りである。封建國家に於いても、此の個人關係は、稍廓大されて、個人からその個人の屬する家

にまで、轉嫁されたのである。即ち、家康に對して裏切つても、それが　徳川家に對して忠義であれば　一層、道徳的であると見られた。然し、これは　畢竟、個人的の意味に於いて變りはない。家康とか、徳川氏とか　特殊の個人的系統を目標として、社會的基礎に於ける、組織そのものを　眼中に置かない點で同じである。

服從、既ち特殊の少數者に忠實であるといふことは、その社會全體の生存事實に依つたものであることは、初めに云つた通りである。それは、實は　少數者の個人に盲從するのではなく　その個人の行動が、全社會の存在を、保障するといふ性質に服從するのである。全體は、斯樣な意味の服從に出る可き本能を持つてゐるのである。そこで少數人が　特に全群の生存に、效果のない行動をとつても、それが外形的に同じである場合には、往々、全群が本能的にそれに盲從するといふことも前に云つた通りである。軍國々家の英雄は、既ち、この群の本能に依賴して、虛僞の暗示を與へた少數人である。全群は、英雄の行動が、外形的に、全群の運命を導くそれと見へるところから、本能的にそれに盲從するのである。豐太閤が朝鮮を保征伐しようと叫び、ナポレオンがヨーロッパを統一しようと力めば、日本やフランスの群集は、その暗示が、全社會の安全を保障する牧場の馬の暗示と同じ外形上なので、盲目的にその方に走つてゆくのである。

忠義が含有する、服從、勇敢　克己の感念は　要するに全群の生存を保障する先驅的行動に盲從する群の本能から出來た約束である。從つて、その目標は、先驅者たる個人そのものにあるのではなく　それに依つて保障せらるべき社會的生存そのことにあるのである。何が爲に從順であり、勇敢であり、克己的でなければならぬかと云へば、全群を含む組織が生存の事實に適ふ方向をとる爲である。故に、今日に於いては　社會的生存の組織的運動に忠實であることが、既ち忠義であると理解されねばならぬのである。

この意味の忠義は、人間を、今迄の道徳家とは、餘程違つた人物にする。無論、封建國家の忠義者とは違ふことは云ふまでもないが、現代の道徳的情操も亦、この見地からは、色々に、批判されねばならぬ。軍國的情操に對し知識階級的情操といふものがある。それは西洋ではギリシャの昔からあるが、東洋でも、印度支那の古代からある。が、これ又、一種の享樂階級の意識であつて、全社會群の意識ではない。この道徳的情操の特徴は「眞理に忠實であること。」又は「主義に忠實であること。」と、云ふやうな言葉で、云ひ現はされてゐる通り、眞理とか、主義とかいふものを、生活よりも、一層高い所に、超越的存在を保ちながら、生活を支配してゐる、萬能的の何物かの樣に考へ、それに依つて、生活を無視することを道徳的と心得るのである。ギリシャ人が、意志の全能を證據だてるために死ぬといふやうなことをし、孔子が、道をきいて了へば、死んでもいゝ、と考へたの如きはその著しい例である。これらは、意志とか道とかいふものが、生活と沒交渉に、人間を支配し、人間は生活を無視してそれに服從することを、忠義と心得るのである。さういふ忠義は反社會的であることには變りはない。それは、眞理を生活せずに、眞理を、智的に享樂することを目的とする、享樂階級の道徳であつて、生存の道徳ではない。

さういふ享樂的道徳が、今日でも、所謂、智識階級と呼ばれる人々の間に遵奉されてゐる。そして、その階級の人々の遊技的爭ひが、一般に興味を引いてゐるが、さういふ享樂的行動は、いざ人間が、實際に行動しなければならぬといふ時には、決して成り立たない。人間は、眞劍になれば、眞理に向はずに生存に向ふのである。

忠義は、生存の道徳に、忠實であるといふことであらねばならぬ。それは行動としては、私達が、群的に生きる組織を盛り立てる働きであらねばならぬ。人間に對する愛着は、畢竟その人間が、組織的生存の勇者である所から、起る道徳的歸依である。猿が群を成して、急流を渡る場合に、一匹の小猿が、流れの眞中に取り殘されたのを、群中の一匹が、走せ

歸つて、それを助けて、群に戻つたと云ふ話があるが、その鷲は必然に、群中の個人的愛着を集めるに違ひない。その意味に於いて、卓越した個人の行動に盲從するといふことは、あり得可きことであり、又、その盲從は組織的に良好な行動でもあり得るが、然し、人間的道德意識は、さういふ場合にも、その英雄の個々の行爲に、盲目的に忠義であつてはならぬと認める。それは、主義でも眞理でも、同じことである。

「眞理」とか「イズム」とかいふものを生活から引離し、その眞理自體、イズム自體を偶像的に崇拜して、一種の法悅を感じ、その恍惚的心境を樂しむといふことも、人間的享樂として惡いことではない。けれどもそれは必ずしも、常に善いことではなく、又生活に即して生きやうとする場合には、多くそれは出來難いことである。それは「眞理やイズムを享樂する」といふ特別の生活であつて、それはさういふ享樂を專門とする特殊の階級だけに出來得ることなのである。眞劍の生活は それ故に、多くの場合に、「眞理」を破壞し、「イズム」を崩壞せしめつゝ躍進するのである。

「忠義」も亦、享樂的な人間禮讃であつてはならぬ。さうであつていゝのは、享樂の時代に於てだけである。それはメスメリズムの忠義である。對人的忠義は、寧ろ「私」の生活に於ける「趣味」と似た良い物である。人間は同類の生存の爲めには、さういふ「私の趣味」を捨てねばならぬ時がある。

# 自律的要請としての忠義と孝道

土田杏村

一

最近に著しい社會科學の發達に伴ひ、わたくし達は社會現象と其れの意味とに就いて幾多の新らしい理論を與へられた。社會や國家、また其等の集團と個人との關係などについては、殆ど革命的といつてもよい新らしい見方がわたくし達の自覺を促がしたことは、何人によつても否定せられ得ない。しかし同時にわたくし達の社會や國家が此れまで傳統的に持つて來た道德觀念は、社會の慣習としての强味から個人の行爲に强い規制力を持つて居るし、また個人の道德的良心は其の懷抱する社會觀の性質如何に拘らず、其の傳統的觀念に今なほ强い執着を示すことであらう。斯樣にしてわたくし達の社會に行はれて居る道德觀念を見るときには、新らしい解釋と古い傳統と、其等はお互ひに交涉を斷つて別々の存在を保ち、其處には此等の矛盾を統一した新らしい生活價値標準が創造せられて居ないのである。しかし此く解放せられた社會的意義の新解釋と民族の精神的傳統とが一つの新らしい生活價値標準を求め得ないで居ることは、現代生活の世界的に動搖して居ることの原因其のものである。ケインズ氏は世界の經濟的困厄の究極原因として、價値標準卽ち貨幣價値の

動揺を擧げて居るが、わたくしは其の見方をもつと擴張して、ケインズ氏の經濟價値標準を生活價値標準と言ひ換へて置きたい。

舊道徳法則の最も大いなる缺陷は次の二つであらう。第一に、舊道徳法則の見方には近代の社會學、政治學などの見方が取り入れられて居なかつた。第二に、舊道徳法則は或る一つの時代に事實への妥當性を持つて居た或る實質的原理を永久に妥當し得るものと考へて了つた。此の缺陷を匡正する爲方として、わたくし達は第一に、道徳法則の解釋には十分なる近代社會學其他諸般の文化科學の理解を取入れなければならない。第二に、道徳法則の妥當性を形式的に考へ、現代に妥當する實質的原理は十分に現代人の生活の實質的事情を顧慮しなければならない。しかし道徳法則とは要するに或る抽象的原理として天降り的にわたくし達の生活を制限する根據と考へらるべきでは無く、歴史的に、具體的に、此く生活して居るわたくし達の生活樣式を本質的に表現したものに外ならないから、其れは同時に現に生活して居る民族の精神的傳統を無視することが出來ない、無視すべきでは無い。シュタムラア氏は法律の本質について「變化する内容を持てる一の自然法」といつたが、其れは同じやうに道徳法則についてもいへることである。山鹿素行は「窮與天壤無」の語意を釋するときに、「懿しき哉。本朝開闢の義は、悉く神聖の靈に因る。是れ乃ち實に天之に授け人之に與する也」と言つたが、其れはよく道徳法則の本質を闡明したものであつた。

## 二

近代社會科學の新理解と傳統的社會法則の規則との中間に立ち、今なほ新らしい見方を持ち得ない道徳的原理の最たるものとして、わたくしは今こゝに「忠義」と「孝道」の二つを持ち出して見よう。

現代道徳のすべては、人格的であり、社會的であり、個性的であることを要求して居るが、忠義と孝道との理解には近

代になり果してどれだけの進歩が見られたであらうか。例へばわたくし達の周圍の若い人達は、殆ど例外なしといつてもよい位に社會主義的理念を其れ〴〵の程度で容認して居るが、其の理念と忠義との間には何等の矛盾も感ぜられないであらうか。また近代の生活は個人主義的、人格主義的となり、古來の家庭生活の樣式を其儘繼承することの出來ないものとなつて居るが、其の生活表現と孝道とは果してよく昔のやうに調和し得るであらうか。わたくしは今近代生活と近代社會科學の理解に從つて、忠義と孝道との見方には、少くも次のやうな修正の加へられなければならぬことを注意して置きたい。

一つの道德的本務として考へられる「忠義」とは、わたくし達が其れの成員として所屬する國家と及び其れの主權者に對して持つ奉仕的、犧牲的の規制をいふのであらう。そして人類が文化生活を營む或る一つの表現として國家を組織することは、人類の生活を肯定し、其の努力の完成を無限に望見する限り、いかにしても否定せられ得ないものと考へるならば、わたくし達は當然其れに對しての道德的本務を持つべきであり、隨つて「忠義」の道德的原理は否定せられることが出來ない。

しかし此處に注意すべきは、「國家」の意義は近代社會科學にあつては昔の理解とよほど其の趣きを異にして來たことである。ヘエゲルの國家哲學を繼承する人達は、――我國の道德學者は殆ど例外無しに此の系統に屬するが、――國家を以て道德生活の最高完成形式と考へ、國家に對する本務は其他すべての道德本務を包攝し得ると考へて居るが、此れは近代社會科學の實驗に合致するものでは無い。國家と社會とは其儘に同意語では無く、國家はわたくし達の社會的機能を滿足せしめる或る一つの社會的形式であるに過ぎない。隨つて國家に對する本務は其他すべての本務を蔽ひ得る力を持たず、わたくし達が社會生活を完成する上について持つ多くの本務の中の或る一つであるに過ぎない。此れまで我國の道德學者は、すべての本務を最初は個人的、人格的、國際的に說いて行くに拘らず、國家に對する本務を考へるときになつて急に

其れまでの成果を國家に對する本務へ讓つて了ひ、其の道德的立場を國家的何々主義と呼ぶのが通例となり、其れは現在の道德敎育の常識にさへなつて居るが、わたくしはさうした妥協的の道德理解には賛成することが出來ない。此れも亦等しく一つの道德的本務として考へられる「孝道」は、わたくし達の生活に最も親近の關係を持つ父母に對する本務である以上、其れを否定することは恐らく人類の本能的感情にさへ背反するものであらう。しかし同時にわたくし達は孝道と中世封建時代に特有の社會形式であつた大家族主義とを混同すべきでは無い。近代産業文明は生活の單位を個人的ならしめ、隨つて大家族主義に特有の財産觀念、家庭觀念などを壞滅に歸せしめたが、社會制度の必然性に立脚した其の新らしい孝道の理解は、本務としての孝道を本質的に破壞したのでは無い。また個人が社會形式に對して持つ關係はすべて人格主義的に更改せられた今日の理解として、個人は家庭や兩親の所有物では無く、父母といへども其子の人格の自律性を害してはならないと考へることも、當然容認せらるべき孝道の新理解であらう。

## 三

右の如くにわたくしは「忠義」と「孝道」とを其れ〳〵一つの道德的本務として觀察し、其れの基礎づけを道德の認識論と近代社會科學の上に求め、其れより不可解的な或る神秘性のヴエールを取り去らうと思ふが、しかし認識論的に考へてさへ、忠義と孝道との實現形式は、其他の本務の其れと著しい相違を持ち、隨つて此の二つの本務には或る色濃き特性の纒ひついて居ることをわたくしは否定しようと思ふものでは無い。此等二つの本務を取り除いた其他のものは、人類のすべてへ平等に妥當し、實行者の個々性を考慮する必要を持たないが、忠義と孝道とは或る特殊の個人を中心とし、人類のすべてへ平等に妥當せず、或る特定の對象者を除いた其他の人類に對しては寧ろ排他的に働きかける。言ひ換へれば、忠義と孝道とについてだけは、其れの實現者を甲とか乙とか或る具體的の個人に限定しない限りは、其れの形式を何

とも決定することが出來ない。一般の道德的法則の普遍性に對せしめられた忠義と孝道との此の具體的、特殊性、個人性、排他性はいかなる理論基礎の上に成り立つたものであらうか。隨つてまた其れの道德的價値をいかに考ふべきであらうか。わたくしは其れを次の樣に解釋して居る。

わたくし達の生活はすべて根本的に人格の統一を示して居る。生活が眞に進展して居るとか、創造的であるとかいふことも、原本的には生活が斯樣に熾烈な統一行動を續けて居るといふことであり、統一行動を離れては生活も人格も無い。其の統一が生活自身より內面的に發展し、自ら生活の本質を求めて深化し行くことは自我の根本的行動であり、其處に直ちに「道德」が成立する。道德とは人格の自律的自己限定の表現だ。わたくし達は思惟の便宜として、右の如き自己限定の人格を抽象的に、一般的に考へて行くが、其の人格の行動が基礎となつて、其處には幾多の道德的本務が成立する。しかし眞に統一の立體となる人格は、此く思惟の對象となつた抽象的概念としての人格であつてはならない。其れは眞に生活して居る具體的、個人的の人格其のものでなければいけない。自己限定を爲しつゝ動く生活の全人的行動其のものでなければいけない。其れは普遍を含む個性、一般を含む具體だ。今若し道德的生活表現の主體が、さうした具體的、個人的、行動的の個人其のものであると考へられたとすれば、其處に實現せられて行く道德形式は、すべて具體的、特殊性、個人性、排他性を持つた其れとなるべきである。だから道德はすべて個人の實行の問題となつたときには、具體的、特殊的、個人的、排他的のものとなる。言ひ換へれば道德的實質は歷史性を持つのである。たゞ其等の本務は抽象的にも思考せられ得るから、其の場合に普遍的、一般的のものとして考へられるに過ぎない。忠義と孝道とは、具體性、特殊性、個人性、排他性を離れて其の意義を持ち得ないものとすれば、其の意味は右の如くであり、隨つて此の二つの本務は、人格の道德的行動を其れの起點に近く、出來る限り原本的に表現したものといふべきであらう。忠義と孝道との本務としての特殊性、隨つて此の二つの道德的原理の本務としての原本性は、直ちに右の論理的構成が基礎となつて證明せられる。わ

たくしは次になほ進んで忠義と孝道の人格的根據を求めて見よう。

## 四

道德の本質は、先にも述べた如く人格の根本的なる統一行動に求められるとすれば、道德の基礎は內面的に人格の根本的行動の上に建設せらるべきであり、其れには內面的の關係を持たない或る外的の基礎の上に建設せらるべきでは無い。然るに從來忠義や孝道の論理的基礎はさうした人格の內面的行動以外のものに、外的に求められた。

例へば孝道については、父母は我れを生み、我れを養育したから、父母に對して報恩の行爲をしなければならぬといひ、忠義については、歷代の天皇は仁政を施かせられたから、皇室は國民の總本家であるから、日本の國民はすべて國家の擁護を受けて居るから、天皇と國家とに對して忠義を盡さねばならぬと說かれて來た。現に小學や中學で敎へられて居る忠義や孝行の論理的根據はたしかに其れである。しかし此等の解釋によつては、いかにも道德は合理的の根據を得たけれども、其の根據となつたものは道德に對して外的のものであり、此の合理的換元によつては本務の道德性は全く抹消せしめられたのである。忠義と孝道との此の說明は、結局は功利的のものだ。其の最後には、個人の利己的本能の上に道德が建設せられ、道德の意義は利己に外ならぬこととなるのである。

此れに反してわたくしは、道德の意義を自律的のものと見て居るから、いかなる道德も其れには本來感情的基礎が存すると考へる。本來何等の道德的感情も自發的に湧き出て來ない人格に對しては、適法性を語ることは出來ても道德性を語ることは可能で無い。道德が自律的だといふことも、結局のところ道德は道德的感情が基礎となり、其れにより悅んで容認せられることを意味するに外ならない。孟子が四端の說を論じたのも其れを意味すると見なければならない。だからわたくし達は忠義や孝道の論理的基礎を求めるといふ場合にも、先づ原本的にわたくし達には忠義や孝道の道德的感情の存

在することを容認し、次ぎに其等の感情は單に本能的のものであるといふだけではなく、其れには或る内面的な人格的意義、より適切に言へば先驗的意味が含まれて居ることを論證するのでなければなるまい。此の見方からすれば、此れまで忠義と孝道との論理的根據を證明する爲方は甚だ不完全なものであつた。

## 五

わたくしは忠義と孝道とについて、其れの道徳的感情がわたくし達に本能的に存在することを否定しない。何故なれば、忠義の本能的感情はわたくし達が人格の地域的のひろがり、換言すれば人格の横のディメンションにおいて、孝道の其れは人格の歴史的連續、換言すれば人格の縱のディメンションにおいて、自己の立脚する地點を本位とする地方主義的の本能を根基とするものであらうから。しかし其の本能的感情は同時に其中に人格的意義、換言すれば先驗的意義を内在せしめて居る。

孟子は「大孝は身を終ふるまで父母を慕ふ。五十にして慕ふは予大舜に於て之を見る」といつたが、孝の根本義を「慕ふ」感情に置いたことは、本務としての孝道を人格の本能的感情に最も近く位置せしめたものであらう。然らば親を慕ふことの意味は何處にあるか。慕ふとは人格のすべての内容が其れの原本的統一の深い底を慕ふのである。統一する行動を反省せられることが出來ない。隨つて一つの統一は其れの根據により高い統一の行動を前提し、此くして統一は人格の無限の底に向つて還元する。其れが慕ふことの意味であり、隨つて其の慕ふ感情の無限の遡源は孝道の構成的意味となるであらう。

孝經は「孝は父を嚴ぶより大なるは莫し」といつて居る。尊ぶとは統一行動の主體となる人格の品位に對して經驗的意識が尊ぶのである。統一行動の無いところには尊ぶ感情も無い。然らば「慕ふ」とは結局は尊ぶのである。自己の根本的

統一行動の主體となる人格を內面的に慕ふことは、直ちに其の人格を尊敬する所以であり、其の尊敬心の換元せられるところ、父母の尊敬する孝道の感情とならぬ譯にはいかない。程子は其事を、「身は父母の血氣に資て以て生るゝもの也。其道を盡せば則ち能く其の身を敬す。其の身を敬するものは則ち能く其の父母を敬す矣」といつて居る。

孝道の論理的意義が其處にあるものと見れば、忠義の本能的感情については其れと全く同じいことが繰り返して言はれ得よう忠とは卽ち信である。「聖教要錄」は「忠は心上に就て說き、信は事上に就いて說く」と論じて居るが、人格の統一的行動が其の深き底を慕ひ、其の底に歸るは忠であり、此くして統一せられた全體的形態は信である。忠の要旨は「一本に報じ始めに反る」ところにある。

## 六

わたくし達の道德的本務としての忠義と孝道との論理的基礎を求める爲事は、既に達せられた。しかし忠義と孝道とは、日本の民族の傳統的歷史的信念を離れて抽象的には其の意義を持ち得ないものであるから、わたくしは次に其等と結びつけて取り離されることの出來ない民族的信念の主なるものに對し、一言の新解釋を附記して置かう。

「天壤と與に窮り無し」は日本民族の忠義と道德との根本的信念である。其れは單に皇位や國家の現實的連續性を言つたに止まるものではない。其れは生活の統一の無限に進展して止まるところ無きこと、道德的理念の實現の無限に亘つて完成せられないことを斷言し、其の根本的統一行動の熾烈なることを確信したものである。

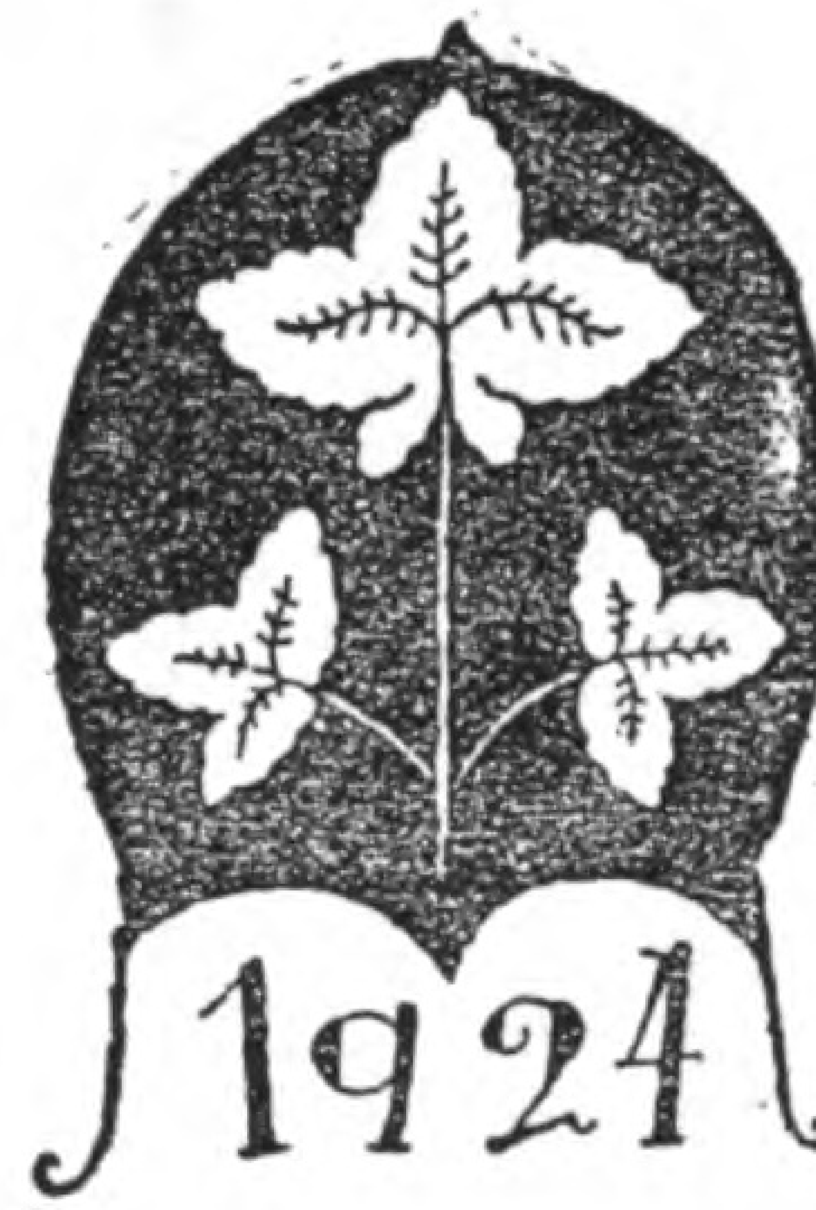
皇室は國民の總本家であるとの根本的信念は、既に事實的には矛盾するものとなつた。しかし其れを事實的に證明して居た從來の爲方も、道德性を事實性の上に基礎づけようと努めた無益な、また誤つた企てゞあつた。道德とは人格の統一であり、其の統一は人格の唯一の深き底に向つて報本反始するとなり、其の根本的信念に隨へば、わたくし達の自ら組織

する國家の主權者は國民の生活の總本家として確信せられるであらう。

すべての道德は忠孝を本とするとの根本的信念は、國家に對する本務を以てすべての本務を蔽ひ得ると信じた時に誤謬となる。忠孝は人格の統一、卽ち道德的行爲の具體性、特殊性、個人性、排他性其のものを最も原本的の形式において表現したものであり、すべての道德も其れが眞に實現せられる時には、其れと同じい具體性、特殊性、個人性、排他性を持たねばならぬと確信せられることが其れの正しい意味でなければならない。天孫降臨のとき天照大神は天壤無窮の神勅を下し給ひ、更に御手に寶鏡を持ち給ひては「吾兒此の寶鏡を視まさんこと當に吾を視るがごとくなるべし」と宣はせられたが、寶鏡を視て人格の進展の原本を慕ふことに忠義と孝道との國民的信念は證驗せられて居る。

最後に「忠孝一本」は、我が國民道德の根本的信念であるが、其の意味は忠義と孝道と其の實現せられて行くディメンションと異にするにせよ、其れの論理的意味は、人格の底への報本反始において歸一せられることの確信にあると考へなければならない。

歷史生活は、其れの精神的貨物を離れて何等の意味をも持つことが出來ない。傳統的信念を滅ぼすことは歷史生活を滅ぼすことであつて、其れは不可能の途でもあればまた價値の無い企てゞもある。傳統的道德としての忠義と孝道とからは、其れの歷史性の奪ひ去らるべきものでは無い。其れはたゞ批判せられなければならない。新らしい見方から解釋し直されなければならない。（一九二四、八、三〇稿）




# 現代文明批評

野口米次郎

## （一）母性禮讃

ラフカヂオ・ヘルンと母親との縁は實際の上では短いが精神的には長い。母親との地上生活の關係が短い爲めに、一層暗示的で奇怪ともいふことが出來る強烈な影を五十幾年といふ彼の一生の上に投げた。この陰影は彼が六歳の時別れた美麗な彼の母親が紡いだもので、彼は一生を通じて彼女の幻覺から離れることが出來なかつた。母親との精神的關係が彼に過去と現在とを考索させ、彼ばかりで無くだれでもの地上生活は 先行者 の影響を受けると信ぜしめた。彼の情緒的生命は彼自身が偶然に拾つたものでなく、代々の先行者が傳へ／＼て彼に及んだもので、彼の血脈には 先行者 の喜びや悲みが震へて居るといふ信仰から、彼は日本の祖先崇拜を無條件で是認した。日本の祖先崇拜は過去と現在との連續的關係から生命の統一を完成するものと信じたのである。私はここでヘルンの祖先崇拜を論ずるもので無い。彼と彼との母親との關係にのみ私の問題を限りたい。

彼の母親の記憶は遠ざかつて行く幻想のやうに朧氣で薄い。ヘルンばかりで無く誰れでも成人してから、六歳の時の記憶を明瞭に持つて居るものは無い。ヘルンの母親の記憶がどんなに實際を離れた夢のやうなものでもそれを論ずる必要が無い。彼が一生信じた所に依ると、彼の母親は美麗な人であつた。彼女は東洋的血を持つた希臘人である。ヘルンが幼少時代の記憶として書いて居る文章の中にかう語つてゐる。自分の寢室の壁に一枚の油繪が懸つて居つた。それは聖母マ

リアと赤ん坊の像で、鳶色の髪をしたこのマリアは自分の母親でその膝の上に抱かれた赤ん坊……眼がぱつちりと開いた赤ん坊が自分であると空想したさうである。彼が僅に記憶し或は實際的に何の記憶も持たない彼の母親に對する憧憬は、自然の進みとして母性禮讃となつた。彼は自分の母親を觀世音とも又天人とも考へるに至つた。彼のすべての美質……正義の愛も不善の憎惡も、美であり眞實であるものに對する賞讃も、男子を信じ又女子を信ずることが出來る力も、又藝術的物象に對する敏感性も又彼が持つて居る言葉の力でさへも悉く彼の死んだ母親の賜物であると彼は信じた。彼は自分の兄弟に遣つた手紙の一節にかう書いて居る、『母親のお蔭で私共は氣高い人間となることが出來る。母親を愛する心の力のお蔭で、單に理智の力でない。立派な財産より私は寧ろお母さんの肖像一枚ほしいと思ふ。』この個人的には母親への歎美欽仰、一般的には母性禮讃は女性崇拜に根を持つとも云へるし又女性崇拜の花を咲くともいふことが出來る。私はこゝでヘルンの一生を評論するので無いから、どうして彼が西洋で自分の理想に近い女性を發見することが出來なかつたかを語らない。彼が今日ほど舊時代が亡びて居ない時代に日本へ遣つて來て、日本の婦人の顔にモナ・ダ・リサの不思議な微笑を見出したことを私は喜ぶものである。彼の記憶から薄らぎつゝあつた母親への憧憬が希臘の婦人に似て居る日本婦人の歎美となつて、彼は失つた母親の生きた肖像を日本の女に發見したのであらう。長らくの間抑壓されて居た彼の戀愛は日本の女を見て始めて滿すことが出來たのである。彼は長らくの間戀愛の出口を知らないのでどの位苦しんだであらう。確に彼は日本へ來る前は悲觀の帳につゝまれた孤獨の寂しい人であつた。時には度し難いほどの人間嫌ひでもあつた。然るに彼は日本へ來て單に『お母さんの肖像』だけで無く、生きた母親を日本の婦人から見出すに至つた。日本の女に對する彼の禮讃は自分の母親の認識が無意識に働いたものである。彼が日本の女を歎美するといふことで彼の多年の夢が實現したのである。彼位日本の女を讃美した文人が無いとするとそれは彼位幼少の時に失つた自分の母親を熱烈に憧憬したものは無いといふことである。彼は女性崇拜者となつて自分の精神を解放することが出來た。彼の女性崇拜位現實の上に置かれて居るものは無い。又彼の母性禮讃位暗示的なものは無い。母性禮讃者として彼は世界に澤山とない文學者の一人である。

今英語文壇に彼の匹敵者を見出さうとすると、英國の詩人

カウパー以外にはあるまい。カウパーもヘルンと同樣に六歲の時に母親を失つて、千七百九十年に彼が五十八歲になるまで母親の幻覺に喜ばされ又惱まされた。五十八歲の時に彼は『母の肖像を受取つて』と題する一詩を書いて、六歲以來彼に附着する不健康で不思議な愛着心から離れてほつと一呼吸したかの感がある。彼の憂欝な感傷性は醫者のいふ神經官能症の一種で、それが高じた場合には彼は狂人であつた。彼は詩的想像で實際化された母親の追憶のなかでのみ安全な心の避難場を見出すことが出來た。其處へ彼女は音のない幽靈の靴で訪問して、彼に溢れる愛情の接吻を與へたであらう。カウパーは彼女が死んだ時どう感じたかを忘れない。又今死んでもぢきに歸つて來ると彼に語つた女中のことも忘れない。何夜彼が安眠して居るかどうかを見るため靜に這つて來る彼の母親の姿をありし日の姿で彼は見るであらう。彼はどういふ工合に彼女が彼の頭を輕く叩いて微笑したかを思出しては、五十幾年間彼は懷しい過去の再現を樂しんだ。前記の詩は、長い年月も彼の幼兒性を奪ふことが出來ないことを說明したもので、讀むと半世紀の『時間』は消えて、カウパーは六歲の兒童に歸つて居る。ヘルンも一生涯を通じて小兒心を失はなかつた文學者であるが、カウパーは六十歲近くになつても困難の場合にはいつも母親に救助を求めて居る。彼の耳には母親の柔和な聲は母の聲であると共に愛人の聲でもあつた。彼は彼女を失つて以來憂愁の苦痛を忘れることが出來なかつたが、それを忘れようともしなかつた。寧ろそれを喜んだ。悲哀の無い戀愛が無いやうに、彼の母親に對する憧憬は戀愛の一種でなくて何であらう。

小供が母親に對する熱烈な愛着を變態心理の研究者は戀愛事件の最初のものとして論じて居る。カウパーやヘルンのやうに幼少時代の幻想が一生の生活を支配するのを見ると、母親の影響がその子の文學作品に及ばざるを得ないといふことに就ては何の疑問もない。ステンダルは父親を嫌つて母親を愛した、さうして母親の影響の跡が彼の作品に見ることが出來る。父親の愛を拒絕して宇宙に理想的父を發見し、その結果無神論者となつた詩人の實例はシエリーに見ることが出來る。ショペンハウエルやバイロンが悲觀論者であり厭世家となつた理由は何であつたか。彼等の母親との關係が幸福な圓滿なもので無かつたといふことが其理由の最大なものであつたに相違ない。米國のポーガヘルンのやうに文學者として病的な不幸な一生を送るに至つたことも、子供時代から溫い母親の慈愛に浴することが出來なかつたに起因して居るであ

らう。

前記の詩人もウパーはイデイパス・コンプレツクスの犧牲者であるといふ論者がある。このイデイパス・コンプレツクスとは何の意味であるか。ソフオクルスの古劇にイデイパスといふ一篇があつて、劇中の合唱に男子が自分の母親と骨肉相姦の夢を見るといふことを歌ふ場所があるのでそれから取つたもので、詰り不倫の夢といふ譯である。カウパーはこの不倫の夢を夢見た詩人で、無意識に種を播いた五十二年前の夢が『母の肖像を受取つて』の一篇の實を結んだのであるといふ變態心理論に無條件で私は賛成することが出來ない。さうして私はヘルンの場合と同じく、カウパーも自分の母親を憧憬する結果、この一篇を以て『母性禮讃の言葉』としたものであると批評したい。實際この一篇の如く子に及ぼす母親の影響を實感的に歌つたものは西洋の文學中一つあつて二つと無い作品であらうと思ふ。

もとより親の影響がどんなに大きくてもそれ丈けで其子を文學者に仕立ることは出來ない。然し子供が幼少時代に母親なり父親なりより受ける影響は自然に彼等が將來に進む人生の路を彼等に知らしめるであらう、又親の影響が春の日に見る野原の陽炎のやうに彼等の一生を包んで、彼等はそれで守護されて居るとも感ずるであらう。世間には親と子との關係が面白くないのが澤山ある。幼少時代に父親を恐れることだけ知つた男子は、生長して敵でも持つとその顔が父親に似て見へるといふことだ。又熱烈な愛着心を母親に持つた男子は、年經て結婚しても自分の妻君が母親の顔となつて來ないとも限らない。子に與へる親の影響は恐ろしいものだ。ヘルンに云はせると、これ悉く祖先から受けついだ血の惡戯である又皮肉であらう。私は如何なる文學者でもその作品からその人の精神系統を遺傳的に調べることは愉快な仕事だと信ずるものだ。こゝに英國近來の大詩人ブラウニングがある。彼は思想家としては健全な樂天家である……健全といふことは鈍重といふ意味でない、彼位實際に破天荒な詩人はない。彼の樂天主義は何處から來たものか。どこから來たものでも無い、彼の兩親を知ると彼の樂天主義の根元が直ぐ知れる。彼の父は自由な藝術的衝動を持つた理智の人であつたが、母親の彼に與へた影響は父のそれより更に大なるものであつたであらう。彼の母は彼の十六歳の誕生日を祝ふ爲め其當時買はれる丈けのシエリーの作を集めて彼に與へた人だ。たゞこれ丈け見ても彼の母が如何に藝術家肌の女であつたかゞ知れる。彼の母は豐富な音樂的傾向と神秘的戀愛の嗜好を持つた

人で、それに加へて獨逸張りの哲學心があつた。大きな河のやうに滔々と流れたブラウニングの樂天主義の源はそれで知ることが出來る。又彼の樂天主義が戀愛の哲學である理由も知れるといふ譯だ。實に滾々として盡くるを知らない彼の偉大な詩は皆な人間性を戀愛で肯定したものである。人生は即ち戀愛の二字であると見た點から彼の女性崇拜は産れて居る。

私は女性崇拜者の生きた實例を米國詩人のウオーキン、ミラーに見たことを喜ぶ、殊に彼の女性崇拜が倫理化し淨化して母性禮讃となつた場合を喜ぶ。彼の母親に對する敬愛は即ち女性に對する敬愛に外ならなかつた。彼は女性の讃美者として自分の母親に尊敬を拂ふといふことを自分の義務だと信じた。ヘルンのやうに彼に對する母親の二字は、美と誠と平和のシンボルで眞實な生命の流は母親の賜物であると信じた。彼に一篇がある題して『最も勇ましい戰爭』といふ、これは一班の母親が人生の上に働く戰爭の勇氣を歌つたものだが、自分の母親に捧げる禮讃の言葉に外ならない。彼は歌ふ『最も勇敢な戰爭が何處で、いつ、誰に戰はれたかを語らうか。それはどんな世界の地圖を見ても發見されない。人間の母親の戰爭だ。この戰爭では大砲を用ゐない、彈丸を用ゐない、劍でも無ければ又氣高い筆の力でも無い。否な、驚くべき人の口から出る雄辯の言葉や思想で戰ふのでも無い。降服することを知らない女の胸といふ深い城壁の中がその戰場だ。そこで一言も發せずに堅忍不拔に自分の任務を果たすのである。整列した軍隊も見なければ野營の歌も聞かない、又閃き動く軍旗も見ない。然し産れてから死ぬまで繼續せられる大戰爭だ。空に橋掛ける虹のやうに誠實に、女は壁で取卷く村落即ち自分の胸の中に立籠つて、この終決の無い戰爭で奮鬪する、さうして靜に人知れずに死んで行く。』

私がこの老婦人を知つた時は彼女が八十四五歳の頃で、丁度長い戰爭に打勝つて西海へ靜々と沒して行く春の日の赤い太陽のやうであつた。月の靜謐と太陽の勇氣と鳥の歌と山河の信仰を持つて居つた人はこの老婦人であつた。實際ミラーの家に高尙な雰圍氣が漂つて居つたのはこの老婦人が放散する呼吸があつたからである。私は年の若い時愛樂して彼女を自分の慈母として彼女から偉い感情を分けられた。私の着物の破れを補つて呉れたのは彼女であつた。又自分を米國の女で始めて接吻して呉れたのも彼女であつた。深夜私が家へ歸つた時珈琲を煮て待つてゐて呉たのも彼女であつた。又囊中一文も無い時車代を呉れたのも彼女であつた。山居に來客が

あつて私が洗つた食器を拭いたのは彼女であつた。私が嘗て新聞で攻撃せられたことがあつた時『高く飛べよ……人が達することが出來ない程の高い場所へ飛び上がれ、その時には世間ではお前に唯尊敬を拂ふのみだ』と私を勵まして呉れたのも彼女であつた。私は一度ミラーに『雀百まで踊を忘れず』と云ふ俚言があると語つた時、彼は『それでは私のお母さんは日本の雀だらう。彼女の快活と歡樂の不朽を御覽なさい』といつて哄笑したことがあつた。ミラーの母親は獨逸種の人で『獨逸の母親は決して死なぬ』といふ言葉通りに彼女は永久に死なぬであらうと思はれた。ミラーがブラウニングのやうに樂天家であつた理由も彼の血を調べると直ぐ知れるのである。

　ミラーの女性歎美は母性崇拜となり更にそれが三轉して自然の母性を欽仰した。實際に於てミラーは百の川や千の山を載せる大地に對すると同樣の尊敬を自分の母に拂つた。女性を輕く見るものにどうして母性を理解することが出來よう。又さういふ人間にどうして自然がその秘密の戸を開けよう。

『私は聲を聞いた。
幻像を見たその中に　曙　がある。
人は香ばしい鳥に兄弟の靈を認め。
薔薇に姉妹の　魂　があるのを見る。

私は美を發見した。
隨所にかゝる美を發見した。
その美は地上を匍匐し、
その美は空中に歌つて居る。

萬物に愛がある。善も價値も、
萬物に神がある。黃昏の中にも黎明の中にも、
人間には幸福、地には平和、
朝の輝く星は歌ふ歌ふ。』

これはミラーが母に與へた一篇の詩の一節であるが、母親のインスピレーションで始めて自然の聲を聞き美を認め人生の幸福に接するといふ樂天家の尊い言葉であらう。彼は女性歎美から自然の母性崇拜で詩人として彼の一生は完成した。

　私は最初母性崇拜を理論で說かうとしたが、その愚なるを知つて、感情的說話でそれを語るに至つた。母性を禮讃せよ、禮讃してこの地上生活の法悅に浴せよ……私のいふ言葉は

これで盡きて居る。女も完全な母性を具へるといふことで、女の將來に對する責任は始まり又終る。

## (二)『重大な結果』

私に詩的表現が許されるならば、渺茫幾億里と擴がる太平洋の青い波は二つの山で守護されると云ひたい。王樣のやうな威嚴と女王のやうな慈悲を持つた山だ……それは日本の富士山と米國加州のシャスタ山のことで、空に屆く頭は白い冠を着て無言の神の挨拶に答へてゐる。廣重や北齋の繪で世界に名高い富士山は東海道の中心となつて日本の自然美を開展させて居るが、一方の米國では加州自然の驚異はシャスタ山から始まる。シャスタ山は北方の守護塔で、そこから人は大蛇のやうに蜿る深い大きな溪谷の寶藏へ踏込むことが出來る。永劫に挑戰する無死の城廓で足元に連なる森林を輕侮するシャスタ山の沈默は物凄い。北を流れるクラマット川と南を流れるサクラメント川はたゞ戰慄してこの神聖な山の姿を浮べて行く。シャスタ山は雪と光の金字塔で期節や時を超絶して光榮ある歷史を書いて居る。又この山と自然美の上で價値を爭ふヨセミテの溪谷がある。天を突く花崗石三千呎の巨岩エルキャプテンと鏡のやうに白い胸に驚くべき樹木や草花を映すマーセッド川は溪谷に含まれて居る驚異の一二に過ぎない。溪谷には澤山の瀑布が落ちて天國のオルガンを震動させ、杉や松柏樹は甘い香氣を放散して自然の節奏を褒め稱へる。仰いで綠の空を眺め、頭を垂れて我々を載せる大地の慈愛を感謝せねばならないのは太平洋岸加州の自然だ。

私はこゝで特に加州の自然を歎美するものでない。私は廣い太平洋を抱へて對立する日本の富士山と加州のシャスタ山との姿を指摘して、シンボルとして彼等は何を語るかを考へて見たい。私は過去二十年以上も此等の兩山の對立を意味あるものとして眺めて來た。私にも想像の冒險を遊戲する瞬間がある、さういふ時はいつも此等の兩山が東西兩洋の文化を代表して相互に敬禮を交換して居ると想像した、さうして近い將來に東西の融和合一が加州の平野で花咲くといふ想像が事實化するであらうと信じた。私の意見は、米國だけを見ても文化が東部の大西洋岸から西へと進んで居る、さうして米國の文化が世界の最大山脈の一であるロッキーを橫斷して太平洋岸へ到着した時、同價値の上で東洋文化を認めて融合することで米國の文化が全世界へ一大貢獻をするものだといふ議論に基礎を置いて居る。私はこの意見は間違つてゐない、

さうして太平洋岸中でも加州がこの意味ある天の使命を果たす地位を占めてゐると信じた。もとより此重大な使命を完成にするに當つては、加州は東洋に對する人種上の偏見を捨てゝ掛らねばならず、又米國の智識階級に東洋研究の熱烈なものがある有樣を見て、政治上にも米國が東洋人に對する差別の態度を撤廢するの時が來るであらうと思つてゐた。然るに今回の排日案の通過は私の意見を粉碎した、少くも五十年も逆行させたの感がある。私はこの出來事位世界文化の點から見て所謂グレープ・コンセクエンスを持來したものは無いと信ずる。實に『重大なる結果』といふだけの言葉では盡されない事件と云はねばならない。實際を主とする政治と思想に依きる文化とは同問題でないことは誰も知つて居る、然し政治上に認めることを欲しない所謂劣等國の文化を米國人がどうして完全に理解することが出來よう、又どうしてそれと接近し精神の融合を實行することが出來よう。文化より政治は一歩先きに歩く さうして文化に對して道路のストン・ローラー（融地機）の役目を務めるものだ。政治に將來の文化を誘致し並進させる行爲があるといふことが政治の眞生命でなければならない。この存在の目的を裏切る行爲があるとすると、其國の政治は第一進化の原理を侮辱するものである又負傷させるものに外ならない。かゝる政治は人類の將來に對する冒瀆である又犯罪である。私は排日案の通過は私の理想を粉碎したといふことを遺憾に思ふよりは、寧ろ米國が折角握つて居つた幸運の地位を利用することが出來なかつたことを悲しむものである。米國が偏狹で不自然な所謂島國主義に引籠つて、文化的世界政策を否定した愚な行爲を遺憾とするものである。米國が更に一層意味ある文明國となることが出來る幸な地位を放棄したものである。このこと位世界の文化史上に大きな黑い陰影を投げた事件はあるまい。私は米國爲めにその行動を悲しむものである。

米國でも過去に於いて東洋思想を高唱して不自然に固まりかけた鑄型から自己を解放し、自然の疲勞を東洋の力で勇氣附けやうとした文學者の例を私はエマソンに見て居る。ソウロウに見て居る、又ホヰトマンに見て居る。然し今日位米國の新文學が東洋思想で自己救濟を行はねばならない時はない。米國では自然の解釋にしても古い機式を捨てねばならない時に達して居る。これまでの米國の詩人は自然の線形文字のみを見て、人情生活の補助物又は人間界事件の背景として自然を取扱つて來た。米國の文學者が感傷的に放縱である理由の一は自然を便宜な道具に使ふといふ點に基いてゐる。私

共東洋人が自然に對する態度は彼等とは違ふ、宇宙の渾一といふ感念から私共は主として自然と人間との親和を求める、さうして自然界へ入つて私共は自己を小くする狹義のイゴイズムを失ひ、宇宙に於ける人間の眞實なる場所を發見するであらう。簡單に自然との同化といふ言葉を使ふけれども、自然を理解するといふことは自分の個性を發見することである。自然を瞑想するといふことは、眞實に自分自身の實現を完成したい希望からである。この文學的態度の如きは米國文學者を衝動的感傷主義から救ふことが出來るに足る、又私共の自然觀は確に彼等をもつと本質的にならしめると私は信じて居る。私共は米國人にすべてのものを教へることは出來ないが、少くも私共は彼等より自然觀の上では現實的である又本質的である。彼等の文學は實際に於て感傷的遊戲である場合が多い。この文學的弱點から彼等を救ふものは東洋思想があるばかりだといつても過言ではあるまいと私は信ずる。私は東西兩洋の文化の融和合一した渾然たる文明の創造を理想とするものであるが、今日の米國に於ける東洋人に對する實際の態度から見ると、米國にこの實現を見ることは不可能でないとしても五十年は待たねばなるまい。故に私は私の希望が五十年も逆行したといふ所以である。

私は今日世界の商權が已に大西洋から太平洋に移動して居ると論ずるもので無い。然し世界戰爭以來太平洋が重大視せられて來たことは誰も否定することが出來ない事實である。さうしてこの廣い太平洋を中間に於いて東洋と西洋卽ち米國と亞細亞が對立して居る歷史を見ると、地中海が商權を大西洋に奪はれたことはそんなにふるいことで無い。又大西洋を支配した國が世界の商權を握つたといふことも事實の語る所である。若し世界の中心が大西洋から太平洋へ移つたとしたならば、この太平洋を支配した國が卽ち世界の商權を支配する國となる譯になる。この大きな舞臺で活躍する國はもとより米國であるといふことはいふまでも無い。然しこの商業の問題も思想や文藝の問題と同樣で排他的では、折角幸な地位から米國は賞讃に價する結果を生みだすことは出來ない。又將來に着眼する國はどんな問題でも世界的意識が是認するに從つて賢明な態度を取らねばならない。果して米國が將來この信念を裏切るやうな行爲をせぬであらうか。地理上に於ける米國の地位は羨ましい。彼は指一本を上げると亞細亞も歐羅巴も彼に答へるであらう。東から西へ又西から東へと交通を結付ける仲人としてパナマの運河は役に立つ。戰時に於ても又平時に於ても米國は自給自足の國で、肉體精神共

にゴシック作りの年若い覇氣のある人間で本國で不滿足なものが世界の各地から流れ込む。米國の將來は實に驚くべきものであるが、此『幸運な地位』は米國自身に取つても又世界の他の國に取つても危險なものは無い。此幸運な地位を生かして善用するには米國は謙讓の美德を知らねばならない。他をいくら尊敬し價値付けても自己を破壞するものでないといふ眞を知らねばならない。米國は偉大であつてはならない、又妥理協的といふことは讓歩的といふ意味でないことを知らねばならない。一言でいふと、米國は世界文化の將來に對する責任者だといふ信念から出立せねばならない。然るに排日案の通過は少くも私共を失望させたもので、無用の危險を冒して人種的僻見を公然と是認した點から確に米國は自分の地位を亂用したものである。この一行爲で彼は國の弱點を遺憾なく暴露したものだ。この行爲が私の信ずる如く世界の文化を逆行せしめるものとすると、彼は將來に對して何と言譯をするであらう。世界の文化を増進させることが出來て始めて眞箇の一等國となれる。米國は正にこの一等國の特權を捨てたものだ。

僅か百年にもならない以前の著斯敦は、よしんば太西洋の中心でなかつたとしても、米國文學の中心でエマソンの友人ソウロウの如きは、北極の現象でさへもこゝにあるなどと傲語したことがある。その當時には所謂超絶哲學者の連中が教會の殿堂を著斯敦に立てゝ、人類の自由を創造しようと計畫して力強く米國文學の權威の主張した。彼等は自分の住所を古のアゼンスと信ずる驚くべき想像の所有者であつた。然るに自分等以外にも文明と文學の研究者があると思ふやうになつた時は、已に米國文學の中心が自分の手から離れて西部へと移りつゝあつた時である。米國の文權が紐育で握られたはとき、著斯敦の一地方主義が世界主義と變じてゐたのである。米國の西部が段々と開發せられるやうになつて、彼の文學も西へ／＼と移動せざるを得なかつた。どこの國の文學でもさうだが、米國の文學も新奇の歎美者であり又浮氣者である限り、熱烈で生殖的な雰圍氣のある所へ移つて自分を顯著に新しく表現しようとすることを非難することが出來ない米國文學の西方への進みは千九百年には已にインデアナポリスへ到着したと云はれ、今日では市俄古が其中心であるといふ論者がある。曾て市俄古は大仕掛で豚や牛を殺す屠殺所を誇るのみであつたものが、今日では人の知る如く市俄古大學を持ち圖書館を持ち美術館を持ち、米國の中西部の若い豫言者や女豫言者の聖殿である詩の雜誌『詩歌』を持つて居

る。この『詩歌』は薄ぺらな一小雜誌に過ぎないが、英語詩をしてカーライルの所謂古い着物を捨てさせるに勇敢な仕事をしたのである。都會として市俄古は自然の發達を經たもので無く、僅々六十幾年間に顯はれた魔法的一現象であつて、この市俄古が新文化の中心として宣傳して居る文藝は革命的であつて進化的で無い。進化の心理は妥協的であり樂天的であるが、革命の心はしば〱意識的に悲觀的である結果、皮肉の不合理に煩はされて性急な行爲をする。この新文學は今日自己創造の心理狀態の渾沌を享樂したり又輕侮したりして居る。又この新文學は赤裸な人生の現實に立つてゐることはいふまでもないが、宿命的で神秘的な興味から人生觀の上で盲目な場合が多い。市俄古は善惡混合の都會で色彩に豐かで種々な感情の表現を持つて居る。彼は放埒な都會であらう。決して淸教的な健康體を所有しない。彼は赤裸で無技巧だが、いつも正直で無邪氣な所がある。今日米國の新文學が市俄古に中心を持つて、建國以來始めて詩に依つて英本國に挑戰したといふことは非常に意味ある事件と云はねばならない。然し米國文學の西方への進軍は市俄古で停滯すべきもので無い。果して米國の文學が市俄古を離れて文化の城廓が太平洋岸に築かれる時が來るとする、その時に於ける米國人はもつと平定して融和した環境を保て居るであらう、從つて彼等は不自然な騷擾の雰圍氣から脫して居るであらうと私は想像した私はこのことを想像して喜んだ。太平洋岸の空は靑い、太平洋岸の山は高く空を接吻して居る、人間の靈は喜ばせる川は淸い。こゝの自然は悉く人生を單純化し力强め整理する上に暗示となつて顯はれて居る。かういふ場所で東洋の影響を自由に受入れ米國の文化が不自然な都會中心主義から自分を救助する、又人生を說明的に見る結果として理智を重大視すぎる無傾向を捨てることが出來るであらうと想像した。私はこのことを想像して喜んだ。東西の文化を融合一致させて精神の飛躍を麗はしくするといふことが米國人が世界文化を進める一大事業でなくて何であらうと私は想像して、この想像を喜んだ。然るにこの私の想像、私の希望は米國人の排他的實際運動の爲め粉碎されたの感がある。

　太平洋岸加州に立つて居るシヤスタの靈峰は溫顏に微笑して他岸の富士に面してゐるであらう。驚くべき太平洋岸の川や山の自然は東洋に對して何の敵意を持つてゐないであらう。然るに米國人は自由の窓を閉ぢて狹量な島國主義に蹲まつた。この位米國人が世界の文化に對する自分の責任を無視した行爲はないであらう。この位將來に於ける文化の進みを闇路に入らしめた野蠻な行爲はないであらう。この位人間の心理狀態に所謂重大な結果を持來す行爲はないであらう。

# 婦人非解放論の淺薄さ

## ──生田長江氏の婦人論を評す──

山川菊榮

### 一

婦人問題とは、社會の經濟的發達に伴うて起つた婦人の地位の變化に關聯する一切の問題をさしていふ名稱である。既に經濟關係によつて惹起された問題である以上、これは經濟的見地を離れて考究し、論斷することの不可能な問題であり、強いてさうする結果は、當然見當違ひに陷らざるを得ないことゝなるのである。婦人問題解決の方向を暗示するところの婦人解放論も亦た同じことで、それらの基礎である現代の經濟生活其ものに觸れることなしに、批評することは許されないのである。

然るに世間には往々、婦人問題を取扱ふに當つて、其背景であり、基礎であるところの經濟問題をよそにして、生物學上、醫學上の見地から、又は宗教上、倫理上の見地から、男女の生理的分業又は社會的分業の區域を論斷することを以て、婦人問題の解決と混同する人々がある。然しこれは全く婦人問題の實際を知らないことから來た結果であつて、現代

の婦人問題は、男女の自然的、生理的分業の區域問題を中心とするものでもなければ、倫理上、宗教上の信念を中心とする問題でもない。それは單純な經濟組織の作用の結果であつて、經濟問題の解決によるの外、如何ともすることの出來ない問題である。

婦人非解放論者が好んで口にする男女能力の比較の如きは、經濟問題としての婦人問題が解決され、兩性發達の機會が均等となつた後始めて問題となり得るかも知れないが、少くとも現在、男女の地位や教育が甚しく相隔たり、男性が女性の利益を犠牲にして發達することを許されてゐる社會の狀態に於ては、最初から問題となり得ないのである。

男女の生理的分業に基く社會的勞働の分野の問題とても同じことで、勿論いつの時代にも、いかなる社會に於ても、男女間には生理的分業あると同時に、それに關聯して或程度の社會的分業のあることは事實である。然し其社會的分業の範圍は、其社會其時代の産業や經濟的發達の狀態によつて異なるもので、かの生理的分業、即ち女子に於ける分娩哺育の任務の如く、決して一定不變のものではない。ところで現代は、産業上に於ける一大變革の時代であつて、生産方法の變化に隨つて、男女間に於ける社會的分業の方則も自ら變化し、再組織せらるべき機運に遭遇して居る時代である。ところが此一定不變の自然的分業、即ち男女の生理的差別と、それに準じて起つたものではあるが、時代により、社會進化の程度によつて或程度まで――そしてかなり廣い範圍に亘つてまで――變化の可能性ある社會的分業とを混同する結果、現代婦人の解放の要求に對して種々なる誤解や無理解が生ずるのである。

婦人の天性に最も適した生活又は勞働とは、いかなる種類のものであるかといふことは、婦人自身が最もよく知つて居る筈である。何人も自己にとつて不幸な、又は不利な生活をえらぶ筈はない。そこで男女間の自然な社會的分業の問題は、婦人が完全に解放され、自己の欲する生活を選擇する權利を得た後に始めて解決される問題であつて、婦人の生活を――其母性をも個性をも全て――營利の犠牲としてゐる今日にあつては、問題となり得ない問題である。

そこで現代の婦人解放論の本質は、抽象的に云へば、全ての婦人をして其天性に隨つて生活せしめよといふに在り、具體的に云へば、さういふ自然な、自由な生活の障害となるような社會制度や習慣と闘つて、社會生活の基礎全體を、一層幸福な、愉快な生活を可能にするように改造しやうとするものに外ならない。これは或人々が早合點するやうに、男女の差別をなくすることを意味するものでもなければ婦人を男性に化することを意味するものでもない。畢竟するに婦人解放とは、婦人が婦人たることを脱却せんがための闘爭——自然に對する反逆——ではなくて、婦人がよりよき人間となり、隨つてよりよき婦人とならむがための闘爭である。婦人は、女性たることから解放されんことを要求するのでなく、奴隷狀態から解放されることを要求するに過ぎないのである。

## 二

『女性改造』六月號に、『婦人解放論の淺薄さ』と題して掲載せられた生田長江氏の短い文章は、色々の意味で上に述べたような、婦人解放の問題に對する不用意と無理解とを代表せられたかの觀がある。氏の主要な論點と思はれる所を擧げれば、第一に氏は、

『婦人解放論者の或る者は、男女の一切の差別をなくして行くことが必要であると言ひ、他のものは、その差別が本質的には極めて僅少なものに過ぎないのであるといふ。彼等の中の特に勇敢なる者等は既に言明してゐる。——子供を産むと産まないとの差別をほかにしては、男女の間に殆んど何等の本質的差別もないものであると。しかし乍ら、これはわざわざ論駁するまでもなく、あまりに實際の事實を無視した言明である。

男子と婦人とは、單に子供を産むと産まないとの相違だけでなく、その相違に原因して、又その相違に準じて、殆

んどあらゆる點に於て相違してゐるのである。』とて、男女間の差異を強調して居られる。『男女の一切の差別をなくして行くことが必要である』と主張した『婦人解放論者の或るもの』とは、果して何人であつたか、世界の婦人解放論者の中に未だ知られぬ珍しい新人の氏名と、其學說とを生田氏が明細に紹介されなかつたのは殘念である。が、少くとも私共の知つてゐる限りでは、最も勇敢な解放運動の鬪將である英國のパンカースト母子、米國のジエーン・アダムス、ロシアの共產主義者でさへ、男女の自然的差別を尊重こそすれこれが絕滅を必要とする者は一人もないことは事實である。然し男女間の自然的差別でなく、婦人の天性を損ふて其自由な發達を妨げるやうな不自然な、人爲的な社會的差別に對して撤廢の必要を認めることは、『男女の一切の差別をなくして行くことの必要』とは別個の問題であることを知つて頂かねばならぬ。

『他のものは其差別が本質的には極めて僅少なものにすぎないのであるといふ。』これは本質といふ言葉の解釋のしやう次第で、是とも非とも解せられる。例へば此處に雌雄二匹の犬がゐるとする。此二匹の性的特徵だけを特に重要視するならば、雌雄の差別は本質的に極めて大きいものであるが、此二匹を單に犬として見る時、犬としての本質には變りがない。隨つて犬としての價値に差別を附する必要がないようなもので、人間でも、女性特殊の生理的職分――それは女性の價値を高めはしても、男子以下に引下げる理由とはならない――以外には男女は共に人間たる本質に於て變りはなく、隨つて人間としての價値に高下を附する理由は成立たないのである。實際、男女が本質的に甚しく異つて居り、女性も男性と同じく、飢えてはパンを求め、踏み躙られては憤り、教育されずば無智に終るのでなかつたならば、即ち女性が男性と同じ要求も持たず、同じ苦痛をも感ぜずに居られる動物か天使であつたならば、婦人解放の問題は起り得なかつた筈である。

『男子と婦人とは、單に子供を產むと產まないとの相違だけでなく、その相違に原因して、又その相違に準じて、殆

んどあらゆる點に於いて相違して居るのである。』

といふ生田氏のお說も、どうとも解釋の出來ることで、例へば男女の言語、動作、態度とかいふやうな、所謂第二次第三次性徴――特に文明民族の間に於ける――を指すに留まる場合には、受入れられるが、漠然と、地球上全ての男女に對して無條件には適用の出來ぬ原則である。殊に重要なことは、男女の性的差別に基づく心的並に體的資質がいかに相違してゐようとも、さういふ相違は男女の價値の不平等を立證する何等の理由ともなり得ない點である。更に假に男女の心身が本質的に、『殆んどあらゆる點に於て相違してゐる』ことが事實だとしても、此假定は、それ故に婦人の要求を一層尊重せねばならぬ理由とはなり得ても、それを壓迫する論據を提供することは出來ない。何故ならば、男女の本質と、隨つて其要求とが相異れば相異るほど、男性は女性の利害を理解し代表する資格を缺く譯であり、隨つて男性の獨斷で女性の位置や職分を決定し命令することには、一層大なる不合理と不正とが伴ふからである。

そこで男女の本質的差異は、それの大小に拘はらず、婦人の生活を婦人自身に支配させるといふ婦人解放論の根柢を覆がへす何等の理由ともなり得ないことは明かである。生田氏の男女の本質的差別論は、婦人解放論の淺薄さを示す代りに、却て非解放論の淺薄さを暴露したものではなからうか。

## 三

第二に生田氏は『婦人は男子よりも小兒に近い』といふ假定によつて、『婦人解放論の淺薄さ』を立證されようと試みられた。其一例證として氏は、『婦人だけ罹つて男子の罹らない、婦人特有の病氣は子供に於ても見出される。しかし男子だけ罹つて婦人の罹らない、男子特有の病氣は子供に於て見出されない』ことを舉げられ、更に、

『婦人は男子よりも小兒に近い。

婦人には小兒の天眞爛漫に、素朴に、無邪氣に近いものがある。
婦人には小兒の冷酷さ、殘忍さ（平氣でトンボの頭をねぢ切るやうな）に近いものがある。
婦人には、小兒の粗惡な、露骨な自我主義に近いものがある。……
重ねて言ふ。婦人は男子よりも小兒に近い。從つて男子よりも未開人に近く、禽獸に近く、自然そのものに近い。男子は婦人よりも一層人間的であると共に、また一層自然を遠ざかつてゐる。……
三度重ねて言ふ。婦人は男子よりも以上に小兒である。
一般に小兒により近い婦人の能力が、小兒からより遠い男子の能力に比して、どれだけかお粗末なものであるべきかは、改めて論ずるを要しない事柄であらう。大體に於て、大人と子供との間に尊卑の差別を立てることが許されるならば、男子と婦人との間にも、何等かの程度に尊卑の差別を立てることが許されなければなるまい。』と主張して居られる。

人類進化の極致に在るものは男性であつて、男性への進化の停止せる狀態、又は男性の未成品乃至出來損ひが女性であると看做す男性中心論者の科學を超越した獨斷より以外の何ものを此處に見出すことが出來ようか。男性と女性とは種種の點に於て生理的に相異るのは事實であるが、其差異は一長一短をいふべく、委しく詮議立てすれば必ずしも男性にとつて有利な事實許りはないのである。男子の肉體的特徴から云へば、生物學上男性の方が女性よりも類人猿に近いことも發見されてゐる。して見れば生物學上『禽獸に近いもの』は女性ではなくて男性ではあるまいか。

又小兒との心的近似點として生田氏の擧げられた『素樸、無邪氣、天眞爛漫、粗惡な、露骨な自我主義』の如きは、小兒といはず、婦人といはず、成年男子といはず、一般に教養の少ない人々の間に見出される傾向であつて、婦人は概して

男子より敎養が不足して居る結果、さういふ傾向を多量に帶びて居らぬとも限らないが、然しこれを以て、一般的に、後天的要素の如何に拘はらず、女性全體の先天的特質とすることは誤まつて居る。これは都會人と地方人、文明民族と野蠻民族敎養ある者と無き者をの間について見れば明かである。更に『婦人には小兒の冷酷さ、殘忍さに近いものがある』といふ斷定も餘りに粗雜な、輕率な獨斷ではあるまいか。男兒と女兒とを比較すれば、いづれが先天的により殘忍な、冷酷な遊戲を好むであらうか。粗暴、殘忍、殺伐は男兒の遊戲の特徴であり、平和と慈愛とは、女兒の動作を一貫する特徴である。更に『平氣でトンボの頭をねぢ切る』どころか、平氣で幾千萬の人類の大屠殺を敢行する戰爭や侵略の下手人は常に男性である。あらゆる殘虐な犯罪や殺人行爲も、十中八九といふより寧ろ十中十までは、男子の中に犯人を見出される。それが女性の場合には、例外的事件として喧傳されるだけに稀有なのである。犯罪人、狂人、白痴、畸形兒等の比率は女性よりも男性に於て遙かに高い。生田氏の如く現在の婦人の一切の缺陷について、社會的、後天的原因を省みずに それらを專ら先天的、必然的な特徴とすることが許されるならば、是等男性の缺陷も過誤も、全て男性の先天的缺陷として、其全體の價値を永久に削減する論據として擧げられてもよい筈でなからうか。

今日の男性が人間として未だ理想的な發達を遂げたものとは云はれないように、婦人も亦、人間として完成の域に達したものとは云はれない。それは今日の社會的條件が全ての男女に十分な發達の機會を與へて居らぬ當然の結果である。然し其不完全な社會的條件の中に在て、男性の方は、全體として同じ階級の女性よりも有利な境遇におかれて居るために、女性より十分な發達を遂げ得る場合が多い。此點に於て女性の地位は大に改善せられることを要する。けれども本來、女性は男性と小兒との中間に介在する未完成の種族乃至階級を構成するものでもなければ、男性への進化の中途に在るものでもないのである。男性と女性との先天的差異は、單なる質的差異である、兩性相助け相補ふに便ならしむる特徴でこそあれ、決してそれ自身兩性間の優劣乃至尊卑を意味するものではない。此點に於て生田氏は御自身の主張せられる男女の

本質的差異の意義を無視して、差異卽ち優劣と斷ずるの謬妄に陷つて居られる。

男兒は長じて男子となり、女兒は長じて婦人とはなるが、婦人がより進歩すればとて、男子になるものではない。男子のみが決して人類進化の極致を示すものでもなければ、模範的な、代表的な人間のタイプでもない。男子、女子、及び小兒は、それ〲特有の領域に於て人類のタイプを代表するもので、各々獨立した存在の意義を有し、人間として平等の價値を有するものである。隨つて其間に、いかなる程度に於ても、貴賤尊卑の差別を立てらるべき道理がない。

男女兩性の先天的優劣とか能力の差異とかいふことが、今日の如く男女の地位や教養の程度の極度に異る狀態に於て、公平に裁斷し難い問題であることは上にも述べた通りである。畢竟するに、非解放論者自身、いかに有利な條件の下に於ても、婦人は到底男子より『お粗末な能力』しか持ち合せぬことを立證するためには、先づ第一に男女の機會均等を實現して見る必要があるであらう。

男性は古來多くの天才を同性の間から出たことを誇りとする。然し歷史上に名を留めぬ不遇の天才――遂に發達の機會を與へられずに葬られた無數の天才の中に、女性の數が何ほどを占めて居つたかを別としても、顯はれたる男子の天才のうち、母親から其生命を受けなかつたものが、一人としてあるであらうか。そして母親が、生命と同時に『お粗末』ならざる才能を其子に與へた例が絕無だと云ひ得るであらうか。全ての天才は『お粗末』ならざる其『能力を、父系からのみ繼承したと誰か立證することが出來やう。婦人の『能力』は『お粗末』だと斷じ去る時、男子は、其『お粗末な能力』しか持ち合せぬ母親の血と肉を承けついだ自分自身にも亦、同じ嘲り、同じ罵りが返つて來ることを知らなければならない。更に亦、生みの苦しみのみならず、或天才的人物を養ひ育て、其才能を發揮し大成させるまでに妻や母親の忍ばねばならぬ偉大な忍苦と犧牲とを想ふ時、誰か天才者の功勞をひとり其本人にのみ歸することが出來やう。

要するに、過去數千年來、自由な發達を阻害されて來た現在の婦人の、社會的、後天的に不利なる一切の條件を不問に

附して、其心身の劣弱を指摘することは、婦人解放論の淺薄さを立證する何等の材料ともなり得ないのである。現在の婦人は、現在の男子が自己の缺陷を意識するより遙かに深く、且つ痛切に自己の缺陷を意識して居る。そして其缺陷を脱却する先行條件として、社會生活の革新を要求して居るのである。

私共婦人から見て不審に思はれるのは、婦人は自己の地位を高めんがために、男性の利益を犧牲とし、其地位を低め、其才能を卑しめようとは毫も考へて居らぬのみか、現在の男性の能力や功績に對しては十分の尊敬を拂つても居るに拘はらず、狹量なる一部の男性は、婦人が其地位を高めることそれ自身直ちに男性の損失を意味すると考へ、繩張爭ひ、又は商賣仇きの氣持で是を敵視することである。女性が將來いかに天賦の能力を發揮した所で、男性の能力を奪ふ譯でもなく、男性の天才が光を失ふ筈もない。たゞ女性の參加によつて男女及び兒童全體を含む人類の社會生活が一層豐富になり、一層光輝を加へるに過ぎないのである。女性の發達が男性の尊貴を侵すやうに考へ、これを恐れ、これを罵ることは自己の能力に對する憐れむべき自信の缺乏を證據立てるのみであつて、決して『婦人解放論の淺薄さ』を證據立てるものではないのである。

## 四

『婦人解放論者が自身の味方を得た如く思つたところの、リスター・ウオードの女性中心說なるものは、實際に於て、我れ／＼にまで何を敎へ何を考へさせたか。

それは何よりも先づ、野蠻時代へさかのぼり、下等動物へさかのぼり行けば行くほど、男性よりも女性が强かつたといふのである。大きかつたといふのである。一言にして云へば、男性中心よりも女性中心の社會であつたといふのである。かりに過去の經過に對するかうした解釋を十分に根據のあるものとするのである。その場合にかうした解釋からして

暗示されるところの將來の性的關係は如何なるものであるか。

女性が殆んど一切のものであつて、男性の存在が殆んど認められてゐなかつた下等動物の時代から、今日の社會狀態にまで進化して來た人類は、(或は生物は、)今度いよ〱男性支配の、男性中心の社會にまで進化して行くのではあるまいか。そして遂には、男性が殆んど一切のものであつて、女性の存在が殆んど認められないやうな究極狀態にまで到達するのではあるまいか。

男性が未だ存在しないやうに見えてゐた原始狀態に於ても、それは少女の內に包容されて立派に存在してゐたことを我々は想像する。

女性が既に存在しないやうに見える生物發達の最高階段に於ても、それは男性の內に包容されて立派に存在してゐるべきことを我々は想像する。』

『小兒の天眞爛漫に、素撲に、無邪氣に近いもの、』『小兒の粗惡な、露骨な自我主義に近いもの』を大人の中に求める人々は此處に引用した數節の中に、その最も完全に近い例を見出されることであらう。

ウオードが其社會學說の中に、世界は男性を以て始まり、男性の支配が古往今來、宇宙を貫く永久の理法であるといふ男性中心說を破つて、生物はもと女性に始まり、男性は女性から派生し、女性の性的選擇によつて今日の如き美と强大とを獲得するに至つたといふ、謂ゆる女性中心說を確立したのは事實である。然し人類の生物學的進化は旣に其限界に達してゐる。ウオードの生物界に於ける女性中心の事實の指摘は、幾千萬年以來の人類の過去の歷史の說明であつてその中には人類が、將來、過去の歷史を逆に辿つて、男性中心に向つて生物學的進化を遂げ、絕對的男性中心の社會を作り出すといふやうな暗示は毛頭含まれて居らぬ。のみならず、ウオードは、人類社會が或程度の進步に達して後、男性中心の結

果として現れた女性退化の事實を指摘し、且つ過去二世紀の間に於て女性の地位が再び改善し始めた事實を認めて、將來は、兩性の双互選擇によつて一層健全な子孫を得るやうになるであらうことを暗示して居るに過ぎないのである。生物としての人類が今日以上に著しい進化を遂げるものでないことは、いかに奔放自在な生田氏の空想を以てしても、如何ともすることの出來ぬ、確定的な事實である。

然し人類の社會は、猶ほ十分に進化の餘地を有してゐる。然しそれが生田氏の主張されるやうに、單純に、無條件に、文明の發達に伴ふて女性中心から男性中心に向つて進み、今後も永久的に同じ方向に向つて進むといふことは、ウオードを始め、如何なる社會學者も未だ曾て提唱し又は暗示したことのない新說である。人類社會に於ては、血族共產制度から私有財產制度に進化し、それと共に女性中心主義が崩壞して、男性中心主義が發達した。けれども今や私有財產制度と共に、その件隨物たる男性中心主義も、發達の最後の段階に達し、原始共產制よりは遙かに××××××と、男女平等主義とに向つて、進化の流れがその步みを進めてゐることは、苟くも盲人ならざる限り、何人も疑ふことを得ない眼前の事實である。精密な意味では、資本主義の時代は、もはや男性中心、男性萬能の時代ではない。それは既に社會生活のあらゆる方向──產業、政治、敎育、社會施設等──に亘つて婦人の協力を必要とする限りに於て、婦人の權利を認めざるを得ぬことゝなり、婦人の地位は漸く改善の緒についたのである。されば男性中心の文明は封建時代を極致とし、資本主義の時代に入つては、既に男性の萬能的權力の崩壞時代に入つたのである。今日の所謂文明を、眞の文明と看做すか否かは人々の自由であつて、或は將來、一層高度の發達を遂げた社會は、資本主義沒落の最期の時期までを、野蠻時代に編入し、それ以後の時代を以て文明と稱せぬとも限らない。が、とにかく、文字の發明から今日に至るまでの時代を、文明時代の一部分と看做した處で、其短い一部分の間に於てさへ、男性中心主義が文明と共に發達したと單純に斷じ去ることは出來ないのである。何故ならば男女の位地を決定するものは、畢竟或時代乃至或社會の經濟的條件であつて

文明の程度ではないからである。ギリシア、ローマの文明時代より封建時代に至る長い期間を通じて、ヨーロッパの婦人の地位は、常に隷屬的なものではあつたが、決して後代に至る程、即ち文明が進むほどそれが甚しくなつた譯ではない。更に現代に至つては、文明の度は高まりながら、男性中心の事實は變化して、女性の地位の改善しつゝあることは、上に述べた通りである。

ウオードの女性中心說は、生物の進化と社會進化の歷史を說いて、男性中心が宇宙を貫く永遠の方則でないことを說き、生物界及び人類社會に於ける女性の重要を明かにしたまでゞあつて、そこには、生物及び人類社會の進步發達が、男性中心の發達と相伴はねばならぬとするやうな不合理な原則——生田氏の見出されたやうな原則——も暗示も、全然含まれてはゐないのである。寧ろ其反對に、過去に於て、進化るあの時期に際し、女性中心から男性中心へ移つた人類社會は、將來、兩性が平等の重要さを以て相協力する所の、より高級な狀態へ進化するであらうことが暗示されてゐるにすぎないのである。即ち男性中心主義は、人類の社會進化の或時期に於ける、一時的な現象として認められてゐるだけであつて、永久な、支配的な原則としては全く問題とされて居らぬのみならず、さういふ謬論を打破した處に女性中心說の價値は潛むのである。

一再ならず紹介されたウオードの女性中心說すら正解し得ぬ程に男性中心主義のチャムピオンの『能力』は『お粗末』なのであらうか。それとも、斯の如く普及した學說を、斯ほどまでに誤解曲解させたものは、『小兒の粗惡な、露骨な自我主義に近い』心理狀態であらうか。」

## 五

『男性の外に出でては脫兎の如き烈婦であり、男性の内に入つては處女の如き貞女であるところの、在來の日本婦人の理

想的典型が、今日の『婦人解放』論者等が無批評に輸入してゐる新しき婦人の理想的典型より、どれだけ、より精練された、より醇化されたより高貴なものであるかは、今日までのところ遺憾ながらたゞ少數の具眼者だけが知つてゐる。』と生田氏は述べられた。謂ゆる『在來の日本婦人の理想的典型』としての『貞女』とは、封建時代の武士階級の間に、男子の武士道と相並んで發達した武家道德の一部——婦人の代表者であることはいふまでもない。武家時代の婦德は、家祿の繼承に必要な男子を生むこと、又は育てること——妻は妾腹の子女をも我子として育てる義務があつた——を重要な要素とし、封建的軍隊の單位としての武家の家族制度を維持する目的のために、武士階級の經濟的利害から割出して婦人に强要された道德であつて、武士階級の存在しなかつた時代の日本には見ることの出來なかつたものであり、又、武士階級が消滅すると同時に、其意義を失つたものである。全ての理想も道德も、時代により、社會により、階級によつて異なる。武士階級の存在にとつて最も有利にして必要であつたがために極力吹鼓せられた武士道や、武家道德としての婦德は、武士階級の消滅によつてその光を失ふと同時に、新たに興つたブルジョア階級には所謂ゆる紳士道又は商人道なる新道德が興り、勞働階級には、階級的團結なる標語が、新道德の表徴として認めらるゝに至つたのである。封建時代の『日本婦人の理想的典型』は、封建制度と共に其幻影にあこがれる者は、今一度び、地球の上に封建制度の再興を企てるより外に道はない。

産業革命は人類の經濟生活の上に一大變革を加へた。其結果として、今や婦人は自ら欲すると否とに拘はらず、又男女の本質乃至能力に關する抽象的な比較論の如何に拘はらず、社會の經濟生活の渦中に捲き込まれざるを得なくなつた。飢餓や失業は、相手が男子たると女子たるとを問はない。婦人も亦、自己の生命を維持せんがためには、男子と等しく勞働を賣るの必要に迫られ、更にそれを一層有利な條件で賣らんがためには、男子と共に資本家階級と鬪ふことを餘儀なくされて居る。婦人の母性も人間性も營利の前には蹂躪されて省みられない狀態に對して、婦人が人間として、女としての當

然の權利を恢復するために解放の叫びを擧げることは、餘りにも自然にして合理的なことではあるまいか。

最初に述べたやうに、婦人問題は純然たる經濟問題に端を發して居る。隨つて婦人解放運動の取扱ふ當面の問題は、兩性の本質的差異乃至優劣の問題でもなければ、兩性の自然的分業の精密なる範圍如何の問題でもなくて、婦人の生活及び勞働の條件を一層有利ならしめ、男女の社會的平等を實現しやうとするだけの事に盡きて居る。それ以上の問題即ち將來の社會に於ける兩性分業の範圍とか、兩性の自然的差異に基づく性能如何とかいふことは、經濟問題としての婦人問題が解決された後に自ら解決の緒につく問題であつて、今日只今、いかに論爭を重ねた處で實際に解決の出來る問題でもなく、隨つて又婦人解放論の當否を斷ずる材料ともなり得ないのである。

玆に於てか、生田氏の『婦人解放論の淺薄さ』は、婦人解放論の實質に一向觸れてゐないものであり、隨つて婦人解放論よりも、非解放論の淺薄さを立證する結果を示したに過ぎないのである。生田氏にして現實の婦人問題を理解されたならば、田畑や、工場や鑛山に働く幾百萬の婦人勞働者の生活を見、主婦や家婢の家庭勞働の實際を、婦人自身の立場になつて理解し得るだけの想像力と洞察力とを持たれたならば、其等の婦人の生活及び勞働條件の改善を含む婦人解放の痛烈な要求のどこに『淺薄さ』が潛んで居るかを發見されるに苦しまれることであらう。更に又、其等の婦人の勞働――日本の社會は半ばそれによつて支へられてゐる――の尊い價値に氣づかれた時、彼女等の『能力を』『お粗末』と呼んだことに對し、些かは良心に刺戟を感ぜられてもよい筈である。

# 財政及行政整理の根本趣旨

高橋龜吉

## 一

一體一國の經濟が賄ひ得る國家の歲出にはその國の經濟力の如何によつて、自ら限度があるものである。その限度以上の歲出を爲すと不健全に國民の生活を壓迫し、國民の生産活動に必要な資金を涸渇せしむる。之を他の言葉で云へば、一國の歲出がその國力以上に及ぶと、その國の經濟は衰微して來るのである。宛も一家の費用がその收入の限度以上に上ると必ずその家は衰微するのと同じわけである。就中一國の歲出中、最も避けねばならないことは不正産的の支出である。例へば一家に於て、子供の敎育費とか、一家の保健費とか、事業の研究費、擴張資金とかの支出はケチ／＼してはならないが――併しそれとてもその收入に比例したものでないと最後かそれが好結果を齎らす迄に中途で破産して駄目になる、――併し虛榮や空虛な面目論やで、徒らに廣大な家屋敷を建築したり、下女下男其他の使用人を多く抱へたり、その他これに似た濫費は極力避けねばならないのと同じ理である。然るに、我が政府は、歐洲戰中戰後の好景氣時代に乘じて最も不生産的な軍費を中心に莫大な經費の膨脹をやつたのである。例へば左表について見よ。

本邦歲入歲出表

| | 歲入（千円） | 歲出（千円） | 差引剩餘（千円） |
|---|---|---|---|
| 明治十年 | 五二、三三八 | 四八、四二八 | 三、九〇九 |
| 二十年 | 八八、一六一 | 七九、四五三 | 八、七〇八 |
| 三十年 | 二二六、三九〇 | 二二三、六七八 | 二、七一二 |
| 四十年 | 八五七、〇八三 | 六〇二、四〇〇 | 二五四、六八二 |
| 大正三年 | 七三四、六四八 | 六四八、四二〇 | 八六、二二七 |
| 六年 | 一、〇八四、九五八 | 七三五、〇二四 | 三四九、九八三 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 七年 | 一、四七九、一一五 | 一、〇一七、〇三五 | 四六二、〇八〇 |
| 八年 | 一、八〇八、五七四 | 一、一七二、三二八 | 六三六、二四六 |
| 九年 | 二、〇〇〇、六五二 | 一、三五九、九七八 | 六四〇、六七四 |
| 十年 | 二、〇六五、七二一 | 一、四八九、八六五 | 五七五、八五五 |
| 十一年（豫算） | 一、四八三、四一九 | 一、四八三、四一九 | ― |
| 十二年（〃） | 一、三四六、一一六 | 一、三四五、九七五 | ― |
| 十三年（〃） | 一、五八九、一八六 | 一、五八九、一八六 | ― |
| 内復興費（〃） | ― | 二四六、四三九 | ― |

明治四十年から大正六年迄の十年間には、我が歳出は約六億圓から七億三千五百萬圓に、即ち約一億三千萬圓を增加したに過ぎなかつた。然るに、大正七年以來玆に歳出は激增して十年には約十四億九千萬圓の巨額に達し、六年に比して七億五千四百萬圓即ち二倍以上に激增するに至つた。而してそれが大體に最近迄續いてゐるのだ。成る程、明治四十年前に於ては、歳出は十年毎に二倍乃至三倍してゐる。併し、我國は日露戰後迄（明治四十年頃迄）は長足の發展をなし得たのであるから、宛も一家の繁昌につれてその支出が增加すると同じ意味に於て尙ほ之れは恕し得たのであつた。それにも拘らず、日露戰後の歳出の激增は當時の我が經濟の發展を阻害し、遂に當時に於ても財政の整理を見るに至つたのであつた。

その後我が國運の發展は大體に日露戰後を頂上にして停頓狀態に陷つた。之れ明治四十年以降大正六年迄の歳出が略ぼ不變であつたわけである。然るに、歐洲戰爭によつて我國は宛もアルコール中毒の如く、一時的好景氣に見舞はれたが、併しそれは束の間で、戰後再び舊の經濟狀態に復歸した。之れ即ち大正九年以來我が國に大なる不景氣が襲つて來た根因である。にも拘らず我が歳出は前表の如く一時の景氣沸騰時代に膨脹したまゝ依然巨額を示してゐる。之れではとても我が經濟はやつて行けない。若しもこのまゝ續けて行けば必ずや我が國は衰微するに違ひない。之れ、今日我國に於て財政の整理が有ゆる方面から絶叫せらるるに至つた根本事情である。宛も成金が一朝凋落して、全盛時代の家政に一大整理を必要とするに至つたと少しも異る所はない。而して之れを更に促進したものは昨年の大震災である。

## 二

所で、一度膨脹した家計を緊縮するには、虚榮や威張屋の奥さんや令孃や若さんや隱居さんやの反對がある如く、一度膨脹した國の財政を整理するにも之に似た反對が起る。併し、斯樣の反對に抗して先づ特に一大斧鉞を加へねばならない費目は不生產的な費用である。生產的費用の削減は進取的國民の萬策に盡きて最後に採るべき方法である。然るに、我

が財政の中、就中不生産的費用たる陸海軍費は歳出全體の約五割の巨額を占めてゐる。勢ひ若し我が財政に見るべき費用の節約を見んがためには、是非共、陸海軍費就中陸軍費の一大削減（海軍は先年ワシントン會議の結果已に一大整理をしてゐる）に俟つ外に策はない。尤もそれも我が國防上絶對に必要だとあれば忍びもせねばならないが、併し今日の戰爭は昔の如く兵隊のみの戰爭ではない。國民を擧げての努力と共の國經濟力（砲銃彈、飛行機、毒瓦斯其他凡ら財力に頼る）との協力に依存するものである。如何に日頃から兵力だけを備へて之に巨額の費用を費した所が、その兵力を戰場で働かす物資を供給する財力が、その國の經濟自體に備はらなくては駄目である。經濟力の伴はない軍備は例へば彈丸の備へない銃砲の如くであり、又は徒らに宏大な住宅を建てながら、之に必要の家具家財も、之を掃除し修繕する維持費も支出する力なく、スワ住込まんとして容易に住込み得ざるの愚の如くである。

併し乍ら、陸海軍を足場にして今日權勢を維持してゐる將軍連にとつては、陸海軍の縮少は、自らの死活に關する重大問題だ。國防の名を藉つて彼等が容易に軍備の縮少に同意しない根因は茲に在る。殊に陸海軍のこの我儘を通さすに都合のよい制度は、所謂陸海軍大臣の武官資格の制限である。即ち、陸海軍の將軍でなくては陸海軍大臣になれないと云ふ規定である。この規定あるため國民全體の利益のために思ふ樣に陸海軍を整理することが出來ない。軍閥の同意を得なくては何も出來ない制度になつてゐるからである。斯樣のわけであるから、日本の財政を整理して、眞に我が國力の發展に資するためには何は措いても先づ、陸海軍大臣を軍閥以外の者から任命し得る樣な制度に改革しなくてはならない。之れ今日世間で云ふ所の陸海軍大臣の武官資格撤廢問題である。

次に、我が財政を整理するためには、我が財政を今日の濫費に陥らしめた根因を先づ除かねばならない。その根因は剩餘金の繰込制度である。云ふわけは、前掲の本邦歳入歳出表にも示せる如く、近年我が財政は歳入（尤も其の中に公債等が含まれてゐるが）が歳出よりも常に多く、年々數億圓の剩餘金を出してゐる。然るにこの剩餘金は、これ迄は、全部翌年以後の歳出に振向けられて來たものである。もと〳〵其所に使ひ得る金さへあれば、濫費に陥るが人情である。そこへ此の巨額の剩餘金が年々あつたのだ。我が財政は愈々容易に濫費に陥らざるを得なかつた。しかも尚ほ惡いことには、此間の機微をよく呑込んでゐる政府の當局者共は、惡賢くも毎

件歲入を內輪に見積つては巨額の剩餘金を蹴出し、之れは餘つた金であると云ふ名で、勝手な濫費を容易に議會に承認せしめたものだ。で、今後國民が政府の濫費をよく監視し得るためには、剩餘金は次年度以下の歲出には使はず、是非共之を公債の償還又は減稅に振向けしむる必要がある。斯くすれば、今後、新に政府が歲出を增加さすためには、常にこれに相當する財源を新に作らねばならなくなるから（例へば增稅乃至新稅等により）之れ迄の如き濫費、就中軍費の大增加の如きは、容易に國民の承認を得ることが出來なくなる。

以上の二つが此際に於ける財政整理に必要な根本基礎である。併し乍らその二つともいま直ちに十分滿足な解決は出來そうにもない。就中陸海軍大臣の武官資格撤廢に於てさうだ。之れ、國民の輿論が足らないからである。國民は更に大に自覺する必要がある。

## 三

この外、政府は所謂一般の行政整理によつて經費を節約し、事務を簡捷にせんとしてゐる。その限りに於てまことに望ましきことである。併し乍ら、此際、日本の社會が眞に必要とする行政整理は決して斯樣な性質のものではない。モツト〱根本的なものである。

元來、日本のこれ迄の發達は、一面から云へば維新革命の先覺者が主となつて、國民を指導誘掖して來た結果である。即ち維新革命の先覺者共は所謂官僚として國民を支配し指導し誘掖し來つたものであり、國民はその指導に從つて今日の發展を見るに至つたものである。であるから自然、これ迄の我が行政制度は、右の目的に最も都合よく出來上つて來たものである。例へば、役人畑に育て上げられた官僚が、國民の支配者として、國民の指導者として、國運進展の一切の責任を荷ひ、ために、我が政治は國民の政治でなくて官僚の政治となり、我が役人は國民の公僕でなくて國民の支配者であつた如きである。然るに斯く官僚が國民を支配し指導するためには、中央から自由にその意思を國民に傳へ、之に從はしむる行政制度を必要とする。之れには中央集權主義、劃一主義が最も便宜であり、文官任用令により行政の特權的位置を官僚に獨占するを必要とする。之れ即ち今日の我が行政の實際である。

然るに、以上の如く官僚が國民を指導し誘掖すると云ふ優越な地位は、最近に至つて二つの理由から根本的に動搖するに至つた。その第一の理由は、官僚自身の實力が老耄したこ

とである。元來、人は權力を得て永くそれを固定すると安逸保守になつて時勢におくれるものであるが、我が官僚も亦この例に洩れず、文官任用令や官僚閥で權力を獨占し、世間に於ける實力の眞劍な競爭から逃避して、安全に鰻上りに、若殿様の如く易々として權力の地位に祭り上げらるゝに及んで茲に官僚は眞實の能力を研磨するの機會を失ひ、全く時代遲れの者と化石するに至つたのである。然るに、他方に於ては一般の國民は此間、死活を賭した眞劍な實生活の體驗を基礎に實力を研磨し、今や遙かに官僚以上の實際能力を有するに至つた。換言せば之れ迄、何事にも官僚の厄介になり、官僚の指導を仰いだ國民が、今や官僚と云ふ親以上の實力を養ひ、却つて官僚を老耄視するに至つたのである。之れ、官僚が舊の如き指導的實力を失ふに至つた第二の理由である。

斯くの如く、官僚は最早時勢に後れ、且つ實力に於て今や却つて民間の人々に遙かに劣るに至つた。それにも拘らず、我が行政制度は、依然官僚がその昔國民を指導する實力を有し、國民亦その指導に唯々諾々として服從してゐた時代のままに今尚ほ殘されてゐる。之れ、我が政治が最近各方面に於て澁滯し、我が經濟が各方面に於て行詰るに至つた根因である。今日、我が社會が眞に要求する行政の整理とは、斯様な時代錯誤の行政制度を根本から改革して、時勢に適應せしめ、且つ民間の活社會に養はれた眞の人材を自由に行政の中心に立たしめ得るものでなくてはならない。

元來、官僚が國民を指導すると云ふが如きことは、少數の先覺者によつて運ばれた革命直後の一時的變態に過ぎない。この時代に於ては大多數の國民は尚ほ新社會に適應する能力尠く、先覺者たる當時の官僚の指導に從ふ外ないからである。維新革命後最近迄の我か國の實際、勞農革命後の露國今日の實際の如き卽ち之れである。併し乍ら、其の後國民一般が一人前に發達したる場合に於ては、政治は必然に國民によつて行はるべきであり、官僚は國民指導の位置から國民の公僕に歸るべきである。このためには、官僚政治と反對に、政治は、中央集權より地方分權に移り、劃一主義より轉じて地方地方の特殊事情に適應せしめ、文官任用令の如き役人萬能主義を廢して、廣く國民全體から人才を選擧して行政の中心に立たしむる制度に改革せねばならない。之れ、私が曩に「我か國民の眞に要求する行政改革」と唱へたものゝ根本主義である。而して茲に地方分權主義とは、例へば市町村の自治權を擴張し（そのためには現在の市町村を整理合併してより大なる單位となす必要があらう）知事を民選し（府縣も整

理併合すべきであらう)。郡役所を廢止する等、要するに之れ迄中央政府の任免の下にあつた官吏が指導的位地にあつたのを、それ〲の地方の人々の手にその指導權を回復することである。斯樣な根本的な行政改革が行はれて、始めて我が現在の行詰は打開され、我が國の政治は活躍し、我が經濟は發達し、我が國力は進展することが出來る。國民の最大實力は斯くして始めて發揮し得るからである。

然るに、現に朝野に叫ばれつゝある行政整理なるものは、斯樣な時勢の根本的變化を自覺しないで、唯だ漫然と、思ひつきに、從來の立前の下で、此處彼所に姑息な行政整理を行はんとするものに外ならない。これでは、依然我が政治や經濟の行詰りは打開される望がない。所詮、これ迄の我が政治家その者が時代後れである。これに國民の眞に要求する行政の改革を期待することが無理なのだ。われ〲の希望は、今や唯だ一つ普通選擧實施後にある。眞の民衆の自覺はその時に於て始めて實行力を有するのであるからだ。

（十三、九、五記）

# 懸賞募集

## (題) 最近最も興味を惹いた話

今度は前掲のものを募集します。社會現象、藝術、科學、宗教、或は皆さんの日常身邊の出來事、その他何んでも「これは面白い」と思はれた話を送つて下さい。そして、それは、「興味ある」うちに「何ものかを暗示」するものでありたいと思ひます。奮つて應募して下さい。

(規定) 〆切、十月十五日、四百字詰原稿紙十枚以内、發表は十二月號の誌上、當選者には十圓乃至十五圓の薄謝を呈します。

女性改造編輯部

## お斷り

本號に發表する筈であつた

**農村婦人の生活**

は、問題が深刻であるだけに、全國的に非常な反響があつて、應募稿は机上に山積する狀態でした。斯樣な問題に、眞面目な注意と、深愛とを注いでゐられる讀者の多い事は、ひそかに本誌の誇りとし、同時に喜びとする所であります。

從つて、選者も大努力を以つて選にあたりましたが、何しろ大變な量であるので、遺憾ながらとう〲本月號に間に合ひませんでした。で、一層嚴選の上、十一月號に發表することにいたしました。右應募者諸氏の御諒恕を仰ぎます。

# 短篇小說懸賞募集

本誌は現文壇の重鎭島崎藤村氏に選評をお願ひして、毎號左の規定に依り短篇小說を募集してゐますから、皆樣は奮つて自由な眞劍な作品を御投稿下さい。

## 規定

一、一篇の長さは四百字詰用紙三十枚以內に限ります。

一、毎月壹日を以て〆切日と定めます。（今回の〆切は十月一日で、發表は十二月號の誌上でいたします。）

一、當選作に對しては參拾圓以上百圓迄の稿料をお送りします。

一、住所姓名を明記して下さい。（但し應募者は婦人に限ります。）

宛名は　東京芝區愛宕下町一ノ一　改造社

女性改造編輯部

# 美術の秋

## 美術觀照の態度

中川紀元

先日あるえらいお役人様が二科の會場へ來て某氏の出品の前に立つての質問に曰く、

「この裸體の手前に置いてある水蓮の花は何を意味するのですか？」

說明の任に當つた石井柏亭氏は少時返答に窮した後に、

「別に意味はありません。たゞ作者はこゝに黄色い色を塗りたかつたから黄色な花を配置したに過ぎないでせう」

と答へた。大官は更に他のある裸體畫（椅子に腰かけた裸女が左手でカーテンの一端を摑んでゐる）に就いて、

「これは何をしてゐるところですか、浴室の陰のベットへ入らうとするところを描いたのではありませんか？」

と訊く、石井氏は當惑な色をなして辛うじて答へました。

「さあ、作者は別にさういふところを寫す考へではなかつたでせう。たゞ畫面の權衡の都合上右手を襟に置き左手を外方に延ばした姿勢をモデルに執らしたに過ぎないと思ひます。」

以上の對話を聞いてゐた私たち畫家の仲間は、いづれもあまりに懸違つた繪の見方をする人の考へに驚いた。恐らく先

方では畫家といふもの丶考へ方のかはつてゐるのにひどく不審を感じたことゝ思ひます。

「繪はどういふ風に觀るものですか、」「どうしたら繪がわかるやうになりますか、」といふ質問に私たちはいつも出會はすのですが返答はたゞ「あるが儘に繪を御覽なさい、色々な場合に色々な繪にぶつかつて、知らずくに繪といふもの丶精神を會得するより外はありません」と云ふより外はないのです。

第一に吾々は繪を觀るのに一度すべての成心（豫定）といふものを捨てゝかゝらなければなりません。これまで持つてゐた美術の觀念を捨てゝ新しく自分自身の眼で繪を眺めることです、肉眼に映じた結果をそのまゝに信ずることです。

繪は——彫刻でも建築でもすべての空間を支配する造形藝術は齊しく——自然の狀態の複寫ではありません。もとよりそこに實物が在るやうに巧みに自然を再現した作品も古來數多く製作されましたが、それはそれだけとして傑れた作品とはなりません。

一枚の繪畫の持つ自然さは自然界の外貌から獨立した全然別個のものです。（妙な繪、かはつた繪と云ふのは大抵の場合自然に似てゐないことを指して云はれてゐるやうです。）人は「こんな歪んだ顏がありますか」といふ。私は「これは繪の顏です、生きた本當の顏ではありません」と答へます。繪が生々してゐると云ふことは中の描かれた人の顏が生々してゐるのを云ふのでなくて、その畫面に塗られた色や線の生々してゐることを云ふのです。

繪空事と云ふことがあります。

墨繪を見て「こんな黒い竹がありますか」と反問する人は繪空事を解しない人——繪畫を解しない人——です。人はその一幅の墨竹畫によつて竹の植物學的な性情を究めるのではなくて、墨色を見、筆勢を見、更に筆者の魂を見るのを目的とすべき筈であります。この態度は古い繪でも新しい繪でも寫實的な繪でも抽象的な繪でも、あらゆる繪を觀賞する場合に同樣です。

立體派の畫家に向つて「あなたには自然がこんな風に見えますか」と問ふことは無駄です。立體派の畫家でも眼の構造の間違つてゐない限り、眞直な物が歪んで見える理由のないのは分りきつた事です。畫家の目的は外界の對象物を再現するのではなくて、一個の全然新しい自然物を創造するのにあ

りす。彼には畫面構成の都合上自身の考案で勝手に對象物の置き換えや變形を行ふことがゆるされてゐます。それは飽く迄自由です。本當に才能のある畫家の仕事ならば如何程抽象的な行きかたでも確實な自然さがあります。重さと輕さ、明るさと暗さ、柔かさと固さ、廣さと狹さ、――それらの布局配置の關係が自然と同じやうな確かさと美しさとを備えてゐます。

無能の畫家が如何程苦心して丁寧に自然を寫してもそれは良い繪にはなりません。物尺で計つたやうな正確さは直ちに一枚の繪の値打ちを決定しません。アンドレ、ロオト氏は正確と眞實とは全く別な二つのものであると云つてゐます。

すぐれた繪は一見してそこに何が描かれてあるか、くはしく看了る前に早くも看者の眼と心とに訴えて來るものがあります。何かしらじつかりした感じ、美しい感じを與えます。惡い繪は一見してゴタ〱したきたないダラけた感じを與へます。

この最初の大體の印象が繪を觀賞する根本のバロメーターとなります。良い繪も惡い繪も永く看れば看るほどこの印象が深められてゆくのです。

巴里のパンテオンの堂宇の内部には偉人の事蹟を描いた多くの壁畫があるのですが、有名なシャヴアンヌの筆になるサント・ジエネビエーヴ傳の繪が一番の傑作で他の人々のものを壓してゐます。建物の入口に立つてズツと内部を一瞥した時に何が描かれてあるとも知れないのに、シヤヴアンヌの畫面だけが他のものと劃然と區別されて云ひやうのない高い美しさを表はしてゐるのに氣が附きます。

構圖や傅彩やのくはしい搜索は專門の美學や美術家のするとで、一般の觀照家としては理屈なしに一枚の繪の持つ全體の感じに打つかるのでよろしい。良い繪と惡い繪との區別は出來ずとも、好きな繪嫌ひな繪の比較は誰でも出來ます。先づそこから出發して段々と繪の見方、物の見方を深めてゆくのです。色々な場合に逢ひ色々な作品に接して、澄んだ心持でこれを眺めてゐるうちに自然と「眼が肥え」て來ます。習ふよりは慣れろです。

美術に限らず音樂でも舞踏でもいづれの藝術でも何等の教養なしに最初から正しい十分な觀照には達しられません。分らないものをつとめて一時に分るやうにしやうと焦つても駄目です。要は美術と接觸する機會を多くして漸次に見方を進めてゆくのにあると思ひます。

次に畫題にこだはることの純粹な美術觀照の邪魔になるこ

と注意したいと思ひます。これは看る人も作家もともに考へなくてはなりません。極端に云へば作品の題名はたゞあれとこれとを區別するための符號でよろしい。繪は繪だけに物を云はせなければならない。徒らに長々しい文學的な畫題をつけたり、クドクドしい説明を附けたりすることは造形藝術の邪道です。

　自然界を御覽なさい。何一つ「美しき花」とか「悲しき海」とか斷はつてあるものはありません。悲しいとか美しいとか感ずることは看る人に任せてある筈です。明月はたゞ一つ、看る人の心々にかはつて映るところに自然の大きさがあります。

美術は宗教の道具でもない、事件の説明圖でもない、また詩想の補助役でもありません。純粹な造形的要素たる色彩、線條、面、容積等の方法によつて表はされた人間の感情であります。それ以外のものを表はさうとならば他に音樂なり文學なりそれぞれその表現に最も適した形式があるのです。

　たとへば「母子」と題する繪について云へば母の慈愛を表はさうとすることは正しい繪畫の精神からは第二義のもので、それよりも第一に重んずべきは母と子との組合せかた、着物と顔の部分との色合の對照調和、人物と背景との關係等畫面直接の方法であります。

（九月一日）

# 彫刻の觀照に就いて

朝倉文夫

　彫刻といふものは、さう大して、六敷しく考へらる可きものでは無いのである。科學の樣な、比較的、難解とされてゐるものでも、それからそれへと押してゆけば、容易に終結が得られるのである。況んや、彫刻に於いては、容易に勘考し

得らるゝものなのである。

　彫刻は、つまり、我々の美的感念の象徴であるから、その彫刻に接す可き我々の態度は、要するに、直感的の美を彫刻そのものから、感取し得られゝば足りるものである。その時の我々の態度は、無心でなくてはならない。對照物から、何ものかを、摑み出さうとか、又、それに依つて、他の何ものかを、連想する樣なことがあつてはならない。前者は、不滿を生み、後者は、邪念をきさする因となる。

　我々は、つまり、平易虛心の心持で、彫刻に接しなくてはならない。その時にこそ、初めて、高調的の眞美を、その彫刻より獲得し得らるゝものである。その吐く息と、吸ふ息とが、初めて、同一點に合致し得らるゝものなのである。

　或る人は、かつて私に、女の裸體の彫刻に對して、何故、美を感ずるのであらうか、それはかへつて、吾人をして、淫卑に導くものではないかと云つたことがある。で、私は、その人に云つた。

「貴方は、花を愛しますか」と。

「エヽ、それは、花ならば愛します。その幽幻的、可憐的の氣品に、心が引かれます」

と、その人は答へた。

　そこで、私は云つた。

「それは、つまり、花そのものが、淸麗で、美感的のものであるから、それを見ることに依つて、貴方は、美的感念を直感される。しかし、その花の瓣を剝ぎ、その中を一々、細かく解剖して行くならば、そこには又、雄蕊あり、雌蕊あり、その上層には粘液があつて、その異樣な形態からは、甘美ある芳香を放つて、蜂や蝶を誘惑するであらう。貴方は、決して、初め、外郭的に花を見た時の樣な氣持は、得られないであらう。それと、同じことで、婦人の裸體からも、そうした邪念的連想を除外した立場から見るならば、花を見た時と、同じ美的感念を感じ得るものなのである」と。

　私達は、連想を加へれば、何んなに、美的なものであつても、それは、邪道に入つて了ふ。例へば、今、私達の傍に、女が通るとする。その赤い蹴出しを見ても、又は、その後姿を見ても、首筋を見ても、それに依つて、何んな邪念をも、逞ましゆうし得らるゝものなのである。故に、私達は、彫刻に接する時は、無心の態度でないと、眞の美は感受出來ないのである。

　しかし、私達は、彫刻を見樣とするに就いては、何よりも、多くの彫刻に接しなくてはならない。彫刻を百度見れば、彫

刻の美を理解することが出來る樣になる。千度、接すれば、容易に評價もし得やう。

私の處にゐる、北海道から來た女中は、初めの中は、何も判らなかつたのであるが、三年もゐる中には、展覽會等に行つても、歸つて來てから、平氣で、その作品の批評をしてゐる樣な有樣である。

彼の婦女子が、男子と比肩して、一般に美的感念の强いのは、卽ち、彼女達が、平常、自身の風采だとか、衣類の縞や柄合だとか、自身の容色等に就いて、尤も注意力をそゝぎ、且つ、その光りを增すべきことに、不斷の研鑽を積むことを、怠らないが爲であるのである。

又、私達が、途上で美人と行き逢ふ。あゝ、美しいなと思ふ。或ひは、それだけには止まらず、今、一歩、踏み出して、今少し、あそこが、あゝだつたら、益々この美に光りが增すであらう。あそこの處を、今少し何とかしたいとか、又は、一見して、感じを惡くする樣な女もある。又は初對面の人と會つても、どことなく氣持がよく合つて、心よく對談出來る人と、何となく、ぎこちなく、意思のしつくりと合はない樣な人がある。斯の樣に、私達は、人と合つても、直ちに、あゝだ、こうだと、品隲し得る頭腦がそなはつてゐる。これは、つまり、幾年月の時を、經るに從つて、益々その試練を經て來て、正鵠を得るものであるが、若し、生れながらにして、盲目であつて、それが、急に眼が開いたとしても、他の通常の人の如くに、ものゝ美醜を適確に判斷し得ないであらう。それと同じことで、私達は、彫刻をよく味覺せんには、又よく多くの彫刻に接つする樣に、しなくてはならないのである。

要するに、私達は、美の教養を積むことに心懸けなければない。その心を忘る時は、私達の美の感念は、亡んでゆくであらう。そして、そこには又、恐る可き犯罪的心理が培はれてくる樣になるであらう。

しかし、又、彫刻には、唯、打見る許りでなく、その光りの濃淡、距離の遠近の度合、といふ樣な事も、充分に、思慮の中に入れて置かなければ、ならないものなのである。

# 畫壇ギルド

木村莊八

## 一

今は何人の繪かきがゐるでせう。かなりの數になるだらうと思ひますが、今日の新聞に依ると二科へは例によつて二千何點とか作が集まつたとか云はれます。――春陽會へ二千何點、帝展へも多分その位か。合せて六千點。一人三點としても二千人。そのうち千人は一人で三方の會へ出すとして差引千人。一つの會に入選三十人宛としてざつと百人。

これに二科、帝展、春陽會などの内輪の者六十人位。その他四十人位は何彼と團體をこしらへたり又は一人でゐたりして繪に苦勞をしてゐる。合せて百人。

まあ二百人位の繪かきは何となく春秋の美術季に出沒してゐると見て大差ないでせう。尤も洋畫家だけの目の子勘定ですが、之れを内譯にして、十人位明治以來の大家、三十人位は今日名ある大家、あと三十人位中堅作家とでも云ふのか、それから猶百三十人――こんなにゐるかじらん。そのうちに百人は今日木村となり明日村木に變るとして、殘る三十人が先づ手がたい出ず入らずの出品作家となる樣のところでせう。

こんな事をかくとさぞイヤな奴と思はれ想に思ふが、何も小生が云ふには非ず。何となく世間がさう決めるので、只小生は試みに判ずるのです。――ところで何故こんな大家とか中家とか、小家とか、そんなものが出來上るのかと考へて見るに、私は思ひます。先づ一つには何と云つてもその作家それぞれの力なり技量なりに依るところである。之れは梅原君もよく云ふが、日本ではさう〳〵埋もれると云ふ作家は少ない。大てい才藝あれば先づ才なりには顯出する樣です。

それから附足の理由としては、時運、時好、押しもありまぐれもある。何れは世間相手となれば理外の理は多きところである。ふわ〱と顯出して了つてそのまゝ定名に納まるチヤンスの者もある。――かと思ふと、又、拮几と勉强して、一年一歩、十年十歩と地歩を占める地道の者もある。そこは正直の頭に神必らずしも宿らず。何故なら神とは少し別の世界のことだから。

何れ我々繪かきと雖も、大半は繪を賣つて食らふ者で、畫室にあつては畫人、然しながら世上にあつては、畫商を兼ねる。即ち世間に何とか顯出せずには工合のわるい、思へば妙な立場の者である。

そこで年々展覽會に繪を出す。人々が見て何彼と云ふのもそこで暗々の中に位づけの樣なものも生ずるところとなつて、中家となつて見たり、大家となつて見たり……ナニどうせ之等のものは何れ術を蔽へば、頼まずとても歴史なり記憶は死者を片附けやう。善き作家にとつては、頼まずとも神や守らんのところのわけですが、問題は只生身のところにある。

我々畫人はかくて世評の俎の上で、昨日はいじくりまはされ、明日はほつたらかしにされることもある。何れにせよ、繪を見せ、繪を鬻ぎ、再び繪を描いて――之れを繰り返して行く。

昔歐羅巴では、之れがGuildと云ふ社會組織を仲介として、つまり云ふ、生活を保證したらしいのである。――繪かきとなるには先づ年少の頃その土地のMasterのところへApprenticeとして入り込む。この年期には豫め年限があり、月謝があつて、何れ内弟子外弟子の別もあるところでせう。徒弟は先生の繪の具を練つたり畫板をけづつたりする傍ら繪を敎はる。

レオナルドの許にはかくて二枚目の岩窟の聖母を描かされたAmbrosio de Predisが居た筈だ。――この年期は、徒弟が少し上達するか相當歳でもとると、改めて先生との關係がAssociateと呼ぶ形式に變つたらしい。と云ふのは、字の通り組合で、例へば某先生の許へ女性改造教會から高祭壇のマドンナを一枚注文して來た、と、その先生はアツソシエートの者に知らせを出して、聖母はまあ先生が描く。周圍のdonorの像とか首天使とか云ふ樣のところは組合の者に廻して、割をとらせる。

作を公開の手間は要らない。内輪で片付く。このAssociateとなると、例へばボッティチェリーの組合の名無きBiagio Tucciの如きも「八人の天使と側にゐる聖母子」と云ふ繪を金貨六

フロリンで賣る樣な工合になれたらしい、が、之れがもう一段進むと、そこで一家の人Maesterとなる順である。――それには前に云つた、フローレンスならフローレンス、ニユーレムベルヒならニユーレムベルヒの繪かきのギルドへ規約金を納めて、つまり一本立になるわけです。

一本立となれば即ち――腕次第で――仕事もとれゝば、殊に徒弟もとれる何れ裹が大きくなれば影はどつちみち大きくなるわけで、中世期には、就中オランダ流派に通例The Liute Mastersと總稱されるジヤレル繪かきが澤山ゐた筈ですが、何れも各人相當にマスターでやつて行つたものでせう。若しも之れが復興期などのことなら、例へばフローレンスで二十一歲にギルドへ加はつたレオナルドは、やがて間もなく彼一家の人には終らない。云ふ迄もないが、「一四七八年（二十五歲）の一月一日には、フローレンスの政廳から彼にシコヨリアル・パレースの聖ベルナルド會堂に祭壇を描くべき仕事の下命が來た。」何れは宮廷畫工となるにも、筋道はまつすぐに彼の力量次第にあるところとなる。

後の十九世紀フランシスの樣には繪かきは個々別々に苦勞してゐないのである。

と云ふのが、逆に、近世十九世紀に至つて、廣く世界的にと云ふべし。繪かきも等しく諸民となり、そこで往年のギルドも生活の隱れ家には不適當となつた、代つてSalonが現はれる工合になつた。

我々現在もさうだが、繪かきの畫生活は公開展覽會と他ならぬギルドとするところとなつた。――それで歷史にはやれテオドルルー・ソーが當時官設サロンは古典流全盛の爲めに九年とか十年とか一作も通らず、散々に辛苦したとか、カルポーがサロンのローマ賞を得たさにアカデミの仕事をして、入賞して、賞金でローマへ行くとそれからはがらりと變つて自分の好きな仕事をしたとか、セザンヌは年々繪を箱づめにして巴里へ送つては通らずに、そのまゝになつたとか、當時の印象派と云ひ、後のアンデパンダンと云ふ。規範は萬事フランスに學ぶ日本の明治此の方の美術も、流派や手法は暫く問はず、先づこの美術家對世間の段取り、引いて美術對生活の段取り。之れは、矢張り新知識の洋畫は從來の日本畫的な筋道はたどらず、フランス式に學んで、Salon萬事のやり口となりました。

何年前かは忘れましたが二科會の起つた理由です。

――それは一つには思想的にアカデミーの第一科と合はなかつたのが理由だ。それはさうに相違ないが、同時に切り離

せぬ實地の理由としては、つまり第一科のギルドとギルドを別にしなければ、どつちみち畫生活に無理を生じた――これは自明のところと思ひます。

## 二

繪かきは公けの展覽會機關へ繪を出さなければならない。出さなければならない、と云つては當らないが、少くも、出すのが捷徑である。そこで仕事を示し、同時に世の中へ己れを賣りつける。昔で云ふギルドへ連なるわけで、假りに今日二千人の畫人がゐるとします。そのうち前に云つた大家とか、中家とか、手がたい人とか、之等はつまり誰つけるともなきギルドの帖面の墨色の古さの樣なものである。――さつとその二千人のうち、二百人ばかりが、大正年度に日本の洋畫家ギルドに加盟してゐるところとなるでせう。

尤も中には二三割方 Associate もあらうが、一方、概世の Apprentice の方は、――これは又昔より便利で、今日は若しい年期も月謝も要りません。彼等が善しと認むる Master に思慕を定めてちつくりと自宅勉强が出來る時勢である。

その或る者は帝展へ繪を出します。或る者は昨日あたり二科へ搬入した二千點の人となり、或る者は來春春陽會へ繪を持つて來る。

ところが此所に既成のどの團體――云はゞギルドの屯所の樣なもの――それを何れも認めぬ。只己れを善しとしてその所信を敢行するに熱心なマヴオの人達の樣な、つまり關所破りの樣な自由な人達も一團を成して居るのを見ます。乃至、何々社と云つた樣な、極く內輪に相結ぶ同志少數だけ、結社を作つて、小規模ながら心靜かに展覽會をして行く。さう云ふ人達もゐる……

この文章は一體畫界の鳥瞰圖と云ふ樣の課題で文案を求められたものですが、鳥瞰を極く大摑みに、一通り眼をつぶつて今の畫界を見て見ると、大體さう云ふことになります。

で、改めて眼を明いてざつと指呼して見ますと、帝展の不言不語に世間に約したギルドで選ばれる畫面は、背景が官設のことですから、圭角の少ない、つまり時勢には少しおくれかけた樣の無事のものが多く、廣間へかゝる肖像とか大ホールの壁畫とか、應接間の裝飾、さういふ種類の繪は、此のギルドに管理される範圍が一番大過なくて、一般向きでいゝだらうと思ふ。

「同じく二科のギルド」が自づと管理するところは、之れは極く當世向きで、寧ろ仕事に年來はしりと云つた風の百尺竿

頭の味がある。で、文化住宅の裝飾とか、殊に西洋好みの趣好の家々の飾り、舊來の傳說とは違つた、何とかそこを一ひねりひねりたいと云つた風の人達へのおくりもの、――それには、此の一團の選む畫面が他の何れよりぴつたりとして間違ひありません。

春陽會の揭げる作家は、之れは大體に云つて極く穩健です。走らず急がずと云つたところ、往々として古ぼけてゐるとか低徊趣味の、隱遁の、何の彼のとも云はれる。かく云ふ小生なども少しその帖面を扱ふので、よくわかるわけですが、御不要ならば何時でも元値で頂く。作家はどつちみちぢつくりとかまへてゐますから、何れ年が經つとその邊が强味か、など、之れはミソです。

正直に云つて、何彼と云ひ分はあれ、先づ春陽會の誰彼、二科の誰彼、と、此の邊が、何れ後代には大正年度の畫人に數へられる、その作も大切にかけられて、殊に傑作は長くのこるところとなるでせう。――帝展の方のはギルドが地體寄合身上ですから、內輪がしつくりとしない。あれは多分生身には相當得もすれ、棺を蔽ふと、大分香氣の拔けるおそれがあるかもしれません。尤も余計な保證はしませんが。

それから他のギルドを彼自身に有する、卽ち基尺を相對におかず、絕對におく、マヴォの人とか何々社の人、山中の個人、それ等の人達の繪は美しそれ等が强ければ矢張りものは何となく相對の性質ですから、隱さずとも顯れて、悠々と、有ると見えて實は無い。至るところの關所を破り、成れば現代の至寶となるでせう。

成らなければ？

成らなくとも彼その人の至寶とはなるでせう。

それでもいゝわけですね。

## 三

要之、畫人は畫をかくべし。畫をかき、畫をかけばそれでいゝわけです。―只そこのところに諸人の間に立つと、何となく所謂ギルドの定めも有る樣な、無い樣な、我れともなくいつか中家ともなり大家ともなる、又忘られもするし、種々。

世の中に交ればどうせ旅は道づれです。小生も畫業十年、自分ではその十年前から一かど畫かきの氣でゐたが、それが又いつ公許の繪かきに成つたともなく世間の中で畫かきとなり、ギルドに連なり、之れからも此のまゝ行くべし。まあ精々己れに樂しんで然して後他に及ぼせる樣になれば、これ

で本望の樣です。――どうも才藝の仕事には運はあとから從つて來るかに思ふ。

之れからの人はどし／＼繪をかいて頑健に展覽會――今の世の便利なギルド――へ出すことだ。他の氣息など伺ふ必要なしと云ふ。

# 日本に於ける洋畫の過去、現在、未來

山下新太郎

現今日本の洋畫界の傾向をお話しする前に一應簡單にその歷史を顧みたいと思ふ。

日本に於ける洋畫の起原を歷史的に見ると徳川時代から始つてゐる。有名な伊達政宗の家臣支倉六右衛門常長が君命を帶びて遠く海を渡つて羅馬法皇に使ひした時彼れは、滯留往復八年彼地に滯在してゐたが、その時彼れが向ふの畫を日本に傳へたのが最も古いとされてゐる。六右衛門は、自らもその畫風を習つて、主として人物畫であるが彼れの畫いた密畫が今日でも傳はつてゐるものがある。降て、室鳩巣なども洋風の畫を習得した。鳩巣は、餘程多藝多才な人であつたと見えて、蒸氣を利用して火を起こす火吹達磨などを拵へたりしたものだが、そんな事からも窺はれるものは、彼れが科學の利用に興味をもつてゐたといふ事である。當時驚歎すべき科學を輸入した外國人の、その畫風にも彼れが心醉した事は頷かれることである。然し之れらは、まだ洋風の畫に新らしい興味をもつたといふのだけで、眞に洋畫を習得し、普及したものとは云はれなかつた。それを確實にしたものは、今日一般に洋畫の元祖と目されてゐる司馬江漢であつた。

その頃、長崎に於ける和蘭陀人との貿易が非常な隆盛を極めると同時に、洋畫も移されたのである。一體に國と國との

貿易が盛んになると、すべての文化が影響し合ふもので、獨り繪畫だけが、取り殘されるといふ理由は無い。例へば、隋、唐の昔より近くは清朝に至るまで日本畫が常に支那の影響をうけたやうに江漢の頃も、科學が入り始めた頃で、志しある者は競ふて蘭學を習つて彼地の文物を移入する事に腐心したもので同時に洋風の畫も入つたのである。江漢は自ら長崎に赴いて蘭人について洋風の畫を學んだのである。洋畫が稍體をなして日本に移されたのは、江漢の努力に負ふ所多大なものであつた。

然し、日本ばかりでは無いが日本人も矢張り始終何かしら新らしいものを求め、移入しなくては承知の出來ぬ國の一つであると同時に、その移し傳へられたものはきつと、自分の固有性に同化してしまはなければ滿足できない國民性を持つてゐる。江漢の洋畫と雖もこの例に洩れなかつたのは勿論である。

其後幕末から明治初年にかけてヨーロッパの文明がすばらしい勢で日本に侵入した。勿論洋畫も入つて來たのであるが、當時攘夷論が盛んであつた頃とて、必ずしも禁じてあつたのではないが洋畫に限らず、外國の文物を學ぶことは實に命懸けの仕事であつた。にも拘らず、絶えず何物かを求めずには居られない國民性は、宛かも渴して水を求むる如くに貪り學んだ。從つてその態度の眞劍であつた事は云ふ迄もない。渡邊崋山が幕府の眼を隱れて長崎に行つて洋畫を學び、それを自分の今迄の畫風に加えて、よく眞を捉えた肖像畫を畫いたのもこの頃の事である。彼れは摸寫ではあるがナポレオンの肖像なども立派に畫いた。

明治になつてはいろんな人々が出て洋畫を習つた。高橋由一、小山正太郎、淺井忠などの人々が洋風の畫に貢献した事は多大なものである。けれどもこの頃までは、まだほんたうに專門に――正式に――洋畫を描いたのではなくて、多くは當時の工部省のお雇ひ教師として來てゐた外國人から習つたもので、それらの教師は專門の畫家ではなくて、全く職業の違つた人達だつたのである。從つて當時傳へられた洋風の畫と稱するものは多くは英國、若くは伊太利のものである。

所へ日清戰爭の始まる前頃だつたと思ふが　この頃亡くなられた黑田清輝氏が、フランスへ法律を研究するつもりで若くして行つて、性來畫が好なためにとう／＼畫家になつて歸朝して始めてフランスの畫風を傳へた。と同時に、すでにさういふ氣運になつてゐたのであらうが、氏の努力によつて、我國の洋畫は澎然として起り、終に今日の隆盛の最も大なる

原因をなした。が、この當時の黒田氏の洋畫界に於ける功績を稱するものは、同時にもう一人の偉勳者を舉げることを忘れてはならぬ。それは岡倉覺三氏である。岡倉氏は、その當時美術學校の校長であつたが、氏は日本畫のために非常な努力をされると共に、一方洋畫の發達にも心を碎いた人で、黒田氏が歸朝すると同時に氏を推して美術學校の教授にし、今迄日本畫科しか無かつた美術學校に新たに洋畫科を設けてその發達に資した。これは日本の洋畫界にとつて實に一大革命であつて、その英斷を敢てした岡倉氏の功績は、黒田氏とともに忘らるべきものではない。

黒田氏は一方美術學校の教授として洋畫の普及、研究を計ると共に、別に白馬會を作つて年一回の展覧會を上野に開いたりして、專心洋畫の爲めに盡された。是れに依つて、今迄英國、伊太利の畫風しか傳はつてゐなかつた日本の洋畫界に、確實にフランスの畫風を移されたのである。

フランスの畫風――おなじ洋畫のうちでも何故フランスの畫風が入つた事がさう重要なのか？　それは、フランスの繪畫があらゆる點に於て他の國の繪よりも優れてゐるからである。洋畫といふものは勿論世界の各國にある。そして各々少しづゝ其特徴があつて必ずしも同一ではない。が、そのうちでもフランスの畫は最も佳きものを多く持つてゐるのである。何故さうだらうか？

それはつまりフランス――殊に其首都の巴里は、美術の研究がフランス一國ばかりでなく、世界各國の美術研究の場所である。あらゆる國の美術家が集つてゐる。そこは實に大きな一つの研究室のやうなもので、各國人が種々の研究を試み發表し、政府も自國の美術家を出來るだけ保護し、奬勵し、之れを國の華として世界に誇らうとしてゐる努力は甚だ大きいものである。從つてフランスの繪は實に洋畫の精粹であつて、之れを範とするにも、研究するにも非常に便宜が多いのである。勿論、英國のロンドンでも、獨逸のベルリンでも、ミュンヘンでも畫の研究に便宜は多いけれども、到底パリーには及ばない。

それ故に日本の洋畫界も、黒田氏によつてフランス風を移されて以來、其後洋畫の研究に渡歐するものはあの大戰の最中も、その後も變りなく殆んど悉くパリーに行つて研究することに依つて常に、フランスの畫が日本に波及されて今日に及んでゐるので、之れが即ち洋畫が日本に入つて來た經路なのである。

然らば、洋畫といふ以上は一も二もなく西洋の模倣に終る

か？　またそれで好いのか？　といふに決してさうでない。またさうあつてはならない。

　前にも述べた通り、支那から畫が入つて來ても、その國民性が違ふので、どうしても支那人のやうな畫は日本人には描けない。支那そつくりの繪を描かうとしても、その點では到底支那人には叶はないのである。然し、たゞ支那の模倣では及ばないが、支那風の畫の描き方を通じて日本人の特性を現はさうとする事には成功する。滿足も覺える。そして我等の祖先はその努力をした。そしてそこに生れたものは、決して支那の模倣でない所の日本獨特の畫であつた。洋畫もそれと同じ道理で、フランスの畫家の風をそつくり眞似をしやうとしてもそれは到底叶はぬことでもあるし、またそれでは決して創作的滿足を感じることも出來ない。そこで、我々日本人のもつてゐる特性で、新らしく、その特色を發揮しやうとすると、そこに生れるものは、日本特有の洋風畫であつて、そこにはまた西洋人の到底及ばぬ何物かゞ現れて來なくてはならないのである。

　では、如何にそれが現はれるであらうか？

　元來、西洋畫家の一般に共通なものは「現實味」の勝つたものである。現實に離れまいとする態度、ものの存在をそのまゝに生き寫しにしやうとすることである。前に到底日本人の叶はぬといつたのはこのことである。この點では確かに西洋人に一歩を讓らない譯には行かない。然し、日本人に特有なものは、寫實よりも、自然を「詩的化」しやうとする態度である。日本人ばかりではなく一般東洋人がさうであるが、それは形よりも精神を把握しやうとするのが特徴である。さういふ傳統に慣らされて來た日本人には、西洋人の如く、形を寫すといふ事は非常に不得手である代りに、自然を詩的化さうとすることには又妙味を心得てゐる。そしてまた、現在の洋畫家はこの事に自覺をもつてゐる。

　そこで興味あることには、現在の日本畫家が、殆んど一般に非常に多く洋畫の影響を受けてゐることである。それは今の洋畫家が西洋から受けてゐるもとは全く正反對の種類のものである。誰れもが一度び展覽會にいつて見ると分ることであるが、物の精神を描くといふ日本人の特色よりも、いかに如實に形を寫さうかに腐心してゐることである。例へば、人物を描いても、髮の毛を一本〳〵丁寧に描いたり、本を讀んでゐる子供があると、その持つてゐる本の小さい活字まで、そつくり描いてある如きである。之れは、我々から見て、現今日本畫界の顯著なる傾向であつて、全く先に述べた司馬江

漢時代の西洋畫法の細部描寫である。決して今の洋畫家のやらない事をやつてゐる。

さうかと思ふと、一方外國——、殊にフランスの美術界では、近代繪畫の特色として物の外形——寫實よりも、むしろその精神を描き現はさうといふ。所謂東洋畫の精神を捉えやうとする運動が起つて來た。そこでかういふ運動が盛んになるに從つて、西洋と東洋の精神が、ある合致を見なければならないはづであるが、——勿論いくばくかは接近するであらうが——然し、それにも拘らず私の考へでは、その合致、若しくは接近は、程度の問題で、やはりいつまで經つても、東洋の畫と、西洋の畫とには、おなじ洋畫といつても確然と差別が現れるであらう事を疑ふことが出來ない。つまり、東洋人でなくては東洋の精神は現はれないであらう。同樣に、西洋人でなくては西洋の精神は現はれないであらう。

かくて、日本の洋畫の究極は、且つて支那の畫を日本化した我々祖先のそれの如くに、洋畫の形式を通じて、日本人特有の——卽ち西洋人の洋畫とは全く別な、日本獨特の——精神を發揮すべき運命を持つてゐると私は信じるものであるが、然らば、その觀方からして、現在の日本に於ける洋畫は、その途上のいづれの點にあるだらうか？　つまり最近の傾向はどうだらうか？

勿論私は、前述の如き傾向をもつてゐると思ふのである。然し、殘念乍ら、それは未だ非常に微々たるもので、確然と、西洋の洋畫の模倣の域を脫して、日本獨特の洋畫を確立してゐるとはいへない。すべては未だ、過渡期にあると見られるのである。けれども然し、非常に微々たる光でも、光りである事には疑ひない。今日迄あらゆる文化を輸入されても、それに打ちのめされずに、必ず、それを消化し、同化し、その形ちを自分のものに造り替えるだけの力のあつた日本人は、將來洋畫に於いても、必ずや日本人獨特の洋畫を自ら創り出すであらう。

それから世人は日本の洋畫が西洋のそれと比べて劣るやうに思つてゐるが、案外世人の想つてゐる程には決して劣つてゐない特に近來水準が高くなつて來た、日本に於ける他の科學と比較して決して遜色の無いものだと云ふ事を一言して置きたいと思ふ。

# 現代日本畫の傾向

平福百穂

この頃の日本畫の傾向は、手法的に描くことよりも、塗ることに變化して行つた。調子の上に重きを置いてゐる。日本畫の材料たる紙や絹や墨や繪の具から言ふと、塗ることよりも描くことに適してゐる。けれども塗ることは對象に接近する上に、描くよりも容易であるのみならず、在來の手法…描くことよりも、外面的に新味を伴ふから、多くこの方法が用ゐられる。色調をたのんで著しく方便に甘へるのである。

これも幾分飽かれて來た結果として、實在を基礎とした、細密描寫が流行り出して來た、今迄の日本畫には無かつた所のものを創造し行かうとする、若い人達の心持が見ゆる。しかし只單に末梢的技巧の精細に止まつては、報告的說明的なる畫面を得るに過ぎない。畢竟するに一種纖細なる技巧の遊戲に墮することになる。一貫せる生彩に輝ける畫面を成すことは、ただすぐれた頭の持主に於てのみ能くするといふことはいふまでもないことであるが、こゝにも慌しき移り氣の模倣者が簇出し出した。

次にまた一面には、題材以外の意味を畫面に持たさうとするものがある。實在に基調を置きながら、それに直面してその根底を見出すのではない。宗教的な空想的な、ある意味を結付けて尊く見せ樣とするものである。輕浮なるを免れぬ所以である。鋭敏なる自然觀照の力と、卓越せる詩が作者の中に深く生れ出でたるものでなくては、永遠なるものはあり得ない。

皮相なる舶來の傾向や、徒らに先輩の跡を標的とし、一つの模倣から他への模倣へと轉々として行く移氣がある。かゝる移氣は新らしさでない。詩が借りものであつたり、宗教が借りものであつたり、自然が借りものであつたりしては、何時迄たつても藝術の本流に觸れることは六づかしい。現代の日本畫界をかく論斷することは、聊か輕卒に過ぐるかも知れぬが、やがては眼ざめたる人が出でて東洋精神の傳統に立ち、自然に直面する眞實の一路を開く時が來るであらう。

哲學講座

（第四回）

# 範疇及觀念

紀平正美

圍碁、將棊、生花、擊劍、柔道等、其他何の技術でも、少し込み入つたものになれば、必ず一定の形式（型）がある。そして更に又流派によつて、其の型にも亦多少の相違がある。それで何の技藝を學ぶにも、只無法にやつてみた處が、上達するものではない。とに角始めは、其の型に入れ嵌める樣に努力せなくてはならぬ。此れは甚だ面倒な事である。不自由千萬とも感ぜられるであらうが、始めから自由を考へ、勝手に流れては、何の技術でも上達することは出來ない。——玆に近來の、自由を我儘勝手と取間違へた誤りの存在することを考へなくてはならぬ。—しかし又努力苦心をして、やつと或る流派の型だけが手に入つて、それが自由に使へる樣になつた所で、まだ本物ではない。やつと師匠の代稽古が許される位であつて、未だ眞の自由を得たものではない。人を出づる底の法を得てこそ、始めて眞の自由が樂まれる。人を出づる底の法とは、師匠より一歩上に立つ所の働きであつて、自己特有の創見があるといふ事である。我國の講談には、武士が武道の習業を爲す場合に、よく此の消息を表明したものがあるので、誠に面白く讀まれるのである。例へば宮本武藏の武勇傳に於て、彼が敵佐々木巖柳と對比して、其を打つべく如何樣に努力したか、而して遂に彼は劍聖（同時に書聖でもあつた）の位置に上つた順序などを考へることは玆に最も大切なる事であらう。大きな技術はともかく、日常平凡なる生活に於ても、大なり小なり人を出づる底の法を有するに到つて、人は始めて人格的の價値を有する。即ち價値創造の主體として、無上の尊嚴性を得ることゝなる。然らざれば模倣の生活に過ぎない。人格としての眞の價値はないのである

る。

技術と同樣に、我等の生活其のものにも一定の形式がある。思考の運用も亦一の技術である限り、又同樣である。思考は其の內でも、最も自由なるものであるが、それさへ一定の形式に從はねばならぬ。—(之を思考の上では傳統といふ)其の形式を無視すれば、矢張無法となる。世には思考の自由性の爲めに、形式を嫌ふといふ一般的の傾向があつて、所謂職業的になつた哲學といふ樣なものに、反抗的の氣分が強く現はされる。殊に此の傾向は、近時最も著しくなつて居る。如何にも總ての場合、拘泥する、執着するといふ事、而てそれは一面容易である。先人の作つた形式に據り居ることは、少くとも安全であるといふ樣な、安逸を樂むといふ樣な氣分から、形式に陷る場合は、即ち惡き意味での形式主義である。此は依然として前に述べた所の、抽象に陷つたものである。眞の形式ではない。即ち形式とは、思考活動そのものを方式的に表出したものである。其故に希臘、印度、支那、日本、それ〴〵に其の形式は相違する。然し其の形式に始めから入り得ずして、自由ならんことを欲するは、上述の如くに無法である。同樣に、其の時代には其の時代の形式がある。一旦は其の形式に入り込んで、後にそれを脫却してこそ、始めて自由な創造が出來るのである。更に細かに考へて、或る人の立てた學問を、師とし或は學ばんと欲するならば、ともかく其師の考へ方に、一應は入らなくてはならぬ。茲には勿論其師を選ばなくてはならぬといふ事は、古も今も變りないが、始めから勝手にやつては、其の結果は却つて徒勞になるであらう。

斯くて之を概念其のもの丶上に移して考へて見ても、抽象的の概念は機械的の組織であるが、其處に實際努力して研究を眞面目にして居る時には、其の概念は一歩進んで有機的の組織となり、茲に創造の働きを有する樣な概念となる、之を名づけて形式的概念といふ、、又此れを特に知識を組織する働きを有する概念と見て、範疇とも名づけられる。即ち茲に前に述べて置いた如くに、概念が批判の原理として働く樣になるのである。例へば始めて物を習ふ場合に會得した限りはそれはまだ抽象的である、働きはない。例へば馬鈴薯といふものを、標本により、教科書によつて知つたゞけでは、若し標本以外のものを見たならば、其れを馬鈴薯なりと判斷する力もなければ、其の他馬鈴薯の多くの種類に對して、其の良否を識別するだけの働きを有たぬ。其等の識別の出來る樣になるには、相當の經驗と努力とに由らなくてはならず、而

て其の働きが出來た以上、其の概念はもう抽象的のものでなくして、形式的のものとなつたのである。

　それで何事によらず、一生懸命に努力して居ると、遂に大きく云へば天地宇宙が全く已が仕事とするもの丶形式に入つてくる樣な感じがする。此の事は實際熟達といふ上からは、甚だ大切なることである。それで斯る形式中で、最も一般的の形式は、數學的關係と、幾何學的圖形と、乃至思考（同時に言語）構成上の形式とである。それで例へば古く希臘のピタゴラスや、支那の易などは、數的形式により、人生の諸相乃至宇宙をも、それに當嵌めんとしたものである。九星術の如きは、一より九に到る數の或る特別配列（此を支那では落書といひ、希臘では魔法四邊形と呼ぶ）を以て、等しく生活乃至世界を組織せんとしたものである。又支那の五行説は、木火土金水の四元素と考へられたもの丶形式化された概念の運用に外ならない。斯るものは、今日の科學からは迷信的のものなりと見做されて居るが、今日の自然科學だとて、十進法を本とした數學が基礎になつて居るのであつて、それが今日總てを機械化するに便利なといふのである。故に十進法が十本の指の數に基き、二十進法が手足二十本の數に基く以外に、尙ほ十二進法、又七進法もあるのであるから、其等を形式として、組織し得られないといふのではない。其故に、若し今日の自然科學のみを唯一の知識と信ずるならば、機械化いふ事（而てそれから今日我等にどれだけの用を爲すかは後に詳論するであらう）を除いては、五行説や易や乃至九星術を、唯一の知識と信ずると等しくなるであらう。其故に、唯一眞正の知識は、最早又形式的のものに止まつて居なくて、具體的の概念へと進まなくてはならぬ。

　形式的の概念と知識論（認識論）上、知識運用の型と見て、玆に一定の形式を認めたのが、希臘に於てはアリストテレースの論理學、印度に於ては因明（因とは議論の根據、明とは學の意義、故に等しく論理學である）である。そして論理學の研究から、各種の知識を纏める働きとしての範疇なるものが、又アリストテレース以後研究せられた實體だとか因果だとか、關係とか（此の數へ方には又種々ある）、又佛教に云ふ體、相、用、とか云ふのは、即ち範疇のよい例である。所が獨逸のカントに到りて、更に範疇の意義が深められた。勿論カントは尙ほ知識成立の根本條件と之を見て、其の數を十二と定め、猶ほ之れを經驗とは別なものとして、其れを學問的に定めようとした、即ちそれが批評哲學と呼ばれる所のものであるが、然し形式は最早抽象的の概念で規定せら

るべきものでない事は、既に述べた所で明かであらう。卽ち經驗から離れては等しく存在せない。更に換言すれば、如何に經驗を捨象して範疇其のものを考へて見た所で、等しく抽象的のものに過ぎなくなつて、形式たるの働きを爲さない事になる。卽ち努力して實現した精神の論理的の力として始めて、批判力を有することになる。それでカントの範疇論は、更に一歩進んだ具體的概念への橋梁を爲して居ると見るべきであらう。形式とは、前述の如く、思考の働きを表象化したものである、それで總てを其の形式に入れ嵌めやうとすれば、表象を以て總てを律しようとする誤りとなり、又之を經驗から離して、獨立に考へんとする時には、又抽象に陷る。それで哲學は思考の働きを働き其れ自らで捕捉すべきことゝなつた。卽ち「思惟の思惟」といふ事になる。「思惟の思惟」とは、アリストテレースが神の當體と定めた所のもので、非常に意味のあることであるが、之を又「反省の反省」と云ふも同じ事である。哲學は其れ故に、神の創造力と同樣の力を得ることである、其の力を得た概念を具體的の概念或は觀念と呼ぶ。

更に便宜の爲めに、始めからの說明を繰返して置く。抽象的の概念は比較から生ずるが故に、必ず對立的のものとなり、矛盾に陷る。我等は日常生活に便宜の爲めに、斯る概念を構成する、其れ以外に存在の力は無い。例へば精神の働きの內で、云々の働きを知又は情又は意と名づけて置くが、之は便宜の爲めであつて、知情意なるものが始めから存在して、其等が相集まつて精神の働きを爲し居るのではない。其他云々のものを机と名づけて、家と名づけて置くだけの事で、机や家が存在するのではない。同樣に、善惡が存在するのではない、云々のものを善とし惡として區別して置くのである。然も此等は物を區別し組織して置く働きとしては、形式としてのものである。されば其れ等形式としてのものが、更に一歩を進めたならば、どんなものとなるか。

余は前號に抽象的の概念は對立的になる、其の對立を更に包括する所に、哲學的のものがあると述べて置いたが、今更に又此の考へ方を進めて見る。どんな卑近な概念からでもよいが、便利の爲に、愛と其れに對立する憎みとを取つて考へて見る。愛は愛であつて憎みではない。然し實際に愛する働きに就て考へて見る、愛と憎とを抽象的に考へて居る間は、未だ、批判の力はない、實際事に當り、相手の人を有つて、愛しても見、又憎みもしてゞなくてはならぬ。處が實際には、愛する反面には必ず憎むといふ働きが入つて居る。とこ

たで只其を憎んで之を去らんとするのが、常人のやり方であるが、憎んで之を去らんとした所が、憎むといふ働きが心の内に存在する限りは、完全にそれを心の内から去ることではない。そこで其の憎い所以の理に反省して見ると、幾分は其の憎いといふ感情が去らるゝ、之を佛教では緣覺といふ、即ち其のよつて起る因緣を思考することである。然しそれではまだ考へて居る間だけ憎みの愛情は去られるが、心中には猶ほ殘存する。そこには最早努力より外にない。其の努力を又佛教では菩薩の行と名づける、而て其の努力の終局に實現した力は即ち菩薩であつて、終に憎みを包攝した愛其れ自らとなる。即ち先きには憎みを起す本となつたものが、却て慈悲を起す理由へと轉化する。之れ恰も、云々の香や味を行つて居るから嫌ひであつた食物が、努力して喰ひ慣れた結果、却て其の香や味を有するからよいといふ樣になるのと同樣である。斯くて愛は最早主觀的に氣に入る入らぬといふ事でなく、又進んで愛と憎とで總てのものを色分けするといふ樣な形式ではなく、愛は一切のものを、各の働きの上に安置せしむる力となる、之が即ち佛教で云ふ佛位に上つた事になるのである。即ち愛は一切を創造する働き其のものとなつた。『中庸』には此の消息を明かにして、「君子の道、端を夫婦に造す、其の至れるに及んでは、天地に察なり」と云つて居る。

昔希臘のプラトーンは、ソクラテースが一生の行によつて示しくれた所の「人の人たる所のもの」を、哲學的に示さんとして、先づ始めに、抽象的な對立的關係に於て世界を觀、生滅起伏して止まざる現象界と實在の世界たる觀念の世界とを對立的に見た。然も更に觀念の世界のみを考へると其れは形式的の概念である、互に聯關し關係する所のあることを考への根據として、終に終局の觀念「至善」に迄及んだ。而して最早終局唯一の觀念實在である「至善」に迄及んだ以上は、其は一切の對立を包攝した働きとなり宇宙成生の根本の原理と轉化せざるを得なかつた。此れが西洋に於ける哲學的思考の始めを爲す。それで我等は具體的の概念を、プラトーンに從うて又觀念とも呼ぶのである。前にも云ふて置いた事であるが、近世の英佛の經驗論者は、物ありて心が其れを寫し取るものと考へたからして、表象をも亦觀念と名づけたのであるが、獨逸の哲學者等は　多少皆なプラトーン的の考へ方を殘してこれを考へて居る。それで「捕捉」といふ意義で概念を考へると、其の概念が斯る觀念といふ樣な位置に迄上れば、そは最早主觀的なものでない。即ち「我の」と

いふ規定を失ふ、然もそれが唯一の實在性を得て來る。同時に其れは抽象的に考へられた、我に對立する。即ち主觀的のものに對立する客觀的の存在ではなく（客觀的の存在を基礎するは、自然科學である、それは又後に論ずる）、絕對的の存在である。絕對的といふ事を、又相對的のものに對立せしめて考へると、絕對が又相對的のものにせられる（而して此の事は普通人の陷る誤謬であるから、よく〳〵注意して置かねばならぬ）。故に絕對的といふ事は、其れを否定せんと欲すれば却て反而に其れを肯定しなくてはならぬ樣な働きを云ふと解すべきである。例へば眞理と云ふ樣な事は無いと主張せんとした所で、其の主張の內には、眞理を暗に肯定しなくては其れを主張し得られないが如きである。其故に懷疑論とて、眞理の存在或は眞理の認識の不可能なるを主張する議論もあるが、此は或る種の形式化された知識、抽象的一面的の知識に對して、其を非眞理なりと否定する場合にのみ意義があるが、其れ以上には無意義である。然し我等は何時のひまにか、抽象に陷り、形式化に止まる、故に其等は否定せられなくてはならぬ。故に「思惟の思惟」或は「反省の反省」は又「否定の否定」だとも云ひ得る。「否定の否定」とは、實にヘーゲルが自己の哲學に名づけた所以のものであつて、思考進化の順序を簡單によく現はして居る。先づ或る事の主張をなさんと欲するならば、それを終局迄分析して、それに對立するものへと移行してしまはなくてはならぬ。（自分が自分たらんとすれば、先づ他人を立てねばならぬ）それが第一次の否定である、然し其の他者とは、己れに對したもので、本來は己れ自身である。或は己が己たる爲の生產であるが故に、更に其れを否定して己が內に攝する、それが第二次の否定である。斯くて出て來た己れは、即ち絕對的のものであるといふのが「否定の否定」の意義である。今此の順序を、前に說明した愛の働きに當嵌れば、最も明瞭に了解が出來るであらう。

嚮に抽象的の概念は「火」と考へた所が、消えかゝりのマツチ程の熱力をも有たぬといふて置いたが、玆に「火」の概念は、火を創造する力である、その直接なることは火の表象と等しく、更にそれ以上、其れを創造する力としては、火の存在する理由である。普通表象を具體的といひ、概念を抽象的と云ふのであるが、概念が此の力としては、再び本の具體性を得て居るが故に、特に之を具體的の概念と呼ぶ。從つて通俗には、自然科學を以て、表象を對象とするが故に、具體的の學問であり、哲學の如きは、概念を取扱ふが故に、抽象

的の學問である、故に不可解になるといふのであるが、此は更に考へ直さねばならぬ。如何にも自然科學は表象を材料とするのであるが、其の取扱ふのは、抽象的の概念である、故に自然科學こそは實際に抽象的の學問である。哲學は如何にも概念を其の材料とするのであるが、其の概念は最早抽象的の概念ではない。其れで自然科學に對するものとして哲學を考へる場合には、其の本領は形式的のものを對象とする樣にも考へられる。此が實際今日獨逸の哲學者即ちカントの批判哲學を繼承して考へて居る、論理的主義と云はるゝ人々の取る態度である。即ち軌範となる所のもの一般、眞善美（聖）といふやうなもの（之を一般に當爲と名づける）研究するのを、哲學なりと考へて居るのである。然し形式を經驗から離しては、既に一部抽象に陷つたものになる、即ち形式の論に止まる。哲學は其故に最も具體的なる概念を對象とする、最も具體的なる學問、即ち日常生活其れ自身の學問なりと考へて置かねばならぬ。

實際我等は事の多大に關ぜず、自己の對象とする所のものを自己で作りつゝ進んで居るものであることが知られよう。自然科學者は、自然科學の方法によつて、科學研究の對象を作りつゝあるのである。それで具體的の概念は、之を文字の上で解釋しやうとすると、上述の如く寧ろ困難である、甚だ難解なものとなるが、農夫が穀物を作るのでも、工人が製作に從事するのでも具體的なる概念でなくては其の仕事がなされ得ない。主婦が多少の經驗を經て、家庭を自己獨特の力で整理し秩序附けて行くのも、亦具體的の概念の力である。此の力の爲には、家政學といふ樣な、抽象的の知識を學ぶことは最も大切なる仕事ではあるが、只學ばれたゞけでは、抽象的のものである、故に實際には家政學を離れた（自由）ものであることを會得し得られよう。斯くて眞の概念は、我等の日常生活を作爲しつゝあるものと考へなくてはならぬ。從て之を大きく云ふならば、觀念とは歷史を通じて顯はれるもの、否な歷史を作りつゝあるもの、否な歷史其れ自らが觀念であると云はねばならぬ。此の事は更に後に歷史の意義を論ずる場合に詳論せられるであらう。ともかく哲學的に考へるといふ事は、抽象的な思ひ付き、例へば各種の新しがりやが考へ出す如き、空想的なるものに惑はさるゝことなく、深刻に自己をみつめ、自己の本性より自己の自身を創造することに努力するといふ事である。（一三、七、二三）



# 浄月庵の秋

## ——有島武郎氏の隠れたる挿話——

本荘可宗

×

白樺の清らかな幹を濡らして静かに降り灑ぐ六月の夜の雨のなかに、打ち默して言ふこともなく首垂れたあのひとりの總明な思想家。二十世紀の初期に於ける日本の思想界に打込まれたる一つの鋲として力學的に其を支へた大きな仕事を殘して、孤獨に歩み秘かに惱み謙遜に反省してその終焉には、遂に言ふこともなく運命の前に碎けた彼。言ふまでもなく彼の魂の收穫として現代に贈られた多くの未知の友に頒たれたるあの十幾冊かのかたみは、日本の思想史に於ける一つのペリオドであつた。後人は之から新行を以て書き初めねばならぬ。

そして彼はその仕事の總和のうへに次代が足をのせて更に一段の高さに進まねばならぬことを無言に私達に示した。

——私はあの總明な瞳を忘れ得ない。穏かでしかも嚴粛であつたあの横顔のシルウエツトを忘れることが出來ない。そしてあの山莊の夜、暗闇のなかに銀の箭が數限りもなく抛げられたやうに降りしきる雨のなかで、——丁度其は天の使ひが下界のこの二人の不屈者を射止めて了はなければ止まないやうにこのぼつんとしたたつた一つの山莊を中心にして前後左右から打ち放つかのやうであつたその雨のなかで——寄り

添ひ乍ら短かい走り書を殘した彼の悲しい背後姿を私は幻視せざるを得ない。懐中電燈の僅かばかりの灯のかげに浮ぶその背後姿を。

「自己」の發見を成し就げた近代の賢者。I exist as I am that is enough （私は在る通りに在る。それで完全だ）といふホヰツトマンの妙句にカチリと衝つたこの日本の賢者の歡びは、丁度採掘者の鶴嘴の尖が長い努力のあと卒つと鑛脈にかちりと衝つたそれにも似てゐるであらう。そして其より漸く環境に働きかけて對社會の問題に這入らうとしてゐた彼は其の生活の轉廻期に於て端しなくも死を誘はねばならない經驗にぶつかつた。——自己の發見と、續いて他人の社會の發見と、斯う順當に彼の魂は發展していつた。そして總てを自己の裏に於いて見出すといふ叡智と總ての價値を流動の相に於て觀ずといふ達觀に辿り着いて彼は始めて寛どかに呼吸ついた。『昔の偉い禪坊主なんか迅くに解つてゐることを、私は卒つと今になつてそれを朧げながら知ることが出來たんです。また私は哲學を知らないから、私の言つてるやうなことは迅くの昔何處かの誰かか哲學者が同じやうなことを、いやもつと偉いことを言つて了つてるのか知りませんが、それを私は四十年もかゝつて如何やら斯うやら斯んなものではないかと頷き出したんです。考へてみれば馬鹿氣たことですが、併し私は之れを私自身の途上で頷いたことに多少の（と彼は謙遜して言つた）價値があるんではないかと思ふんですよ』彼は自らの眞理を自らの經驗を通ほして、その個性と因緣とによつて頷いた。そして其處に彼は彼の人生肯定の偉きな藝術と、深い文明批評とを殘した。

蓋し彼の評論はその儘其れを歐文になほして西歐大陸に持つていつても些の遜色はない。否現在の歐州の思想家の大多數こそ反つて彼に學ぶところ尠しとはしないであらう。私は淨月庵の故屋を尋ねて今更乍ら逝き人の跡をしみじみと懐かしく思ふ。

×

私は新秋の或る日淨月庵を訪ねた。其の庵はいま故の場所から取り除かれて、輕井澤の青年會の集會所として町近く移されてゐる。死の跡も追憶の影も其處には既う無い。

せめて元の形のときにひとりででも訪ねてみるべきであつ

たのだけれども、私と有島さんとは妙な關係から絶交狀態になつてゐたのと、も一つには有島さんをめぐる昵懇な人々、弔ひに手傳ひをした人々に對して私はあんまり親しくも無いしまた餘り虫の好く方の人達でも無かつたので（たゞ足助君だけには私はいまでもあの人に深い敬愛を感じてゐる）世間がまだ騷いでゐる頃には猶ほさらのこと、行つてみる氣はしなかつた。

併し歳も一年も經ち、故館も毀されて了つて、多忙な爲めに健忘にかゝつてゐる世間といふものゝ注意もそこから漸く離れて了つた此頃になつて、やつと私はひとりで有島さんの終焉の地を自分の生涯に珍しく感傷的な場面として訪ねてみたくなつたのである。

いまの淨月庵の傍には野花が美しく咲き亂れてゐた。舊の場所には雜草が微風に搖れて淋しく茂つてゐた。きりぎりすの聲さへ斷續して空氣は寂寞の極みに沈んでゐた。

東京は八十度臺から九十度を突破してゐる殘暑に、此處は氣溫を七十度臺に止めて、涼しい山氣は愈がうへに心の髓までも澄ますやうであつた。

私は生前の有島さんに就いての記憶を、私の觸れた側面から、その有りの儘を曝け出して——そして其は軈て私自身が如何に低卑な人間であるかを示すことになるのだが——些か自分の深厚な弔意に代えたいと思ふ。そしてまた何か讀者諸君の心にお贈りするものがあるかも知れないと思ふ微かな望みに勵まされて其を書きたいと思ふ。

×

私は札幌にゐたときには有島さんと餘り親しく會はなかつた。私は何故かあの頃は、基督教的教養のある匂ひが大嫌ひであつた。當りは軟くて實は眼は探偵のやうに物を見拔かうとして動いて居り、親切であつて實は人は親切でなければならないといふやうな內的强制が慣習となつて了つた爲めにしてるやうであり、ゼントルマンであつて實はゼントルマンであることが他人よりか自分自身へ對する虛榮であつたりする人が多かつたので嫌であつた。一言でいへば基督教的教養の匂ひは一種の嫌味として私の心に非常に不快であつた。僞善者の匂ひを（自分が僞善者であつたからかも知れないが）すぐに感じて嫌であつた。

私はいまでも温和な人であり乍ら、聰明な人はあまり好きでない。薄氣味惡いといふのか、その人が本當に善い人とは思へない氣がする。慈眼は、物を探ぐる眼であつてはならない。物を味ふ眼であるべき筈だと思つてゐる。――私は欺す人を然う怖れない。欺されてゐるなあと知つて乍ら知らぬ顏して欺まされてゐる人を一番怖れる。親切であつて聰明な人といふのは本當は善人ではない。抑も聰明といふことは善人の有する德ではないのだ。探偵と泥棒とは同じく聰明である。欺す者は、欺される者よりか知を動かしてゐる。併し欺す者よりか、欺してゐるなと知つてゐ乍ら欺まされてゐる者の方が、一層高く相手を欺してゐるのである。――私は有島さんに對して札幌時代には聰明といふだけで怖ろしかつた。そしてその基督敎的敎養から來るゼントルマンリネスは嫌であつた。

私は抗意的にヴアルガアであつた。故意と野人禮に倣はず式に振舞つた。(故意とだから猶ほ私の方が本當は嫌味なのだが)。

併し有島さんのすることには屢々陰では感心したものであつた。

有島さんは其の頃、札幌農大の豫科で英語を敎へてゐた。ある時―多分第三學期の試驗であつたと思ふが―英文和譯の試驗問題を出した。その時或る學生が、有島さんの敎つたのとは別な解釋をして答案を書いて出した。それで有島さんはその人に惡い點をつけた。その學生はその爲めか如何か知らないが兎に角自分では落第だと思つて郷里の靜岡の方へ歸つて了つた。ところが後になつて能く考へてみると、その學生の解釋の方が正しいので、實は有島さんの敎へた方が間違つてゐたといふことを有島さん自身が發見した。

有島さんはその學生に非常に濟まなく思つた。そこで有島さんの敎へた通りに書いた學生達の答案にも仕方がないから滿點を與へることにして、その學生の答案にも滿點を與へた。――

併し私達を吃驚させたのはその故ではなかつた。有島さんはその試驗が濟んで休暇になると直ぐ靜岡縣まで行つてその學生に謝罪にいつたことであつた。

『おい。有島さんがXの處まで謝罪りにいつたつてよ』

『Xが郷里へ歸つて了つたことを心配してさ』

札幌の豫科の教室で斯んな話をし乍ら學生達は心秘かに尊敬して了つた。

×

これも札幌のときの有島さんの挿話である。

有島さんの所に一人の學生を預つてゐた。ところが此の學生は仲々の道樂者で、毎日毎夜有島さんの眼をかすめては遊廓に通つてゐた。有島さんも始めは知らなかつたけれども、學校の出席時數が餘りに少いのと、成績の非常に惡いのとで氣がついた。有島さんは彼を呼んで懇々とお互の心持や考へを語りあはうぢやないかと申出た。『私は決してあなたの道樂を如何こう言ふのではない。ただあなたの心持を聞きたいのだ。そうして其があなたにとつて如何しても斯うゆかなければならない路なのならば私は自分の出來るだけの事はしやう。……併しとにかく學校の方だけは、くだらない事だけれども早く片附けて了ふ方が宜いだろう。それに金を使ふといふことも、私に出來るだけのことはするから、遠慮なくあなたの内心を、―本當に戀してゐる人があるならば藝者でも何でもそんな事は宜いから―あなたの心の有樣を聞かして貰ひたい』と其の學生に話ました。

そして後で、この學生が非常に熱くなつてゐる一人の藝者があるといふことを知つた。或る冬の晩―彼のデカダンスが漸々と激しくなるので、―その晩も彼は居間にはゐないで、こつそりと遊里に出かけたので、有島さんは暫く考へたのち立ちあがつた。

雪のしんしんと降る花街のなかを、零下何度といふ極寒の夜を、有島さんは藝者家を一軒たづねて彼と彼の戀人(果して本當に戀人同志であつたか或は所謂おなじみといふ程度であつたか如何か知らないが)の居る處を捜しあてやうとした。自分で出來ることなら、無理をしないで二人が戀しあへるやうにしてやり、そして學校の方の事も自分が父兄に監督を頼まれてゐる以上巧くやつて貰ひたいと、思つたらしい。無理をしたり、自棄したりして自暴したりして耽溺するのは互に損ひあふだけだと考へたらしい。

―この、有島さんが雪の夜花街を捜して廻つて歩いてゐたことは端しなく世間に洩れて誤解の種となつた。『有島さんはあれで如何して、内證にこつそり薄野(札幌の遊里)へ出

かけるのだからなあ。』『何と云ふ性質の惡い、穏順しい僞善者だ！』こんな事が學生の口から洩れた。

併し、有島さんは一言も其れに辯解はしなかつた。その學生はその後學校をやめて郷里へ歸つて了つた。

後に有島さんはこの時のことを私に語つて斯う言つた。『何あに、いまから思へば、あんなことを爲なくても宜かつたんです。あの人にとつて實は餘計なおせつかいであつたんですよ。其うした問題に、周圍の人の親切だの、忠告だの、老婆心なんていふもの程、反つてその人を損ふものはありませんよ。』

『えゝ、無駄なことなんです。親切といふ名で加へられた強制ですからね。』

私はいまでも、あの雪の夜の花街を、一人の蕩兒を追ふて尋ね廻つた有島さんの姿を想見するときには、ある人にはそれが何と見えやうとも、私には何となく懐かしい先生のやうな氣がするのである。何でも話に依ると、その夜、有島さんはその遊女を身受けするだけの金を懐にして出ていつたのださうである。そして二人が居る前で、双方の心持を能く聴いて、其場で（二人の爲めに）彼女を身受けする覺悟であつたさうである。

愛しあつてゐる男女二人が、男は貧乏な爲めに、また女も貧乏なために、一所にゐることが出來ないで、そして女の方は愛の無い男に性交を強ゐられるやうな制度の下に呻き苦しんでゐるといふ場合公娼になつてゐる人の愛の不幸に就いて有島さんは悲しみと憤りとを持つてゐたことも事實であつた。

私はこの時の有島さんを忘れることが出來ない。

×

私は一高に來てから、そして有島さんが札幌の家を引きあげて東京に引移つてから、屢々有島さんに逢ふ機會に接した。併しこの時も實は餘り有島さんの處へ飛び込んで行つた譯ではなかつた。本當は、有島さんの都合からいへば毎週金曜日にホイットマン研究の『草の葉』會が氏の宅で開かれるのでその時間へは一番邪魔にならなくつて宜いのであつたらうが私は決して其の會には出席しなかつた。何故かといへば、私は當時、有島さんを取卷く青年ほど嫌だと思つたもの

はなかつたからである。

有島さんは好きであつても、有島さんを取巻いて集まる若者の、虫づはるキザな思想と趣味と感情とには傍へよるのも私には嫌であつた。男でも女でも。――所謂「有島張り」な考方物の言ひ方をする若者が二三人集ると　どんな事を喋舌りあつてゐるかは讀者も推察出來るであらう。

そして其が如何に、頭の善いものには『はあこの次ぎには斯んな事を言ふぜ』と言葉のさきからさきへと此方が先きに解るやうなことを、多少の上品さと氣取りとを以て文學青年的アツフエクテーションを以て意義深げに語り、そして感傷と道義心とを表に出して顏をつきあはせて座つてゐる一團の人々、その中に座つてゐる有島さんと、を想像すれば、誰だつて自分をそんなものゝ中に見出して、自分を情けない道化者にして了ふことは嫌ではないか。――有島さんも實は、之を悲観してゐた。彼を取り巻いてくる人に見出すキザと負誇とには時々咳聲を洩してゐた。内證の話だけれども有島さんは斯んなことを言つてゐた。「×××子さんなんか、まあ、失禮ですけど、餘程氣をつけないと絶望ですね。あの人はつまり虚榮に考へたり喋舌つたりしてゐるだけなところがありますよ。才で書いたり――才で書くといふことは物眞似しか出來ないといふことですよ―衒いで喋舌つたりする、謂はゞ現代の都市的處女の最も惡い、併し賢い點をあつめるとあんな人が出來るでせうねえ』――彼女の言葉は一種のオシヤレである。香水の商標がそうであると同じやうに。いまにあんな女は金を何とか工面してでも佛蘭西を一廻りして來て、さも佛蘭西に十年ゐた人位通を振り廻したり、書くものに必ず佛蘭語を一つか二つ入れないと氣が濟まなかつたり、またいつか（未だ知らないから宜いが）オリーヴ、カスタンスの假面に眞似たやうな意氣なものを　多少の誤ちをさへ混へて）ちよつと喋舌つたりするだらう。誰であつたか斯んなことを其に對して答へてゐたやうな氣がする。「あの人にはすべてがみえにさへなれば宜いんですからね。はゝゝ』

兎に角私は高等學校のときには有島さんを餘り訪ねなかつた。が能く意外な處で出逢しては長喋舌りをしたものであつた。

或るときは大橋圖書館の食堂で出逢した。そしてその儘に

館になるまであの不快な留置場みたいな食堂で話をした。私はミスチシズムを研究してるといふことを言つたら、有島さんはそれは面白いだろうといふやうな話であつた。マイスチル、エックハルトの話、神の否定と發見の話、人間の復辟の話、何でもそんな話をした。

歸途に五番町の有島さんの家で夕飯をよばれた。

×

大學に來てから私は、有島さんと甚だ近く接近するやうになつた。金を借りたり返へしたりして、御了ひには五十圓ほど借り放しになつてゐた。その頃は有島さんを取卷く有象無象は霧散して了つたし、それに私の心持も、有島さんのエッセイを翫味して讀むにつれて漸々に偉い人だと思ふやうになつて來た。訪ねてゆくことを恥しいと思はないやうになつた。

その頃から私は禪宗から轉じて眞宗の他力信仰に歸依しやうと願つて獲信のための模索期に這入つた。そして漸つとそれが解つて來た頃であつた。（いまでは私はそんなもさへ打越えて了つた氣までがする。安心といふことさへ要らぬ自分の全存在の相を領いたやうに思ふ）臨濟の言つた言葉のコツが解ると同時に、不思議にも他力道のコツも領けて來た『この位のおまかせ』といふ無義が領けて來た。臨濟が『爾諸方に曰ふ、道に修あり證ありと、錯ること勿れ、修證し得る底のもの皆是れ造業』といふ一句を淚こぼして歡んだ時であつた。有島さんも此の頃は私が──無誠意な男であることを迅くに看破してゐ乍ら、──能く親し味を以て迎へてくれた。

『無誠意なら、無誠意のまゝで行つてみませうよ。どうにかなるでせう。如何にもならなくつたつてその道がちやんと如何にかなつてゐる至上の路なんですものね』私の斯ういつた言葉にも有島さんは領いてくれた。その頃麴町の下宿にゐた足助素一君を訪ねて、夜遲くまで私は信仰の事で足助君と語りあつた。そして仕舞には議論になつて了つた。『君なんかまだ本當に何も解つてやしないよ。信心の外廓だけ呑み込めてゐるやうだけれども、なあに、中味は空洞つぽさ。はゝゝ』足助君は私に斯う擲りつけるやうに言つて外方向いて了つた。

『えゝ。その空洞で宜いんですよ！』私も捨白を殘して席を起つて歸つて了つた。──あとで有島さんにその話をしたら、

『お互に少し他人の心に手を少し出し過ぎてるやうですね』

と笑つた。

×

私は、論文を書きに鎌倉に行つた。有島さんの所に泊めて貰つた。

有島さんはその時はずつと身體の工合が惡くて臥床つて居た。大阪毎日に當時載せてゐた『生れ出づる惱み』の原稿を、有島さんは病を推して書いてゐた。私が行つてから、それを私が書くことになつた。そして有島さんは仰向けに寢て口で言ふのだ。元々私はそんな事は大のにが手であつて、實は内心飛んでも無い所へ來たなあと少し悲觀してゐた。一體人の口で言ふことを書くほどつまらない、容易い、その癖、疲れ易いことは無い。何でも「生れ出づる惱み」のなかの、何とかいふ主人公が、頑丈な靴を樹の根株に蹴りつけて雪の塊りを落すといふやうな所から書き初めたやうな氣がする。所が二三日爾うしてゐるうちに、有島さんの病熱が卅九度近く急にあがつた。周圍の人達は遽かに心配しはじめた。足助君などはやつて來て『本莊君。君がいけないよ。君が有島を煽てて書くやうにさせるものだから……』と私に言つた。冗談ぢやない煽てる所か内心悲觀してゐたんだ。

有島さんの病氣は何だかえたいが知れないんで、或は逝くなつた奥樣の肺病でも傳染つたんではなからうか、なんて私達は當時に近所に住んでゐたY夫人やS夫人達と話しあつた。

有島さんの頭に氷囊が載せられ、その室内での長い談話は禁じられ、來客には病牀の傍で煙草をのむこともお斷りにされてから何日か經つた。その時、有島さんの宅に雇つた看護婦が、とても太した海山千年の代物で、朝鮮から滿洲を股にかけて渡り歩いた女であつた。始め東京で或る男と戀に陷ちて大阪に流れて、それから珈琲店に勤めたり、京城の醫院でドクタアに思はれ圍ひ者にされたり、そして其の爲めに其の一家には大した騷動が持ちあがつたりして『私は面倒臭いから、本當に心のなかでは先生（そのドクトルの事）に感謝し乍ら、其處を飛び出して新義州に行きました』つていふやうな女傑であつた。流れ流れて、幾つかの戀や、廢頽や貧乏やを重ねて、再び日本の鎌倉に舞ひ戻つて、彼女は千九百何年かの春に、有島さんの家へ派出看護婦として這つて來たので

ある。

彼女から受ける印象は女郎から受けるそれであつた。顔立ちも宜いし愛嬌もあるしするけれども、その全部が野卑な形で淫蕩の塊として轉げ出されてゐた。彼女の感情も河馬の皮のやうに、使ひ擦らして鈍く厚ぼい感じがした。それは彼女が用の無いときは女中部屋で、女中共に自分の過去を、嘆いてゐるのか自慢してゐるのか解らない形で、ペラペラ喋舌つてゐるのを聞いてゐるときにも、彼女と私とが對話してゐるときにも、爾う思つた。

この看護婦と私とが怪しいと揶いはじめたのは足助素一君であつた。『看護婦さんが君に宜しくつて。是非君に逢ひたいと言つてたよ』こんなことを足助君は私の部屋に來て揶つた。私はこのときは、有島さんの病氣が重いので、氏の別荘から少し離れた米淸といふ宿屋に、足助君もゐたしするから其處へ引越した。

或る日の朝、私は有島さんのお見舞ひに枕頭に座つた。その看護婦さんが丁度そこへ氷嚢を代えて持つて來た。彼女は私に一寸會釋して氏の枕の傍へ膝をつくと、秋波そのものである流盼を暫くぢつと私に送つた。嫣笑し乍ら。氷嚢の水がぽたぽたと有島さんの頭に落ちるのも忘れて。――有島さんはその時―確かに眼を瞑つてゐる筈であつた有島さんは、眼を細眼にあけて、蛇よりも冷めたい、凄い眼光を彼女の瞳に下から向けてゐた。そして直ぐまた眼を瞑いだ。そして今度は、顔をぴくとも動かさずに、矢張り眼を細目にあけて、瞳孔だけ左の方へぎつと寄せて、瞼毛のかげから（それ程眼は閉ぢてゐるやうに見えた）私の―それに應答してゐる瞳をぢつと睨めつけた。その眼光の青さ、冷めた、凄さは、そして陰險な窺視は、丁度ルパンの小説のなかの怪賊が陰々とした夜更に鍵の孔から室内を覗いてみてゐるやうな凄さであつた。喋舌つてゐるときの濕和かないつもの有島さんとは裏腹であつた。斯んなことが出來る人なら、話しあつてゐるとき、平常のときにも、怒つたり睨つたりしてもよささうなものにと、と思つた。

私の眼と有島さんの眼とがカチリと逢つたとき、有島さんはすぐ眼を閉ぢた。私は眼を落して膝のうへを見た。看護婦はまだ嫣笑してゐた。馬鹿者奴……。

兎に角、有島さんは斯ういふことをする人であつた。さあらぬ態を。怖ろしい人であつた。

有島さんはそれから東京へ入院の爲めに歸つた。足助君はその看護婦がお拂ひ箱になるまで私に揶つてゐた。Y夫人が米満に私を訪ねて來て、庭から二階の私を呼んだことがあつた。私は、留守であつた。そしたら足助君は障子の影から、見えぬ庭の女の聲に答へた。『看護婦さんですか？本莊君はお留守ですよ』と怒鳴りつけた。あとでY夫人と知つた赤面したさうだ。

×

このとき鎌倉で私に一生涯の重大な、熱烈な――そして其はいま思ひ出しても清淨な氣がする、或る事件が起きた。S夫人との問題が始まつた。しかもまた何といふ氣紛れであつたか、それ程の、總を傾け盡した私の内面の重大事件の眞只中で、有島さんのお留守番に來てゐた若い肥つた女Nと躓いて了つた。晝間ちよつと冗談を言つたら、夜になつて淋しいから遊びに來てくれと迎ひに來た。私は、變な不安を感じて、後で後悔するやうなことにならなければ宜いが思ひつゝ出掛けていつた。そして矢張り怖れてゐたものに、併し不思議な歡びを秘めたものに――自然がせゝら笑ひ乍ら伏せた陷穽に何の手向ひもなく至つて手取早く陷り込んでしまつた。若さが産む誤ちといふものを心から悲しく、自棄に似た怒りで感じた。

私は取りかへしのつかない此の自分の所業を信ずることが出來なかつた。私は自分のこの愚昧と羞恥と自責の苦痛で、自殺をしやうと決心して二日許り山の中を逍迷つた。因縁といふ奴が私のうへに冗戯け散らした惡戯に對して私は復讎を、憤怒を、死によつて見せなければならないやうに感じた。この事はいまだに如何しても自分の爲たこととは思へない。何だか憎むべき他人事のやうに考へられる。『因縁に動かされては――（主觀的に言へば）要求に動かされては――人間はどんな事をするものだか解らない』と私は染々思つた。

これを聞いていままで仲よく私と接觸してゐた周圍の人達は一所になつて私を排拒して了つた。有島生馬氏は佛頂面して翌日、東京へ歸つた。歸つて兄貴（武郎）に打明けた。足助君は、親切に『おい、有島の面に泥を塗るやうなことは止

したが宜からうぜ』と英語に縷々と書いて寄越た。有田四郎といふ畫家は『彼奴は不良青年だから、撲り飛ばして追拂つてやる』と腕まくつた。斯うなると私の眞劍なS夫人との戀愛事件も、誰からも眞劍だと思つて貰へなくなつて了つた。宜い加減に彼方此方の娘や夫人を荒して廻る惡漢にされて了つた。

（S夫人と私とは關係なんか何も無かつた。S夫人は私を弟のやうに大變可愛がつて下つた。私は永久に尊敬する、S夫人の名譽のために之丈けの事は言ひ添えて置かねばならぬ。）

その後大分經つてから、有島武郎さんから其の事に就て私の出した手紙の返事が來た。その抄錄がいまこゝにあるから書いてみる。

『君は始めから爾んなことをしさうな男だつた。だからその話を聞いたときも、ふうん爾うかと返事した。奴さん遂々やつたなと思つた。併し內心ちと不快な氣持がした。……斯ういふことがあつたとて私は直ちに君の心が何も不眞面目だといふのではないんだ。性慾のことは私にもいま能く解らない。

たゞもう少し君に自重して貰ひたかつた。實は私とても斯んな幅つたい口がきけた譯ではない。いつどこで如何んな機會でどういふ問題を起すか解らない。たゞ君より年齡をとつてゐるだけ性慾の問題なんかには少し餘裕があるだけだ。また私の身體が强健でもないからでもあらう。といつても未來はどうだか解らない』

『戀愛といふものは移り氣で、貪婪なものである方が本當らしいやうな氣がする。一人の相手にいつまでも動かぬ關係で繋りつけるのは人間の本性ではないらしい。それは社會の秩序のために出來た、後天的な、作爲のやうな氣もする。戀愛は多角的なのが本當で、執一的なのはどうもあとで出來た狂ひのやうだ。私はいま爾うい ふことでは些しも君に助言はないのだ。同じく迷徨してゐる者だから。』

『ホイットマンなんかも隨分婦人との問題は放埒のやうでゐつた。だから君も若し爾んな風にゆきたければ行くが宜いだらう。然しその責任はすつかり君が持つんだといふことは充分覺悟してかゝらなければならないだらう。』

『Sさんとあなたとの問題も、あなたが眞面目にさへそれを

追ひつめてゆくのなら些も關やしない。勿論その一切の責任は、呉々も言ふ通り君が背負はねばならないのだ。背負ふ代り誰が何と言つたつて君にはそれは他所の國を流れてる川みたいに何の關はりもないものだ。PやQやLがSさんにあなたを中傷した爲めにSさんがあなたを信じられなくなつてあなたを去ればまた其れまでではないか。離れることを怖れて、いつさもつさやるのは、君の能く使ふ言葉で「運命を信ずる者」のやる事ではあるまい。』

『戀愛といふものを思ふたびに、君の言ふ通り、私も運命といふことを考へる。戀愛は運命に屬いたものだ。二人が逢つたといふことが第一運命だ。そして相方が愛を持ち合ふといふことは猶ほ更らに深い運命だ。千人も萬人の中で、その中から相方がその人を相手として一人撰び出して戀しあふといふことは不思議だ。幾百億の人類のなかで此處にも營まれてゐる一つの戀。ぽつんとして多數のなかに存在する一つの小さい戀。』

×

有島さんが鎌倉にゐた頃。有島さんの後添えになりたいといつて、かなり熱心に結婚を、結婚でなければ家政婦か坊ちやん達の保姆としてでもと、願つてゐた一人の婦人が能く訪ねて來た。その婦人は二十六七歲の、教養のある穩やかな立派な婦人であつた。

或る日、その婦人と有島さんと二人連れで長谷の方へ散歩に行つた。途中で私は逢つた。そこで三人連れで大佛の方へ行つた。大佛をぬけて奥の山路の方へさしかゝつた。いろ〳〵な話を三人でし乍ら歩いた。そのとき有島さんは斯んな事を言つた。

『私は戀といふものに就いて、古めかしい、ロマンチックな考へを持つてゐるんです。それはプラトウの話ですね、あの男と女とが天上では一つの身であつたものが、この世には半分づつに分たれて生れて來たんだといふ話、それだから此世では男と女とは片身が互に片身を搜しあふんだつていふ話、あれに似た考へを持つてゐるんです。……私の戀人、――片身は今何處にゐるか知らない。或は西瑞の山奥で羊飼つてゐるかも知れない。そして此の、ひよつとすると彼女は名さへ知つてゐないだろう所のこの極東の日本といふ國に、黄ろい

顏して生れて來た私といふ男が、自分の本當に愛すべき男だなんていふことは夢にも知らないだろう。そして彼女は近所の羊飼の男や獵師の若者と戀をしたり樂しんだりしてゐるに違ひない。しかも猶ほ心の底のどこかに、本當に逢ふべきものに逢つてゐないといふ不滿を感じ乍ら、戀しあつてゐるだろう。或は私の本當の戀人は銀座の街路でつひ鼻の先を通つて、そして行つて了つたかのも知れない。或はどこかの海岸で船頭の女房になつてるかも知れない。或はまた私の片身は支那の大江の畔りで洗濯をしてゐる小娘なのかも知れない。私は何も知らない。とにかく斯うしてお互にこの世を本當に逢ふべきものに逢はず、戀しあふべき者と戀し得ずに終るのかと思ふと淋しい氣がします。餘程幸せな人だけが逢へるんですね。』

有島さんのハゲ上つた額には午後の陽光が照りかへして、その上に先刻から小さい一疋の蠅がついて廻つては留まつてゐた。靜かに話し乍ら歩いてゐる有島さんは、エトラルドの指輪をつけた手で時々にその蠅を逐つた。蠅は追はれるまでの間をその光り瘤の上で敏捷に彼の六本脚の前の二つを手のやうに使つて顏を撫でたり後の一つを拜むやうに合せて擦つて揉むだりしてゐた。――有島さんは嚴肅な顏してゐた。

婦人は打俯き乍ら聽いてゐた。私は不屆な蠅だと思ひ乍ら氏の言葉を頷いてゐた。

私は氏の話の途切れを待つて擡へた。

『併し有島さん。嫌ながら添つてる自分の妻君でも其れがその片身でないと如何して云へます。片身と逢つてゐない、逢つてゐるといふことを見分けるものは何ですか。……私は淋しいのは逢ふべき者でないものと逢つてゐるのだと見分けるものを持つてない事なんです。第一に幸福な者は逢ふべき者に逢つた人。第二に幸福な者は逢ふべき者に逢つてる逢つてないといふ見分けのつく人。第三の不幸な者は私みたいに「いま逢つてる者は、逢ふべき者なのだらう逢ふべき者でないのだらうか」見分けのつかぬ人。斯ういふ私みたいな男は逢つてゐるといふ滿足も知らなければ、逢つてゐないといふ斷念の靜平も知らない。轉り轉つてのた打ち廻つて歩くだけですよ。……併しそれだけ不安もあれば當てもあるやうな氣もする、謂はゞ幸福だか不幸だか解らぬ人、これが一番不幸

なんですね』

その婦人は、有島さんに靜かな微笑を見せて默つてゐた。

婦人は鎌倉驛からその歸りに東京へ戻つた。

入り惱む夕陽が和やかな褪赭を見せて源氏山の彼方にくすするでゐた。

私は有島さんの家へ寄つた。有島さんは、その婦人の事を一寸話しかけたが止めた。私も聞かなかつた。たゞ有島さんは『當分私の氣持――ほんの氣持からですよ、意見だの思想からではないんです――氣持は、どうも結婚したくありません。』と言つた。『結婚の退屈が解るからですか。子供さん達に對する新しい母親の心持を考へるからですか。結婚して了つてから、もつと善い女と後で逢つたりするとき、結婚して了つたことを後悔するのが嫌だからですか。』私が斯ういふ失禮な質問を聞いたのには返事はしなかつた。人間の心を簡單に忖度しやうとする愚問であつたからだ。

×

有島さんに接吻した女がある。

それはKといふ或る將校の夫人であつた。彼女は鎌倉まで有島さんを訪ねて來て、若し氏が散歩か何かで留守のときは必と私の處へ廻つて時間をつぶした。私はK子夫人と屢々逢つていろいろな、秘密な性の報告を（彼女は斯うしたものを正直に報告することは、人生を生きてゆく者のうちで最も眞摯なる者がすることだと考へてゐたらしい）聞かされた。それから戀愛の重複性―彼女の言葉に依ればこれは物理學でいふ物質の不可透性の反對を言ふのである―を說明されたものである。

『何人の男を愛したつて、その一人一人は、女にとつては夫れ〲別な興味や魅力によつて結ばれてゐるのであつて、同じ深さと大きさとで、而かも些とも愛の質さへも低下させずに、戀してゆくことが出來ると思つてますの』『そしてその內のどの一人の男を取つて來たつて、それは女にとつて矢張し、「最愛なるあなた！」ですわ。……つまり外の場合では最上級の言葉は唯一の場合しか使へませんが戀愛の場合は、幾つも同時に使へるといふ譯なんです。どの愛人も女には唯一最愛なるあなた！ なんです。それは決して「愛する者の中の一人」ぢやないんです。お解りでせう？』『それをね、殿

方は嫉妬をお燒きになるので嫌ひになつてしまひますわ。自分だけを唯一最上の愛人にさせようとお仰るのですもの。他に愛人の片影すらも無いやうにつて。それでないと安心なさらないのですのね。私、夫なんかと能くそれで喧嘩をしますのよ。』彼女は喧嘩したやうな顏も別に見せずに微笑むでゐた。

このK子夫人が或る日の告白に依れば、『私は有島さんに接吻しましたのよ』と少し頰を赭らめて淑やかにいふのであつた。

『先達、あの朔日の晩ね。あの晩私がお暇申上げますと、有島さんは「私も少し散歩しませう」つてお仰つてお立ちになりましたの。お送り下さるなら其には及びませんからつて、何だか勿體なう御座いましたから、たつてお斷り申上げたんですけれど、「いや私は少し疲れたから丁度散歩に出やうと思つてゐる所なんです」とお仰るんです。

『二人で少し遠路しまして、いろ／＼私は有島さんにお話をお訊きしたり申上げたりしたんです。……何しろ蛙の啼き聲が穩かな温かい暗闇のなかに聞えるんでせう。そして靑葉の匂が空氣を香水の霧みたいにさせてるんでせう。それは素敵でしたわ。(私はこゝで思はず彼女の叙景に感心して「よう素敵ですね」と彌次つたことを覺えてゐる)路の處々に、コムマのやうに立つてゐる街燈の光りは楓の若葉に映つて、晝間には嫌な往來の砂塵さへその晩は何だか黃玉を粉末にして撒いたやうに感じられましたのよ。

『有島さんに、私大膽に『先生、私此頃思ふんですが、人間がいつの世からか性慾といふものを餘り重大事件のやうに考へることに慣らされて了つた爲めに、現在世の中には隨分あるまじき不幸が多いと思ひますのですが如何でせうか。新聞の三面記事を飾る多くの情けない犯罪や刄傷なんか、もう些と性慾といふものを樂に考へれば無くして宜い事ぢやないかと思ふんですが……。これを嚴しく考へ、、、させるやうにしたのは社會の秩序に便利のためにしたのでせうが。―それは社會の秩序の方をこそ改正した方が宜う御座いますわ。

『心の中で愛してゐることは自由ですものね、他人さまも自由にさせて下さいますし、また束縛しやうといつたつて駄目なことです。そうすれば愛してゐるなら性交を――若し二人

の心が昂つて其の要求にまで突き進むなら――自由に認めて宜いでせうと思ふんですが。……私の考へは餘り放埒でせうか知ら。だつてあれを三度の御飯と同じ位に考へたつて宜さそうなものに、と思ふんです。

『有島さんは「それには女の現在の生活狀態では少し難しいでせうね。女が經濟的に男に寄食してゐない生活も必要でせうし、嬰兒が女の運命を喰ひ込んで了ふやうな不便な世の中も訂正されなければなりませんでせうし、總じて男と女とが一所に生きてゐる社會といふものを、も少し何とかしなければ駄目でせうね」とお仰いました。』

K子夫人は斯くしてその夜、話してゐるうちに漸々と感じ昂つてゆくパッションを語つた。「有島さんも爾うらしいのよ」と附け加えた。「尤も有島さんは私なんかにはさう興味をお持ちにならないかも知れませんけど」とも言つた。

――K子夫人は或るお寺の石段をあがるときにちよいと躓いた。その拍子に有島さんの腕に凭れた。

『どうなさいました』

『いゝえ、大丈夫で御座いますの』

二人は默つて了つた。暫くそのお寺の境内の中で、丁度角材が少し許り積んであつた所へ來たので、それに腰かけて休んだ。

K子夫人は有島さんの手を握つた。有島さんもそれに應えた。

立ちあがる際にK子夫人は有島さんの手を取つて、その中に接吻した。有島さんは默つてゐられた。手を離すときに二人とも強く握りしめた。――或は何も言ひあはなかつたのかも知れない。

K子夫人はそれだけの事を私に喋舌つた。どんな話をその間にしあつたのか私は知らない。或は何も言ひあはなかつたのかも知れない。たゞ『有島さんが停車場まで送つて來て下さつて改札口の處へ立つてゐらしたのを、私は振りかへつてみましたら、靜かに微笑んでゐらつしやいました。二人はまたお辭儀しあひました』彼女は懷かしさうに私に、惚氣ともつかず眞面目ともつかず、變な語調で言つた。

×

私はその後、宗教的人生觀から離れて了つた。『神に賴る

な、神をさへ考案した人間の生命の力を理解しろ『自己の全存在』といふものを傾けば宜いのだ。』『神に頼る路さへも反て其處から解つてゆく、といふ意見になつて了つた。マイステル、エツクハルトの研究は私にとつて宗教否定の第一步になつた。有島さんの死の一ト月ほど前に手紙で之を書いた。『宗教改革によつて、人々は宗教は蘇つたやうに言ふけれども實はその反對だ。宗教改革から近代は出發した。ルーテルによつて神は生き返つたといふは凡頭の史家の言であつて、實はルーテルによつて宗教は滅びのくち火を切つたのだ。「神」への離別、「自己」の擴充へと旅立ちしたのだ』斯んな事を書いて送つた。有島さんから面白いといふ返事が來た。これが有島さんとの手簡往復の最後であつた。

『神に頼るな。これよりか人生觀を變へろ』『價値の流轉、生命の現在、個性の働きかけ。……すべて魂の本性を傾けば「救ひを求むる」といふこと其事が既に不要なことゝなる。』

私といふ人間はどんなにくだらない者であつても、くだらないまゝに、完全な存在だ。常に唯一至上の路を歩いてゐる者だ——私はしみじみとした心で斯く獨り言をつゝ、新秋の淨月庵の廢墟にひとり立つた。

蒼空は深く遠く澄んでゐた。樹の葉は眉を掠めてしきりに舞ひ落ちてゐた。雜草の間からは蟋蟀の聲が閑寂に斷續して聞えてゐた。路には蜻蛉が飛んで、秋の風は光りつゝ流れて袖を吹いた。

わが子よ！私はお前に手を與へる！
お前に金よりは少し貴い私の愛を與へる！
說敎や法令の代りに私はお前に私自身を與へる！
お前もお前自身を私にくれないか、
そして一緒に旅に出ないか。
生きてる限り、お互にしつかり結びついていつたら如何だらう。

（有島武郎——ホヰツトマン譯詩より）

輕井澤の秋は物悲しく、故人の愛句を思ひ出さしめる。私はホヰツトマンの"Song of the Open Road"の一句を誦して、下界より天上の人へ贈る餞けの言葉とした。

樹の葉はしきりに散つてゐた。白い雲は吹きちぎれつゝ靜かに蒼空に動いてゐた。



# 春香傳（續）

—廣寒樓記—

呂圭亨作

中西伊之助抄譯

## （三）千里幸想思

一

鈴は、春香の甘い唇を知りそめてから、夢のやうな日がつづいた。そしてその年の春もいつしか桃紅李白と共に逝いて、豪華な夏が來た。

鈴は、玉虫色に光る楊柳の樹陰を、輕い紗服をまとうて、房子を供につれながら、春香の家に通つた。夕風は、遠い北の氷島からでも忍んで來たやうに、鈴の素肌に媚びよつた。

鈴の心は、今宵の歡樂を偲んで、小鳥のやうに踊つてゐ

た。彼はもう決して、春香なくては生きてゐられないのであつた。かれら二人の戀は、日ましに募つて、血よりも紅く、蜜よりも甘くなつて行つた。

鈴の父、翰林は、郡内の治績大いに擧つた。そして、國王は彼に同副承旨として、京城へ榮轉せしめる勅旨を發した。翰林は、王命に感喜して、早速、ここの任地を去ることになつた。

翰林は、平常から、鈴の容子を怪しんでゐた。きつと、自分の息子には、戀人ができてゐるのであらうと察してゐた。しかし、翰林は、まだ學文修業のたいせつな途中にある息子が、情痴のために、身を誤つてはならないと思つて、以前か

ら、嚴しい意見を加へようとしてゐたが、たとひ、意見を加へても、若いものたちの戀愛は、とても解決のつくものではないとあきらめてゐた。今度の轉任で、彼を京城へつれて行つたならば、その解決は、自然につくだらうと考へた。

翰林は、ある日、一切の準備もついたので鈴を自分の室に呼んだ。鈴は、なにかしら落ちつかぬ容子をしながら、嚴めしい父の前に坐つた。

翰林は、長い煙管をそばへおいて、薄紫の煙を吐くと、たれさがつた銀髯を撫でながら、鈴を一瞥した。

『鈴や、お前は、いつも房子に案内をさせて、どこへ行くのかな。』

鈴は、それをきくと、ぎくりとしたが、さあらぬていで云つた。

『廣寒樓へまゐります……』

『なに、廣寒樓へ行く、なにをしに、そんなに廣寒樓へ行くのぢやな』

『え丶、それは、非常にい丶風景だからでございます』

『なるほど、廣寒樓は、この南原の形勝の地ぢや。世に謂ふ嶺東の八勝は勿論のこと、海州の芙蓉堂、晋州の矗石樓、平壤の錬光亭、成川の降仙樓・黄州の月波雙城郭も及ばぬのは、ここの南原の廣寒樓ぢや　廣寒樓の名は八道に響いて、世人は小江南とも云つてゐる。』

翰林は、もとの自分の任地にある形勝を、いかにもほこらしげに述べた。

『それですからお父さま、私は廣寒樓を觀に行くのです』

鈴も、それに調子を合せて、得意げに云ふ。

『うむ、それは結構ぢや、しかし鈴や、往昔から、秀麗の江山には美人が生れると云ふから、あんまり名勝を觀過ぎると面白くないぞ』

翰林は學者ではあるが、さすがに政治家らしい趣のあることを云つた。鈴は、それでぐつとまゐつてしまつた。

『そこで鈴や、お前は、毎日家にゐないので知らんかもしらんが、わしは今度、國王陛下の優勅を蒙つて、京城へ榮轉することになつたのぢや。』

鈴はそれをきくと、眼を瞠つた。

『で、もうあらましのことは準備をしたが、しかし、まだ三四日はこ丶にゐなければならない。ぢやからお前はお母さまと一緒に明日出發するやうになさい』

鈴は、その慌しげな一家の容子に氣がつくと、不意に暗い谷底へ突き落されたやうな氣になつた。

『お父さま、お父さまこそお年寄りですから、お先へお歸りなさい。私はあとのことは、すつかりかたづけて歸りますから……』

が、翰林は、ほゝ笑みながら首を振つた。

『いや、いや、それはいけない、わしは國王陛下へたいし奉つて、十分な職責を果して歸らねばならぬのぢや。若いものに任して粗漏なことをしてはならぬ。』

父は、頑としてきかなかつた。鈴は、父の冷酷な心持が呪はしかつた。そして、自分の去つた後の、春香のさびしい、悲しげな姿が、涙ぐましく胸に溯つて來た。……

## 二

鈴は考へた。もし春香を、自分がそつと同伴して歸つたならば、どうであらう。が、そんなことは、とても父が許すものでない 國王陛下の優遇を蒙つてゐる父は、かりそめにも自分がそんなことをしたならば、どんな重い折檻するか知れないのである。けれど、父の怒りを恐れて、自分が春香を捨てて都へ旅立つてしまつたならば――彼は夢にもさうした心にはなれなかつた。彼女との固い契りを、ただ父が轉任すると云ふことばかりで、どうして破ることができやう。――彼は、深い悩みを感じながら、その日も、夕方から春香の家に行つた。

春香は、自分の戀人に贈らうと思つて、錦の函に刺繍をしてゐた。が、鈴の姿を見ると、うれしさに瞳を輝かして、立ち迎へた。

『今日は大層遲うございましたわね。あの今日はなにかお差支へのことでもお邸の方におありになつたのですの……』

春香は、やさしく首をかしげて、なまめかしくきいた。

『なあに、べつに差支へなどはなかつたのだがね』

鈴は なにげなくさう云つたが、しかし、彼は沈み切つてゐた。いつもの晴やかな、赤々と燃えてゐる瞳は、今宵は、灰色に曇つてゐた。それを、怜利な春香は、決して見のがさなかつた。

『あなた、どうかなすつたのぢやありませんか、今晩に限つて、なんだか御心配がおありになるやうな氣がしますわ』

きづかはしさうな彼女の眉が、一しほ美しかつた。そしてまたきいた。

『あなた、きつとお父さまにお叱られなすつたのでせう。かうして毎晩お家をお明けになるので……』

『いや 叱られたのぢやないのだ。それくらゐならこんなに心配はしてゐないのだよ』

『では、どうなすつたのでございますか．早く仰有つて下さいましよ。私、心配でたまりませんから』

春香は、鈴の袖にすがりつかないばかりであつた。

『春香、實はね 僕は京城へ歸らなくちやならなくなつたのだ——父が同副承旨に榮轉したのでね』

『まあ、さうでございますか それなら、私、どんなにうれしいか存じませんわ』

『…………』

『私もお母さまと一緒に、早くあなたと京城へ行つて暮したいと思つておりましたのよ、——まあ、ほんとにうれしいことになつてまゐりましたわね』

が、鈴は、あきれてゐた。

『お前にさう云はれると、僕はどう返事してい〻のかわからないのだよ』

彼は 悄然として云つた。

『あなた それはなぜでございますの………』

春香は 急に怪しんできいた。

『府使さまがお歸りになれば、あなたも御一緒なのはあたりまへでございますが、私はあなたとお伴するのはわかり切つたことでございますわ。女は夫に從ふと申しますから、たとひ千里でも決して離れはいたしません。——でもあなたは、きつと私を疑つてゐらつしやるから それでそんなに御心配な顔をしてゐらつしやるんですわね』

が 鈴は、更らに躊躇してしまつた。

『いや春香 さうひとり合點をしないで、まあ僕の云ふことをきいてくれ。——ねお前を一緒に京城へつれて行かれるくらゐなら 僕はこんなに心配はしないのだよ。さう云ふ風にできたら、僕やお前はどんなに幸福だか知れない。が 僕はいやしくも兩班の子だ。それにまだ未婚者の僕が妾をつれて歸つたとなれば、親戚知己からどんなに非難されるか知れないのだ……』

その言葉を 春香は最後まで云はせなかつた。

『あなた』

と、彼女は、相手を、毅つとけはしく美しい眉をしてにらみつけた。

『あなたは、今なんと仰有いました。も一度仰有つてごらん遊ばせ。——妾とは一たいなにごとです。いつ私があなたの妾になると申しました。この前、あなたがこ〻へゐらした時のこ〻をよく思ひ出してごらん遊ばせ。あなたはあすこにゐらして、私はこ〻に坐つてゐましたが、その際、あなたはな

んと仰有いました。あなたはもうお忘れになつたかも存じませんが、たとひ碧海が桑田と變り、桑田が碧海と變つても、二人の契りは決して變りはしないと云つて、堅く言ひ交したではございませんか。あなたはそれをもうすつかりお忘れになつて、これから京城へお歸りになれば、きつと美しい奥さまをお迎へになることでございませうね。そして、文科試驗に及第でもなすつて文官にでもおなりなすつたら、名妓名娼は思ひのまゝでございますわ、――さうなれば、もう決して私のことなどは思ひ出しても下さらないのでございませうね。私はそんな口惜しい目に侍ふよりは、今夜の五更になつたら、きつと死んでしまひます……』

春香は、怨み泣きをしながら、化粧盌や、文房具などを毀してしまつた。

『どうせ夫のない女ですもの、こんなものは要りません』

かうしたもの騒がしい房の容子に、母の月梅がそつとは入つて來た。

## 三

鈴は、春香の悲しむ姿をながめて、彼も涙を頬に傳はらせた。

『春香、さうお前のやうに泣いてくれちや困る。僕は一旦ひとりで歸つても、決してお前のことは忘れはしない、それどころか、時期が來ればきつと迎ひに來てやるから、しばらく辛棒して待つてゐてくれ……』

『いゝえ、私はどこまでもあなたと御一緒でなければ、きつと今夜の五更に死んでしまひます』

春香は、可愛い首を振つてきかなかつた。

『まあ、お前どうしたと云ふのです』

月梅は、二人の容子を見て呆れてゐた。

『母さま、あの若さまがね、京城へお歸りになるのですよ』

『え、京城へお歸りになる、それはまあどうしてです』と、さすがに驚いた。

『お父さまと御一緒に、――お父さまが同副承旨に御昇進遊ばしたからです』

『それはそれはおめでたい。若さまがお歸りになれば、お前も御一緒にお伴ができるぢやないか、それになぜ泣いてなどゐるのかい』

『いゝえ、お母さま、若さまお一人でお歸りになると仰有るのですわ』

『まあ、若さま、それはほんたうでございますか……』

月梅は、顏色を變へて、鈴にきいた。

『お母さん、僕はさうなんですよ。今度はどうしても僕一人で歸らなければならないのです。それに兩班の子として、未婚の僕が妾をおくことはできないものですから、今別れるのは僕も非常につらいのですが、しばらく機會を待つより外にないと思ひます』

　月梅は、それを聽くと、全身を顫はせながら口惜しさに春香へ云つた。

『春香、お前死んでおしまひ、ね、早く死んでおしまひ。私はとてもお前がこれから一人で暮して行くのを見てゐられません……』

　月梅は、それから涙を拭つて、鈴に云つた。

『若さま、あなたは、なぜ私の娘を弄んだのです。なぜさんざなぐさみものにしておいて、今になつてすててしまうとなさるのです。――それとも、娘の品行が惡いと仰有るのですか、徃昔、君子は七去のわけがなければ離縁はしなかつたものです。それはあなたもよく御承知の筈です。さあ、私の娘に七去の中のどれがあてはまるかをきかせて下さいませ

　月梅は眉をあげて詰め寄つた。鈴は、月梅の樣子に驚いて、おどおどとしてゐたが、彼は、思ひ切つて云つた。

『ではお母さん、春香をつれて行きます。』

『えゝ、娘をつれて行つて下さるのですか』

　月梅は、にわかに顏色をやわらげて叫ぶやうに云つた。

『えゝ、つれて行きます。しかし、父に見つけられてはなりませんから、今度歸る時に私が持つて歸ることになつてゐる先祖の位牌を入れて行く輿があります。その輿へ春香をのせて、位牌は私が持つて行きます』

　鈴は、春香の戀しさと、母の詰問の恐しさに、とうたうか云ふ苦肉の策を考へ出した。

『お母さま、もう若さまのお心はよくわかりました。兩班のお身でありながら、あんなにまで仰有つて下さるのは、どんなに私を愛してゐて下さるのかがよくわかりました。お母さま、どうか若さまをもうこの上苦しめないで下さい。そして若さまのお心を信じてあげて下さいませ』

　春香は、涙を拭いて、月梅に云つた。

『さあ、お母さま、どうぞあなたの室へ歸つてゐて下さい』

　彼女は、それから、さびしくなつかしさうに、鈴へ云つた。

『若さま、私を殘して一人でお歸りになるあなたのお心持は―私ほんたうにお察しいたします。けれど若さま、もうこれからは私のことはすつかりお忘れになつて、十分御勉強を

遊ばして下さいまし、そしてずいぶんお體をたいせつにね……
……』

芙蓉のように勁烈な、最初の彼女の姿は、もうここでは全く見ることができなかつた。そして秋雨にうなたれる楊柳のやうなさびしい愁があつた。鈴は、ら必ず再會の日を待てと云つて泣き入る彼女を慰めてやつた。

『僕はきつとこれから勉强して文科に及第したら、必らずお前を京城から迎へに來る。だから當分のあいださびしいのを堪へてゐてくれ』

鈴はかう云つて、懷から鏡をとりだした。

『僕の淸い心は、この鏡と少しも違ひはない。千萬年を經ても決して濁らないから、これをお前へ渡しておく。僕だと思つてもつてゐなさい』

すると、春香も、涙を袖に押へながら、指に嵌めてゐた玉の指環をぬいた。

『あなた、それではこれを私の魂だと思つて持つてゐて下さいまし、玉は固くて潔いものです。私の貞節がこの玉の中にこめてありますわ。また環は、首尾の切れないものですからあなたと未來のお約束に、どうぞ忘れないでお肌につけてゐらして下さいまし』

そして春香は、鈴の膝に、頰をつけて泣いた。母の月梅も瞼を紅くして、鈴に云つた。彼女は、自分の娘の決心の固いのを見て、もうすつかりあきらめてしまつたのである。

『では、若さま。どうぞおからだをお大事に遊ばして、當分は春香のことを思ひ切つて熱心に御勉强遊ばして下さいまし。そして一日も早く文科試驗に及第して娘をつれて行つてやつて下さいまし。そればかりが、この老人のお願ひでございます……』

彼女は、かう云ひ終ると、新しく別離の涙を絞つた。傍らには、女中の香丹もゐた。彼女も、やさしく貰ひ泣きをしてゐた。

家の表に、待ちあぐんでゐた房子は、とうたうしびれを切らせて、鈴を促した。彼は、纏綿としてつきない情緖をのこして、漸く、門へ出た。

春香は、母と香丹にたすけられて、門に佇んで鈴を送つた。鈴は、みんなに最後の言葉を殘して、なごり惜しげに別れて行つた。春香は、あわただしく自分の部屋へは入るとそれなりで、突伏して泣き入つた。母や、香丹は、彼女の背を撫でて、やつぱり涙に咽んだ。

## (四) 生離縁

一

父の李翰林は、鈴と春香の、密のやうな戀なかを知つてゐた。が、今直ちに二人を會はすことは、鈴の學文のために惡いと考へた。それで、彼は京城へ歸つてから、春香のもとへ、白米や、衣類などをひそかに送つて慰めてやつた。そして將來を待てと申送つた。

　李翰林の後任には、卞學道と云ふ兩班が京城から赴任して來た。その門閥や、位地は、決して翰林には劣らなかつた。が彼はその頃の兩班にありがちな酒色の痴者であつた。

　ある日、――それは彼が赴任する丁度前の日、卞學道は、吏房を呼んで、にやにやとほゝ笑みながらきいた。

『どうぢや吏房、きけば俺の行く南原郡は却々美人が多いと云ふさうぢやが、それはほんとうかな』

　そこで吏房は、恭しく答へた。

『さようでございます。この南原郡は、天下の勝地と申しますやうに、また美人も却々澤山生れております』

『なるほど、すると俺は非常に好い土地に任ぜられたものぢやな。ではそこでゆつくり樂しむことにしやう。時に南原郡の春香と云ふ有名な美人はやつぱり今でもゐるんぢやらうな』

『はい、南原郡の春香と申すものは、八道にも聞えた有名な美人でございますが、只今もやつぱりをりますでございます』

『さうか、それはなによりのことぢや。ついては、その南原郡までは、何里ほどあるかな』

『さあ、まあ六里あまりもございませうね』

『あゝさうかい、そんなに近ければ、明朝馬を仕立てて行けば、晝までには着くだらう。今夜のうちに、萬事の準備をしておけ』

『かしこまりましてございます……』

　吏房は、それから早速廐に行つて、明日の用意を、馬丁たちに命じた。

　その夜、卞學道は、南原美人を夢みながら、酒宴に更かした。

二

　卞學道は、美しく飾られた馬に跨つて、多くの從者に衛られながら、威容堂々と赴任の途についた。

　南原郡では、新しい府使が赴任すると云ふので、郡民は、

音樂を奏して華やかに圓舞してゐた。沿道の老若男女は、鼓腹撃壌して、輝かしい良千石を迎へつゝあつた。

卞府使は、そのありさまを見ると、得意滿面であつた。彼は、すぐ使令をよんで、かうきいた。

『おい、あすこに澤山の女たちが集つて俺を出迎へてゐるが、あれはみんな妓生かね』

使令は、府使の非常識な問ひに眉をひそめた。が、位に叩ることの上手な使令は、早速答へた。

『はい、さようで――あれはみんな妓生でございます』

すると、府使は溶けいりさうな滿悦の笑みを泛べて、手にしてゐる扇子をぽんと叩いた。

『うむ、さうかい、あの大勢の女たちが、みんな妓生だとは見事なものだ。さすが南原は美人の產地だけに、却々美しいのがゐるわい』

彼は、瞼を細くして、とろりとしながらながめてゐたが、また云つた。

『實は、俺は日頃から、かうした妓生の澤山ゐるところへ赴任したいと望んでゐたのだ。今日こそその望みが通つたわけだ』

彼は、春風春雨一時に來ると云つたやうな顔をして、下役人の出迎へを受けながら、郡衙の門を入つた。

その夜は、卞府使は、旅の疲れを休めるために、酒宴を開いた。そして事なく眠りについた。

彼は、三日目に、郡衙の政務を一覧した。それがすむと、早速、郡内の妓生にたいして、點呼をすると命を下した。

## 三

戸房は、府使の命によつて、妓生を郡衙に集めた。新しい府使の前に、彼女たちは檢閲を受けるのであつた。

紅紫黄綠、彩りのあざやかな裳を曳いて、いかめしい郡衙に伺候した。郡衙の控室は、花園のやうに美しかつた。

卞府使は、大卓子の前に、悠然と座を構へて、長髯を撫してゐた。戸房は、妓生名簿を前に置いて、一々、その中から名をよんだ。

翠香と云ふのがあつた。錦香と云ふのがあつた。蘭香と云ふのがあつた。月香と云ふのがあつた。その香の字が聽える度毎に、府使は耳をそば立てた。眼を瞠つた。が、彼のために不幸なことには、春香と云ふ名は、遂に聽えなかつた。

名を呼ばれた妓生たちは、府使の前に、つゝましやかにまかり出た。そして滿面に媚を作つて、あどけなく禮をした。が、府使の心は、はなはだたのしまなかつた。

『おい戸房、また春香は出ないか、南原には春香と云ふ有名な妓生がゐると云ふではないか』

府使はしびれを切らせてきいた。

『はい春香と云ふ女はをりますが、あれは妓生ではありません。立派な淑女でございます。』

『なに立派な淑女ぢや。そんな筈はない。春香と云ふのは妓生ぢやと云ふことをきいてゐたぞ』

『いえ、さうではございません。あの女の母は月梅と云ふ妓生でございますが、あの女は決して妓生ではありません。ですから妓生の名簿には載つてゐないのです』

『それは怪しからんぢやないか、南原の花とまで謳はれてゐる美人を妓生にしないと云ふ法はない。それに妓生の娘なら妓生にするのが當然だ。すぐ春香を妓生にして名簿に載せろ、そして急いで伺候するやうに命ずる』

戸房は、この驚くべき命令に、さすがに呆れてしまつた。

『令監、あの春香には、契つた夫があるのでございます。あの女は、前府使李鈴と約束があるのでございます』

『すると、春香は、鈴がつれて行つたのか』

『いえ、つれては行きませんが、鈴と別れてからは、戸外へも出ず、化粧もせずに、ずつと家に引籠つてをります』

『構はん、俺が呼ぶからすぐ來いと命令しろ』

府使は、他の多くの妓生たちに眼もくれずに、かう言ひつけて、さつさと自分の室に去つてしまつた。戸房は、當惑げな顔をして、しばらく考へてゐたが、妓生の取締をする行首妓生を呼んで、相談した。そこで、行首妓生は、春香の家へ、使に立つた。

## 四

春香は、遣瀬ない、憂欝な日を送つてゐた。思は、千里に飛んで、郎君の上に在つた。寂々無人、中門を閉ぢて、落花、庭に布く月明るい夜、ひとり紗窓にもたれて、吐息をつけば、曉の鷄の聲さへ聽くことも屢であつた。

弱水の三千里、青鳥よ、お前はどうして渡つて來たのか。戀しい郎君のたよりを、お前はきつと知つてゐやうに——春香は習ひおぼえた歌を口ずさむ時もあつた。

行首妓生は、さびしい春香の室に訪づれた。そして彼女に、府使の命を傳へた。と、春香は、悩ましげに眉をひそめながら、答へた。

『府使さまのお召ならば、何を措いても參らねばならないのですが、私は妓生ではないのですから、たとひどなたのお言葉でも從ふことはできかねます。それに、この頃は少しも氣

分がすぐれないのですから……』

行首妓生は、それを無理にすゝめるわけにはゆかなかつた。で、彼女は郡衙へ引返して、その旨、府使へ復命した。

卞府使は、それをきくと、邪僧のやうに冷酷な眦を裂いて、憤怒した。そして使令と軍奴とに、急いで春香を逮捕せよと命令した。かれらは、命を奉じて、春香の家を襲つた。

春香は、涙に泣き濡れた手紙を讀んでゐた。京城の李鈴から屆いたものであつた。

――懐しい春香よ。

千里相別れて、私は思ふこののみ滋き日を送つてゐる。お前は、母の膝下で、毎日、無事で暮してゐるだらうと思ふ。私も、家族たちと共に、幸福に暮してゐるから、どうか安心して下さい。

懐しい春香よ、お前の心は、私が知つてゐる。そして私の心は、お前は知つてゐてくれる筈だ。だから、私は今更らなにも云ふ必要はないとも思ふが、しかし、春香よ。貞節の貞と、操守の守の二文字は、どうか忘れないでゐて下さい。ほんとうに一刻も忘れないでゐて下さい。

懐しき春香よ、私は、遠からずお前と再會の機のあることを信ずる。

お前はそれを信じて、安心して待つてゐて下さい。

……………

綿々としてつきない戀人の手紙を、春香は、幾度もくり返して讀んでゐた。と、そこへ、使令と軍奴は、つかつかとは入つて來た。が、春香は、その姿を見ても、少しも驚かなかつた。彼女は、立ちあがつて、かれらを座敷へ通した。そして、母と共に、酒肴の用意をした。

『さあ、どうぞ召しあがつて下さいまし。ほんたうになにもございませんけれど』

それを見て、使令は云つた。

『いや、それはどうもありがたい。しかし、今日實はわたしたちはね、府使の命令でここへ來たのです。が、今あなたが府使の慾に從つて行つてしまつたら、あなたが李鈴さんに立ててゐる貞節は水の泡になります。だから、わたしたちはこの儘歸つて、府使をうまく欺して無事に濟ませてあげるから、まあ安心なさい。』

俗吏根性の、袖の下を貰ふ下心から春香にたいして、陰險な迎合をした。それをきいた春香は、さすがにうれしかつた。そしてほつと安堵の吐息をしながら、云つた。

『それはどうもありがたうぞんじます。どうか何分よろしくお願いいたします』

そして、かれらに、三兩づつを握らせた。

使令と軍奴は、美人の酌で、したたかに酒を振舞はれて、その上に、思つたよりも饒かな役徳があつた。かれらは、醉步蹣跚として、謠をうたひながら、郡衙に歸つた。

二人の姿をながめた卞府使は、眞赤になつて憤つた。

『ばかものめ、きさまたちは、春香をどうした。役目も果さないで、酒に醉つ拂ふとはなにごとぢや』

『へい、へい、どうも恐れ入ります。實は、春香の奴、病氣のために來られないと申すのでございます』

と一人が云つた。

『その辯令監手前どもには酒を飲ませまして、金三兩もくれたものでございますから、とうたうつれて來られなかつたのでございます。』

と他のものが云つた。

『なんでしたら令監、春香の代りに手前の母をつれてまゐりませうか、手前の母は、實に春香なぞより、づつと美人でござりますぞ』

と、また前のが云つた。

『なんぢや、お前の母があの春香より美しいと申すか』

卞府使は、眼を瞠つた。

『へい、へい、それはそれは美しいところぢやございません。』

『うむ、お前の母でも春香より美しければ差支へはないが、一たい齡はいくつぢや』

『へい、齡は今年で僅か八十五歳で……』

『ば、ばかつめ、なにを世迷言を云ふか、さあ、これからすぐ春香をつれて來い、來なければ春香もろとも、きさまたちも一緒に打ち殺してしまうぞ』

卞府使は、烈火の如く憤つた。二人は、酒の醉もさめて、縮みあがりながら、再び、春香の家にかけつけた。

## 五

銀瓶に水を傾けて、玉の頰を修め、金爐に香を焚いて、郎君を待つた宵もあつた。が、今の春香は、蛾眉を粧ふ心もない彼女は、衣服も改めずに、郡衙に行つた。

卞府使は、春香の淸冽な姿を見ると、恍惚として云つた。

『お前が春香と云ふのか、なるほど、美人ぢや、わしは氣に入つたぞ』

が、春香は、その府使のありがたい言葉にたいして、石の

やうに冷たく默つてゐた。

『しかしお前は、李鈴と言ひ交してあるさうぢやね、いや、若いものは氣が變り易い、やつぱり年寄りの方が安心して可愛がつて貰へるぞ。どうぢや、今日からお前は、わしの妾になれ、な、えゝぢやらう……』

『いゝえ』

と、春香は、斷琴の絃のやうに云ひ切つた。

『私は、妓生の母は持つてをりますが、私は妓生でもなければ、また妓生の名簿に名を列ねたこともございません。只今お仰せのやうに、私には李鈴さまと云ふ夫がございます。私はいつまでも李鈴さまと同棲する日を待つてをります。たとひあの方がお忘れになりましても、私は班婕妤の心を學んで、決して貞操を破らない覺悟をしてをります。お言葉に背きましては恐れ多くぞんじますが、それぱかりはどうぞ御免下さいまし』

春香の答へには、千鈞の重さがあつた。

『なにを生意氣なことを云ふ。お前がどうあつても俺の言葉に從はねば、きつときびしい仕置をするが、それでも厭か』

卞府使は、權威を笠に着て、野獸の如く猛りたてた。が、春香は、毅然として動かなかつた。彼女は、燃えるやうな朱唇から、熾烈な言葉で云つた。

『あなたは兩班の御身分ではございませんか、兩班には禮儀があります。婦人の貞操を破らうとなさるのは、無禮の極です。ましてあなたは萬民を治むる父母の地位にある方ではございませんかそれに人倫を蹂躙なさらうとはなにごとでございます』

春香の鋭い非難は、卞府使の肺腑を突いた。そして彼を逆上せしめた。

『おい、使令、こやつを笞打て』

その命令で、使令は、春香の腕をぐゐと掴んだ。が、彼女の神々は自若としてゐた。

春香は、庭につれ出された。そしてそこの刑臺の上に坐らせられた。彼女の嬌やかな軀には、黑蛇のやうな戒具が嵌められた。が、彼女の姿は、霜を衝いて咲く白菊の花のやうに神々しかつた。

卞府使は、自ら春香の罪狀を書いた判決文を持つて、彼女の前に現はれた。

其方儀

元來、身分卑賤なるにも不拘、貞操などと稱して官長の命

に從はざるは不屆至極にして、その罪、正に死に當る、依つて棍杖にて打ち殺す者也。

卞府使は、その餘白に、春香の署名を求めた。彼女は、惡びれもせずに、署名した。

卞府使は、その刑の執行を、使令に命じた。

使令は、用意の棍杖をもつて、疾風のやうに、春香の細腰を打つた。と、棍杖は、二つにぽきりと折れた。そして一端は、唸りを生じて、空に舞ひあがつて落ちた。が、春香は、靜かに瞑目して、笞刑を受けた。

新しい杖が持ち運ばれた。二杖、三杖、四杖、五杖、六杖――彼女の、胡蝶のやうな體は、今にも粉碎されるように見えた。そして白絹袖の衣服の表には、落花のやうに鮮血が滲み流れた。が、彼女の心は、美しい戀愛の殉教者として、高いほこりに燃えてゐた。

『おい、春香、きさまは大典通編を知つてゐるか』

卞府使は、あくまでも屈しない春香にたいして、獰々しい憎惡にいらだちながら、突然きいた。

『いゝえ、存じません』

春香の聲は、まだ強い生命の力に張り切つてゐた。

『うむ、知らんぢやらう。では聽け春香、大典通編には、かう認められてある。凡そ官長に逆らつたものの罪は、懲治の上定配すべし。――どうぢや春香、お前は俺の命に從はねば、殺されても悔むことはならんぞ』

『では……』

と、春香は、苦しい息の下から叫んだ。

『……大典通編には、夫ある人の妻を辱かしめんとするものの罪は、なんと認められてありますか』

卞府使は、またも強い一擊に會つた。彼は默したる魔王のやうに彼女の前に突立つた。そして、使令を叱咤して彼女を笞たしめた。

棍杖の數は三十を越した。彼女の玉肌は血に塗れて爛裂した。流血は、糊の如く刑臺を衂らした。が、春香は、意中の人のために死ぬことを悦ぶやうであつた。血を含むだ彼女の唇には、殉教者のやうに晴やかなほゝ笑みが靜かに泛んでゐた。………

（未完）

# 燕岳の上

島木赤彦

山のうへの岩に簇りてさく花の紫深し露寒みかも

昨の夜は白雲深くゐたるらしお花畑の露しとどなり

天降りたる娘らと思はねど雲のうへのお花畑にあやに遊べり

現身の人にしあれば天なるやお花畑を踏みて惜しむも

高山の栂の木立は皆低し肩に觸りつつ麻蘿さがれり

山の上の栂の木肌は粗々し眼にしみて暁けそめにけり

山にゐる我の心は幽かなり笹の葉の露に咽喉をうるほす

笹の葉に口うち觸りて露は吸ふ我や幽けし生けるものにて

山の上にわれの心や醒めぬらし笹の葉の露をうちすすりつつ

雲の海沈もりて遠き山浮べりはてしも知らに心向ふも

わが心遙に寂しも天なるや日を浮べたる雲の海の原

高山の谷あひ深くいづる湯に眼つむりて我は浸れり

# 自分を觀る

久保田万太郎

## かれ

かれは強情つぱりである。そのくせ、かれは、いくぢなしである。すぐ人情にからむのである。――強情つぱりのところはかれの父ゆづりであり、いくぢなしのところはかれの母ゆづりである。

子供の時分、かれは、甚だ氣が小さかつた。始終くよ〱ばかりしてゐた。――どんな場合でも、かれは、まつすぐ顔を上げて往來をあるくことが出來なかつた。

そのくせかれは癇癪もちだつた。ときあつて埒を越えると、(勿論、自分からかれには越えられない。先方から、いつも、越えることを餘儀なくされたのである。)どんな強い相手でもかまはず向方見に、かれは武者ぶりついて行つた。喧嘩したあとにかぎつて、かれは、あたまの中のはつきり澄みつくすのを感じた。――まつすぐ顔を上げてかれはどこでもあるくことが出來た。

子供の時分とばかりいはない。十年まへ。――すくなくも二十六七の時分までかれはさうだつた。

いけなかつたのは、かれの、子供の時分のことにして、年をとるにしたがひ、癇癪を起す機會を自分からだん〱すくなく持つやうになつたことである。――すなはち頭をはつきりさせる機會をそれだけすくなく持つやうになつたことであ

る。

そのころ、かれの、ぐうたらで、ふんぎりのつかつた所以である。

氣の小さいかれは、つねに、綺麗に取澄してばかり暮したいと思つた。ために、かれは、出來るだけかたちの上で自分を大切にかけた。たゞ〳〵自分を損ふまい——損はれまいとばかりした。

かれは手も足も出なくなつた。——だん〳〵疲れて行く、疲れて因循して行く、因循していよ〳〵臆病になつて行くかれを、間もなく、かれ自身み出した。

損ふまいとした、めにかれは損はれた。

そこで、かれは、いまゝでの逆に出ることを決心した。あるまゝにたゞあらしめよ、おもむくまゝにたゞ趣かしめよ——さう思つて、かれは、かかるがまゝのかれ自身をかれのまへに投出した。

癇癪がまたかれに返つて來た。

かれの我情とかれのいくぢのなさと。——どつちが生きてどつちが死ぬだらうかは、このゝち、かれが、どうよく運命づけられる、どう惡く運命づけられるかによつてきまる話である。

かれは、まだ、三十六である。

# 無信條に生きる

辻　潤

自分と云ふ人間がこの世の中に存在してゐること——それが唖でも、聾でも、片眼でも白痴でも、各自の存在理由をなん等かの形で主張してゐるのではあるまいか？

生きることは彼自身を主張することなのだ。たとへ街頭で自己の主義思想を大聲に叱呼しないまでも、默々として腹の底に彼自身の優越感を何等かの形で承認しない人間があるだらうか？

寧ろ無邪氣にさらけ出せ！——代議士の如く、勞働運動者の如く、勇敢に無邪氣にさらけ出せ！——偉大なるドラック音松をして我々の最大なる模範的人物たらしめよ。

ダダは酒と女と誇大廣告とを愛する人間——と宣言の大嫌ひなトリストラン・ツアラアグムつてゐるではないか？

自分はなによりも主張することがきらひなのである、——さう私はいつでも主張することに躊躇しないであらう。

親愛なるマキシム・ゴルキーはまだ生きてゐるのだらうか——一體今頃、彼はなにをしてゐるのであらうか？——彼の如き人物も遂にボルセビイキに入れられぬ程に不德なのであらうか？私はひそかに彼の心の平和と健康とを祈つてゐる。

マカアル・チユウドラと云ふのは彼の作品に出てくる老ジプシイの名前である。

老ジプシイのマカアル・チユウドラは冷たい風に外套をひろげブロンズのやうな毛むくじやらの胸をはだけながら思ふさま風に吹かれて泰然と、大きなパイプから濃い煙りを輪に吹かせて寢ころびながら死のやうに沈默したステツプの闇の底からドツシリしたバスで僕に話しかけるのだ。——

——あなたはわしにどんな風に渡つて歩るくと御訊ねになる——なる程如何にも御尤も——あなたも割のいいことを御擇みさ、渡つて歩いて、それから見る、見飽きたら寢て、それから死ぬばかりでさあ！

それだけのことでさあ！

生活？　他人樣のことですかな？——そんなものがあなたになんの用がありますかな？　あなた自身が生活ぢやありませんか？　他人樣はあなたがゐなくツても生きてゐる、あなたがゐないでも生活してゐる、あなたは自分が誰かになくてはならない人間だとても御考へですか？　あなたはパンでもなく杖でもない、——さうでせう、だから誰れにだつて御用はない筈さ。

學問だの敎育だのとおつしやる、が、あなたにきくが、そんなもので人を幸福にすることを會得することが出來ますかな？　そりやあ勿論、出來ない相談でせう、まあ頭が白くな

つてからでもそんなことは口にするがいいのです。なにを數へる？　誰れだつて自分になくてならないもの位は知つてまさあ、あり合せのものを自分のものにするのは利巧の方で、なにも受け入れない奴は少しボンクラですが、まづ誰れもかれも自分で學問します

　世間の奴等ときちや、まつたく笑はせやがらあ――ちつぼけな地塊になつてウロ〱と押し合ひへし合ひしてゐる、なんの爲めに？　誰れの爲めに？　誰れも知つちやゐねい、人の耕やす樣子を見なさるがいい、人間は汗みどろになつて自分の力を地に流し込む、それからその中に埋もれて朽ちてしまふ、自分の仕事の結果も碌々見ずにみんな死んでゆく、生れた時のやうに馬鹿になつてね。

　そんなら地を掘るために生れ、自分の墓穴を掘るひまもなく死ぬ爲めに生れてきたのだとおつしやるか？――人間になんて自分の運命が解つて耐まるものですか？　ステツプの廣さが、ステツプのウネリの囁やきがか――フン！　人間はどの道奴隷ですわ、オギアと生れたら最後、一生奴隷ですわ、それで萬事ケリがつきますよ、少しばかり利巧になるともう首縊りさ。――ところで、わしはこの五十年の間に……見て歩るきましたわい、わしがどんなところに足を踏み入れなかつたか？――そんなことは一々御話は出來ませんがな――またわしがどんなところをうろついて歩いたか？――世渡りと云ふ奴はかうして行かなけりやならないものだ、傍眼もふらずに、ドシ〱行け、行け！――それつきりです、一つところに永く立ちどまつてゐてはいけない、ちつとも得のゆくことありませんや、それ夜も晝もいつでも追ツかけツこをしてゐるでせう、浮世ぢや、だからあんたも生活なんてことに頭を突ツこみなさるな、生活に愛想をつかさぬやうにな、一度考へ始めたら、もうお仕舞ひさ、生きてゐるのが厭にならない人間がゐるでせうか？――こりやいつでもきまつた話で、わしだとて御多分に洩れる筈はありやしませんや、まツたくね――

　自分はなんにも主張することがないので、思はず――チユウドラ爺さんの文句を並べてみたのだが、私の生活信條もこの爺さんの説教に盡きてゐると思つてもらへばまちがひないだらう、實に端的にキビ〱とやりつけてゐるのではないか？

　序だから、僕のノートの端しくれに記されてゐる言葉を紹介しよう。

楊子の曰く、――と云ふのだが、果してそんな人間が云つたのかどうかは問題ぢやない。支那では古人我を欺かず、――と、なんでも昔の人間が云つたとさへ云へば間違ひがないと心得てゐるのだ。――

古の人言へるより、吾寄て之を識れり、將に以て汝に告んとす、然る所以を知らずして然るは命なり、今や昏々時々紛々若々として爲す所に隨ふて爲ざる所に隨ふ、日に去り、日に來る、孰れか能く其故を知らん、皆命なり、夫れ命を信ずる者は是非なし、理を信ずる者は是非なし、心を信ずる者は逆順なし、性を信ずる者は安危なし、則ち之を却て信ずる所なし、却て信ぜざる所なしと云ふ眞なり、慤なり、奚を去り、奚を就く、奚を哀み、奚を樂しみ、奚を爲し、奚を爲さざらんや――

すべてこの調子で自己を主張して生きてゆきたいと云ふのが僕のダダの信條だが、他のダダの連中がどんな信條によつて生きてようと死のうと、僕の預かり知つたことではないのだ。

人は彼のなることの出來る者になる。生れながらの詩人でも色々な不利な事情に妨げられて彼の時代の最高水準に立つことが出來ないやうなことがあるかも知れない。偉い詩人になり、完璧な藝術品を生み出すに缺くべからざる勉强をする機會を得ない場合があるかも知れない。しかし、兎に角彼はたとへワイマアの宮廷で生活するにしても、或は一人の百姓にしても詩を作るであらう。

哀れぬむべき諸君は、若し諸君の意のまゝに跳ねてゐるなら幸福に生活が出來るかも知れないのに、諸君は學校の先生や、熊香具師の笛につれて諸君自身に役にも立たない藝をやらせられるのである。

――似非文明と、誤まつた教養と、腐つた社會主義と、石頭の官僚と、他國民をいぢめる侵略主義者と、――こんな奴等に反抗せよ、そんな奴等をみんな征服しちまへ！――と未來派が叫んでゐる。未來派も時々馬鹿には出來ない、とダダが考へる。

自分の書く物が藝術だか、自分が藝術家なのだか、そんなことに毫も自分は頓着しない。自分は唯だ自分の生地をむき出しに表現するだけだ。生きることは表現することで同時に主張することだ。――自分は文字によつて自分を表現する時に、特に自分を表現してゐるのではない。自分の生活全部が自分自身なのだ。――自分は自分の力の浪費者だ。自分がそれを悉く使ひ果した時に、私はこの世を失敬するばかり

だ。それ以外に私はなん等の自己主張をも宣言しないであらう。（一九二四、八）

# 自分を買ひかぶつては居ない積り

堺利彦

『反省』とか『自省』とかいふ言葉が昔からある。それを今樣に云つたのが『自己批評』である。『かへりみる』と云ふよりは、『批評』すると云ふ方が、強く聞える。既に批評と云ふ以上、解剖もあり、分析もあり、攻擊もあり、追究もあり、罵倒もあり、嘲笑もあり、鞭韃もあり得るわけだ。

然し、自己批評は兎かく自己辯護にありたがる。攻擊、追究、罵倒、嘲笑、鞭韃等の形式を取る時ですら、實質上（若しくは効果上）には、それが矢張り自己辯護である場合もある。

他人の『自己批評』を讀む人は、先づたつぷりと眉に唾をつけてかゝる事だ。然し私は、自己批評をする人達が、意識しながら自己辯護をやると云ふのでは勿論ない。否、その反對に、無意識の自己辯護が殊に有害だと考へるのである。

扨、こんな風に云ひだして見ると、自己批評など迚もやれないわけになる。然し折角の問題に對して、何も云ひ得ないでは餘り卑怯だとも考へる。そこで何か少しばかり云つて見る。

私は誠に意志の弱い男である。それかと思ふと、場合に依つては、存外強さうに見える事がある。自分でも、少しは強いのか知らんと自惚れる時もある。然し直ぐに又、反對の事實が現はれて、反對の結論に到達する。

私は誠に憶病な男である。それかと思ふと、場合に依つては、存外平氣で危險に對面する事がある。自分でも、滿更ら憶病でもないのかなと自惚れる時もある。然し直ぐに又、反

對の事實が現はれて、反對の結論に到達する。

私は親切な温厚な人だと云はれる事がある。自分でも全くそう思はないではない。然るに私は又、皮肉な意地惡だと云はれる事がある。自分でも、成るほどそうかなアと考へないではない。

私は冷靜な人、センチメンタルでない人だと云はれる事がある。自分でも、可なりそうだと考へてゐる。所が、芝居を見てポロ〱涙をこぼしたり、ムカ〱とした腹立ちまぎれに深くも思はぬ事を云つてしまつたりする所は、其の反對の樣にも考へられる。

私は可なり正直な人間だと自ら信じてゐる。然し正直ばかりで今の世の中が渡つて行かれない事は明らかである。私はずゐぶん平氣で不正直な事をやつてゐる。

最後に、私は實質以上に自分を買ひかぶつてはゐない積りである。それだけは確かだと信じてゐる。尤も、或點について變な自惚がないとも限らないが、其の代り一方には、ずゐぶん安く自分を踏み倒してゐる點もあると思ふ。そこでそれらの諸點を差引して、自分といふ者を總括して考へた時、決して買ひかぶりはない積りである。然しそれも精密に計算する方法がないのだから、いよ〱の所は何とも云はれない。

どうです諸君、これでも『無意識の自己辯護』が混入してゐるでせうか。

山本有三著

# 嬰兒殺し

定價貳圓
送料十七錢

## 第七版

天才戯曲家として一作を出すことに讀者の血を躍らし、そしてその核心をシカと把握して離さないのは山本氏の戯曲である。氏の人生へ對する愛着、舞臺に對する細緻の觀察は篇中の何人をも躍らし泣かさずにはおかない、此書に收められたる五篇の總てが、均しく東都で歡迎せられそして舞臺の上では幾萬の人を泣かしめた傑作のみであることは呶々するまでもない、「嬰兒殺し」の含蓄多き殺人婦に對する熱情、「坂崎出羽守」「津村教授」「生命の冠」に用ひられた忍從の辛さと困難にはいかなる男兒でも涙ならでは讀むことができまい。（本書は山本有三戯曲集の改題せしものです。）

内容

津村教授
嬰兒殺し
生命の冠
女親
坂崎出羽守

發行所
東京市芝區愛宕下町一ノ一
振替東京八四〇二番
改造社



純ゴム製
附器容鑵
帶經月

# ビクトリヤ

到る處の藥店小間物店にあり



彼れこれと美点をあげる迄もなく最も優れた月經帶‥‥‥‥‥‥とは勿論ビクトリヤよ‥‥‥‥と『菊花咲く日の本の新しく美しき女性』は誰方もお言ひになります。

定價
一號品（純ゴム製）金五十五錢
二號品（保溫腰衣附）金七十錢
送料 金十二錢

直接發賣元へ御注文の節は滿四十五錢添へ前金に願ます◎代金引換は送料二十四錢切手御前送下さい

發賣元 大和ゴム製作所

東京向島寺島町（曳舟驛前）
電話墨田四 二一〇三三 一〇三四
振替東京一三〇〇二番
（新設）穴手二九五七

文藝講座

（第四回）

# 小說作法講話

森田草平

## （三）人生の眞實と道德

### 附　作者の體驗と材料

小說の目的は人生の眞實をあらはすにありとして、それに關聯してすぐに想ひ起されるのは、では、人生の眞實と道德との關係は何うなつてゐるかと云ふことである。汎く云へば、文藝と道德との關係である。この問題は古來非常に喧ましく論議せられたもので、しかもまだ學者の間に確たる解決を見ない。その人に依つて、その所見を異にする。殊にそれが實際行政上の問題と關係があるために、一層面倒である。發賣禁止や上演禁止、乃至美術の方面では展覽禁止と云つたやうな紛議は、皆この問題に關係があると云はなければならない。と云つて、私はこゝにその問題に最後の決定を與へるやうな抱負がある譯でも何でもない。たゞ私も作家として日夕筆に親しむ身である以上、自分一個としては、何等かそこに落ち着くだけの據所がなければならない。それに就いて、極めて簡單に述べさせて貰ひたいと云ふに止まる。

私がこの講話の藍本としてゐるクレイトン・ハミルトン氏は、かう云つてゐられる。曰く、或作品が道德的であるか反道德的であるかは、それが人生の眞實をあらはしてゐるか否かに依つて決定すると。即ち人生の眞實さへあらはして居れば、決してその作品は不道德ではあり得ないと云ふのである。これは隨分思ひ切つた云ひ分である。これだけを取つて見れば、殆ど自然主義の主張よりも烈しいと云はなければならない。自然主義は人生ありの儘の眞實をあらはすのを目的として、その結果が道德的であるか反道德的であるかは自分

遂の關知する所でないと云ふに止まる。ハミルトン氏の主張は確にそれ以上である。が、氏はすぐその後から條件を持ち出して曰く、作品の道德性といふものは決してその中に取扱はれてゐる材料の如何に據るものではない。アルフォンソ・ドオデエの「サッフォー」は隨分如何はしい性格の如何はしい行爲ばかりを描いたものだが、それだからと云つて、あの作を反道德的だと云ふのは間違つてゐる。世の中に不道德的な小說の材料といふものはあるものでない。作品の倫理的判斷の基礎となるものは、その材料の取扱ひ方にあるのであつて、決して材料其者にあるのではないと。或作品が道德的であるか否かは、その中に取扱はれてゐる材料に據らず、その材料の取扱ひ方如何にあると云ふ意見は、ひとりハミルトン氏から聞くばかりでなく、多くの知識階級の人々、特に作家に同情があつて、しかもその人自ら創作に經驗のない人々から聞く意見である。常識的で、極めて思ひ遣りのある意見ではあるが、同時にやゝ曖昧であることを免れない。一體、取扱ひ方とは何うすることなのか。それを押し詰めて行くと、ハミルトン氏の意見は、作家たるものは宜しく作の全體に亘つて各人物の關係を健全な曇らない眼で見てゐて、善人は善人、惡人は惡人としてあらはせと云ふことになるらしい。が、それでは何うやら一種の勸善懲惡小說になりはせぬか。尤も、本來の勸善懲惡小說なるものは、單に善人は善人、惡人は惡人としてあらはすばかりでなく、筋にまで干涉して、善人善果、惡人惡果を得るやうにするものであるから、人生の眞實は眞實として表はして、たゞそれに作者の各人物に對する意見を附加しただけでは、まだ純然たる勸善懲惡主義の小說とは云はれない。が、それにしても、自然主義の主張は作者の意見を添へることを頭から排斥してかゝるものである。では、ハミルトン氏の意見は自然主義の主張とは到頭相容れないものであらうか。

で、二たび小說創作の三段階に立ち歸つて考へて見る。第一段に科學者の眼で人生の眞實を捕へ、第二段に哲學的考察に依つてそれを評價した上、第三段に及んで始めてそれを藝術的に表現すると云ふ段取りは、自然派の作家と雖も破ることの出來ない鐵則である。たゞ彼等は第二段の哲學的考察を加へる場合に、作者の主觀を極めて偏狹な、永久性のないものと見て、捕へ來つた人生の眞實に何等の評價を加へることを欲しない、たゞ事實を事實として、その儘表現しようとする。が、一方から云へば、それは何等の評價をも加へないと云ふ評價を加へてゐるのである。それに反して、ハミルトン

氏の意見は、それに作者としての哲學的評價を加へようと云ふのである。哲學的評價を加へる以上、或場合には、それが善人を推奬し、惡人を貶黜するやうな、所謂勸善懲惡主義に陷ることもあらう。何となれば勸善懲惡主義も一つの哲學的見解に相違ないから。が、さう云ふ缺點は、作者の人生觀、宇宙觀をひろく大きくすることに依つて、いくらでも免れ得られる。そして、だん／＼ひろく大きくして行つた究極が、自然主義の主張と同じやうに、何等の評價をも加へないことになるんだとも云はれよう。つまり自然派の主張も、ハミルトン氏の意見も、たゞ程度の差があるばかりで、結局同じものだと見れば見られないこともあるまい。

たゞ問題は、人生の眞實をありの儘に表はして、それに何等の評價をも加へなかつたら、果して反道德的であり得ないか何うかと云ふ點である。どうも之は絕體にあり得ないとは云はれないやうだ。例へば、モオパッサンの短篇小說にかう云ふのがある。數名の浮浪人の群が飢ゑに勞れながら田舍の村を歩いてゐた。が、或物持ちの家でお齋にあり着いて、鱈腹飲んだり喰つたりした。で、腹が一杯になると、今度は野原へ來て、盛に放歌高誦してゐたが、恰度そこへ一人の少女が通りかゝつたので、それを捕まへて輪姦してしまつた。これだけの話である。成程、人間といふものは、饑餓に迫つてゐる間は食慾の外に何物をも考へないが、それが充されると、今度は他の慾を想ふ。さう云つた人間の暗い方面を描破した點に於て、確にこの作は人生の眞實を表はしてゐると云はなければならない。が、これだけで、この作は果して反道德的でないと云はれようか。ハミルトン氏が「世の中に不道德的な小說の材料と云ふものはあるものでない」と云はれたのは、決して文字通りに取つてはならない。或作が反道德的であるか否かは、作者のその材料に對する態度に據るので、作者の評價さへ誤つてゐなかつたら、何んな材料を取扱つても構はないと云ふ位の意味に取るべきである。

では、人生の眞實を表はして、反道德に陷らないためにはどうしても作者の誤らない評價を添へなければならないか、人生の眞實をありの儘に表はして、何等の評價も添へなかつたら、その作を反道德的だと云はれても仕方がないものか。文藝と道德との關係に於ては、これが一番肝要な點である。そして、この點に就いては、夏目先生が「文藝の哲學的基礎」の中で述べられた說が最も妥當にして且要領を得てゐると信ずるから、その概略を紹介して置きたい。

要點だけを擧げれば、先生は心の作用即ち智情意と感覺と

に就いて、それ〲一つづつの文藝上の理想が立られると云つてゐられる。即ち感覺のそれは美であり智のそれは眞であり、情のそれは善であり、意のそれは壯である。そして、それ等の理想は悉く等價であつて、どれがどれに優つてゐるとは云はれない。從つて又どれがどれを犯すことも許されない。たゞ一つの理想が非常に深く力强いものであつて、他の理想と矛盾してゐても、それを忘れて、深くその理想に浸ることが出來るやうな場合にのみ、換言すれば、他の理想をエリミネート（追ひ出す）して汪洋し得るやうな場合にのみ、一つの理想は他の理想を犯すことが出來ると云ふのである。これは實例に當つて見ると極めて明瞭に分る。例へば、歌麿の繪で見るやうな、あんな頭髮の大きい、腰の細い、身丈の高い女は實際には見られない。しかしあの美しさに恍惚として、そんな女が實際にゐるかゐないかなぞと云ふことは忘れて見てゐられゝばこそ、歌麿の女は美人畫として許される。同じやうに、秋の展覽會に出品される裸體畫でも、その曲線の美しさのために裸體の道德上の判斷なぞは忘れて、善いとも惡いとも思はないで、たゞその美に醉ふことが出來たら、立派な藝術品として許されようと云ふのである。で又、それと同じやうに、人生の眞實をありの儘に描破した小說でも、そこに表はされた眞實の深さのために、他の道德上の善惡の判斷なぞは忘れて、一意人生の眞實に味倒することの出來るやうな深い作品であつたら、たとひそれが善の理想と矛盾するやうなものであつても、一向差支へないと云ふのである。で、これを前のモオパッサンの作品に當て嵌めて見て、あの作が果して善惡の批判を忘れて、たゞ人生の眞實のみを味はふことの出來るやうな、深い意味のあるものであるかどうかは讀者諸君の判斷に任せて、私としては何も云はぬことにしたい。私はたゞ夏目先生の所說が、文藝と道德との關係を說明する上に、極めて用意の周到な、同時に極めて實際的な意見であることを云つて置けば足る。

で、文藝と道德との問題は一通り解決された。作家たるものは、最早道德上善惡の批判なぞには顧慮する所なく、只管に深い、力强い人生の眞實を求めさへすれば可い。何となれば、求め得た人生の眞實が本當に力强い、深い意味のあるものでさへあつたら、道德上の批判を壓倒して、その存在を主張することも出來るから。たゞ何處で、何うしたらさう云ふ力强い、意義のある人生の眞實を捕へて來ることが出來るかそれだけが問題である。そして、又一番肝心な問題である。肝心な問題ではあるが、小說作法はそれに對して滿足な解

答を與へることは出來ない。小說作法の關與する所は、既に捕へ得た題材を何う云ふ風に取扱つたら、最も有効に表現することが出來るかと云ふに止まる。何處で、何うしたらさう云ふ人生の眞實が捕へ得られるかは、その人の天分に屬する問題である。作者は宜しく自分自身の方法に依つて、人生と角力を取つて、その中から讀者を動かすに足るさうな、深い人生の眞實を捕へて來なければならない。尤も、それに就いて二三の暗示のやうなものは與へられないこともない。が、それも結局暗示に止まる。決して多くの期待をそれに繫がるべきものではない。

人生の眞實は人生の泉から汲み取る外ない。そして、人生の知識はたゞ作者自身の經驗に依つて得られる。これだけは誰にでも分つてゐることである。で、その經驗に就いて考へて見るに、凡そそれに二種ある。一つは外延的な經驗で、他は內包的な經驗である。換言すれば、廣い經驗と深い經驗とである。田舍牧師の娘であつたジエーン・オーステンが、二十一歲で始めて處女作「矜と偏見と」を出したのを見て、當時既に盛名を走せてゐたウオルタア・スコツトが、その英吉利に於ける中流階級の日常生活に對する知識の深切なるものがあるのに驚嘆したと云ふ話がある。家庭に蟄居して、家事の手傳ひばかりしてゐた、年の若いジエーンの人生に對する經驗が、老大家のスコツトに較べて、外延的に見て極めて狹いものであつたことは想像するに難くない。たゞ狹いけれども深い彼女の人生に對する知識が、流石の老大家をも後へに瞠若たらしめたのである。トルストイとか、ドストイエフスキイとか云ふやうな、餘りに偉大な、一寸その全體を思料するにも困難を感ずるやうな偉大な作家は別問題として、大抵の作家にはそれ〲その得意な方面と云ふものがある。その得意とする方面の專門的な人生の知識にかけては、他人の追隨を許さないものがあつて、先づそれに依つて成功するのを常とする。マキシイム・ゴオリキイの漂浪者の生活に於けるオスカア・ワイルドの廢頹した享樂主義に於ける、ジヨセフ・コンラツドの海上生活に於けるラフカヂオ・ヘルンの日本の怪談に於ける、皆さうである。我國の作家に就いて見ても、谷崎潤一郎氏の變態性慾に於ける、正宗白鳥氏の徹底したエゴイズムに於ける、それ〲他人の企て及ばないその作家の特徵をなしてゐるものと云はなければならない。

で、作家に取つては、外延的に廣い經驗よりも、內包的に深い經驗の方が遙に價値のあるものであることは云ふ迄もない。たゞ外延的な經驗は、知らぬ土地を旅行したりさま〲

な階級さま〴〵な種類の人間と進んで交際したりすることに依つて、いくらでも意識的に廣くすることが出來る。例へばピエル・ロテイの異國情調に於ける、又は長田幹彦氏の京の舞妓に於ける廣汎な知識と云つたやうに。が、內包的な深い人生の經驗と云ふものは恰度眞の友情や戀愛と同じやうに求めて得られるものではない。得られるべくんば、それは求めずして得たものでなければならない。求めて得た經驗は、それは最早經驗ではない、人生の實驗である。化學上の實驗なら、試驗管の中でも自然界に起るものと同じ反應が得られよう。人生の實驗はさうは行かない。人生を實驗するつもりでかゝつて、果して本當の喜びや本當の悲しみが體驗されようか。それは斷じて出來るものでない。噓から出發した人生であるからである。人生を實驗しようと云ふやうな心持ちが既に噓であるからである。尤も、世には噓から出た眞と云ふこともある。最初は人生を實驗するやうなつもりでかゝつたのが、終ひには自分で掻き起した火勢のために、その火勢から生れた烈風に捲き込まれて、一度出掛けて行つたまゝ、二たび歸つて來ないと云ふやうな場合がないとは云はれない。特に戀愛なぞの場合にそれが多い。さうなりや、もう立派な經驗である。が、さう云ふ勇敢な人生の實驗者の場合は別として、吾々が人生の深い經驗を得るためには、じつと眼を瞠つたまゝ、靜に待つてゐなければならない。そして、それが遣つて來た時には、猶豫なくそれを捕まへることの出來るやうに、常に眼を開いてゐなければならない。折角人生の經驗が遣つて來て戶を敲いても、生憎作者は留守だと云ふやうなことがあつては困る。それと同時に、作者自ら往來へ出掛けて行つて、自分の家へ寄るつもりでもない人生の經驗を無理に引張つて來ると云ふやうな、前とは正反對の間違ひを仕出來してもならないのである。

處で、大抵の人といふものは、人生の經驗が訪れる時に、なか〳〵自宅にゐるものでない。やゝともすれば留守にして、折角の機會を取り遁し勝ちなものである。例へば同じやうに東都の大震火災と云ふやうな、未曾有の變動に際會しても、或人はその中から深い人生の眞實を捉へて來てゐるのに、或人は何物をも見ないで、平氣でそれを通過させてしまつたと云ふやうなのが、それである。そこに又眞の作家と普通の人との區別があるとも云はれよう。眞の作家は普通の人が何物をも見ない所に見、何物をも經驗しない所に經驗する。經驗も亦一種の天分であると云はれるのは、恐らくこの意味でなければならない。處で、さう云ふ素質が何んな

ものであるかを、はつきり說明するのは難かしい。が、その中に、少なくとも、二つの傾向のあることだけは明瞭であるやうに思はれる。一つは潑溂たる好奇心であつて、他は何物にも直ちに同情することの出來るやうな和らかい心である。委しく云へば、前者は主として外延的に經驗を廣くする上に力があり、後者は內包的に深い人生の眞實を理解する上に役に立つ。同情のない所に、眞の理解はない。特に複雜な人生問題に於てさうである。チャールス・ヂッケンスが倫敦に於ける下層社會の生活の種々相にあれだけ深い理解を有ち得たのは、一重にこの同情心の賜物と云はなければならない。從つて作家としては好奇心よりも、同情心の方がより大いなる能力である。が、いづれにしても、この二つのものが相寄り相扶けて、作者の人生に對する興味の緊張を招來するものであることは爭はれない。

なほそれに關聯して云つて置きたいのは、作者が最深い同情を有するのは誰でもない、作者自身であると云ふことである。從つて、作者が最も好く理解してゐるのも、作者自身の生活である。で、何んな初心の作者でも自分自身の生活を書けば、第一書き易くもあるし、それに大抵は何等かの點に於て讀むに足る作品が獲られる。これはひとり初心の作者に就いて云ひ得られるばかりでなく、トルストイやドストエフスキイと云ふやうな、偉大な作家に就いても、同樣に云ひ得られることである。

で、好奇心に依つて人生に對する興味を培ひ、同情に依つて深くそれを理解すべきものであることは、既にこれを述べた。が、作者はたつた一つの人生の眞實を捕まへただけではまだ足りない。それと他のものとの關係も知悉してゐなければならない。それに依つて、始めて人生の眞實を誤りなく傳へることが出來るからである。處で、さう云ふ風に作者の用意を周到ならしめるためには、矢張り經驗の力に俟つ外ない。經驗に經驗を積む。そこに作者の修養があるのである。が、それには時日を要する。人生の一角を鋭く捕へれば足るやうな短篇小說の場合は別として、ひろく人生全體を見渡さねばならないやうな長篇小說の傑作が、多くその作家の成熟期に及んで生れるものであると云つても、別段驚くには當らない。例へば、英國小說の鼻祖と云はれるリチャアドソンの「パメラ」は、その作者の四十一歲の時に書かれたものである。「ウエーヴアレイ小說叢書」の現はれ出したのは、ウォルタア・スコットの四十三歲の時である。レオ・トルストイが「戰爭と平和」に取かゝつたのが三十四歲で書き終つたのが四

十歳、「アンナ・カレーニナ」を書いのが四十五歳から四十八歳まで、「復活」を書いたのはもう七十歳の餘である。フョードル・ドストイエフスキイが「罪と罰」を書いたのが四十六歳、「カラマゾフ兄弟」を書いたのは、五十九歳から六十一歳へかけてである。これを我國の作家に就いて見るに、大抵の作家の傑作と云はれるものは多く二十代に書かれてゐる。晩くとも三十歳前後に書かれたものが多い。そして、四十五十になると、大抵何も書かなくなつて仕舞ふ。書いても世間から顧られない。これは一體何うした譯か。日本人が早熟だからと云つてしまへばそれ迄だが、そこに何等かの理由がなくてはならない。讀者の方から云へば、今の小說の讀者は大抵年の行かない青年子女で、成熟した大人の人生觀に對して興味を有たないと云ふのも、確にその理由の一つであらう。が、作家自身に就いて云へば、折角經驗に經驗を積んで、作家として人生觀が成熟して來る頃には、最早その好奇心も銷磨すれば同情も硬化してしまつて、人生に對して何等の新鮮なる興味をも有たなくなると云ふのが、その主なる理由ではあるまいか。つまり年を取つて、好い加減に人生を見る眼が成熟してからも、尚且若い時代の溌剌たる好奇心や同情心を失はないやうな、和らかい心の持主にして、始めて偉大な傑作を生むことが出來るのである。

前號の「小說作法講話」の中、一二二頁の上段終りから九行目、『現に私の友達の』の下に、『身の上に起つた事實だ』なぞと云つて、なか〳〵』の二十字を脱す。そして、『屈服しないものである』につゞく。

なほ前々號の二三頁の下段一行目に、『作者が他の文で』とあるのは、『地の文で』の誤植である

なほ〳〵同じ號の二一頁の下段に、『ハムレットも丁抹の古い王室にあつたヘンリー。フレデリック。アミエルといふ公子の事蹟から取つた云々』と書いたのは全然私の思ひ違ひであつた。ハムレットは矢張り丁抹の公子なる『アムレットの傳記』から取つたもので、その『傳記』が最初に佛蘭西譯なつて傳はつたのでアムレットと云はれるに過ぎない。アンリー。フレデリック。アミエルは十九世紀に瑞西のジエノアに生れた美學者で詩人で、ハムレットとは全く別人である。たゞその人の死後に殘した日記に據ると、矢張り劇中のハムレットと同じやうに、どうしても自分自身と調和することの出來ない性格の持主であつたのと、一生獨身で通して、童貞の少女に對して終始渝らない青年のやうな尊敬の念を抱いてゐた所からよく、ハムレットに似た人物として引合ひに出されるやうになつたのである



# 男嫌ひ

(獨逸)パウル・ハイゼ作
盛山久子抄譯

(一)

「お天氣はどうだね。船頭さん!。」と今や、小船に乘つた牧師クラトは氣遣はしげにナポリの方を眺めながらきいた。

「まだ、陽がのぼりませんや、霧が少しばかりあるけれど、なあに、今にきつと晴れまさあ。」と船頭のアントニオは答へた。

「早く船をやつてお吳れ、暑くならぬ中に行きたいから。」と、云ひながら小柄の牧師は、岸邊の人達に如才なく挨拶をしてゐた。船頭のアントニオは、小船を海の方へ押しやらうと擢を握つたが、急に手をやめて、礀道の方を見上げた。瘦せがたの少女が半巾を振り〳〵その道を此方へ急いで來る。包を小脇に抱へ興奮しながら、しかし、やゝ身をそらせ縮毛を額の所に丁度冠のやうに捲きつけてゐた。

「何を待つてるの?」牧師は船頭にきいた。

「向ふから誰か來ます。どうもカプリ島へ行く人らしい。先生!いゝでせう、たつた十八の娘子でさあ、長くはかゝりませんや。」

そのうちに少女は礀道をまはつてやつて來た。

「おや、ラウレラさんだ、島に何か用があるのかね。」と牧師は言つた。アントニオは肩をそびやかした。娘は急いで船にたどりついた。

「お早う。ラ、ラビアータ」と近くにゐた若い船頭の一人が言つた。少女は高慢な樣子でこの挨拶をうけながしたので、

もしこの時牧師クラトが居なければ若者達はもつと餘計なことを言つたかも知れなかつた。

「お早う。ラウレラさん、どうしました。カプリ島へ行くのですか」と牧師はきいた。

「船に乗せて頂けませうか、牧師様。」

「それは、アントニオさんにきくがいゝ。誰もが自分の物の持主で、神樣は萬物の持主でいらつしやるのだ。」

「半カルリン（銀貨）持つてますが、これ丈けで乘せて頂けますか。」と、ラウレラはアントニオの方を見もせずにきいた。

「その金をとつてお置き、もつとよい使ひ道があるさ。」と若者は呟くやうに言つて席をつくるために其處にあつた蜜柑の籠を傍に寄せた。その蜜柑はカプリ島で遊山の人に賣るためであつた。

「無賃で乘らうとは思ひませんよ」と少女は言つて、一寸眉をひそめた。

「まあ坐るがよい」と牧師は聲をかけて、

「アントニオは正直者ぢや、貧乏なお前から金を取つて儲けやうとは思やしない。乘つたらいゝぢやないか。」と言つて手を借して、

「私の近くにお坐り、そら御覧、アントニオが、わざ〳〵お前の身體の痛くないやうに上着をぬいで敷いて呉れたでは無いか。私にはこんな親切はして呉れない。しかし若い手合は、よくこんな事をするものだ、十人の貴人よりもたつた一人の小娘に氣をつかふものだ、さあ、もう辯解するには及ばない、アントニオ、類は類をもつて集るといふことは、それは神樣の御制度ぢや。」

　この時ラウレラは、折角アントニオの敷いて呉れた上着を傍に押し除けて一言もいはずに席についた。アントニオはこれをかまはずに捨てて置いて口の中で何かブツ〳〵言つた。やがて小船は岸から離れた。

（二）

「その包の中に何がはいつてゐるの？」と牧師はきいた。

「絹糸と撚糸とパンとです。絹糸をカプリ島の人に賣らなければならないんです。それから撚糸も。」

「自分でつむいだのかね。」

「えゝ」

「たしか紐を撚ることも出來たね。」

「えゝ、でも此頃は母が漸々わるくなりますから、ちつとも家があけられませんの、たつた一つの機織臺の損料も拂へま

せん。」
「漸々わるい？　つひあの復活祭のころには床にも着かずに私達と一緒に坐れたではないか。」
「母には木の芽時がいけないんです。あの大嵐と地震のあと、母は身體の痛みがひどくて床についてしまひました。」
「可愛相に。……祈ることと願ふこととを止めてはいけない。聖母様がお守り下さる。勇敢に勤勉にお祈りをおつゞけなさい。」
　しばらく沈默がつゞいた。
「さういへば、さつきこの舟に來た時に、『お早う。ラ・ラビアタ』と岸の若者が言つたが、あれはどうゆふわけかね、從順で謙遜である筈のクリスアヤンの名にふさはしくないではないか。」
　少女は顏を赧めて眼をしばたゝいた。
「私は他の人達のやうにダンスをしたり、歌つたり、お喋舌をしたりしないからつて、皆で揶揄ふのです。誰もかまつて呉れなくていゝのです。私、あの人達に何もしないんですもの。」
「しかし、も少し親しみがあつてもいゝね。踊りや歌は生活に困らない人達のすることだ、しかし親切な言葉は苦勞する人達にもふさはしいことだから。」
　ラウレラは伏眼になつた。沈默のまゝ小舟は進んだ。太陽は今や山々の上に昇つてヴエスビアスの頂の雲が次第に薄らいで來た。ソルレント町の平地にある家が緣なす蜜柑畑の間に白く光つて見えた。
「あの何時ぞやの畫家はその後まだ消息をしてゐますか？あなたを奧さんにしたいと言つたあのナポリ人は？」と牧師はきいた。少女は頭を輕くふつた。
「あの畫家はあなたの肖像をかくために時々來たのだが、どうしてあの人を拒むのかね。」
「何だつて私の肖像をかくのでせう。他に私よりも、もつと綺麗な人はゐますのに。私の肖像で何をするかしれたものぢやありません。その畫で私を呪つてその上殺すかもしれないつて母が申しますよ。」
「そんな罪深いことを信ずるものぢやない。あなたがもし神樣をいつも信じてゐるなら髮の毛一本だつて誰がどうすることが出來るものか。あなたが繪をかくことを拒みさへしなければ、あの人はあなたと結婚しやうとしたものを。」
　彼女は默つてゐた。
「そしてまた何故あの人の申出を斷るのか。慥かにあの人は

俠氣のある人に相違ない、あなたが今糸つむぎや機織などして糊口を凌ぐよりもあなたのためにもお母さんのためにも、どんなによいかしれないぢやないか。」

「私達は貧乏人です。その上、母は永い間病氣なんです。ただあの人の厄介になる斗りです。そして私はまた紳士方の役には立ちません。もしあの方のお友達でも來れば、きつと私のやうなものが居るのを恥に思ふでせう。」とラウレラは力をこめて言つた。

「あなたは何をいふのだね。たしかにあの畫家は見上げた人物ぢやないか。その上わざ／＼ゾレントの町へ移住して來やうといふぢやないか。あなたがたを助けるために天から授けられたその人は、また二度とは來やしない。」

「私はどんな人でも男の人は皆いやです。」

と彼女はキツパリと、また獨言のやうに言つた。

「何か誓約でも立てたのかね、或はまた修道院へでも行かうといふのか」

彼女は默つて頭を振つた。

「皆があなたを片意地に思つてラ ラピアタなんどと評するのも無理はない、随分丁裁の惡い名前だが。……あなたはこの世に一人ぼつちでゐるのではないではないか。あなたが頑固なばつかりにあのお母さんもます／＼病氣がわるくなつて命を縮めてしまふのではないか。あんな良縁をことはるには何か深い譯があるのだらう。私に話しなさい。ラウレラ！」

「理由がございます。でも言へないんです。」

と、彼女は聲低く言つた。

「言へない？人の懺悔をきくことを神樣から許されてゐるこの私に話せないのかね、あの畫家があなたに好意をもつてゐないと思ふのかね。」

彼女は輕くうなづいた。

「私に打ちあけてしまつて、あなたの氣を輕くするがいゝぢやないか。もしおまへの考が正しければ私はお前に加勢する第一人者になる。まだお前は若いから、世間のことを知らない。そして自分に來る幸福を馬鹿にしてゐるが、後に必ず悔いる時があるに違ひない。」

この時彼女は船頭の方を見送つた。アントニオは帽子を眼深にかぶつて思ひに耽りながら水面をみつめ、手は撓をうごかしてゐた。この樣子に氣づいた牧師は少女の方に近寄つて耳をその方にかたむけた。

「私は父のことがわかりません。」とラウレラは身を震はせて悲しげに言つた。

「お前のお父さん？たしかお前が十歳の時に死んだと私は覺えてゐるが、今その良い靈は天國にゐるだらう。それとお前の頑固とどういふ關係があるのか。」

「牧師さま。あなたは私の父のことを御存知ないのです。あの父の罪だけが母をあんなに病身にしたことをあなたは御存知ないのです。」

「どういふわけで？」

「父は母を踏んだり蹴たりしました。父が怒に燃えて家に歸つて來た晩のことを今も思ひ出します。母は一言もいはずに父の亂暴をなすがまゝにさせてゐました。父は母を打擲しました。私は心臟が破れるほどつらかつたのです。怖しさに蒲團をかぶつて寢たふりをしてゐましたが、實は夜通し泣きあかしました。そして、母が床の上に死人のやうになつて横はるのを見ると父は急に樣子をかへて母を抱き起して息もつまらん許りにひどく接吻するのです。母は父にいぢめられると、他人に一言も喋舌つてはならぬと私に口止めしました。かうした出來事が母の身體にひどくこたへて父の死後も長い間病床の人となり、いまだに丈夫になりません。もし母が早く死ぬやうなことがあつたら……そんなことがあつては大變ですが……誰が母を殺したかよく知つてゐます。」

しばらく沈默がつゞいた。

「お父さんを許しておやり。お前のお母さんが許してあげられたやうに。そんな暗い思ひ出にお前の頭を使つてはいけない。おまへにはまだ、もつと良い時が來る、その時が來れば凡べこの苦しみを忘れてしまふだらうから。」

「どうして忘れられるものですか」と少女は身震ひをした。

「牧師樣、ですから私はいつまでも處女のまゝでゐたいと思ひます。いぢめてみたり可愛がつて見たりするそんな男の誰にも私は家來になりません。處女である私は、今、私を打擲したり接吻したりする人があればその人を防禦することを知つてゐます。しかし私の母は父の打擲も接吻も防ぐことが出來なかつたのです。それといふのも母が父を愛してゐたからです。私は一人の人を愛するために遂に病氣になつて一生不幸になるやうな、そんなことなら誰をも戀しません、」

「まだ〳〵お前は子供だ。地上におこる出來事の本當の姿がわからないのだ、それぢや男といふ男は皆お前のお父さんのやうに熱情的で亂暴をするものときめてしまふのかね。正直で親切な男子と喜びに充ちた生活することも出來るとは考へないのか？」

「私の父がどういふやうに母に對したかといふことは母より

外に誰も知りません、何故なら母は父のことを人にはなす位なら千度も死の苦しみを受けた方が增しだと思つてゐましたから。もし戀といふものが、人が助けを呼ばねばならぬ場合さへその愛のために口を閉され、意地わるい敵がすることの出來る以上の酷いことをされても、それに反抗することも出來ないやうなそんなものが戀ならば……そんなら私は私の心を一生涯どんな男にも向けやうとは思ひません。」

「よし〱。私は斯う言はう、お前はまだ子供で、自分の言つて居ることの意味がわからないのだ。もしお前の心が時を得れば、お前は、愛しやうか愛しまいかと自分の心に幾度も問ひをかけられるだらう。その時になれば今お前の頭の中でつくつてゐる事は皆、何の役にも立たなくなる。」と　一寸言葉をきつて、

「それで、あの衆家はお前を虐待すると思つてゐるのかへ。」

「え丶あの人の眼が。……母の機嫌をとつて抱きよせた時に父もあんな眼付きをしました。あの眼…私、よく知つてゐます。自分の妻を打擲したり害したりしる眼。私はまたあの恐しい眼をみると思ふとぞつとします。」こ丶迄言つて、ラウレラは默つてしまつた。牧師も口を噤んだ。もうこの上言つてきかせる言葉を持ち合せなかつた。

小船はやがてカプリ島の小さい船着場に來た。岸から少し離れてゐたが、ラウレラは、人手を待たずサツサとスカートをはしおつて右手に靴、左手に包をか丶へてバチヤ〱淺瀨を渡つて岸にと急いだ。

「私は今日はカプリで日が暮れるから船頭さん、待たないでお呉れ、そしてラウレラ、歸つたらお母さんによろしく傳へてお呉れ、今週の中にもまたお訊ねしやうから。お前は晩までにはお歸りだらうね。」

「え丶、船さへあれば、」と、ラウレラはからげたスカートを下しながら答へた。

「己れが今日中に歸ることは知つてゐるぢやないか。」とアントニオは投げかけるやうにラウレラに言つた。

「兎に角己れは夕方までお前を待つよ。でもその時にお前が來たければその後は待つとも待たぬとも私にまかせておく」

「ラウレラ、きつと歸つて來なければいけない

と、牧師は言葉をはさんで

「一晩だつてお母さんを一人ぼつちにしてはいけない。今日は遠くまで行かねばならないのかね。」

「ええ、あのカプリ町まで、料理屋のあるところです。」

「ご機嫌やう」と牧師は言つた。ラウレラは牧師の手に接吻

して聲低く「ご機嫌やう」とたつた一度洩した。アントニオはこの一語を自分に言つて呉れたものとして受取つた。そして牧師には帽子を取つて一寸會釋したが、ラウレラの方は見なかつた。此處で三人は別れ〳〵になつた。

　ラウレラは岸から丘になつてゐる方にさつさと登つて行つた。手を額にかざして暑い陽をさけながら。道が引き返すやうに曲つてゐる所から、また登つて行く時に今來た岸の方に眼をやると、そこにはアントニオが彼女の方を見送つてゐて、視線がパッタリ會つてしまつた。ラウレラは大變すまない事をしたやうな氣がして、口を堅くむすんで、サッサと歩き初めた。

（三）

　午後一時も過ぎた頃であつた。アントニオは岸近くの漁師の居酒屋にもう二時間も前から休んでゐた。そして何か思ひ付いた樣に五分位毎に日向に出て上の方に二つに分れて見える硝道の左右を眺めてゐた。時々居酒屋の女主人と談してゐたが何となくそは〳〵してゐた。やがて、また往來へ出たがすぐ引返して、

「已れはもう出かけるよ。」と言つて、「ソレントの町から今朝早く來た娘つ子が夕方は病氣の母親のところへ歸らなけりやならないのだ。」と附け加へた。

「まだ〳〵日が長いさ。おゝその姐さんが來た、さあ、さう急かずに一杯呑んで行きなさい。」と女主人はコップを渡さうとした。

「有りがたう。私頂けませんの。」と、今來たばかりのラウレラは言つた。

「ついでやれよ、遠慮してゐるのさ。」と傍に休んでゐた若者が口を出した。

「ほつて置けや、この娘は頑固者だ、こんな聖人は手がつけられないや。」とアントニオは言つて、さつさと船の方に行つて仕度をした。ラウレラは酒場の女主人に今一度挨拶して少しためらひながら船の方に行つた。岸まで來て、彼女は、誰か船にのる伴れが來ればよいがと待つやうに丘の方を彼方此方見まはした。しかし丘も岸邊も靜かで人つ子一人見えなかつた。うつかりしてゐる間にアントニオは人形でも扱ふやうにラウレラをさつさと抱へて船の中へ入れてしまつた。そしてすぐ船は沖へ向つた。彼女は默つて、アントニオの方へ半分背をむけて小船の前の方に坐つた。眞面目な顏をしてただ水面を見つめてゐたが、陽があつく照りつけるのでパンを包

んであつたハンケチを取つて髪にのせ、やがてカプリ島で食べる筈であつた昼飯のパンを取り出して食べ初めた。アントニオはこれを默つて見てはゐなかつた。島で賣れのこつた蜜柑を二つ取り出して、

「ラウレラさん。パンに添へるものが此處にあるよ。何もお前のためにわざ〱殘して來た譯ぢやないが、こいつが籠から轉がり出てゐたのを知らずにゐて船に戻つて籠を置かうとしたら見付かつたのだよ。」といつた。

「あなたが自分で食べて下さい。私はパンが充分あるから何にもいりません」

「果物は暑い時はいゝよ。それにお前は長い間かけまはつたから、さぞ渇いてゐるだらう。」

「でも山の方で水を一杯のんで來たから渇きは とまりました。

「勝手にするがいゝ。」と若者はつまらなさうに蜜柑を籠の中に轉がし込んだ。沈默がつゞいた。海は鏡のやうに穩かだつた。小船の艫の音がしづかに響いた。白い鷗が音もなく海面をかすめて岩穴の巣へ歸つて行く。

「この蜜柑はおまへの阿母さんに持つて行きな。」と、アントニオは言つた。

「うちにもありますよ。無ければまた新しいのを買つてくるからいゝんです。」

「さういはないで持つて行つてお呉れ。そして己れから宜しくつて言つてお呉れよ。」

「阿母さんはあなたをまだ知りませんよ。」

「そんなら己れが誰だかお前から話して呉れたらいゝぢやないか。」

「私だつてあなたを知らないや。」

彼女のこの言葉は今日が初めてゞはなかつた。一年程まへにかの畫家がソレントの町に來た時夏の日の出來事であつたが、アントニオが他の若者と伴れだつて町の廣場で球投げ遊びをしてゐた時の事であつた。畫家は初めてラウレラに出會つた。この時ラウレラは水桶を頭にのせて、あたりの人々を見向きもせずに通り過た。畫家はラウレラの姿に見取れて球の通る道をも忘れてぼんやり其處にたつた、この時堅い球が彼にぶつかつたのでハッと氣がついて彼邊を見まはした。物思ひにふけつたため邪魔をしたと思つて詫びやうとすると其處には一人の若い船頭が怒をふんで立つてゐた。やがて肩をそびやかしてその船頭はその仲間の方に行つたので、畫家はだまつてゐるのが得策と思つてそのまゝ立ち去つた。しかし

このことの後華家がラウレラに求婚したといふ噂が立つた。そして華家が、「あのボールをなげてゐた無禮な若者を知つてゐますか」ときいた時、「私は知りまん」とラウレラは答へた。實は彼女はこのボールの事件をよく知つてゐた。そしてそれ以來アントニオを前よりもよく知つてゐた。

扨、今や、ラウレラは敵に對抗してゐるかの如き心地で小船の中に坐してゐた。ひどく動機を打ち出した。常には優しみのあるアントニオの顏も今日は赫らんでゐる。櫂で波を打つと飛沫が船の中にはいる。何か腹立たしい言葉を言つてゐるかのやうに彼の唇は時々震えてゐる。ラウレラは故意と呑氣さうな面持で船端に腕をのばして、手を水に浸してすべらしてゐた。やがて頭にのせてゐた手巾をとり髪をなほして船の中には自分だけゐるやうな素振りで兩手を濕して、少し逆上せた頰をひやしてゐた。

今や小船は海の眞中に來た。遠くにも近くにも帆影一つ見えない海鷗さへ靜けさを破らない。アントニオはあたりを見廻した。一つの考が頭に浮んだ。頰には紅がさして來た。彼は靜かに櫂をしづめた。ラウレラは思はず彼の方を見た。心は緊張してゐた。しかし恐れてはゐなかつた。

「己れはもう結着をつけるのだ。」とアントニオは俄かに言つた。

「此處迄傷けられた心を持つて己れが今迄死ななかつたのが不思議だ。お前は己れをしらない？　さう言つたな！　己れがお前の側を通るとき、ものが言ひたくて心が一杯になつてゐたのにお前は永い間默殺して呉れなかつたのか。それだのに前は腹お立たしい言葉をはいて私に背をむけるのだね。」

「私、何も言ひはしなかつたぢやありませんか。」と彼女は一寸言葉をきつて、

「私はあなたが私にもつてゐる考をよく知つてゐました。でも私はたゞ無暗に浮名をたてられるのが嫌です。そしてまた、どんな男でも男といふ男を私は嫌ひなのです。」

「誰もいやだと！　いつ迄もそんなことが言つて居られるもんか。華家を斷つたからそんなことを言つてゐるのか。ちえつ！　あの時はお前はまだ子供だつたぢやないか。いつかはきつとお前は淋しくなるに違ひない、その時にはお前が狂人ぢみてゐるだけに手近にある誰でもを手當り次第に取るだらうよ。」

「誰に未來のことがわかりませう。そりや私だつて考をかへるかも知れません。それがあなたに何の關係がありますか」

「己れに何の關係があるときくのか？」と彼は身を起して櫂のある席から飛び上つた。小船はグラ〳〵と揺れた。

「それが己れに何の關係があるとお前はきくのか。そのことが己れにどんな關係があるかよく知つてゐるのに……よくそんな口がきけたものだ。お前が己れよりももつと歡迎する人を持つならそいつは悲しさに死んでしまふがいゝや。」

「私は一度でもお約束した事がありませうか何の責任があるのですか、あなたはどういふ權利をもつてゐるのですか。」

「おゝそりや文字には書きはしないさ。しかし己れがおまへに對して權利を持つてゐる事は良い人間が必ず天國に行けると同じやうにきまつてゐるのだ。考へて見るがよい。もしお前が他の男と教會へ伴れだつて行つて、お前が肩をそびやかして己れの前を通りすぎる……それでもお前は己れに世間の嘲笑を辛棒せよといふのか！」

「お好きなやうになさつたらいゝでせう。私は誰の束縛もうけません。私は私の勝手をします。あなたもあなたの勝手をしたらいゝぢやありませんか。」

「何時迄もそんな口はきいてゐられまいよ。」かう言つた彼の全身はひどく震えた。

「己れも男だ。こんな頑固者のために己れの生涯を破滅させはしない。今この船中ではお前は己れの手の中にあるのだ。己れの欲するまゝにお前はならなければならぬことは分つてゐるだらう！」

ラウレラは驚いて大きな眼を見張つた。

「あなたがもし出來るなら私をお殺しなさいな。」と、彼女はゆつくり言つた。

「男子といふものは事を半分やりかけて置くものではないぞ」彼は更に調子を高めて「この海には二人を容れる席があるよ、己れは貧乏でお前のために何もしてあげられない。」と、彼は情をこめて言つて、

「しかし、我々は……一度に……海に沈まねばならない。……さあ！今!!!」

彼は調子はづれの聲でいふや否や突然彼女の兩腕をつかまへた。その瞬間に彼は右手をいきなり離した。血がほど走つた、彼女が力まかせに噛みついたのである。

「私はあなたの意のまゝにならなければならないのですつて？」と彼女は叫んでスラリと身をかはした。

「果して思ひ通りにならねばならないかどうかよく見ていらつしやい。」かう言つて彼女は船から身を躍して海へと沈んだ。やがて彼女は水面に再びあらはれた。巻き毛はほどけて

髪の毛が波にもまれて重々しく頸にまきついてゐる。彼女は腕を擴げておよいだ、一言も發せず、船から遠ざからうとあせりながらかなたの岸にむかつて力まかせに游いだ。アントニオは恐怖のあまり失神せんばかりになつた。彼は小船の中に立つて前かゞみになり恰も何か不思議なものでも見るかのやうにぢつと彼女の方に眼を据えた。やがて彼は身震ひして思ひついたやうに櫂を取りあげて力まかせに彼女の方に船をすゝめた。船端は腕から流れ出る血潮で紅にそまつた。今や船は彼女のそばへ來た。彼女がいかに急いで游いでも船にはなかなかつた。

「どうぞ、船に歸つて呉れ！己れは氣が狂つてゐたのだ。自分で何をしたかよく解らなかつた。まるで天からの電光にでせ打たれたかのやうに己れはカッとなつて、何を言つたか何をしたか解らなかつた。己れを許して呉れとは言はないが、ラウレラ！どうぞあなたの命をまもつて下さい。そして船にのぼつて呉れ！」彼女は尙も游ぎつゞけてゐる、少しも耳にはいらない樣子で、

「岸まではまだ二哩もある。どうかお願ひだから阿母さんのことを考へて下さい。萬一あなたの身の上に不幸がおこれば阿母さんは驚きのあまり死んでしまふだらうに。さあ、どうかお願ひだから。」

この時彼女は一寸目測で岸までの遠さをはかつてゐたが、アントニオの言葉には何の返事もせずに、船の方に游ぎついて船緣に兩手をかけて船の中に身を入れた。アントニオは立ち上つて彼女を助けた。その拍子に船がひどく一方に傾いて、船端にあつたアントニオの上着が海中にすべり落ちた。彼女はもとゐた場所に落ちついた。彼は櫂をとつた。ラウレラは水の滴る着物を絞つて髪の毛の水を取り初めた。この時船端を染めてゐる血潮に氣がついた。すぐに彼女はアントニオの手の方を見た。その手は何事もないかのやうに、櫂を動かしてゐた。

「そら！」と彼女は自分の手巾を渡さうとした。彼は頭をふつたまゝ漕ぎつゞけてゐる。

つひにラウレラは立ち上つて彼の方に歩み寄り彼の深い傷口を確かと結んだ。そして彼の拒むのを無理に一つの櫂を取りあげて彼と向ひ合ひに座をしめて、——然し彼の方は見ずに——櫂を水に入れた。この時、其處にもおびたゞしい血のついてゐるのを見た。二人とも蒼白な顔色をしてだまつてゐた。

小船が岸に近づくと濱邊に網をつくろつて居る漁師達はア

ントニオに呼びかけ、またラウレラにからかつた。二人とも一言の挨拶もしなかつた。彼等がマリーネ河の入江についた頃は太陽はまだプロンダの峰に輝いてゐた。ラウレラの着物はもうこゝへ來るまでにすつかり乾いてゐた。彼女は岸にあがつた。今朝、船が出る時にゐた糸つむぎの婆さんはまだ濱邊の小さい家に同じやうに座してゐる。

「トニオさん、その手はどうしたの？あら！船まで血だらけぢやないか。」と婆さんは叫んだ。

「なんでもありやしないよ。釘の出てゐたのを知らずに引つ懸けたのさ。明日は癒るよ。己れの手は血が出やすいのだ。」

「まちなよ、今わしが血止め草をとつて來てあげるから」と婆さんは言つた。

「心配はいらないよ、何でもないんだから。血が出ると兎角仰山に見えるものさ。明日になれば忘れたやうに癒つてしまふから。己れは皮膚が丈夫だから、なに、すぐに新しい皮が出來てしまうから。」

この時ラウレラは「さやうなら」と言つて向ふの道に行きかけた。

「おやすみなさい。」とアントニオはそちらを見ずに言ひ送つた。そして小船を物置に仕舞つて近くにある彼の小屋のせまい階段を昇つて行つた。

（四）

二つの室には彼より他に誰もゐなかつた。その室の中を彼は今、行つたり來たりしてゐる。開いた小窓からは靜かな海の上を吹く潮風が這入つて來て靜寂が彼を取りまいた。彼は壁にかけてあるマリアの像の前に永いこと立ちすくんでゐた。然し祈る氣分にはなれなかつた。今はもう何の希望もなかつた今日の此の日はぢつと立ち留つてゐるやうに思はれた。早く日がくれればよいと思つたそれといふのも手の傷が案外痛くて彼は大變疲れたのである。ふと、ひどい痛みを感じて腰掛の上に坐し、繃帶をゆるめた血が一しきりほどばしつた。そして傷口のまはりはひどく腫れ上つてゐた。彼は水に入れて永い間冷してゐた。やがて手を水からあげた時にその傷口にラウレラの齒の跡をはつきり見ることが出來た。

「彼女は正しいことをしたのだ。己れは殘念だつた。かうなるのが尤もなのだ。己れは明日はギユウゼツペさんに賴んでこの半巾を返さう。己れはもう二度と彼女のまへに姿をさらすのは厭だから。」と彼は獨りかう言つて半巾を念入に洗つて陽に乾した。そして左手と齒を使つて上手に手に繃帶を

した。さて彼は寢床に身を横へて眼を閉ぢた。

朦朧たる月光が彼のまどろみを覺した。同時に手の痛みをつよく感じた。傷口で血が脈を打つて流れるのを柔らげようと水の中に手を入れた。この時戸口に人の氣合がした。

「誰が來たのか」と言ひながら、戸をあけた。ラウレラが眼の前にあらはれた。彼女は何もいはずに內に這入つた。すぐに頭にまきつけてゐた布をはづし卓の上に籠をおいた。そして深い吐息をついた。

「半巾を取りに來たのでせう。わざ／＼足勞をかけなくとも濟むのでした。明日の朝早くギウゼツペさんに賴んでお返しする積りだつたのに。」とアントニオは言つた。

「半巾のために來たのぢやありません。」とラウレラは口速やに答へた。

「私は山にカミツレ草を探しに行つて來ました。血止め草にするために。これ此處に。」と言つて籠の蓋をあけた。

「そんなに心配をかけて……。」と全く恐縮したやうな語調で彼は言つて、

「そんなに心配をかけて……傷はもう大變良いのです。もし惡くなつたつて、それは反つて徐になるのです。こんな時に何であなたは此處に來ましたか。もし誰かが此處に來たらまた何を言ひ囃やすか知れませんよ。」

「私は世間の事なんか氣にしません。」とラウレラは受けながして、

「それよりも手を見せて下さい。カミツレ草をつけませう。左手だけでは巧く出來ませんから。」

「いや、疵は何でもないから見る必要はないんです。」

「何でもないと信ぜられるために見せて下さい。」と彼女は無雜作に手を握んで繃帶を解いた。そのひどく腫れた傷口に思はず身をふるはせて、「まあ!!」と叫んだ。

「何、ごく僅かなんです、一日一晩位で腫れはひきます。」

彼女は頭をふつて、

「いゝえ一週間位は海に出られません。」

「なに明後日にも海に出やうと思ふ、これが何の大した事か……」

その中に彼女は傷口を洗ひ直してカミツレの葉をもんでつけ、持つて來た繃帶を丁寧にかけた。これがおはつた時、アントオニは言つた。「有りがたう。そしてたゞ一言お願する。今日のあの氣狂ひじみた凡べてを許して忘れて下さい。そして、もう私、はこれよりあなたと怒り合ふことは誓つて致しませんから。」

「私、お願ひがあります。私はすべてのことをもつと違つたやりかたで說明すべきでした私の沈默があなたを怒らせそして傷さへも……。」

「いやあの際どい時にこの傷が私を生氣に返して呉れたのです。この傷について詫びて下さるな、あなたは私に親切をして下さつたのです。さあ歸つて休んで下さい。手巾は此處にあります。持つて歸れるやうに乾かして置きましたから。」と、彼は手巾を彼女に渡した。彼女はぢつと立ちすくんだまゝ自ら決しかねる樣子であつたがつひに言つた。

「あなたは私のお蔭で上着を失ひました。そしてあのポッケットにはあなたが蜜柑を買つたお金の這入つてゐたのを知つてゐます。私は家に歸る途中で氣がつきました。その損失をお返し出來ません。私は何も持つてゐませんもの。皆母のものですから、私、銀の十字架があります。これはあの畫家が最後に私の家に來ました時にだまつて机の上に載せゝ行つたのです。私はこれを見たくもなし箱の中に入れておきたくもないのです。もしあなたがこれを買つて下さつて――買つても僅かにしかならないといつぞや母は申してゐましたけれど――幾分を償つて下さつて、足らないところは母の寢てゐる間に私がそつと糸つむぎをしてお返しします。」

「そんなものは要りません。」とアントニオは言葉短かに言つて十字架をつき返した。

「どうか取つて下さい、傷ついたその手のために何時か逆海に出られないか分りません。傷はたしかに重いのですもの。」

「そんなら、それを海に投げ込んでしまふ方がいゝ。」

「私があげる贈物ではありません。あなたが當然これを取る權利があるのです。」

「何！權利？私はあなたに何の權利も持つてゐません。この後、若しも私があなたに出會ふことがあるとしても、私に親切をしないで下さい。私を見知らないで下さい。私の過去の罪を思ひ出させて下さらないために、さあ、かへつてお休みなさい。もうこれきりです。これでお別れです。」

彼は手巾と十字架を籠の中に入れて蓋をしてラウレラに渡さうとして、ふと眼をあげた時彼は吃驚した。彼女の頰には熱い淚が流れてゐた。それを拭はうともしなかつた。

「どうしたのです。加減がわるいのですか、頭の先から足の先まで震えてゐるぢやありませんか。」

「何でもありません。家に歸ります」と、彼女は戸口の方へ向つたがとう〳〵泣き出してしまつた。彼が引き留めやうと戸口に追ひかける途端に彼女の方から泣いたまゝ向きなほつて彼を押しつけるやうにして、

「もう辛棒が出來ません」と叫びながら、死人のやうに其處に立ちすくんだ。

「あなたが親切な言葉で私に行けとお命じになるのが私の良

心に咎めてなりません。私を打つて下さい。私を蹴つて下さい。私を呪つて下さい。……しかし……まだ……私が凡べての無禮をした後の今も……まだ私を愛して下さるなら…私を引き留めて下さい。ひきとめて……そして……あなたの思ふやうにして下さい。どうか……このまゝ赦して下さいますな。」

彼女はまた一しきり咽び泣いた。彼は暫く無言のまゝ彼女を腕にさゝへてゐたが、

「まだ、己れがお前を愛してゐるときくのか。」とつひに叫んだ。

「默つて言ふよ。この手の僅かの傷から己れのすべての血が流れてしまつたといふのか。その血は流れ出てお前の胸に通はうとしてゐるではないか。しかし、もしお前が私に一時の義理をたてゝ、私の戀をたづねるなら……歸つておくれ。己れは戀を忘れやう。……お前は私に決して惡いことはしないのだからそんなことを思つて呉れるな。私こそすまないと思つてゐるのだから。」

「いゝえ」と彼女ははつきり言つた。眼に涙をたゝえたまま肩越しに彼をみつめて、「私はあなたを戀してゐます。永い間私はそれを思ふさへ惡いと考へて、そのために私は、途中でも知らん顏をして頑固にしてゐました。今はそれが變つたものとなりました。もう途中で出會つても今迄とはちがひます。接吻して下さい。ラウレラは夫とする人のほかには接吻をしません。」

彼女は三度彼に接吻して、それから彼をはなして、

「おやすみなさいまし。そして、手を大事にして下さい。私を逐つて來て下さいますな。私はあなたの前より外には誰も怖くありません。」かう言つて彼女は戸の外に消えた。彼はその夜、永く窓外を見てゐた。空のすべての星が踊つてゐるやうに見えた。

（五）

翌月に、牧師クラトが教會の懺悔の椅子に席を取り、そのまへにラウレラが長い間ひざまづいてゐた。

* * * * *

椅子から立つて來たクラトの顏には抑へきれない喜びの色がたゞよふた。彼は獨り言を言つた。

「誰が思ひがけやうか。あの娘の心がこんなに早く變らうとは。實は頑固といふ鬼をもつと激しく嚇かさうかと思つた私のあの時の心をすまなく思ふ。いや、實際神樣の眼から御覽になれば、我々の眼は近眼だ。若き夫婦に祝福あるやうに。……ラウレラの長男がその父親のやうに大きくなつて海に出る時が待たれる。それまで、生きてゐたいものだ。……おゝ、お、おゝ、ラ、ラ、ラビアータ!……。」

（完）



# 秋

赤松月船

## 新月に

新月よ
あの山ふところの家に住むひとに告げよ、
今宵
君の庭に咲いた木槿の花が眞白いなら
ああ、新月よ
それはわたしの心であると告げよ
ほのかな輝りと露と
——思ひ出にみがかれた心であると告げよ。
新月よ、

あの山ふところの家に住む人に告げよ、
今宵
君の庭に咲いた白い木槿が地に落るなら
ああ、新月よ
それは、わたしの心であると告げよ、
ほのかな輝りと露と
——思ひ出の重みに堪へかねた心であると告げよ。

## 馬追蟲

夜が更けたから
そして、私が新しい疊の上に寢轉んでゐたから
馬追蟲よ
それでお前はやつて來たのか？

私の胸から足へ
そして、緣側へ
だんだん遠のいて行く月光が
どんな効果を私の心に與へるか？
ああ、それを知つたのは俺一人だといふつもりなのか、馬追蟲よ
それで、お前は私の掌上にとまりに來たのか？

# 遺兒を偲ぶ

## 亡兄の子供たち

有島生馬

亡兄は年來の志望だつた財産の放棄に着手し、愈々番町の住宅を見捨てるつもりで、初め牛込に、後四谷に借家を用意して待つてゐたのでしたが、前年から取かゝつてゐた赤坂檜町の母のための隱居所が仲々落成しないので、延々になつてゐたのでした。四谷の家には多少の家具まで運びながら、そんな譯で引越しだけ實行出來ないで、六月に兄は亡くなつて終つたのです。八月末に赤坂の新宅が出來、引移ると間もなく、そこで母は地震に逢ひましたが、幸ひ損害は極めて輕かつたのです。私はそれまで四年も鎌倉の海岸に定住してゐましたが、この二つの大事件に促され、一家を纏めて上京し、空になつた番町の家へ這入り、輕井澤の避暑地で十月まで姉の世話になつてゐた三兒の歸京を迎えたのでした。母にも三兒を引取り自ら育てたいと云ふ希望があつたのですが、老年のことではあり、家も十分廣くないので、私共が結局預かることになりました。

去年の秋から冬にかけ寄附すべき遺産の整理と家具の賣立を濟せ、三月には永年住みなれた父の家を捨てゝ、隣家に位してゐる私のもとの住宅へ三兒と共に引移り、現にそこに住つてゐます。今後も三人が成人し獨立するまで一家族と共にして暮して行く積りです。

私は元來病弱の上、この數年來胸と腎臟の宿痾のため、一年の半分は病牀にゐるやうな状態だつたので、もういつ死ぬ

か知れないといふ諦めた心持でゐたのでしたが、三人の子供を預かるやうになつてから急に命が惜しくなり、死んではならぬと思ひ、近頃は尚更に憶病な氣がしてかなひません。それは弟達もまだありますが、それ〴〵家庭的の負擔がある人許なので、自分の責任の重いことを考へると、この重苦しい責任をもう一つ負はせるのが酷く氣の毒のやうな心持がします。まあもう暫らく病氣と戰つて生きて行き度いと思つてゐます。

兄の子供は皆な男で、今年十四と十三と十二になりますが私の處にも十四になる女の子が一人あり、どういふ緣であつたか生れて間もない頃からいつも一緒に育つて來ました。嫂が大正五年の夏亡くなつてからは殊に共同に暮す方が多く、めつたに離れたことがありませんでした。外に從弟達も澤山あるのですが、兄の子と内の子とだけは特別兄弟のやうな關係で育つて來ましたので、かうして愈々預かることになつても少しも改まつた氣がしませんでした。これは不幸中の幸です。又家風なり、生活の狀態なりの變化も殆ど無いのですから子供等にとつてももとの部屋から隣の部屋へ這入つた位の感じしかないやうです。子供の心の傷といふものは仲々外部から見られないものですが、少くも日常の感情動作は前と變つた樣子なく、いつも快活で、機嫌よく、唯だその日〳〵の生活に沒頭し成人しつゝあります。

私が預かつてから別にこれと云ふほど特別に教育の方針を設けたことはありません。一時學校を變へてみようかと思ひましたが、子供達が不賛成なのでそれも中止しました。强いて云へば從來餘り度々活動その他の興行物を見に行つてゐたのを私は堅く止めさせました。それは初のうち大分不平のやうでしたが近頃ではやつと馴れて來たやうです。活動は學校の休暇中一度か二度位の程度で見に行つてもいゝことにしてゐます。

學校の教科以外、家では每週二度英語の先生と一度謠曲の先生に來て頂いてゐます。(謠曲の稽古は滑稽に思はれる方があるかも知れませんがこれは我家の傳統です)その外の復習にはKさんといふ方が非常に愛情をもつて殆ど毎日のやうに遊びに來て下さいます。このKさんといふ若い先生であり友達なる方はもと帝大の醫科にゐて、今は文科に籍のある科學者であり、同時に藝術的素養にも缺ける所のない人ですからもし子供達に研究心さへ起れば非常に德をする譯ですが、まだ何んだか學問のことなんか夢中で暮してゐます。Kさんの獻身的な指導には唯だ唯だ感謝の言葉もないのですが、まる

でも今では家庭の一員のやうになつて、めつたに御禮の言葉を云つたこともありません。

三人の子供の素質はそれ〴〵違つてゐます。然し大體からいふとどうしても藝術的傾向を多く帶びてゐて、科學的の興味が薄いやうです。致方もないことですが、多少とも補つて行く方がいゝと思つてゐます。然し結局素質は曲げることは出來ないと諦めてゐます。運動は皆な好きで、上手なやうです。少し好き過ぎ、上手過ぎるやうです。

學校は近頃評判になつてゐる成城小學校へ通學してゐます所謂新教育主義を標榜してゐる學校の一つなのですが、未成品で賛成の點もあり、困ると思ふ點もあります。この種類の學校も段々外面的許りでなく、內容的にもよくなつて行くことゝ信じてゐますが、米國風の面白くない教育臭味が國內に蔓延しないように注意したいものです。

妻と子供達との間が圓滿に行つてゐることは私を喜ばせます。その點で今私は何んの杞憂も抱いてゐません。強いて云へば少し甘やかせ過ぎるでせうが、それは不憫の情が伴ふので止むを得ないと思つてゐます。

それから亡兄の妹であり、私の姉である愛子が、もう自分の子供達も大きくなつてゐるので、常々深い注意を三兒の上に拂つてゐて呉れます。この姉は元來情の濃い人ですが、殊に兄に對しては絕對の敬愛をもつて仕へてゐたので、自然その遺兒を出來るだけ面倒みようと思つてゐるのでせう。この夏も半分は輕井澤の姉の別莊にやつて樂しく暮させて貰ひました。

その外の兄弟も代り番に面倒を見てくれます。里見の叔父さんの本讀みと話は面白いといつて、その來るのを心待ちにしてゐます。

それからもう一人三兒の上を日夜非常な心配と愛情で見守つてゐて下さるのは外祖父の神尾將軍です。旅をなされば葉書を一々書いて送つて下さる。旅に出ると云へば、歸つたと云へば必ず見に來て下さる。その無言の愛情は三兒のため必ず生きて來るものと信じてゐます。

自分は癇癪持ちであり、怠者であり、其他樣々の缺點を持つてゐるので、子供達に對し、暗に私のやうになれといふ標準を示し感化薫陶することが出來ないのですから、實は仲々困つた事である。そんな事を色々先から先へと考へて行くと暗い氣持にもなるのですが、子供はそれ〴〵己のものを己の裡から見出し、自然にそれを立派に育てゝ行くだらう位に樂觀してゐる外仕方がないのです。思へば心細い教育係である。

# 母として懐ふこと

厨川蝶子

亡くなつた夫もさういふ主義でしたが、私は子供を教養して行くのには、總てに極く自由な態度で、その個性を尊重し持つてゐる天分を、伸し育てゝ行く樣にしたいと心懸けて居ます。個性を無視して親の望む方面に、無理强ひにでも子供を向けて行かうとする樣な、亂暴な教育方針は、絕對に避け度いと思ひます。唯子供等の個性や天分が周圍や境遇に依つて變にゆがめられたり、惡く害はれたりしないやうにとそれには絕えず注意を拂つております。

長男の文夫は十八歲で芝中學校に通つて居ます。生來、藝術的天分があるとでも申ませうか文藝の方面に非常に趣味を持つて居てよく、賴まれてはポスター等を書いたりステインド・グラスの圖案をしたり、又學校で旅行等に行く時には、その校友雜誌に紀行文等を擔當して書く事を樂しむでおります數學が不得手であるかはりに英語はよほど得意なやうに見受けます。此の夏休みには一人でシエイクスピアの飜譯をして居ました。これに父の遺傳とでも申すのでせう。然し斯う申しましても、私は夫の踏んだ道を又子供に繼がせやうなぞとは考へておりません。唯本人の希望通りにその天分を充分に自由に伸し育てゝやる事が出來れば誠に結構だと存じておりますだけです。

次男の次郎も、やはり芝中學校で、十六歲になります。兄の優しい態度とは違つて、至つて活潑な方で身體もしつかりした丈夫な質の子です。どうした事か農業に非常に趣味を持つて居りまして、自分では、大きくなつたら、百姓になるのだと云つて居ます。自然に親んで、好きな野菜や草花果實等を栽培し廣漠な田野を乘馬でゝも見廻ると云つたやうな大

農園主を理想としてゐるらしいのです。

私の家の周圍に咲いて居る草花は、一切自分の手一つで花壇を造り種を蒔き、それを移植したのです。簡單なフレームの中では熱帶植物の培養をさへ試みております。

それで近頃は、日本語で書かれた園藝の研究書では飽き足らないで、原書等を取り寄せて字引と首つ引きで讀みふけつております。兄と違つて、文藝方面には理解も趣味も持つて居りませんが、美しい草花が咲き競るのを非常に喜び、朝も暗い中から、起きて水をやり、晝間も、學校から歸るが早いか、鞄をほつたなりで、庭に廻つて、世話をして居る樣な有樣です。汗を流して土いぢりをしてゐる子供の姿こそはこの俗塵の間にあつて涙ぐましい迄に尊くも見られます。そして美しい花が咲けば先づ父の寫眞の前に供へる事を忘れないのも私としてはどんなに嬉しい事でせう。

三男の守は十二歳で、番町の小學校に通つて居ます。幼い時から、音樂が非常に好きでした。

夫の亡くなる前のことでしたが、輕井澤に居ました時に、ホテルのピアノで各國の國歌を誰れにも習はず獨りで彈奏してゐた事があります。夫もそれを聞いて大層喜んでこれは專門家に就いて敎へて頂いたらなぞと私に話した事でした。そして又左手が、右手同樣に利きますのも幸です。本人も將來は音樂家を希望しておりますので、今は中央音樂院の室崎清太郎氏に就いてピアノを指導して頂いて居ます。それから好んで童謡等も作ります。

斯ういふ風に、三人が三人ともに、行き道が違つて居るのです。唯三人共揃つて數學を好まないと云ふのは親讓りで致方もない事と存じます。

然し私は世間の親御樣方と少し考へが違ひますので、試驗の點數だとか、順位だとかにはやかましく申度くないと思ひます。否むしろそういふ試驗の點數だとか、順位等を過重視する傾向を不滿に思つて居ます。その爲に、何の位子供らの純眞な精神が損なはれます事か。それのみならず點數や試驗等に氣を取られる結果、總ての學問に對して興味を失つて了ふやうになるのを恐れます。いま學生の中の大多數がこの有害無益な試驗の爲めに苦しみ、規定以上の平均點を得むが爲めには不得手な嫌ひな學科に身もやせる許りの勞力を費してゐるのです。それ丈の苦しみを自ら好む學科に苦しむだならどんなに素晴らしい功果が上るか知れませんのに、無駄なことだと存じます。

私は、學問は深い興味を持つて自ら進んで學ばせ度いとこ

そ思ひます。世渡り上の或資格を附ける爲めに卒業證書が必要で手段としての學問にどれほどの價値がありませうか。其涯學問や藝術に深い愛を持つ事が出來るならば、その子が人として、何の位幸福だか知れないと考へます。

世間の人が、偉いと云つて今の俗世間の所謂成功者を手本にせよなぞと子供に云ひ聞かせる傾向がありますが、それは可成恐ろしい事だと思ひます。その偉いと云ふ標準が單に社會上の位置とか財産とかといふ物質的の偉さであつて、人格としての偉大さでなく、唯だ現今の資本主義社會制度に於ける才子、敏腕家、世渡り上手と云つた種類の所謂成功者に何の尊敬が拂はれませうぞ。天眞爛漫な神に近い無垢な子供等をこそ彼等が「手本」として學ぶべきでせう。斯樣に私は考へますから、所謂、偉い人になると云ふことを、目的として勉强させ樣なぞとは思つても居ません。たゞ各々の個性と天分を、伸びのびと、自由に大きく育てて、人格として立派な人になるやうにとひたすら希つてやまないので御座います。

父が亡くなつてから後、子供達は、唯私のみを賴りにし、私の健康を朝夕に心配致します。私が、悲しめば、子供達も理由が判らないながらにも悲しみ、私が樂しげに粧へば子供達も何となく嬉し相にして居ます。ですから、私は自分の苦しみも悲しみも子供達の前では、出來る丈隱くして、一緒に唄つたり、又、遊んだり、畫を描いたり、花を植えたり、總て、お友達の氣分となつて、唯、只管に、子供らを淋しがらせない樣に勉めて居ります。

父が居ない爲に、いぢけた暗い心を、少しでも持たしたくないと、それ許りを心懸けて居るのです。

伸びてゆく若芽よ、彼等だけはこの人世の暗黑面から吹いて來る無情にも冷酷な風にあてゝ凋れさせ度くない。うらゝかな日の光、靜かに降りそゝぐ惠みの雨に健かに育てよ、とこそ祈ります。たゞ過去一年間の苦鬪にさへ勞れ弱つた私自身の健康が彼等の成人となる迄、その衛りの塀ともなり挊ひの士ともなるに堪へ得るか、と思へば心細くも涙のみ流れます。

# 大杉君の五人の子

安成二郎

和田君が本郷の燕樂軒前で、太つた大きな男にズドンとピストルを一發打つたのが、いろ〳〵な方面に影響を及ぼしてゐることは御存じの通りであるが、それが私にも及んでこの原稿を書かせることになつた――といふのは、私は大杉君の遺兒の最近の消息には甚だ疎いので、本當なら、九州へ行つて子供達を見て來た近藤憲二君か、村木源次郎君が適任たのであるが、和田君のピストルのおかげで、近藤君は檢束されてゐるし、村木君はどこへ行つたか分らないさうで、私に順番が廻つて來たが、そんなわけで、私が、どんなにあの可愛らしい子供達が大きくなつてゐるかと、樂しく想ひめぐらしてゐるだけで、それについて新しい材料は何も持つてゐないのである。

この夏休みに魔子が東京へ來る筈で、魔子の友達である私の三人の子供達も樂しんで待つてゐたが、魔子のゐる福岡市外花園町の野枝さんの叔父代準介氏の附近に火事があつて騷いだりしたので、到頭上京は止めになつたが、若し魔子が來てゐて、そして和田君がピストルを打つたら、九州へ送つて行く役目も私に廻つて來たかも知れないが、それにつけても私は、大杉君の友人A氏が、近く一大天災のあることを豫感する、魔子を東京へ連れて來ることはやめにし給へと言つたのを思ひます。天災は遂ひにやつて來なかつたが、無政府主義者には天災よりも人災が恐ろしいのである。

大杉君の子供のことを書くに當つて、一番殘念なことは、彼のたつた一人の男の子のネストルがこの八月の初めに死んだことである。同志の一人が餘りの殘念さに、女の子と代れば好いのにと言つたが、さうも言ひたい位ゐ皆の殘念がつた

のである。ネストルは昨年の八月八日に柏木三七一の大杉の最後の家で生れたので、やつと一年生きたばかりである。春頃、肺炎にかゝつたと聞いて、しまつたと思つたが、それで弱つてゐたらしく、心臓痲痺で死んでしまつた。大杉君が死んでから、四月には前夫人の堀保子さんも死んだ。

大杉君は子福者である。野枝さんと一緒になつてから十年の間に五人生れた。もし保子さんが多産的の人だつたら、一緒にゐた七八年の間に三四人生れてゐたかも知れない。

長女の魔子は、大杉君が最も窮乏してゐた巣鴨宮仲の家で生れた。その時の葉書が私のところにある。

一昨々日女の子が生れた。まだ名はきまらないが、僕は魔子と主張してゐる。女中はなし、忙がしくてやりきれない。二十八日夕。

消印を見ると、六年の九月である。そこで日記を見ると、

十月十五日。……夜、大杉君を訪問、家が分らなくて閉口した、巣鴨といふ町にはいつも閉口する。暗い道を歩き廻つてやつと探し當てた。家具の乏しいガランとした家で、パカに薄暗い電燈の下にもう野枝さはん起きてゐた。大杉はまだ裕衣を着てゐた。それでも元氣で、名前は魔子ときめたと言つてゐた、野枝さんは反對したが通らなかつたと言つて笑つてゐた。金を○圓置いて來た

私はその巣鴨の家には、それ一度しか行かなかつた。次ぎのエマは六つ位ゐになるだらうか、之は第一のエマで、生れると間も無く、今も天津日本租會にゐる大杉君の二番目の妹の牧野田[illegible]枝さんの所へ養女に貰はれて行つた。牧野田氏は軍人だと聞いたやうに覺えてゐる。このエマが彼の子供のうちで一番無事に育つてゐる。母の松枝さんがエマを抱いて馬に乘つてゐる寫眞を見たことがある。この子がどこで生れたか、私は記憶しない。

第二のエマは十年の春、鎌倉で生れた。恰度大杉君がチブスにかゝつて、築地の路聖加の分院に入院した時で、野枝さんはお産が濟んで一週間目には病院にやつて來て附きつ切りに看護したのである。大杉君があのチブスに助かつたのは野枝さんの看護によるのだが、知合ひの醫師奥山氏が、病院ではチフスだけの手當をするが、チブスはもういいから肺炎の方を注意するやうにと言つたさうで、野枝さんは其の方に夜の目も寢ずに注意してゐた。チブスで死ぬのは、高い熱の爲めに肺炎になるからださうで、それを注意すれば大概助かるさうだから、一寸ここに一般の注意を促して置く）さて、エマといふ名は、エマ・ゴールドマンの名をとつたのであるが、

この第二のエマは野枝さんの叔母さん(代氏の姉)が福岡へ連れて行つて育てたので、大杉君がフランスから歸つて、柏木に移つてから引取つた時には、九州辯が可愛らしかつた。

その妹のルイズは今年三つで、九州へ行つて來た近藤君の話によると、之も九州辯になつてゐて、姉のエマと猛烈なとつ組み合ひの喧嘩をしてゐるといふことであるが、この子は實に可愛い子であつた。子煩惱の大杉君はよく乳母車に、エマとルイズをのせては、夕方散歩に出たが、それを憲兵が、子供を連れて戸山の原へ散歩に行くと、柔道の達人に報告したわけなのである。その形見の乳母車は可なり上等なもので欲しい人があつたらと言つて、今私の家の物置に預つたまゝになつてゐるが、希望者にお譲りすることを此の機會に廣告しておく。

ルイズはルイズ・ミッシエルの名をとつたので、逗子で生れて、今年三つになる。大杉が思ふさま贅澤性を滿足させてゐた頃に生れたので、その子の頭を洗ふのに、何とかいふ資生堂の石鹸を使つたさうで、髪が柔らかに房々とちゞれてゐたあのまゝの髪で育つたら、髪にキッスする人の幸福は羨望すべきものである。

その次ぎが、たつた一人の男の子のネストルである。ネストルは不仕合せな子であつた。生れて四十日目に兩親に別れて、一年目には自分が死んで了つた。無政府主義將軍ネストル・マフノの運動に大杉君が興味をもつてゐた時で、名前はついたかと私がきくと、傍にゐた野枝さんに、ネストルにしようかネと、何度目かの相談といふ調子で大杉君が言つた。ネストルつて何だときくと、さういふ無政府主義者がゐるんだその人のことを此の間書いたからと彼は答へた。改造に出た彼の『無政府主義將軍』といふのがそれだ。

大杉の子供はそれだけだ。然し、もつと生きてをれば、もう何人かゞ生れたに違ひないのである。大杉自身も九人の兄弟があつて、四人が男、五人が女であるが、そのうち男が二人、女が一人は死んでゐる。

五人の子供のうち、魔子だけが父親の記憶をもつて生長するだらう。彼は一番魔子を可愛がり、よくどこへでも連れて歩いた。小さい時から抱いて歩いた。刑事をだますことなども魔子は天才であつた。男の子のやうな活潑で、男の子と遊んでも負けてはゐなかつた。東京にゐる時は學校へもやらずに育てられたが、悧巧で、ローマ字なども綴つてゐた。福岡へ行つて春吉小學校へ入つたが、成績は百三十名中の三十番で、成績表を見ると、

| | 修 | 國 | 算 | 圖 | 唱 | 體 | 手 | 操 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 一年 | 甲 | 甲 | 乙 | 乙 | 甲 | 甲 | 甲 | 甲 |
| 二年 | 甲 | 乙 | 乙 | 甲 | 甲 | 甲 | 甲 | 甲 |

で、總評甲になつてゐる。

大杉君は野枝さんとも戸籍上の夫婦などでは無かつたので無論子供達には皆んな籍が無かつた。九州へ行つてから、野枝さんの父の戸籍に入れられたといふことで、生れた月日などはどういふことになつてゐるか、野枝さんのことだから、臍の緒を紙に包んで、それに生年月日を記して置くやうなことをしたかどうか。さうすれば生れた通知を受けた時、九州の方で書きつけてでも置いたので無ければ本當の日が違つてゐるかも知れないが、少くとも魔子の生れた日が大正六年の九月二十五日なことか確である。

名前も戸籍に入るとき、皆な改められた。魔子は眞子となつた。エマは笑子になつた。ルイズはるい子になつた。そしてネストルは榮になつた。大杉君が魔子を可愛がつたやうに野枝さんはルイズを可愛がつた。そして、エマは叔母さん子であつた。ネストルはきつと皆んなに可愛がられたであらう

九州では、魔子は代氏のところに一人妹達と別れてゐる。エマとルイズはそこから少し離れた野枝さんの兩親、糸島郡今宿の伊藤吉氏方にゐるのである。

さて、大杉君の子共と言つても、まだ皆んな小さい。どんな風に育つて行くか、大きくなつてから、親のつけてくれた名の意味を考へ、親の通つて行つた道を新しく踏み直さうとするか。それとも、大杉君の兄弟のやうに、おとなしい無事な生き方を選ぶか、私には丸で見當のつかないことであるが、とにかく、さういふ機會があるか無いかも分らないが、あの子供達が大きくなつてから見せたいと思つて、私は大杉君が殺された當時から、盗まれた遺骨のことまで、三四種の新聞をとり揃へて置いてある。公表することを許されない寫眞も手に入れて保存してある。それは私にとつても、忘れることの出來ない記錄なのである。少くとも魔子だけは、遠くからぢつと見守つてゐる人々を失望させないやうに生長して行くであらう。（九・六日）

# 世界婦人欄

## 婦人内閣の末路

### 近頃讀んだ婦人問題の著書の中から

千葉　龜雄

議論の本ばかりあまり續くので、たまには小說などもどうかと、左の名目のものを紹介いたします、題は「When Woman Rules!」で、副題に「第一婦人内閣下の英國」または「最初の婦人内閣物語」ともあり、著者の名は「無名な一代議士」といふ匿名になつて居ます。一九二三年に出たもので、もとより通俗小說とはわかつて居ますが。廣告に「冴えきつて素的に面白い文體、全英國の評判になるべき小說」などとあると、つひ氣を惹かれるではありませんか、それに婦人次官の居る勞働内閣下の一代議士！　まあ、今日の日本は、もとより勞働内閣ではないけれども、たとへば永井柳太郎さんや、尾崎行雄さんがこんな題目の小說を書いたとしたら、好奇心ででも、誰でも一寸、頁をかへして見る氣になるといふ譯でありますまいか。

### When Woman Rules!

話は、内務省に務めて居る女役人達のお饒舌りの場から始まります。「御覽なさいよあのアリスさんは、何か心配事があるんぢや無い？」、ロオズが言ひ出すと、エセルが、「そりや勿論男の事でよ」「すると貴女は、アリスさんが戀をしてるといふの？」、「エエ、そうですともさ。あの歳になれば誰だつてね。こんな牢の中に居る女は誰だつて！。たゞ待つて居るのは一人の男が來て、鎖を解いて、自由の生活へ連れて行つて呉れることだけですよ」するとロオズが笑つて、「馬鹿をおつしやい。こゝだつて、結婚の奴隷生活よりは、よつぽど増しだわ」、するとエセルが、「それは、夫と妻が、どつちが奴隷になるかといふだけの問題よ。私はもうこの鎖は眞平だわ」、「それにしてもアリスさんが結婚したら、夫になる人は堪らないわね。あんなに仕事の好きな人ですもの、ハスはいつもぎゆうぎゆう使はれて許り居るわね」「アリスさんはそんな方ぢやないのよ。あれで好く物が解つてる俐巧な方ですわ、どんな私共の監督だつて、あの方のように、要領がよく理解して下さる人は一人もないのよ」

このアリス・ペラク孃は、今年二十六歲、書類整理をして居る若い女達の監督官で、氣立てと頭腦のよいので省中に評判の女です。同じ役所に居るバシル・ムウレイといふ青年とは、親も兄弟も無いので似寄り同志、いつか戀に落ちて居る。それがや薄々同僚や下役連の耳に入つて、岡燒きの材料にいつもなつて居る。

所が今度の英國では、これまでの男性内閣では駄目だとあつて、總選擧の結果、婦人達が内閣を組織することになる。首相がフェヤフキルド夫人で、内相がドラ・スタンドル孃、どちらも、材能においても、人格においても申し分がない、所が法相にストラボオ伯爵夫人が一枚入つて來たのが此の内閣が破綻する元になる。が、それは後の話として、首相は五十二歲の白髮の婦人で、十年前夫に死に別れた。夫人は自身がすでに英國婦人の模範と云はれるばかりか、陰に夫人の内閣を助ける

のが、ヘンリイ・コオルフックスといふ人格の高い老政治家である。彼はこの婦人内閣の政策を「平和」、「能率」、「正直」の三箇條に置くべく、外に「平等局」といふものを置いて、一切の不正不平等を除くべきことを勧めた。そして婦人内閣は漸々その政策に從つて進んだのである。一方コオルフキックスは、名を隱して田舎を巡りあるき、社會不平等の實相や、婦人内閣の評判をもれなく聞いてあるく。

この時、青年ムウレイは、早くも才能を認められて、内務省の重要な役人に擧げられ、萬事を、内相スタンドル嬢と二人で直接に決裁することになつた。またアリス嬢の方は、司法省へ轉勤を命ぜられて、これも繁劇しい能率を擧げる。それから、これまでの男性内閣が、一向に能率を擧げ得なかつたのは、老人を使つて居たのと、惰實を許して居た爲とも一つ事務が無用な繁雜を極めて居た爲だとして、この内閣では急に法令を改め、五十以上の官吏には、澤山の年金をつけて罷めて貰ひ、萬事を大臣の直裁にした。これも婦人内閣が、男性達の怨みを買ふ一つの原因となつた。

處でアリス嬢とムウレイの戀は當然に一つの難關に陷つた。それはこんな内閣において、上役と下役の戀が、どう結果すべきかである。然るに法相の伯爵夫人には、ポンペイといふ若い策略家がついて居る。二人はお互に利用し利用されて、うまく成功して夫人が今度法相になり、ポンペイが次官のやうなものになつた譯だが、或る日二人が田舎で密會してる場所を、アリス嬢に見付けられた。ポンペイが大に弱つて、上役の權利で直ぐ嬢を免職して了つた。それを戀人たる内相次官のムウレイが知つて、アリスと相談の上、密かにアリスと結婚して、田舎に小さな家屋を買ひ、そこへアリスを棲ませ、自分は一週間の終りにいつもそこを訪れる。が、アリスがまだ司法省に居た頃、元の女監督官であつた或る女の部屋の一室を借りて居た。その女の弟のワウオルタアといふのが、またアリスと同じに司法省に勤めて居たが、いつとなくアリスを戀ふやうになつた。しかしアリスがムウレイと結婚して、逃げるやうにその部屋を去つたので、彼は狂人のやうになつてアリスをつけ廻し、とうとう二度ばかりその家を訪ふたのである。然しアリスはその話をムウレイに打明ける事が出來ぬ。そこへも一つ困つたのは、内相のスタンドル嬢が、ムウレイに婆あるとも知らず、内心ムウレイを慕ひ出して來たことである。かくしてアリス對ウオルタア、ムウレイ對内相、法相對ポンペイのゴシップが、政策の好し惡し以上に國内の評判になつた。首相夫人はそれについて心配し出した、この英國最初の婦人内閣の價値を示すには、どうしてもまづ大臣の人格を公明にせねばならぬと。そこでその風聞の實否をただし始めた。そして法相對ポンペイ以外の風評は、事實が少しも疚しい事でないとは解つたが、さてまたムウレイに妻があると聞いた内相スタンドル嬢は、烈しく絶望の揚句、爆發の爲に辭職して外國へ去つた。さうする中に法相のストラボオ伯爵夫人が、今度の議會に政府案として、過激な離婚法律修正案を出すと共に、夫の伯爵は、夫人とポンペイに向つて、私通の訴訟を起すこととなつた。首相夫人はまた困つた。どうかして、法相夫人の修正案を、もつと穩やかなものにしたいと苦心したが、どうでもその修正案が通らぬので、首相夫人は、とうとう思ひ切つて内閣を投げ出して了ふ。斯て婦人内閣は終りを告げた。

青年ムウレイはどうしたか。金持ちな一米國人がムウレイの素的な才能を看破つて、新計畫の道路會社の仕事を彼に一任した。そして金も出來た。夫婦の間に子供も出來る。しかし妻のアリスは、十六歳の時から勤めに出て、學問をする隙が無かつたのを悔み、この頃は、お手のものの能率を家庭事務の上に發揮して多くの餘暇を造り、博物館や、聽講やに出かけるので、今では大へん凡ての知識に富んだ母となり、家婦となつた。

これが「婦人が統治する時に！」の一篇の梗概であります。

この小說の作者は、もとより純藝術の制作といふ積りでペンをつけたものではありますまい。しかし、戀愛や、社會の實際生活や、勞働爭議や、勞働者の生活や、その他の社會相の現實に觸れた點では、さすがに遊戯でない眞劔な見識と知識と批評を持つて居るやうに見えます。また政治家として、實際家としての女性の材能を、決して男性に劣るものでないと認めた卓識も見上げたものと思ひます。しかし、英國の現代で兩性道德のひどく混亂して居る實例を擧げ、法相夫人の行爲を强くけなしつけ、アリスとムウレイの愛の生活を、最後で熱烈に描いて居る企圖を見ますと、著者はやはり、女性の故郷は家庭と戀愛にあるといふ結論を懷くものではないかと思ひます。が、この最初の婦人內閣が、政策や、統治の成績の上で破れずに、女性個人々々の戀愛沙汰や、それに對する風評の大波に漂はされて、つひその爲に瓦解したといふその點に、著者が、眞面目に力點を置いて居るのは馬鹿々々しいと云へませうか、決してさうばかりも云へますまい。首相夫人が「われわれ婦人は、もう下らぬ噂話には馴れ切つて居ます、打捨つて置きなさい」と言ひ乍ら。やはり根のない、理解のない風評が、內閣の土臺を揺かす元となつたので「あゝこんな事をよして、もう一度、女としての自然の生活に歸りませう」と溜息をついた時、コウルファクスに、「これは戰爭ですよ、司令官がそんなに弱くてどうしますか」と叱られた處にも、我等は多くの同情を寄せることが出來ます。ある人と人との間に、何といふ理解のないこの世の中でありませう？。

# 男裝化其他の趣異

大橋　房子

## 個性美

前々號の「流行概觀」に於いて私は服裝の總合美と、その總合美を出す爲飛んで行く流行を取捨して自己に適合せしむべきことを述べた。流行を自己に適合させるといふことはつまりその人の持つて生れた個性美を清新な形に於いて表現することである。

私達は一口に「似合ふ」「似合はない」といふ言葉を使ふ。「うつろ」「うつらない」を選擇の動機に置く。直觀が凡てであるとすればそれだけで充分な筈なのであ　。だが私は巴里の女を觀て來てから、日本婦人の服裝の原理である此の「似合ふ」「うつる」が案外疎漏なものであるのに氣付いた。それはだいたい日本服といふものが直線を基調とする、そして小道具の多いものであるからでもあらうが、私は先づその多色多彩――といふよりは寧ろ

過色過彩なのを眩しく感じ、次いでかなり凝つた服裝をしてゐてもその服裝が着てゐる人のひとになりきつてゐない――つまり、着物と着主とがいかにも二つの別な物に　えるのを、妙に物足りなく感じた。此の點に於て洋服は其自身肉體の輪廓を生かす形に出來て居るし、個々人のファンタスィーを映し出す自由を持つてゐる爲もあらうが、巴里の女は、皆が皆とはいへないまでも、概していつていかにもその人でなければならないといふやうな實に割切れた服裝をしてゐる。これは彼女等が服裝の選擇乃至創製に際して、單に「似合ふ」とか「うつる」とかいふ皮相的標準を突き破つて、もつと科學的に、分解的に、そして合理的に頭を働かすからではあるまいかと思ふ。

一例を擧げれば、こんなことを言つてゐた女優さんがある。

「私には黃色と、そして緑がよく似合ふでせう？ 髪も眼も黃色だから黃色の似合ふのに不思議はありませんけれど、何故緑が似合ふのだといふと、それは私の瞳の黃色に混つて細い緑の線があるからです。」

つまり彼女等は非常によく自分を識つてゐる。識つてゐるばかりではない、非常に細く自分を研究してゐる。彼女等の選擇の的確さは此處から生れて來るのではないかと思ふ。

頭の結び方を定めるものは顏と衿足と肩の形である。着物の型を定めるものはもとよりその人の體格と四肢の長さとである。色彩選擇の標準は頭髪の色、眼の色、肌の色に在る。彼女等はまた行く所々の光線や色彩、雰圍氣によつて服裝の效果を割り出すことも心得てゐる。

芥川龍之介氏はその「侏儒の言葉」に於いて「女人の服裝は女人自身の一部である」といつて居られるが、私は服裝の全部が女人自身に成りきつたところにこそ、眞の個性美といふものは生れて來るのであると思ふ。

## 男裝化の復活

はやれば倦きる。そしてすたる。或ひは、奇拔なものゝ出現を待つ。これはあまりに見えすいた流行心理である。見様によつてはずゐぶん殘酷な此の心理は、比較的長い間可愛がつてゐた爽型或ひは筒型の單純な輪廓に、そろ／＼ケチをつけ出した。あれはロープ、シュミーズだ、襦袢だか着物だか判らない、といふやうな惡口も聞える。そこでいろいろの小細工が始つた。

裾を二段三段に重ねてみる。横裾に添うてレースのやうに切りこんでみる。二重にして上の一枚を一方にたくし上げる。縦に割つて内部から襞を取つた別の布をはみ出させる。肩や袖、裾の一部を切り除いて、リボンを編んだもので充す。力士のまはしに似た房で裾や肩を飾る。或ひはその房を狹く、長いものにして股の一點――例へば脇腹とか臍のあたりとかから落す。行き詰つてはちよいと男の眞似をしてみたくもなる……

一頃、婦人運動に關連して、女性の男性化が皮肉に傳へられたことがあつたと思ふ。私も羅　の婦參大會で、頭をざんぎりに、首にカラーの枷を附けた典型的な無性乃至稲性婦人を見かけた。だがそれは珍しい婦人運動者の中で正に紅一點だつたのである。畢竟女は女である。婦人運動の望みは女が女であるといふことに在る筈である。私は前記の大會に於いて、先驅婦人等の殆んど全部が、心ばかりかその外觀まで、あまりに女らしくあるのを寧ろ意外に思つたくらゐである。

最近巴里に現れた男裝的分子は、婦人運動

とは何等の關係もないもの〻やうに思はれる。女性の戸外運動や社會的活動が盛んになつて、從來のルーズな、遊びの多い婦人服に不便を感じ初めたのも一つの原因であらう。頽廢に傾きつ〻あつた流行の趨勢の反動とも見ることが出來やう。だが私は此の現象を、行き詰つた流行がふと見付けた一時の逭れ場所と解するのが一番當つてゐるやうに思ふ。

昨秋あたりから、男の鞄を小くしたやうな袋を手に握ることがはやつてゐたが、見樣によつてはそれが男裝的流行を導き出すモーティフだつたといふことも出來るであらう。

具體的にいへば、此の男裝的分子は腰以上の部分に在る。運動服や狩衣には男子のと何う變つたところのない半ずぼんも用ひられないではないけれど、さうした小數の場合を除けば女は袴を着けるべく宿命づけられたもののやうに思はれる。そこでも一度具體的にいへば、胸は男のワイシヤツと選ぶところがない。首枷のやうなカラーの代りに、柔かな衿を折り返して華奢なリボンを蝶形に結んでゐる。袖口にもワイシヤツの變形が見出される。中にはタクスイードを殆んど其儘眞似た上衣なども見える。こんな服を着た場合の帽子は山高、スイルクハツト、麥稈を想はせるやうな簡素なものが選ばれる。伊達に洋杖(カンヌ)を抱へることもはやつてきたやうである。私は男裝の端正さを通して生地の女のエレガンスを表現するといふことを、いちがいに貶すことが出來ない。

## 防寒準備

秋冷の候に向つて用意しなければならぬのは毛皮である　酷寒の皮外套は別として、巴里の女は夏でも涼しいとすぐ肩に毛皮をのせる。腕は丸出しにしてゐても、背には白や茶の、頭のついた狸などを被負つてゐる。日本では一番重要な防寒具である毛絲で編んだものが、向うでは室內用に限られてゐることも毛皮の用途の廣い一つの原因であらう。

外套の衿、袖口、裾はもとよりであるが、通常服や夜會服の裾に毛皮の線を附したものもよく見かける。薄物の裾に波の出來るやうな襞をとつて、綿のやうな毛皮で輪廓をとることなども、新しい趣向であらう。

夜會用には豪奢な、そしてフアンタスティクな外套と共に、外套を脫いだ時肩を包む肩掛を用意する必要がある。去年は西班牙ショール全盛の觀があつた。これはかなり永續性のある流行だと思ふ。西班牙ショールとは、活動寫眞でおなじみでもあらうが、敷物ほど大きな四角い布の周圍から、おそろしく長い重い手編の房を垂らしたもので、之を三角に折つて引曳り氣味に肩を包むと、房の間から夜會服の裾が仄見えて、非常に效果の強いものである。南國らしい花模樣で縫ひつぶしたものなど驚くべく高價でもある。だが肩掛などは到底毛皮の比でない。私は芝居に行く每に考へたものである。これだけの素晴しい毛皮が購ひ得るほどそれはどの世の中にはあり餘る富の力がひそんでゐるのであらうかと。

# 最近の英米婦人界

市川房枝

編輯者の御希望で、今度は英國の婦人界の事をも少し書く事にしました。尤も英國の婦人界とはいふものの、米國の時に御斷りしましたやうに、社會的方面での婦人の團體的な及個人的な活動を申上げるだけにとどめます。尚英國の事は初めてですから、本誌八月號の本欄に掲げられた事を除いて、此の四五月頃の事も大な事だけは書く事にします。

## 米國

### ▽東洋婦人勞働狀態調査會

最近到着した米國婦人勞働組合聯盟の機關雜誌を見ますと、過般ニューヨーク市で開かれた同聯盟の總會決議中、九月號の本欄で御紹介した以外に『東洋婦人勞働狀態調査會を組織する事』が附け加へられて居ます。

右調査會組織の趣旨は『東洋諸國に現在存在してゐる婦人の長い勞働時間、夜業、不衞生な狀態、兒童勞働、工場法の不備等は婦人の健康を甚だしく害するものであり、然してそれ等産業の或る部分は外國の資本によつて經營されてゐるから、この儘に捨てて置かれない』といふのです。尚總會は同時にアムステルダムの國際勞働組合聯合の婦人部へ、米國の婦人勞働組合聯盟と同樣に委員會を設けて此の東洋の婦人勞働の狀態を調査する事、然してその委員會にはヨーロッパ洲の婦人勞働組合から三人の顧問委員を任命するやう申送る事、尚進んではこの決議を米國商務大臣に送る事を決議して居ります。

### ▽婦人の大統領候補者

カリホルニア州ロング・ビーチのプレム女史は、六月六日に開かれた米國禁酒黨の全國大會で、副大統領候補者に指名されました。婦人で副大統領候補者に指名されたのはこれが最初だといはれてゐます。

禁酒黨といふのは矢張政黨の一つではありますが、現在では殆ど存在を認められてゐない程で、從つて指名はされても勿論當選の可能性はありません。

### ▽民主黨全國大會と婦人

六月二十四日からニューヨーク市で開催された民主黨の全國大會は、百三回も投票してやつと前英國大使デビス氏と大統領候補者に、ネブラスカ州知事ブライアン氏を副大統領候補者に指名するといつた大混亂を呈しました。

民主黨内に於ては婦人は、共和黨婦人が漸く今年獲た男女同等權を、一九二〇年の大會以來行使して來ましたが、此度の大會に於ても婦人代表者四十六人訪問者數百人といふ未曾有の多數で、共和黨婦人以上の活動振りを示しました。

オデイ夫人はニューヨーク州から選出された代表團の團長に選ばれましたし、南カロラ

イナ州のスプリングス夫人は資格審査委員會の委員長に選ばれました。スプリングス夫人はまた民主黨大統領候補者としてマカダー氏を指名する事に贊成の演說をしましたし、夫人自身副大統領候補者の候補の一人にあげられました。又ケンディ女史は大會の副委員長にあげられ、委員長の留守の時は議長をしました。其他ブラウン夫人はデビス氏の大統領候補者指名に、バーレット夫人はグラス氏の大統領候補者指名に贊成の演說をしました。ミラー夫人はスミス氏の大統領候補指名に贊成の演說をした外、ク・クラックス・クラン(白衣團)の問題が議題に上された時、これに對し非常に反對の演說をしました。

　決議された政綱の中婦人に關する項は、共和黨同樣何にもありませんでした。特に婦人の法律上に於ての差別待遇に關しては、ブレドカート夫人が會長をしてゐる民主黨婦人同盟及ルーズベルト夫人、パーキンス女史等で組織された婦人顧問委員會から「婦人の保護法はこのまゝとして、婦人の差別的取扱を除く事」といふ意味の一項を政綱に挿入する事を申出たのですが採用されませんでした。

## ▽婦人の州知事

ニユー・メキシコ州の州國務長官であるチエコン夫人は、副知事が缺員になつたのでこの代理をもしてゐますが、去る七月知事がニユーヨーク市で開かれた民主黨全國大會に出席した留守中は、知事代理としてこの仕事をしました。尙州知事は州國民軍の司令官をも兼ねてゐますから、夫人は知事代理としてその職も兼ねて居りました。

　婦人が直接知事の仕事をしたのは夫人を以て嚆矢とします。

## ▽グレイプル町の新婦人町長

　ワイオミング州のグレイプルといふ町は約三千位の人口があつて、二つの石油會社と六つの教會と三十人の先生‥‥がある町ですが、最近ワイリイ女史をその市長に選擧しました。

　女史が立候補の時の政綱は『經費の節減』『法律の勵行』『町民の共同』といふのでした。因に女史は書籍店及菓子店の持主で、前にはワイオミング州婦人倶樂部同盟の會長をしてゐました。

## ▽進歩的政治運動會議と婦人

　勞働團體、社會黨、進歩的團體等に、過般ワシントンで組織された婦人政治運動委員會を加へた諸團體は、次期大統領候補者を指名するために、七月四日クリーブランド市で進歩的政治運動會議を開きました。

　この大會は滿場一致で現共和黨上院議員ラフオレット氏を大統領候補者に、同じく上院議員ホイーラー氏を副大統領候補者に指名しましたが、進歩主義を標榜してゐるだけに、又その成立が新らしいだけに、どの政黨よりも婦人が重要な地位に置かれ、充分活動しました。

　大會に於てコステイガン夫人は婦人を代表

して所謂キイノートな演說をしましたし、政綱を決定する政綱委員會に四人の婦人が、又規約委員會及資格審査委員會にも各二人の婦人が委員に任命されました。決議された政綱中婦人に關するものでは「勞働婦人に對しての保護法制はそのまゝとし其他に於ての差別待遇を全部撤廢する事」が掲げられる事になりました。

尙此大會で任命された全國委員會委員の中婦人は十六名で、その中には左の如き人々が含まれてゐます。

コステイガン夫人（前婦人有權者聯盟生活費委員會々長）ハウサー女史（前婦人有權者聯盟幹事）クリストマン女史（米國婦人勞働組合幹事）コーン女史（國際婦人被服勞働者組合副會長）シユナイダーマン女史（ニユーヨーク婦人勞働組合會長）ブラッチ夫人（有名な婦人運動者で社會主義者）アダムス女史（國際婦人平和自由聯盟會長）バーカー夫人（社會黨議員夫人）

此の大會は二大政黨である共和、民主の兩黨に對し、第三黨の出現として來るべき大統領選擧戰に非常な渦を卷き起すだらうと豫想されてゐます。

### ▽服裝改良の運動

舊教（キヤソリツク）婦人協會は最近その協會に屬する約七十萬人の會員に對して、舊敎の立場から見て適當な服裝の標準を定めることの必要を申送りました。どういふのが適當な服裝かといふ具體的な事は指示して居りませんが、これは近頃膝迄位の長さの着物だの、袖が短くて殆ど腕をすつかり出したのだのが流行したり、髮を切つて男の洋服と同じやうなのを着たりするものがある事に對しての一つの反對運動なのです。

### ▽婦人辯護士協會大會

去る七月七、八日兩日フイラデルフイヤ市で婦人辯護士協會の第二回總會が開かれ、プレス女史がこの新會長に選ばれました。婦人辯護士會は已に二十五年以前に紐育に於て組織されましたが、全國的な現在の團體は昨年組織されたばかりです。米國には現在一七三八人の婦人辯護士及裁判官があります。

### ▽婦人の活動展覽會

九月二十二日から五日間、紐育市コモドル・ホテルで、紐育職業婦人聯盟主催の下に、婦人活動展覽會が開かれる筈です。この展覽會は一昨年初めて行はれましたが、非常な好評を博したので引續いて每年開いてゐます。今年のはその第三回目にあたります。

## 英國

### ▽婦人參政權獲得運動の其後

英國婦人は一九一八年に參政權を獲得しましたが、これは制限選擧で三十歲以上の婦人で地方自治體の選擧權を持つてゐるもの、若しくはその妻でなければならない事になつて居ます。從つて此の選擧權を擴張し男子と同じく二十一才迄に引下げる運動は、當時引續

いて行はれて居ります。

此度の議會では本誌八月號に永井氏の書かれた通り、去る五月勞働黨議員アダムソン氏から右の改正を含んだ選擧法改正案が提出され、六月十九日に第二讀會を通過しました。然し同案に對しては現政府はあまり熱心でないらしく、それに一方では若し婦人に男子と同様の參政權を與へると、婦人の有權者の方がずつと多くなる、すると婦人によつて國家が左右される事になり國家が衰微するといふので反對してゐる人、及一九一八年に選擧法を改正するとき今後十年間はなぶらないといふ内約があつたとかいふので反對してゐる人が少くないので、此案の通過は此度は覺束なさゝうです。

### ▽戰爭の原因廢止大會

『戰爭の原因を防止するための大會』が國際婦人協會主催の下に、五月五日から八月迄ロンドンのウエムブレイに開催中の英帝國博覽會内で開かれました。出席者は國際的な婦人團體の代表者及世界的各國からの代表者で、國際婦人協會々長アバーデン侯爵夫人が議長となり、次の諸項に就いて意見を交換しました。

教育と戰爭防止、賃銀稼得者の權利、國際的經濟問題、國際聯盟、少數民族、軍備徹廢、國民外交等、

國際聯盟にゐられる新渡戸稻造博士は講演者の一人として、此會合に出席されました。

### ▽英帝國赤坊展覽會

花國赤坊週間協會は、七月の最後の一週間英國帝國博覽會場內で「赤坊週間」を催しましたが、これと關聯して英帝國全體に亘つての赤坊展覽會を開く事にしました。尤も展覽會といつてもカナダや印度やオーストラリア等から赤坊を持ち寄る譯には行かないので、赤坊を裸にして寫眞を撮り、それに年齡、重さ、身長、齒の數といつた事項を二十二齋き醫者の證明を添へて出す事にしました。そうして集つたのを專門家が審査し、其の優秀なものを表彰する筈です。此の催しは勿論母性及子供の保護を宣傳するためなのです。

### ▽國際婦人技師大會

去る四月二日から五日迄、英國のマンチエスターに於て、第二回國際婦人技師大會が開かれました。ベルギー及米國からの代表者を交ぜて約四十名の出席者があり、婦人技師を増加する方法其他に就いて協議しました。

### ▽母親の後見人としての權利

自由黨婦人代議士ウイントリンガム夫人は、現在の法律が母親に父親と平等の權利を與へてゐないといふので、今春『父母はその子供に對して同等の責任と權利とを持つ』といつた改正法律案を下院へ提出しました。この案は四月四日に第二讀會を通過したのでありますが、一方政府は同じやうな案を上院に提出し、この方は六月三日に上院の二讀會を通過しました。

所が政府が提出した案はウイントリンガム夫人の案よりもずつと生ぬるいものだといふので、殆どすべての婦人團體はこれに反對しウイントリンガム案を採用するようにと連名で政府に抗議書を提出しました。

### ▽既婚女教員の問題

ノーホーク教育委員會は、今後は既婚女教

員は採用しない事、倘若し未婚女教員が結婚したら、直に退職させる事に決定しました。

　その理由が何であるかは判りませんが、英國に於ける失業問題と關聯してゐるらしく、最近方々で起りつゝあります。

### ▽「等しい仕事に對しては等しい賃銀」の運動

　どこの國でも『等しい仕事に對しては等しい賃銀』の言葉が婦人運動の一つの標語とされてゐますが、去る九月婦人自由聯盟、セント・ジョン社會政治聯盟、看護婦同盟、シクス・ポイント・グループ、ペターシー兩親同盟、男女同等市民權協會同盟、婦人事務員協會、女優參政權聯盟、婦人選擧委員會、女子基督教青年會、デプトホード婦人協同組合等十四の婦人團體がロンドンのトラファルガル廣場に集合し、『男女教員に對して同等の俸給を支拂ふべし』との意味の決議を通過し、これを政府に提出しました。

### ▽地方自治體と婦人

　婦人地方政治協會が最近發表した所によりますと、イングランド及ウエールスに於ては、七九人の婦人が郡會議員として、二二六の婦人が町會議員として、又一〇六人の婦人が市會議員として、働いて居ります。スコットランドでは二人の婦人が郡會議員として一三五人の婦人が町會議員として、又一〇五人の婦人が教會區議員として働いて居ります。

　尙婦人で市長及町長に選擧された數は、昨年の十一月以降に六人あります。

### ▽ロンダ子爵夫人と上院議員

　英國の下院は前に述べましたやうに一部の婦人に選擧被選擧權を與へて居り、現在八人の婦人議員がありますが、上院の方には一人も婦人が居りません。

　一昨年の中、ロンダ子爵夫人は、夫人自身がその爵位を結婚によつて獲たのではなく、其の父から讓られたのであるから、男女差別撤廢法により、夫人は當然上院議員となる資格があるとして請願しました。所が上院の最初の委員會では、これを許可しやうと可決されたのですが、二度目の委員會では遂に否決してしまひました。

　然し夫人はこれにかまわず今度も上院に請願を提出したので、今委員會で審議中との事です。下院婦人議員アスター夫人の夫で上院議員であるアスター子爵は、これが通過に奔走してゐるさうです。

　因に、ロンダ子爵夫人は、今シクス・ポイント・グループといふ婦人團體の會長で、父から讓られた會社、鑛山等を經營し、石炭女王とまで云はれてゐます。

### △婦人のみの出版會社

　最近ロンドンに社員から資本主から總て婦人のみで經營し、婦人に關する書籍を出版しやうといふ會社が創立されました。さうして已に婦人年鑑を出版しました、今は婦人の週刊雜誌を計畫中だとの事です。

# 野上彌生子論

## その印象二つ三つ

森田草平

「いやな用事とはどんな事ですか」と、野上夫人彌生子さんが改まつて訊く。

「さ、あんまり好い用事でもありませんがね」

と、私は麦酒の洋盃を下に置きながら云つた。「實は『女性改造』から彌生子論を頼まれちまつて、その時斷れば好かつたんだが、つい愚圖々々で引請けてしまつて、今日が締切りなんです。何でも隨意に書きますから、少し材料を提供して下さい。」

「私はまだ偉くなるつもりですから批評は後にして頂きたいんですよ。」

「そりや同感ですね。」

「で、どうしてもお書きになるやうなら、細りと痩せた女だと、それだけ書いて下さい。その外の事は何うでも宜しう御座いますから。」

野上夫人彌生子はかう云ふ事を云ひ得る女である。で、この言葉をその儘受取つて、夫人のことを本當に肥つた、づんぐりした婦人のやうに想像する讀者があつたら、それはまだ女性といふものを知らない人だと云ふことを斷言して云はせて置いて貰ひたい。私の信ずる所に據れば、女性といふものは決して自分の本當の弱點をそんな戯談の對象とするものではない、又し得るものでもない。その點に於ては、婦人と雖も矢張り女性である。

私はその時始めてじろりと夫人の方を見遣つた。夏負けのせいか、やゝ蒼醒めた顏をして、近頃本當に滅切り瘦せられたやうである。

「私とY子さんと仲の好いのは」と、夫人はなほつゞけられた。「本當の所はあの方の身丈が低くて、づんぐりしてゐるからよ。でも、一遍御紹介しますからY子さんと會つて御覽なさいまし、そりやあ氣持ちの好い方なんですよ。剝卵子のやうな性質のそれでゐて、好く物の分る……」

「剝卵子がそんなに氣持ちの好いものか分らない」と、こゝで郞君が口を狹んだ。

要するに、私はまだ讀まない五六篇の著作を借りたばかりで、別段何等の材料も提供されないで歸つて來た。そして、机に向つてゐるのである。

「どうもあの人は會つて話して見ても、小母さんのやうな態度を取つて厭だ!」と、嘗て或若い文學志望の婦人連が蔭口を利いてゐたのを聞いたことがある。厭か厭でないかは見る人の心々として、夫人が「小母さん」のやうな態度を取るのは、必ずしも若い婦人連に對してばかりとは限らない。郞君の友人――郞君と云つても、もう好い加減頭の頂邊が薄くなつてゐる――その友人たる吾々に對しても、何うかすると子供扱ひである。そして、それが此頃になつて始まつた譯ではない。若い時代からその通りである。

吾々の友人Mが今でも醉ふと口惜しがつて（?）話す一つ話がある。それはまだ私どもが大學生の時分で、近頃野上が美しい妹を連れて來て同棲してゐると云ふことだから見に行かうぢやないかと云ふ相談が持ち上つたことがある。Mが主唱者になつて私を引つ張つて行つた。そして、道灌山から田端の上を拔けて、線路傳ひに染井の墓地まで步いて行つた。勿論電車と云ふやうな便利なものはない。染井の墓地と云へば、都離れた僻遠の地である。その墓地近くの或大きな植木屋の離座敷を借りて、若い夫婦は人目を避けて飯事のやうな生活を營んでゐたのである。妹と云ふのが怪しい位は大凡そ分つてゐた。けれども、兎に角妹と稱するんだから見に行く權利はあると云ふので押し懸けたのである。私はその時始めて野上夫人の目通りをした。が、その時の印象はどうもはつきりしてゐない。たゞMの話によると、かう云ふのである。「あの時何かの序に英國プレラフアエット派の詩人ロセツチの話が出た。で、お互に知つたか振りで甲論乙駁してゐると、側から口を出して「Mさん、それはガブリエル・ロセツチですか、それともクリスチナ・ロセツチですか、どつ

ち？」と云やあがつた。處で、俺は田舎の高等學校から出ての大學生で、ロセツチに二人あることなんざあ知らねえ。忌々しいとは思つたが、知らないから何うにも仕樣がなかつた」と云ふのである。(この話は考へて見ると、どうも初對面の時のことではなかつたやうにも思はれるが、今記憶がはつきりしないから、この儘にして置く。その當時の大學生が今の大學生に比べて、いかに物識らずであつたかの一つの例にはならう。但し書物はその當時の大學生の方が餘計讀んでゐたやうである。一概には云はれぬけれども)

　これは二十年前の話である。が、最近にもかう云ふ話がある。これは私自身の經驗したことだから間違ひはない。或日私と野上君とが寄つて友人Nの陰口を利いてゐた。(私どもだつて友人の陰口位は利く。但しそれを永久に陰口として通さうとは思はない、必要の場合にはそれをその友人の前で大平に云ふだけの勇氣は持つてゐる。そして、この事はもうその前で云つてしまつた後だから、こゝにも書き得るのである。但し當つてゐるかゐないかは保證しない。)曰く「どうもあの男は自分に都合の惡い理窟は棚へ上げて置いて、都合の好い、自分に有利な所ばかり取つて、ぐん〳〵ロヂカリイに押寄せて來るから敵はないよ。」「さうだ、それでゐて自分ぢや公明正大な態度を取つてゐると確信してゐるんだから宜しくないね」なぞと乘氣になつて饒舌つてゐると、側にそれを聞いてゐた彌生子曰く、「哲學者といふものは皆さう云ふものですよ、さう云ふのが哲學者ぢやありませんか」と。郎君は知らず、私にはこの言葉はギヤフンと來た。その通りだとは思つたが、御尤もですとも云へず、感服仕るとも云ひ樣がないので、その儘默つてしまつた。

　一口に云へば、彌生子夫人は女としては稀れに見る聰明な婦人である。或は頭腦の好く働く女であると云つても可い。

　何時、何を書いて偉くなつたかと云ふやうなことは、はつきり云はれない。最初『ホトヽギス』に書いて故夏目先生に認められてから、着々として地歩を占めて來た。そして、一旦占めた地歩は決して失はない。この堅實味は男子の間にも稀れに見るものである。大抵女流作家といふものは、線香花火か流星のやうに、ぱつと燃えて、ぱつと消えるのが普通であつた。夭折するか、書けなくなつて、何時の間にか姿を隱すか、兎に角永つゞきのしないものであつた。その間に立つて、一人久しきに亙つて聲價を失はないのみならず、一作は一作と好くなつて行くわが野上夫人の如きは、誠に當代の偉觀とするに足るではないか。實際、「私はまだ偉くなるつも

りですから」と云はれたあの言葉が決して戯談でないから驚くよ。

勿論、それは實力の致す所である。が、それと共に、決して多作をしない、濫作をしないと云ふやうな、周到な用意の拂はれてゐることも見遁してはならない。そして、自分の作を載せる場所載せる時と云ふやうなものに關しても、私どもの到底考へ及ばないやうな、細心な注意を拂つてゐられるらしい。惡く云へば、つまり女ながらも明哲身を保つの術を心得てゐられるのである。尤も、私はこれを惡く云ふつもりで云つたんだか、好い意味にしか取れないと云ふ讀者があつたら、それでも一向構はない。

處で、それ程用意周到な性質であるだけに、一面に於ては夫人の生活を單調で平凡な、極めて面白くないものにした。一生を一擲に賭けるやうな、思ひ切つた眞似は、勿論する必要もなからうが、必要があつても夫人には出來なかつたらうと思はれる。そして、それは夫人の生活ばかりでない、作品にも影響してゐる。さう云ふ意味で夫人の作を面白くないと云ふ人があつたら、私は直ちにその人に同意する。が、夫人の作の面白味はさう云ふ所にあるのではない。矢つ張り周到な、行き屆いた觀察の間に、理智の輝く、所謂自然主義的な作品にあると云はなければなるまい。「お芋の皮を剝き〳〵、お襁褓の洗濯をしながら小說を書いた」と云はれるジエーン・アウステンの生活が、直ちに夫人の生活に當て嵌められるかどうかは知らないが、矢張り夫人の眼の及ぶ家庭の周圍に於ける日常生活の情味に豐かな描寫が、夫人の好まれると好まれないとに係らず、その獨擅場として許すべきものではあるまいか。何日であつたか、新居の家に關する前住者との紛紜を書いた作『一つの家』を讀んで、小宮豐隆が「頭腦は好いものだよ」と云つて激稱してゐたのを聞いたことがある。昨日借りて來て讀んだものの中では、私には矢張り『母親の通信』が一番面白かつた。一つは私が子供好きな所から特種の興味を持つて迎へて讀んだためではあらうけれども、その外夫人の所謂お襁褓臭い作品は皆それ〴〵の意味に於て面白かつた。

たゞ『海神丸』は夫人の作としては一風變つたものである。あれは出た當時から世間の評判になつた作で、私も多大の興味を持つて一讀したものだ。あの漂流して、食物も水もなくなつて　だん〴〵切迫して行く狀態を、それに伴ふ心持ちの變化をあれだけ順序正しく、はつきり描き分けると云ふことは、餘程頭腦のしつかりした作者でなければ出來る藝で

はない。あの作は本當にさう云ふ目に遭つた老船頭から云かに聞いて その儘書いたものだと云ふことを夫人自身から承つた。が、それを聞いても、私の感服の程度は少しも薄らがなかつた。何となれば、それにしても矢つ張り前と同じ事が云はれるからである。が、たゞそれ丈けである。それがいくら好く出來てゐようとも、あれを以て夫人の獨擅場とすることは許されない。

昨宵私は『キリストと祖父と母』と『縛られた者と解く者』とを讀んだ二つとも今年の春、公にされたものである。近頃夫人はかう云ふ方面のブッキッシュな題材に興味を持つてゐられるらしい。が、それも何んなものであらうか。成程、婦人の身で、あゝ云ふ方面の題材を取扱ふだけの頭腦もあれば、素養もある。それが驚嘆すべきものだと云へば云はれないこともない。が、男子の作者で、あゝ云ふ題材をあれ以上にこなし得るものは、わが國の作者の中にも隨分とある。あれをたゞ目先を變へるために試みにやつて見られたものとすれば、私はたゞその多能に敬服する外ない。が、若し本氣であゝ云ふ方面に進んで行くつもりだとすれば、果して何んなものか。『キリストと祖父と母』の中でも、私は一番マリアの母らしい心遣ひに感心した。祖父もよく描けてゐる。が、最後に祖父が衆人に取卷かれながら說教をしてゐるキリストを見て、「痛ましげな、悲しみに堪へないやうな憂欝な顏色をした」と云ふのが、餘りに唐突で、私にはよく分らなかつた。から云ふ事をしてゐるキリストの運命を豫見したためだとすれば、急に爺さんが偉くなり過ぎて、持つて行つてくつつけたやうな感じを免れない。さう云へば、『縛られた者と解く者』の最後の場でも、あゝ云ふ風にエロスがバアナード・ショウを想はせるやうな皮肉でプロメトイスを遣つ附けるのは、今迄とは全然調子の違つたものだと云ふ感じを抱かせるだけで、一向作の効果を昂めるものではない。少なくとも、私にはさう想はれるのである。

一體世間ではよく夫人の作を夫君が手傳ふのだらうと云ふやうなことを云ふ者がある。文學の讀者には、そんな篦棒なことを考へるものもあるまいが、平生文學に親しまない一般の讀者は、やゝともすればそんな事を想像しかねないものである。私は今むきになつてそれを否定しようとは思はない。そんな事をするには、餘りに馬鹿げた想像である。が、かう云ふ事だけは云はれなからうか。あの夫君——私の友人である——は、隨分艶消しにして他人に分らないやうにしてはゐるが、よく／＼見ると、あれでどこかペダンティックな所の

ある人である。少なくとも、それの嫌ひでない人である。これは決して悪口ではない。何となれば、世には私のやうにペダンテイックになりたくても、なる資格のない人間もあるのだから。で、それはそれとして、偖て夫人のことだが、夫人があゝ云ふ方面の題材に興味を持たれるやうになつたのは、そこは同棲してゐられることだから、自然と夫君のそれに感觸れられたのではあるまいか。若しこの推定が當つてゐるとすれば、私はたゞ目出度いと申上げて置く。妄言多罪。(九月四日)。

# 始終ある唯一の女流作家

神近市子

○

野上彌生子夫人は、古い巖本善治氏の明治女學校の出身であつたやうに聞いてゐる。明治女學校は明治の初期に民間にあつた女學校中では有數なハイカラな學校で、島崎藤村、戸川秋骨など二人が教鞭をとつてゐたこともあつたさうである。從つて當時にあつては新しい多くの才媛を出した女學校で、『小公子』の譯者若杉賤子(本名は巖本嘉志子、善治氏の夫人)とか藝術家肌な任俠をもつて聞へる新宿のパン屋中村屋の女主人相馬黒光夫人、それに野上夫人など社會的に名を知られてゐる人々である。

極く近い圏内に生活してゐて、私はまだ野上夫人とは一面の識もない。『青踏』とか『さふらん』とか同人雜誌に關係してゐた頃は、平塚夫人とか富本一枝夫人などを通じて氏の生活の模樣を聞いたり、私の書いたものに對する批評を取次いで、貰つたりしたものであるが、先方が大家であればあるだ

け私は何となしに氣憶れがして自分ではお逢ひしに行つたことはなかつた。

私が氏の作品に始めて接したのは、東京に出て學生生活を始めた頃であつた。『父親と三人の娘』『フレジヤの悲しみ』など愛讀したのであつた。そしてどこか雜司ケ谷あたりの樹木の多い（今日では以前のやうには樹木もないさうであるが）鄙びた閑靜な小住宅に、愼しく質素な生活を營む世にも賢い一人の婦人を發見して深い愛を寄せてゐたものであつた。が、その時分から星移り物變り、夫人の地位も無名から有名に、家庭的なものから社會的なものに變化して行つてゐる。

○

その後暫時振りに氏を見出したのは市中の雜踏の中であつた。電車で氏に乘合せたと云ふ人があつた。

『どんな印象の方ですか。』

『どんな印象の人かそんな高尙なことは私には分らないが、恐しく常識外れな氣障な人ですね。』

その人はかう冒頭してその一例として氏と氏の子供達との對話を引用した。何でも子供を二人連れてゐてその小さな方に氏が、

『××さま、お兄さまのお履物に泥をつけてはいけません。』

と云つた調子のことを云つて居られたと云ふことであつた。

『自分の子にお兄さまもありませんよ。あれでスッカリ嫌ひになつた。』

その人は親の讐でも探し出したやうに氏を卑しみ惡んだ。

その話を聞いて、私は格別に驚きもしなかつた。本來が中産階級出の野心の少ない藝術家好みの人であつたので、『お上品』は氏の作品の何れにも到るところに見出せるものであつたから。

○

六七年前の夏、赤阪の高臺にある、或る家の應接間の一隅で、私は紐育から來てゐた若い婦人記者の爲めに野上氏の『二つの小馬』を讀んだことがあつた。相手の婦人記者がノートをとるのをまちつゝ野上氏の作品のこゝの木陰かしこの水邊を低迷してゐるうちに、私は前に讀んだことのあるその作品が最初粗匆に讀過した時とは全く異つた半面をもつて私に示してゐることを感じた。

私はこの時野上氏が初期のその純にしてあえやかな藝術的

の匂に富む作風をすてゝ、ごくアンビシアスな轉換を試みやうとしてゐられることを看取した。

この試みの動機が氏の內生活の發展によつて生じたものか乃至は或る批評家が云つたやうに外國作家の模倣又は當時の文壇の風潮の影響によるのか、私にはそれは劇かに判定することはできなかつた。しかし極めて偶然なことから、私は氏のこの態度の變化を發見した。

それ以前は私は氏の『渦き』とか題する作品とその他に何とか題した今一篇の作品をよんでゐた。そしてそれ迄は單純に野上氏の作品を愛讀してゐた私は、褒めて好いのか貶してよいのか自分ではハッキリしない妙な感に捕はれたものであつた。

それらの作品は三つとも作者の家庭に使つてゐた小女の成熟期に起つたある變態の狀態を取扱つたものであつたやうに私は今記憶してゐる。文章が洗練され作の構造、――その屋根、その庇、そのポーズ、それらのものが見事に完成され一讀して何人にも立派なものだと云ふ印象を與へる割にそれは私には讀後快よい感銘を殘さなかつた。そしてそれそれは作中の女主人の自分が使用する小女に對する餘りに優越を意識し過ぎた態度と作者自分が鼻高々とその女主人の態度を隨聽し讀者に感心を強いて『これでもか、これでもか』と疊みかけて聞かしてゐるやうな氣がした爲めであつた。

その後私は一人の友人から、その頃新潮に出た氏の『我家の圓天井』について聞かされた。友人はまだ讀んでゐなかつた私の爲めに筋を話して『迚も馬鹿々々しいものだ』といふ話をした。私はその後も到頭その作品を讀む機會を得なかつたから、自分でその友人の批評の當不當を批判することはできなかつたが、たゞボンヤリと、自然主義に出發して來られた氏がその頃の文壇を風靡してゐた人道主義風潮に一步を踏み入れやうとする、その暗中模索の結果に生れた作品ではあるまいかと考へて見たことがあつた。そして人道主義的な人世の見方は極めて屢々社會主義的な人世の見方に進むものであり、氏も詩人をしての與謝野晶子氏の如くに藝術道によつてそこに步みつく人ではあるまいかと考へた。

しかし最近三四年の間に發見された氏の作品には、その當時の私が期待してゐた轉換の跡は少しも見られなかつた。比較的に寡作な氏の作品も私は全部は眼を通してはゐないのであるが、しかし手許にとゞく雜誌に氏の作品を發見する時は大抵見落さずに眼を通すのであるが、それらしい變化の跡は見ない。反對に最近の氏の諸作には、自己の才能の優越を

意識したものゝ尊大さと貴族趣味とが如何にも濃厚である。

曾て私は氏のこの作風を諷して『氏の作品には鐵筋コンクリートの建築のもつコチンとした冷たさがある』と云つたことがあつた。鐵筋コンクリートの建築のもつ危げのない手丈夫さと堅固さとは確かに氏の作品が最初に讀者を捕へる印象である。しかし次に讀者の心を打つものはその、コチンとした冷たい感觸である。

私の見るところでは、氏のこの作風がもつ致命的な缺陷は作のモチーフがいかにも脆弱であることにある。初期の中條百合子氏の如く、人道主義に出發した人にあつては人道主義そのものゝ傳統としてそれはモチーフに最も重きを置かれてゐる。それが彌生子氏の如くに自然主義に出發した人にあつては、それが第二義的の必要しか示さないものによくなりがちである。

ある人々には私の斷定は少し意外であるかも知れない。それらの人々は彌生子氏の作のテーマ乃至プロットをもつてモチーフとしてゐるのではあるまいか。テーマ乃至プロットはモチーフを表現するに當つて用ゐられる手段であつて、モチーフそのものではない。それは所詮は頭腦の所產であり、これは生活そのものゝ所產である。綜合された感情の所產である。

第二の缺陷は、氏の作品には作家としての氏の生活がない。云ふ迄もなく、氏の作品にも正義があり道德があり眞實があり嫉惡がある。しかしそれらは凡て氏の創造によるものではなく、正義も道德も眞實も凡てごくコンベンショナルな性質のもので、偶々氏の創造によるものがあるとすれば、それは氏の妙に偏した藝術家としての『好』である。云ひ換へて見れば氏の創作には思想がない。作者が人世をいかに見て藝術作成の對象としての人事に接してゐるか、それがハッキリしてゐない。

野上氏の小說集『小說六つ』の中に『多津子』と題した一篇がある。母親の經驗によつて母親の理想通りに出來上つた雛と云つては餘りに純潔であり餘りに美しくあることより外に批の打ちどころのない多津子と云ふ娘が、婚期を失つて行く事情を書いたものがある。娘は理想通りに育ち上り、嫁すばかりに道具も入念に揃へられたがさてその娘を渡すべき肝心の婿は遂に現はれて來なかつた。そして娘は老けて行つた。この時の母親の惱みについて、野上氏は詳細に報告してゐる。

『母親は娘を見た。雛形は完全に仕上げられてゐる。彼女には娘がこれ以外のいかなる型であつて欲しいと思ふやうな注文は微塵もない。すべてが滿足であつた。それと共に娘の爲

めに今日までとつて來た自分の處遇を失敗であつたと認めない譯には行かなかつた。』

ある處で作者はかう云つてゐる。

野上氏の作品を前にして、私は多津子の母が考へたことを考へてゐる。野上氏の作品は完全に仕上げられてゐる。いかなる小說作者もこれ以上は手を加へることは出來ない。すべてが滿足である。しかし、それと共に私は氏が今日まで努力して來られた藝術道の修業は失敗ではなかつたであらうかと考へて見ることがある。

○

餘りに完全なものがもつ破綻とでも云はうか、氏の最近の作品には少しも情熱の煌きがない。一人の人間が生きた感情をもつて見た儘、聞いた儘の人生を眞率に表現して私共に語るのを見る代りに私共は恐しく尊大で思ひ上つた、ペダンチツクでさへある一人の婦人の生活の報告を聞く。大げさな誇張と氣障な上品とで作成された小說を見る。ハイカラなひどく洗練された文章で表現されてはあるが、それは藤村千代氏の幾分感覺的なハイカラ味ほどにスツキリとしたスタイルにはなり切つてゐない。

○

私はこれまで可なり長く野上氏の最近の作品と傾向とに對する不滿をもらして來た。しかし、これは氏の初期の傾向と、す作品とを餘りに愛着する私の反動的な興奮の所產であつて今虛心坦懷に今日の氏の地位を考へて見る時、私は矢張り氏に匹敵すべき女流作家は、現在の日本にも過去にも發見することはできない。日本は氏に於いて始めて始終ある女流作家を見たと云ふも過言ではない。そしてこの地位は氏の作品が日本の文學史に占むる地位の如何によらず、永久に氏のものとして確保されるものである。

私共は樋口一葉の晩年の數箇の作品に對して驚嘆の眼を開いて見る。その後は佐藤俊子女史が久しくその才筆によつて日本の女性を文學上に代表してゐた。そして私の記憶にして誤りなければ、薄命可憐な素木しづ氏も數箇の好短篇を私共に殘してゐる。

しかし私共が野上氏に見る驚きは、その粘りづよい長い作家としての生活である。多くの不滿はあつても、その實力に於いてその想像力に於いて、氏は現在の日本の男性の作家の多くに伍して少しも遜色のない人である。もしかすると、私共は氏の如く女性と云ふ割引券を附する要のない獨立した女流の作家を再び得る迄には、可なり長く待たなくてはならないかも知れない。それほどに氏の地位は確立的で且つ高いものである。

生理學講座

（第十一回）

# 男の體と女の體（其の二）

永井潜

　以上男女の體型に關して大要を述べた後、各箇の主要なる部分に就て少しく詳細に觀察して見たい。先づ第一に頭骨であるが、このものは人種により又た個人により可なり廣い範圍に於て變化を示すもので從つて夫れに關して深遂の研究をしたバルテル氏の言ふ所によると、或る一の頭骨に於て、是れは女なり是れは男なりと云ふ判斷を附けるに足る必然的の特徴なるものはない。唯多くの點を綜合して考察を下すことによつて、始めて正しい判定が行はれるのである。言ふ迄もなく、男女の頭骨は、其の大さに於て相違がある。バルテル氏が、多數の學者の測定の成績を根據とし、獨逸人の頭骨の內容積（腦髓を入れる）の平均價として擧げて居る所によると、男子一四六二立方糎、女子一二九八立方糎で、其の比は一〇〇〇對八八八となつて居る。又た重量の平均は、男子七五五瓦であり女子五九五瓦である。

　最も注意すべきは、頭骨に於て、腦髓を包有せる頭蓋部と、顏面をなせる顏面部との割合である。顏面部は、男子に於ては、絕對的にも比較的にも女子よりも大きい。男女の身長の比例は一〇〇對九三・六であるが、顏面の高さ（鼻根より下顎の下緣に至る距離）の割合は、一〇〇對八九・六となつて居る。又た顏面の幅は、一〇〇對九三・五である。即ち男子に於て、顏面の高さの割合が、女子よりも遙に大なることが分かる。

　之れと正反對に、頭蓋部の比例に於ては、女子が男子を凌駕して居る。即ち頭蓋部の周圍は、一〇〇對九六・五であり、其の幅の割合は一〇〇對九六・五であり、其の高さ（耳孔の水平面から頭の頂上に至る垂直距離）は一〇〇對九五・五であつ

て・何れも男女の身長の割合が一〇〇對九三・六であるのに較べて、女子に有利になつて居る。又た男女の體重の比が一〇〇對八三であるのに、頭蓋部の內容積の比は、已述の如く、一〇〇對八八・八であることは、頭蓋の內容積が明かに女子に於て比較的大であることを語るものである。而して又、凡て此等の事實は、女子の頭が、小兒の夫れと似よつて居ることを示すものである。尙ほ又頭蓋部の形狀を見るに、男子では、其の穹隆が全般に亘つて平等であるに反して、女子では、顱頂の中央部は比較的平たく、周圍に於て懸崖樣に急に曲がつて、頭の側面に移り行かんとする傾向を示すものである。併しこのことは、必しも女子に限つた譯ではない。

顏面部が、男子に於て遙に大きい理由は、男子に於て、咀嚼器官が佳良なる發達をなすからである。即ち上下の顎骨、齒牙及び咀嚼筋は、何れも男子に於て著しく發達が良い。バルテルス氏によると、下顎骨の重さは、男子では、頭骨の重さの一一・三%に當るが、女子では一〇・五%にしか當らない。又た男子の下顎骨は、前方に向ふて半圓形をなし、後方は甚しく角張つて居るが、女子では、下顎の前方が狹められ、寧ろ拋物線狀を示し、且つ後方は角張つて居ない。そこで齒牙の生へるべき場所(齒槽)も、女子では、狹く短く隨つて齒牙も細小であり、且つ動もすると齒列が亂れ勝ちである。但し上顎の中央二枚の切齒は、往々比較的大きいもので、之れが女性の齒牙に於ける特徵であるとシヤフハウゼン氏は云つて居る。

咀嚼裝置の佳良なる發育は、獨り骨のみならず、筋肉に於ても亦現はるゝもので、隨つて男子に於ては、頰部・顎部・にある各種の咀嚼筋がよく發達する。其のことは又た、多くの咀嚼筋の附着部である顴骨弓の發達を促す。斯くて男子の顏面が一般に方形をなすに反して、女子の顏面は圓形若くは卵圓形をなし、而して是れが艶麗優美なる女性の顏貌を形成する基礎をなすものである。又た眼窩の上部に隆起せる眉弓が、女子に於ては殆んど缺如し、男子に於てよく發達して居ることは、男子の顏貌をして剛強ならしむる一因をなすものである。其の他眉・眼・鼻・口、凡て男は強く女は優しい。又た顏面筋の發達緊張が、女子では男子よりも少ないこと、竝びに皮下脂肪組織のよく發達して居ることゝは、女子に於て顏面の褶襞を少なからしめ、顏貌をして福よかならしめる原因をなすものである。

婦人の頸が男子に比して著しく細長く見へるのは、頸部肩胛部に於ける筋肉の發達の相違に基くもので、頸部の骨格

其のものに差別がある爲ではない。又た婦人に於て皮下脂肪組織のよく發達して居ることは、頸と胴との接續をして、大になだらかならしめる。且つ喉頭軟骨の發達が、女子では男子の如く著しくないことは、喉頭の兩側にある甲狀線が、女子には比較的大きいのと相待つて、頸部の前面に丸味を帶ばしめて、顏面と相竝んで常に外表に露出すべき頸部に、一程の美的感覺を惹き起さしめる。

次に胴に就て見るに、胸部と腹部との比が、男女に隨つて大に違ふ。男子に於ては、腹部よりも胸部が比較的よく發達するに反して、女子では腹部の方が胸部よりもよく發達して居る。是れは言ふ迄もなく、男女の生理的分業に基づく體制の差別であつて、活潑なる運動を行はさるべからざる男子では、心臟・肺臟の旺盛なる機能を必要とし、隨つて夫等の臟器を容れて居る胸部の發達が好い。又た手を餘計に使用すると、よく胸廓の發育を促すもので、このことも亦、男子をして胸の人たらしむる原因をなすものである。之に反して、胎兒を宿し、且つ之を榮養せさるべからざる女子では、骨盤は廣く、又た榮養器官たる腸・胃・肝臟等は比較的大きくならなければならぬから、勢ひ腹部が比較的大きくなる。斯くて男子が胸の人であるに對して、婦人は腹の人となるのである。其の意味に於て、婦人の胴は比較的長大となり、脊髓の中殊に腰髓が長くなる。さうして又腰髓の彎曲が強くなり、前方に向ふて弓狀をなす爲に、腰部は甚しく凹沒し、其の結果臀部に於ける脂肪の蓄積と相待つて、臀部をして著しく後方に隆起せしめる。さうして婦人の姿勢に一種の美觀を加へる。

婦人の胸廓は、其の斷面丸味を帶び、上部は狹く、下部に至るに隨つて廣かるもので、恰もビール樽を半分に切つた樣な形をして居る。之に反して、男子の胸廓は、上下の廣さに甚しき差別なく、且つ稍扁平で、前後徑よりも左右徑の方が長いのであるから、圓柱を前後に押しつぶした樣な形狀をして居る。そこで婦人が、帶やコルセットで緊縛を行ふことは、胸廓の中、切角廣い下の部分を殊さらに狹小にするもので、衞生上有害であることは言ふを要しない。

婦人の腹部は、啻に長い許でなく、著しく膨くれて居る。さうして側面から見ると、腰のあたりで、背部が前方に向つて凹入するのと相伴つて、腹部は前方に向つて凸隆して居る。斯くて人間の體軀に於て見らるゝS字狀の前後に向ふ彎屈は、男子に於けるよりも、婦人に於て遙に顯著である。加之、腹部に於て殊によく發達せる脂肪組織は、全く腹筋を包被して、柔い曲線美を現はすもので、凡て此等の關係

も亦、婦人美の一要素として見逃すことの出來ない特色である。男子に於ては、腹部は寧ろ扁平で、且つ腹筋がよく發達し、脂肪組織が少ない爲に、往々腹筋の輪廓が露はれて、斯の婉柔の感を與へることが出來ない。斯く婦人に於て腹部が長大であり膨隆して居ることも亦、婦人と小兒との間に見らるる肖よりの一である。併しながら、其の肖よりは、婦人の體軀が、單に小兒の狀態を保つて居ると云ふ爲ではなく、寧ろ胎兒を養ふべき天職に適合すべき爲に取つた一個の順應現象であると考へる方が至當である。

骨盤の大さ乃ち形狀の差別が、最も顯著なる第二次性徵であることは、既に屢々述べた通である。女子の骨盤は、啻に比較的でなく、絕對的にも、男子のより廣大である。又た其の形狀を見るに女子の骨盤は、大體に於て廣くして淺い。而して小骨盤の入り口は、男子に於ては、後方にある薦骨の爲に狹められて「カルタ」の「ハート」型をして居るが、女子では丸い形をして居る。又た男子の小骨盤道は、坐骨が相近づく爲に、出口に行くにつれて狹められて、長い漏斗形をして居るが、女子では、この道が短かく、且つ略同一の廣さを保つて居る。又た女子の骨盤は、男子の骨盤よりも著しく傾斜して居るもので、其の爲にも、女子の臀部が著しく後方に隆起する樣になる。而して凡て女子の骨盤に見らるゝ斯等の特色が、懷姙と出產てふ女子の天職と密接の關係あることは、改めて言ふを要しないのである。

女子の骨盤の出口が廣いことは、之を支へて居る脚の骨の形と位置とに、少なからざる影響を及ぼすものである。男子では、上腿と下腿との骨は比較的垂直の位置を取り、一直線に立つて居るが、女子では大腿の骨が膝より上に斜に左右に向つて開いて居る。このことは、步行殊に疾走に當りて、女子をして男子よりも大に困難を感ぜしめる原因をなすものである。

以上、男女の外形に關して、部分的に其の特色を述べたのであるが、進んで內部の臟器に就いて其の差別を尋ねて見ると、最も明瞭なる性的差別は喉頭に於て認められる。喉頭を形造る甲狀軟骨は、男子では大きく出來て居る許りでなく、其の二枚の板は、正中線に於て急角度を以て相接着して居る。そこで其の角が、多くの場合、皮膚を通じて見へるのに反して、女子では甲狀軟骨は小さく、其の二枚の板は、前方に向ふ丸い曲線を形造りつゝ觸接して居る。斯くて女子の頸部をして曲線美を帶ばしめる。

胃腸や心臟肺臟其の他各種の臟器に就いて、精確に男女の

比較を試みることは、一面個人差が甚しいのと一面屍體に於て病變が加はるからとで、殆んど不可能である。併し大體から言ふと、同一體重に割り宛てた各種臟器の重さは、女子に於て男子を凌駕し、小兒は更に女子を凌駕して居る。此の點に於ても亦女子は男子と小兒との中間に立てるものと云ふことが出來る。次の表は、成年男子と、成年女子と、初生兒とに就てて、體重一〇〇に對する各種臟器の重さを擧げたものである。

| | 腦髓 | 心臟 | 右肺 | 肝臟 | 腎臟 | 脾臟 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 成年男子 | 二・二九 | 〇・四八 | 〇・八二 | 二・九一 | 〇・四九 | 〇・二六 |
| 成年女子 | 二・三三 | 〇・四九 | 〇・八八 | 三・一五 | 〇・五五 | 〇・三三 |
| 初生兒 | 一二・四〇 | 〇・七六 | 〇・九四 | 四・五七 | 〇・七五 | 〇・三四 |

斯く女子の內臟が比較的重い事實は、一面には女子の體重の輕いことが、主として筋肉骨格の薄弱なる結果であることゝ、一面には體が小さくなると同じ割合を以て、內臟が小さくはならないと云ふことゝから說明せられる。

男女に於ける腦髓の比較に關しては、特に細說する必要がある。蓋し人間をして萬物の靈長たらしむる最も大切なる特徵は、其の優秀なる智能であり、隨つて智能の坐位たる腦髓就中大腦の發達程度を、男女に於て比較することは、兩性の優劣尊卑を判定すべき最後の準據となりはしないかと云ふ考から、色々の研究が試みられて居るからである。先づ男女の大腦の重量に關して、從來測定せられたる平均の價を見ると、ワーグナー氏によると、男一四一〇瓦女一二六二瓦で、其の差一四八瓦であり。フローカ氏によると、男一三六瓦、女一二二二瓦で、其の差は一五四瓦である、ビショフ氏によると、男一三六二瓦、女一二一九瓦で、其の差一四三瓦であるといふ風に、大體に於て一致せる成績が擧げられて居るが、殊に近時マルシャン氏によつて爲されたる一二三四例の多數に上る愼重なる測定と、並びにレッチウス氏による七〇〇例の測定と、合せて約二千例の測定の平均價によると、男一四〇五瓦（約一四〇〇瓦）、女一二七五瓦で、其の差は一三〇瓦となつて居る。何れにせよ、男子の大腦は、女子のよりも絕體價に於て重いこととは、爭はれない事實である。

所で、女子は男子よりも身體が小さいのであるから、斯の關係を考慮して、男女の大腦の比較價を求めて見ると、如何なる結果に達するであらうかと云ふに、斯の比較價を求める方法に、次の三がある。其の一は、男女の腦重を其の身長に割り宛てゝ見る方法であり、其の二は、體重に割り宛てゝ見る方法であり、其の三は、同一の大さの身體を有する男女の

腦重を比較する方法である。併し何れも決して完全なるものと云ふことは出來ない。先づ身長を標準とする方法の不合理であることは、言ふ迄もない。何んとなれば、上下左右前後の三方向に廣袤を有して居る立體的の人體を、單に身長と云ふ上下の一方向による廣袤によつて律せんとするからである。斯る不合理あるにも關らず、屢々此の方法が適用せられた。マルシヤン、レツチウス氏によつて擧げられた成績によると身長一糎に對する平均の腦重は男子では八・四六瓦であり、女子では八・二三瓦となつて、男子の方が比較的にも重い大腦を有つことになる。尤も斯る價は、可なり個人差による動搖が著しいもので、男子では七・七乃至八・八瓦女子では七・六乃至八・〇瓦の範圍に位すと言はれて居る。

次に體重を標準として、腦重を比較することは、一見頗る合理的に見へるが、併し玆にも考慮を要すべき多くの問題がある。元來體重は、個人により、又た同一の個人でも其の健康榮養の狀態如何により、時に從つて甚だしく動搖するものである。然るに腦髓の重さは、榮養狀態の如何によつて殆んど何等の影響をも蒙らないものである。このことは、飢餓死に陷る迄に、身體各組織器官の消耗が、如何なる割合に於て行はれるかを研究したフオイト氏の報告に照らして見ても、明瞭である。即ち單に過剩なる養分の貯藏物たるのみで、何等大切なる生理的機能をも有せざる脂肪組織の如きは、飢餓の間に百中九七は用ひ盡くされて、僅々三%しか殘留しないのであるが、筋肉の如きものでは、三〇%消耗せられ、七〇%は殘留する。而して腦髓脊髓の如きものは、僅に三・二%しか消耗せられないで、九六・八%即ち殆んど全部が殘存する。心臟の如きも、飢餓時に於ける消耗は僅に二・六%に過ぎない。即ち飢餓時に於ては、不必要なる組織を犧牲として、生命の維持に缺くべからざる大切なる器官が保護されるのである。斯くて種々なる事情の下に、絶へず變化動搖すべき體重と、變化しない腦重との間の割合を求めて、之を基準として腦髓發達の程度を定めようとするのは、甚だ據りない仕方と言はなければならぬ。殊に又、屍體となつて研究材料に供せらるゝも、大多數は病の爲に死亡したもので、其の病狀の如何んによつて、體重に甚しい變動が起ることを考ふる時體重を標準として腦重を割り宛てることは愈々以て不確實なる方法と言はなければならぬ。

第二に、斯の方法をして不合理ならしむることは、男女の體內にある脂肪組織の不同である。已述の如く、女子は男子に比して遙に脂肪組織に富んで居る（男子は體重の一一%女子

は三五・六%)。而して斯の脂肪組織は、非活動性のものである。之れと反對に、筋肉の如き活動性組織は、男子が遙に女子を凌駕して居る(四一・三%對三五・八%)。活動性の筋肉の如き組織は、直接大腦の主宰を必要とするが、脂肪の如き非活動性の組織は敢て大腦を待ずともよい。そこで體重と腦重との比較をする場合、嚴格に云へば、斯の大腦の主宰を必要としない脂肪組織を差引くのが正當である。さうすると、腦重の割り宛は、女子に於ては男子よりも大に有利になつて來る筈である。

そこで斯る面倒な關係を暫く論外に措いて、男子の平均體重で、其の平均の腦重を除して見ると、體重一瓩に對する大腦の重さは二一・六瓦となり、女子に於ては夫れが二三・六瓦となる。卽ち女子の方が比較的には重い大腦を有つことになる。尙ほこの上に上記の脂肪組織の差し引を勘定の中に入れて考へて見ると、一層女子の大腦の發達が男子のよりも佳いことになる。ヘヴロック、エリス氏は、男女の體重の比は一〇〇對八三であるのに、腦重の割合は一〇〇對九〇であることを擧げて、同一の結論に達して居る。

併しながら、斯く單位體重に對する腦重の割合が、女子に於て有利であるからと云つて、之を以て直ちに女子の大腦發達程度が女子に優越せるものと速斷してはならない。何んとなれば、體の小さい動物は、大きい動物に比して、割合に重い腦髓を有つことの比較解剖學的事實があるからである。例へば腦重一に對する體重の比は、人間では四五(女子)乃至四六(男子)であるが、小さい猿の一種であるアテレスでは夫れが一五となり、イヌサルでは一七となつて、單に腦重と體重との比例のみを考慮すると、人間よりも是等の下等なる猿類の方が、遙によく發達せる腦の所有者であると云ふ結論を下さなければならなくなる。併し是れは無論事實と矛盾せるもので、斯る結果は、畢竟、斯等猿類の體重が甚しく小さい爲に起つて來るのである。同一の理由から、體重一瓩に對する腦重を求めて見ても、人間が約二三乃至二四瓦、猩々類たるゴリラが四・七瓦、オラグランが七・五瓦であるのに反して、下級猿たるマカツクでは一一・四瓦、小鼠では二〇・瓦、雀では三三・瓦と云ふ風に、矛盾せる成績を示すことになる。

そこで更に轉じて第三の方法たる、同一の身體を有する男女に就て其の腦重を比較する方法を取つて見る。併し玆にも亦た多くの誤謬の泉が隱れて居る。同一の身體と云つても、體重が同一である男女に就て比較を行ふとすれば、上に述べ

來つた樣な不十分なる諸關係が起つて來るのであるから、寧ろ同一身長の男女に就て比較を行ふ方がよい。夫れには、身長さへ同一なれば、其の他の身體的構成も略同樣であることを假定してかゝらなければならない。併し斯の假定は、必しも當つては居ない。加之、元來男女の間には本來平均の身長に一定の相違があるべき筈なのであるから、同一身長の男女を選んで比較的を行ふとせば、男子では比較的小さい者を、女子では比較的大きい者を選り抜くと云ふ不自然が加はることを覺悟しなければならなくなる。

夫れは兎に角、マルシャン氏が、斯の比較方法によつて調査した成績によると、身長一五一乃至一六〇糎の範圍にあるものでは、男子の腦重の平均は一三二六瓦であるのに、女子の夫れは一二四三瓦であり、又た身長一六一乃至一七〇糎の範圍の者では、男子の平均腦重は一三九一瓦であるのに女子の夫れは一二九〇瓦であつて、何れも男子の方が女子に優越して居る。之を要するに、同一身長の男女では、男子の腦が女子よりも重い。而して斯の差別は、身長の大小に基くものでなくして、恐らく男女の身體の構成の差別から喚び起されて居ると考へなくてはならない。蓋し男子の特色は動的であり女子の特色は靜的である。隨つて活動に際して作用すべき筋肉の發達は、男子に於ては女子に於けるよりも遙に顯著であり、隨つて又之を主宰すべき大腦の中樞も、男子に於てよく發達すべきは自然の勢である。

男子の腦が女子に比して重いことは、一個の性徴と云ふことが出來やう。マルシャン氏の調査によると、生後一ケ月の男兒の平均腦重は、三九五瓦であるが、同月齡の女兒のは三七〇瓦しかない。即ち六・三％の差別がある。然るに其の兩者の體重は四％、身長は二％に相當する差別しかない。殊に興味ある事實は、ワルダイエル氏によつて報告せられてゐる。夫れによると、身長が四〇〇粍に發育した男と女の双生兒に於て、體重は、女兒が男兒に勝さつて居た（一一八八瓦）對（一一八五瓦）にも關らず、腦重は男兒が女兒を凌駕して居た（一六五瓦對一七五瓦）。

さて男子の腦重が女子に勝さつて居るとした所で、之を以て直ちに男子の智能は女子に卓越するものと斷ずるのは許すべからざる輕擧である。成る程比較解剖學上から云つても、又た人種的差別の研究から云つても、一般に知力の旺盛なるものは重い腦髓を有つて居るやうであるが、併し腦髓の如き美妙なる器管の機能は、決して單なる量的關係によつて決定せらるべき筈のものでなく、寧ろ夫れよりもより以上大切なる

ことは、質の問題である。實際現に大腦の中でも、中樞として大切なる働をするものは、其の表層をなせる灰白質であり、而かも其の灰白質の部位に從つて、夫れ夫れ特殊の機能を分擔することが分つた。更に進んで、將來に於ては、其の顯微鏡構造と、化學的組成分との如何が、其の機能的差別の根柢をなすものたることを闡明せんとすることを想定し得るとしたならば、重い腦必ずしも賢き腦でないことは、敢て辯明するを要しない。從來調査せられた腦重に關する記錄を尋ねて見ると、第一位に立つて最も重いのは二二二二瓦であるが、而かも其の所有者は平凡なる男子であつた。第二位に當つた者も凡人で、第三位ツルゲエネフの二二一二瓦の腦が置かれて居る。而して第七位に於て、始めて一七四二瓦の婦人の腦が見られて居るが、其の所有者は狂人であつた。斯樣に重い腦髓の所有者必ずしも賢明でないのであるが、反對に又た、輕い腦髓で而かも知力の優秀なる人がないでもない。伊太利の有名な政治家ガンベッタの如きは、腦重僅かに一、一〇〇瓦に過ぎなかつたと云はれて居る。

腦重の差別を基準として、兩性の優劣を決定せんとすることが、無謀であり輕擧であると同樣に、其の他の體的特徵を捉らへて、之れが尊卑の判別を立てんとしても、夫れは決して妥當でない。此の問題に關して、古から今に至る迄、最も普汎的の考察であり、最も合法的の判斷であるとせられて居るのは（一）婦人は多くの點に於いて小兒と近似すること（二）小兒は未開の狀態なること。（三）かるが故に婦人は男子に比して、自然の地位に於て低い階級に立つべきものであると云ふ主張である。以下聊か之に關して述べて見たい。

# 單純生活の根本問題

エトワアド・カアペンタ
宇佐美文藏譯

編輯者から私に、何か「單純生活」と云ふことに就て、書くようにと云ふ、注文があつた。——さうした題目は、何時とはなしに、私の名前と關聯して、考へられるやうになつたものと見える。だがそれは、どちらかと云へば私の企畫の、一小部分に過ぎないと云ひ度い。私は、あの非常に道徳的な「サンフオドとマアトン」と云ふ小説の中にあつた、シモンズ孃と云ふ婦人の、ひどく人の心を打つ話を想ひ出す。或る浮つ調子の綺麗な女が、世間でよくやる、例の安つぽい騒々しい曲を彈いたあとで、彼女がピアノに腰を下ろす、そして「極く短い簡單な曲」を手すさむのであるが、それは「皆の人の目に、涙を誘ふ。」私の編輯者も亦、多分、此れと同じやうな御噺を「サヴオイ」誌の讀者に、與へて貰い度いと、思つてゐらるゝのであらう。

だが實際私には、此の題目に就て述べるべき感傷的なことも、又は發表すべき道徳的な話も、何等持ち合せてゐないのである。（手提袋を提げて居られるやうな部類の）人達が、時々私の書齋にやつて來られる。そしてその部屋が明るくて氣持がよかつたり、又はその中に、何か僅か許りの鑑賞用の品物があつたりするのを見て、かう云はれる。「だつて、裝飾品を備へるやうなことは、あなたの主義に反することだと思ひますわ。」そこで私は、何百度となく、さう云ふ種類のことを未だ一度も云つたことがないと云ふ事や、未だ嘗て、美に反することを以つて自分の義務とした事のない事や、又は自分や他の人々の生活をば、無味乾燥な主義と云ふ箱の中に、詰

め込まうなど〻云ふ考へを、起した事がないと云ふことを、説明しなければならない。

　此れは事實の問題であり、又生活の藝術化の問題である。そしてその事實と云ふのは、かうなのである。一般に、生活に關する人々の考へが非常に混亂してゐるので、何の方面にも拘はらず、手に入れたり蓄積することが多ければ多い程、それだけ多く「裕かに暮せる」ものだと云ふ考へが、一般に深く沁み渡つてゐる。その結果、町を歩いてゐて、何かよさ〻うなものを店のショウ・ウインドの中に見つけでもすると、ポケットに金でもあれば、屹度その儘そこを立ち去らずに、それを買ひ込んでしまふ。そしてそれを肩に掛けたり、口に入れたり、部屋に置いたり、壁のまはりに貼りつけたりする。それから暫くして、それが左程自分の氣に入らないものだつたりすると、どうも適當した品物が買へなかつたと考へる。そしてもう一度外に出かけて行つて、他のものを購入する。斯樣なことを、彼等は、腦髓と同じ樣に身體も生活も凡て色んなものでとう〲、動きが取れなくなる迄、盲目的に、且つ習慣的に續けて行くのである。そして所有物や、道具や、義務や、責任や、又はそれに關係した病氣などの過剩のために、身動きすることも、自分の心を、樂しますことも出來なくなつてしまふ。

　勿論かうした馬鹿げた行爲の起源は、極く明瞭である。それは、科學者の稱へるところの「隔世遺傳」である。我々の多くや、我々の祖先や、又は數時代も以前の人々にあつては、(そして遠くに溯るにつれて、此れは益々本當になつて來るが)充分な食べ物や着物に、缺乏してゐた。その結果、さうした時代にあつては、機會さへあれば、出來る丈け澤山のものを蓄積しようと云ふのが、一般の原則となつたのであるそしてその原則が、遂には、盲目的な習慣と迄なつてしまつた。野蠻人は、可成り充分な――死んだ象のやうな――食べ物に出くわすと、こんな機會が將來又とあるかどうか知れないので、出來る丈け腹一杯に、詰め込まうとするものである。今日上品な社會では、腹一杯詰め込むと云ふやうな一般的な考へは、幾分薄らいでしまつてゐる。だがそれ以外の考へは、殆ど凡て現存してゐる。そして何のためだかはつきり分りもしないで唯矢鱈と、人々は、もうこれ以上駄目だと云ふ點迄、自分の家や、部屋や、棚の上などに、品物を詰め込んだり、着物を着込んだり、指に澤山の指環を嵌め込んだりする。

　勿論指の人々が、本當に、かうしたことを愉快にしてゐる

のならば、何等の問題にも、ならないのである。だが絶えず聞えて來る愁嘆やうめき聲から判斷して、此れは確かに、解決を要すべき問題ではないかと考へられる。固着の觀念を滿足さすとは、生命の要求の滿足とは逆つて、一種機械的な事柄のやうに思へる。そしてそれは必要缺くべからざることのやうに思はれてゐて、その實確かに負擔が重く、又悅びを伴ふことが少い。それが故に、時とすると、外科手術か何かの手段に依つて、出來る丈け巧みに、かうした觀念から離脫することが、即ち進步と云ふことであるかのやうな、觀をさへ呈してゐる。

　かうした、近代生活を非常に惱ましてゐる「蓄積」と云ふ問題を處置するには、色々の方法がある。その第一は、謂はゞソロウの方法とも云ふべきものである。ソロウは、彼の棚の上に、或る裝飾品を持つてゐた。だが毎日その埃を拂ふ必要があつて然かも自身でその仕事をしなければならなかつた。だが結局、こんなにして、毎日埃を拂ふてやる程の値打のあるものでもないと云ふことになつて、窓の外にその裝飾品を、投げ捨てゝしまつた。此れは確かに、賢い方法であつた。そこには確かに感情上の、若しくは主義上の問題はなかつた。唯事實の問題――快樂が勞力に値ひするや否や――があつた丈けである。

　個人的に云つて、私は自分のまわりに美しいものを、持つてゐるのが、好きな方である。そしてその品物には夫々、どの位の勞力が掛るか、又その勞力がそれの考へる樂しみに依つて、償はれてゐるかどうか、私には明瞭に分つてゐる。此れは唯、個人的な問題に過ぎない。或る人々は、自分の部屋にうんと品物を置き並べて、然かも尙、好んで自分の生涯の大部分を、それを整理することに、費す人があるかも知れない。だが、何人もそれに就てさうした、種類の人と論爭する事は出來ないであらう。

　此れは非常に、分り易いことである。だが世の中には、今一つの階級がある。それは所有物を持つ快樂を享受しながら、自ら好んで、その品物を綺麗にして置く勞力を、取らない階級である。彼等はそれに附隨してゐる勞力や苦痛を拔きにした。快樂丈けを得ようと欲する全然出來さうもないことを、しようと欲するのである。そこで彼等は召使や從者を雇ひ入れて、自分の代りに色んな品物を整理せしめる。そして彼等がかうした方法を取るのは、それが實に、自分等の考へてゐる「單純生活」と云ふものであり、彼等の勞力を、省略する方法でもあると、考へてゐるからである。だが一般の人

々は、かうした事は皆彼等の頭が混亂してゐて、はつきりと物事を考へないからであると、思つてゐる。

然し乍ら問題はこれで萬事、解決したわけではない。大抵の人々は皆幾分人情と云ふものがある以上、他人と一緒に一つ屋根の下に生活するとなれば、勢ひその人の事が色々と氣掛りになつて、氣持が束縛されてしまふ。その人間の、要求や、趣味や、心配や、又は病氣のやうなことを一切、考へてやらなければならない。卽ち複雜した事柄の整理どころか、やがては又新しい、さうした人間に對する責任と云ふものが增えて來るわけである。假りに、我々の代りに部屋の面倒を見て呉れる女中を雇ふとする。さうすれば我々は、絕えず彼女のする仕事を敎へてやらなければならない。又敎へてやつたところで、彼女はそれをこちらの思ふ通りには、決してやつて呉れるものではない。磁器を壞したり、朋輩と喧嘩をしたりするやうなことが絕え間なしにある。又自宅には母が病氣をしてゐたり、近くの居酒屋には若い男があつたりして、彼女の悲みや苦しみや嗜好と云つた風のもの丈けでも、際限なくある。それで結極、女中を雇ふ前後の相違は、唯自分の部屋を掃除すると云ふ代りに、今度は、毎日毎日女中を掃除してやらなければならぬと云ふことであるに過ぎない。然も此の方が、一層混み入つた重大な仕事となつて來る。

又一方。或る人々のやうに、本當に少しく人情味に缺けるところがあつて、いつも召使や從者を家畜のやうにして取扱ひ、又進んでかうした條件の下に、彼等を自分の家に住はすことが出來るとしても、——矢張かうした方法でも、都合よく生活が送れるものではない。彼等は當然、あらゆる點が我々に、復讎するであらう。私は先日、家並が文明世界から輝き出す綺麗な光線のやうにして無限に立て並んでゐる郊外の別莊地の一軒の家で、夫婦間の惚れ〲するやうな會話を耳にすることが出來た。それは、いつもの古くさい問題に關してゞあつた。『畜生！』夫はとう〲かう叫んだ。『奴等はいつもお前を、困らさうと許りしてゐるのだね。そらあの料理番の女を御覽。あいつは何時も歌許りうたつてゐやがる——仕事がしながら、いつもあゝだ。あいつはお前が歌は嫌ひだと知つて、あゝしてゐるのだとしか、わたしには、どうしても考へられない！』勿論——調子外れにやられては堪つたものではないが——唯歌丈けで濟めば、結構な方なのである。兎に角角出來さうもないことをしようとするのは、骨の折れることで、勿論旨く行つたところで、それは決して完全に出來上るものではない。

だが上に述べたことは、召使を雇ふことの全然間誤つてゐ

ると云ふ、證據にはならない。一つの固着の觀念から離脫したからと云つて、全然、それと反對の觀念に始終しなければならぬと云ふ譯は、ないのである。若し我々が、自分に事へるものと心から一致融合さへすれば、彼等の我々に與へる快樂は、その我々に惹き起す勞苦を償つて、餘りあるものだと云ふことが、分つて來るであらう。又單に自分の部屋を掃除するよりも、女中の頭を掃除することの方が、確かに、より有益な樂しい仕事をしてゐるのだと、云ふやうなことにも、なつて來るであらう。此處に至つて初めて、それは、双方共に利益のある、賢い自然的な、仕事の交換と云ふことになつて來るのである。そしてさうした關係が、初めて實際の「生活の單純化」と云ふことゝもなるであらう。かうしたことは、さう取り立てゝ云ふ程でもない、極簡單な、分り切つたことである。それでこんなことを此處に書くのは、自分乍ら恥しく思ふ次第であるが、さうせざるを得なくなつたのは、決して私の罪ではない。

生活は藝術である。實に美しい藝術である。そしてその藝術の必要條件の一つは、決して、自分の手で旨くこなし得る程度以上の――椅子、卓子、召使、家、土地、株、友人、知己と云つた風の――多くの材料を、持たぬことである。世間體もあるから、さうしたものを仕方なしに持つてゐなければならないと云ふやうなことは、決して正しい言譯ではない。我我は、さうしたくだらぬ事を斷然止めてしまはなければならない、馬や馬車を必要もないのに持つてゐて、それを毎日乘り廻すために、馬鹿者になるよりは、本當に利用出來る人に、さうしたものを讓つてしまふがいゝ。必要もない知己には、好きなやうな振りを見せてゐて、お互の生活を噓で揑ね合せてゐるよりは、寧ろさうした人には、不愛相に出た方がいゝ。

立派な繪には、單なる生まの材料の儘に殘つてゐるところは、一個所だつてないものである。凡てが表現である。然かも、生活は、繪畫以上に大きな藝術である。近代の文明人は、繪具入れや刷子の積載の中にぼんやりと坐つてゐて――然かもさうしたものを尙一層澤山搔き集めようとしてゐる――人としか見えない。だが彼等が何時になつたら、彼等の生活の間から、美しい、觀賞に値ひするやうなものを製作するか、唯神が知るのみである。

かう云ふ意味に於いて「生活の單純化」は、生活と云ふ藝術の手ほどきとなるべき、アルファベットの最初の文字である。だがそれは、單に最初の文字であるに過ぎない。まだ學ぶべき多くの文字があるのである。それ故にも早や、話を更らにその方に進めてもいゝ頃だと思ふ。又手提袋を持つて居られる私の友人や、又はさうでない友人からの、此の題目に關する質問の答も、も早や此の邊で打ち切らうと思ふ。

（此れは千八百九十六年サヴオイ誌七月號に掲載されたものである）

# おばけと子供

三宅やす子

## 妖怪談と子供

×

私どもの子供の時分は、おはなしといふと大抵お化、幽靈、鬼さういつたものが出て來る話か、でなければ狐や狸にばかされる話と極つて居た位でした。

何でも想像の國にかけり度い幼年時代には、どんな種類のお話と限らず、聴かせて貰ひ度くてならないものです。だからお話をして呉れさうな人には、幾度でも、幾度でも、お話をしてくれとせがみます。

話しをする方では其中に種がつきて了ひます。もう無いと云はれると　聴手の方ではでは此間の何の話と要求します。それは、大抵こわい思ひをして聴いた話をもう一度くり返して貰つて、もう一度恐い感じを新らしくしようとするのです。

×

話の家では　父が出張の留守番に泊りに來る男が道化者で、よく話をしてくれたので家中の者が夜を待ち受けて居た事を覺えて居ます。氣の長い京都の町の事ですから　皆氣のながいかほをして吊ランプの下に集つて來ます。其男は——大抵泊り番になどゆくものは話を澤山知つて居ました——次から次とおばけと幽靈の話をしてくれます。若い女たちはこわがつて、話がすんでから廁にゆけないと騒ぎます、其くせ、出來るだけ恐ろしさの度の強いものを話して貰ひ度がつて居

るのです。

又或時は、半紙をぬらして、眼と鼻と口の處だけ指で穴をあけて、それを顔にはりつけて暗やみの座敷に白い布を肩からさげて踏臺の上に立つて居る其男の「おばけ」を皆は面白がつて見にゆきます。そして毎晩、毎晩、「おばけ」をしてくれとせがみます。

そんなこわさを面白がつた事は今でもよく覺えて居ります。

×

又私の家の隣には老人の夫婦がなにもなしに暮して居ました。其老人達は私を可愛がつていろ〳〵お話をしたり本をみせたりして呉れました。其處で見た本には、澤山のそれは〳〵こはいおばけの繪と幽靈の繪がついてゐました。私はそれを見せられた時に「見なければよかつた」と後悔するほど恐ろしく思つたのですけれど、又暫く時が經つと「おぢいさん、此間の本を見せて」とねだるほどになつて居ました。

芝居のある町に行つて、劇場の看板を見上げると、大抵一つ位は、女が髪をふり亂して足の方はすうつとほそく消えて居る畫がありました。見世物小屋の看板には、ろくろ首が行燈の油をうれしさうになめて居るのをよく見かけました。(だから其頃まだ、夜なかの用には用ひられた行燈がこわくて仕方がありませんでした)

×

さうした自分の幼年の頃を思ひ出すと今の子供は仕合せだと思ひます。幽靈と云つても、私どもの小さい時にすぐ眼に浮んだほど幽靈の姿を澤山見せられて居ませんからぼんやり頭で考へて見る位です。鬼もよほどお伽話化したものに考へて居ますから、私共が今も覺えて居る地獄極樂の氣味のわるい人形の、鬼がうごめいて居る有樣などは想像して見ないでせう。

それは一つには、此頃子供の眼にふれるものに、だん〳〵さういふものが少くなつてゆくからでありませうが、親達がさういふ話をして聽かせないことにもよります。

知らなければ知らないで濟んで了ひます。只、親が話さなくても、いつか他の人から聞いて覺えるといふことはあります。

その時に、さう恐ろしがらずにすむかどうかは、平生、怪物の存在を信じない、あまり氣にかけない、と云ふような氣持で居るかどうかによるのではないでせうか。

×

私は今迄子供から怪物に就ての質問をあまり受けませんでしたが、それはなるべくさういふものを恐がらせないように少し苦心したからかもしれません。私が臆病で、怪物の畫を一度見たために今でも時々暗い處で其畫を思ひ出すと厭ですから、なるべくそんな記憶をつけまいとしたのです。

或時、化物の畫を何かの機會でふと見られましたが、それは三味線か何かのお化けで、ちつともこわくないと云つて居ました。今の少女雜誌などでこわいのは骸骨の畫ださうです。さういはれると、骸骨の畫がどれほど私達に深い氣味の惡い印象を與へるかを回想する事が出來ます。黒岩涙香譯の『鐵假面』の中に骸骨が墓場をほり返して居る畫がありましたのを暗やみで思ひ出してこわがつたのは私に十年間續きました。

×

最近童話が非常に盛になつて來て、今の子供達は、大人から妖怪の話をせびらなくても話にも讀物にもこまらないようになりました。其中に出て來るこわいことは、又今の子供を新らしくおびやかされて居るでせう。

つまり昔からの子供がきかされて居たこわい話と又少しちがつた「こわさ」が想像力の豐かな子供をおびやかせて居ることは爭はれないでせう。

それに就て、母がどう説明するかと云はれても、其場合、場合ですけれど、なるべく出來る事は恐ろしい畫など見る機會をないようにすること、實在のものに不合理なこわいものはないことを年に應じて理解させること、もしこわいと思つて居るようだつたらなるべく其氣持を他へ轉ぜさせる事などでせう。心持を明るくさせておけば深いおそれはなくてすむと思ひます。

# 子供とおばけ

岡田八千代

子供にどういふ風におばけの話をするかと云つて、手許に子供が居ませんから、そんな經驗が少なくてお話しが出來ません。只自分達が子供の時、おばけの話を聞くのが一番恐かつた事を覺えてゐる丈です、其中にも幽靈の話よりも狐や狸の化けた話の方が本統らしくて恐かつたものです。今でも、幽靈は出さうに思へませんけれど、狐や狸はほんとに化けさうに思へてなりません。子供の時分、講談物の「甲斐坂の怪」なんか讀んだ後、暗い處を歩いてゐると、ほんとに大入道が前へ出て來さうに思はれたり、はゞかりの窓から異樣な顏が覗きさうに思はれたりしてなりませんでした。私はそんな話を聞くと不思議に涙が出て來るのです。人間に近いおばけで恐いと思ふのは盲のおばけです。これは「妲妃のお百」かなんかの講談で、盲のおばけが出るところが染み込んだのでせうが、その時分盲を見ると、今に目を開いて恐い顏をしさうでなりませんでした。海坊主といふものも恐いに違いないと思つてゐました。子供の時分神經衰弱にかゝつてるやうな時に讀んだものが一番頭に染み込んでるのだらうと思ひます。

夫から、子供の時、何だか氣味惡く恐いやうに思つたのは、夜、外を歩く物賣の呼聲でした。今では往來も電氣で明るい處が多く、廣い町は電車が通つてますから、さうした物賣が來ても、そんなに恐い事を聯想しないのでせうが、其頃私達は山の手の番町近く富士見町の富士見軒の前の處に住んでゐたので、往來も暗いし、今のやうにまだ藝者屋も出來ないで淋しい處でしたから、無暗に外へ出るのが恐いところへ、夜更けて――更けてと云つても八時か九時頃でせう――きつと賣りに來る辻占賣、夫からおいなりさん、私は辻占賣の聲が

恐くて、私の兄はおいなりさんを酷く恐がりました。此辻占賣は探偵だといふ噂がありました。恐いも見たさで、そつと昔風の出窓の格子の中にかけた簾越しに覗いて見ると、夫は大きな男で、猫背のもう好いかげんな年寄のやうでした。そして太い低い聲で「つぢうウらーつぢうら」と呼んで歩くのです。何でも辻占を賣る振りをして探偵をして歩くのだと云ふ事でした。探偵が恐いわけは無いのですが、探偵によつて聯想する「五寸釘寅吉」「いなづま强盜」そんなものが恐かつたに違ひないと思ひます。兄はどうしておいなりさんを恐がつたのか「おいなアり、さん」と云つて來る稻荷壽司屋の聲を聞くと、きつと夜勉强してる机の下へもぐり込んでしまつたものでした。これにも何か聯想があつたのだらうと思ひます。夫に私達の住んでゐた處は一番町の近くで、番町には有名な七不思議といふものがあつて、天井から出る大足、とか、小豆婆さんとか、種々な事を聞いて居て、彼處の邸がその不思議のあつた處で、なんて古い奉公人などに聞かされたり、招魂社の馬場向ふには夜中になると鐵瓶や行燈が天井へ付いたり歩いたりする家があるとか、あすこの邸では今でも夜中に女の呼ぶ聲がするとか、どこそこの銀杏は化けるとか、指さゝれて云はれる處が多いので客に聞く話よりも余計恐かつたのだらうと思ひます。そんな事から考へても、あんまり子供の時分、おどかして恐がらして話をするのは惡いと思ひます。私は自分がそんな話を聞くと恐がる方ですから、知つてる子供達にもお化けの話しはした事がありません。でも不思議に子供達といふものは、恐い話や、哀れな話が好きのやうに思ひます。まだ十六七の時、お稽古に行つてゐて、自分の番を待つてる間に、他の小さい子供達に出たらめの繼子いぢめの話しをしたら、一人の子が酷く感じてワツと泣き出したのでびつくりした事がありました。夫でも、その子は習る日になると「お話ししてよ、お話ししてよ」とせつつくので、終いには石盤を持ち出して繪を描いて、此お邸に惡い奥樣が居たなんて、二階屋なんかいかめしく描いて、デクの坊を配して種々舞臺面を替えて話した事なんかもありました。そんな場合にはよく泉先生の大銀小銀なんかゞ應用されたものでした。然し人間も子供時代――娘時代を離れて、だん〴〵に物を恐がらないやうになると、もうお終ひだと思はせられます。

（十三年九月五日）

# 戀と詩の生（續き）

## ——ブラウニング夫人の生涯——

矢野峰人

相逢ふべき運命の下に生れながら、今迄は互に唯文字を通してのみ語り合つたに過ぎない二人の詩人が、時到つて遂に相見えたのは、千八百四十五年五月二十日、火曜日午後三時の事であつた。ブラウニングは果して如何なる豫想と豫感とを以てこの病女詩人を訪づれたか。またエリザベスはこの尊敬する年少の詩人を如何なる期待を以て迎へたであらうか。ヰンポール・ストリート五十番地なるバレット家の門を叩いた時、ブラウニングを階上なる暗い大きな室に導いたのは恐らくエリザベスの妹であつたらう。はじめて二人のみ對座した時二年の後には偕老同穴の契を結ぶべきエリザベス・バレットとロバト・ブラウニングとは、果して如何に感じ、また何をか語つたか。我等はそれを基礎として浪漫的な光景を築き上ぐべき何等の文獻をも、不幸にして有しないのである。

ブラウニングは家に歸るや直に手紙を書いて自分の訪問が病人にどんな影響を與へたかを氣遣つた。自分はあまりに高聲で話しはしなかつたであらうか、またあまり長居しなかつたであらうかなどとも訊ねた。エリザベスからは翌日直に厚意こもれる手紙が來た。かうして二人の間には前にもまして毎日の樣に手紙が交はされるのみならず時折はブラウニング自ら訪問する樣になつた。エリザベスに對する愛をはじめて告白したのはこの年八月三十日の消印ある手紙に於てであ

る。勿論それ以前の二人の手紙を見れば、はつきりと文字の上には表はさないが互に一の問題に觸れんとしては離れ、離れんとしてはそと觸れて居るのがわかる。恐らくブラウニングは二人對談の時、わが眞意をばそれとなく幾分を打明けたのではないかと思はれる。先その手紙には「われはお身を絶對に信ぜず、この問題に就て語るなかれと君のたまひし時、君は恐らくわが心の中を知り給はざりしならむ。今こそ告げむ――これを限りに――われは君を心より愛し、わが生命をば獻げたりし事を」と書いて居る。エリザベスが「この問題に觸れて呉れるな」と言つたのは、決してブラウニングの心配する樣に、彼の態度に對する不滿或は不信等ではなく、さうした問題を直に受入れる用意が彼女になかつたが爲に他ならない。エリザベスの眼にはブラウニングの姿が「いかなる人の眼にも、わが眼に見ゆる君ばかり氣高く清き姿はあらじ」（八月卅一日附手紙參照）と映つゐたのである。而も齡はブラウニングに長ずる事六、不治の病を抱いて殆んど廢人の如き生活を營める中年の、理性に鋭き彼女は、熱烈なるブラウニングの愛に對して直に報いんと答ふる事のあまりに輕卒無暴なるを思はざるを得なかつた。「我如きものに君がこよなき感情を與へ給ふは、まことに砂に水を注ぐに似たりと思召ずや」「若し君が生命を賜ひ、わが全心をそれに注ぎなば、わが注ぐものとては唯苦惱――君が負ふべき運命にもまされる悲哀のみならむ。何をかわれは與へ得む？されば此の事にはわれらかたみにまたと觸れまじ。」エリザベスがこの手紙を書いてから約幾月の間は、この戀愛問題を故意に避けて、世上の事文學上の問題のみに觸れた手紙が依然として交換されたが、九月十三日になつてブラウニングは再び前の問題に立歸つて切なる情を訴へ出た。それは今こゝに引いたエリザベスの文言によれば、彼女がブラウニングの愛に報い得ざるは、あまりに二人の人間的價値に差違があり、彼の愛に報いる事は要するに理由なき苦痛の負擔を彼に課するが故であるといつた風に解釋される所から、ブラウニングは茲に再び自分の淺學非才なる事、最初から彼女の愛を得ようと夢みる程迂愚ではない事、若しエリザベスの愛が他に注がれて居るならば其爲に役立つ事さへ彼の誇であり幸福であると說いた。エリザベスは「若し神意によりて、或點に於ては現狀と異なれ

る狀態にあり、また他の點に於ては自由であるならば、自分は感謝と誇と、滿足とを以て、あなたの申出を受けるであらう。自分も決して木石ではない。然しあなたの愛を受けた自分には、他の所に愛を注いで居るなどといふ事は決して無い。若しそんな事をして居たならば、自分には眞實といふものは全く無いと言つてもよからう。自分は眞に價少なきものである。若し今後二人が親友として交りを續けんとならば、どうか思ひを他に轉じて戴きたい。それに甚だ申にくい事ではあるが、若し父が二人のかうした手紙の交換をしたといふ事實を知つたならばたとひ十年の後と雖も妾を許さないでせう。それは唯、この家では一種の感情の發達を見るに堪えないといふ奇異な理由からなのですが。兎に角障碍は異つた性質のものなのです。唯妾が言葉にも涙にも表はし得ないほどあなたに對して感謝して居るといふ事をお信じ下さい」といふ意味の長い手紙を書いた。彼女はこの時齡四十に垂んとし、病床に横はる事八年、たとひブラウニングの愛を受入れんとも、彼女の前に横はるものは唯々前と同樣の病室生活であり、多望多幸なるブラウニングの前途をわが身の故に暗くする事はあまりに堪へ難い事と思はれたのであつた。千八百五十年に公にした『詩集』の中に收められた「拒絶」と題する詩は這般の消息を最もよく語れるものである。「友よわれら相會ふ事遲きに過ぎぬ。死の經帷衣はわが足にまつはれり。行くも動くも身の果なり。動くを得ざるわがこの身、いやはての危機に瀕していかで君へと寄り得べき？切なる君が求愛に何と答へむ。たゞわが面覗き見たまへ。われ君をば愛でし、敢て愛さじ。唯默として行きたまへ、わが手をば落したまへ。花薔薇求めたまはば、その夜咲ける國の小徑にこそもとめたまへ、かゝる砂漠の砂ならで。……若しそのかみの日にしあらば、あはれ今衰ふるこの胸の躍りしかみの日にしあらば、戀をたたふる君が歌聲耳にして、われもおん身を愛したらむに。色褪せし双頰のかくも涙に濡れざりしそのかみの日に、わがこのつよき全心に君愛せよと求めたまひしならむには、われ徐に微笑みてかくぞ言ひけむ——わがおもて覗きたまへと。さはれ今ははや人の世の仇浪に心はおぼれ、暖かき神の御國とかゝはり無く、氣輕き歌も輓歌と響く身にしあれば、いかで人妻たり得むや。」

エリザベスがブラウニングを如何に尊敬して居たかは、その年の一月、この二人が文通をはじめてからまだ間の無い頃、彼女が一友に送つた手紙の中に、「過ぐる夜ブラウニングから手紙を貰つて私は全く有頂天になつてしまひました。ブラウニング――あの『パラセルサス』の作者で神秘家の王たるブラウニングから」と書き、又亞米利加の一友に對しては「最近になつて文通を始めたブラウニング氏は大望に滿ち滿ちた方ですが、未來の光明が其額に輝いて居ます。彼の人は後代永くつたはる詩人です。私はあの人が詩人にして豫言者たる事を確信して居ます」とも書いて居る。從つて、今更に、越し方行く末を思うておのが命運の拙なさに泣き、ブラウニングの愛を容るゝ事を敢て肯はなかつたエリザベスも、この年少の友の男性的にして熱意こもれる、無私敬虔な愛の告白を再三再四聞くに及んでは、遂に「諾」と言はざるを得なくなつたのである。此の如くにして、奇蹟的にもまた極めて浪漫的な二詩人の戀愛は日を重ぬるに從つていよ／＼その熱と力とを加へて行つた。さうして又、今迄は單に書籍を通じてのみ知り得た實人生を、今こそしみ／＼と自分の血と肉とを通じて味はんとするのである。

戀愛時代に於けるエリザベスの心状の僞らざる告白は、この頃密に物し後年になつて葡萄牙語よりの飜譯てふ名の下に公にした四十四篇の戀愛小曲集『ソネッツ・フロム・ザ・ポーテユギイズ』に讀む事ができる。

ブラウニングの魂と共鳴し永遠の愛を誓ひ得る迄の淋しき日を思ひ出でて彼女は「過ぎにし日にはわれ、まことの男女ならで、幻をこそ友として日をかき暮らし、その聲にもまさりて妙なるものあらじとばかり思ひしに、いとしき人よ、その時君は訪づれて、まことの姿示したまひぬ」と言ひ、又「愛人よ、われおん君に會ふまでは、年ごろ日ごろ胸重く、ありとあらゆる人の世の自らなる歡喜も、なやみなき悲哀ゆゑに消されしが」と語る。

されば、理想的の愛人を見出でて其胸に瘠せたる頰を倚する今となつて見れば、今迄唯ひとり堪へ忍んで來た一切のなやみ、苦しみも、すべて遙かに消えゆく幻の如くに思はれ、また今迄はわが前に物凄じき形相をして佇立威嚇してゐた

「死」其物さへも、いつしか其固き捉把の手を緩め、其醜き姿をば潜めたかと思はれる。即ち、今や、愛の光四方に溢り、彼女の魂を光輝ある未來へと強く牽引するのである。小曲第一篇はかゝる心境を歌へるものである。『涙の霧を透かし見れば、たのしくもまたかなしき日、うれはしき過ぎ來し方はつぎつぎに、やをら浮びて暗き影われに投げつゝ消え行きぬ、なげゝるわれはたちまちに不可思議の物のかたちの背後より迫るをおぼえ、ひしとばかりに黑髪を引き寄せられぬ。わが身を藻掻くその間にも、そのものは、聲おごそかにとなふらく――いましをかくも捉へしは誰ぞ、語れよ、と。「死」なり、とわれは答へしに、聽け、その聲は爽にかくぞ響きぬ――「死」にあらず、「愛」にこそあれ』

死の掌中にありながら生を樂しむに似た彼女の生活は、今や愛の光に浴するに及んで肉體的にも自ら變化を見さるを得なくなつた。激しき緊張的な心の生活を送つたにもかゝはらずその夏の彼女の健康は例年になく佳良であつた。これを機會に醫師の勸告を容れて、倫敦の厳冬を避け、數ケ月をピイザに過さんとの計畫が立てられた。かうして萬端の用意成つた時、突如、如何なる理由よりしてか不明であるが、最初これの計畫に賛成して居た父は娘の轉地に對し許諾を與へる事を拒んだ。娘は從順に故國に留つたが、幸にも其冬は寒氣さまで厳しからず、彼女は常程には惱まなかつた。彼女の後を追うてピイザに赴く筈であつたブラウニングも、仔細を聞くと同時に旅行を思ひ止つた。

ブラウニンク如き人の妻としてはエリザベス以前の如何なる女性も適はしからさるべく、またエリザベスが夫を擇ぶとすればブラウニングを措いて他に適當な人はなかつたであらうと思はれる。されば如何なる人の眼にも、若しこの兩人が結婚するとすれば、これにもまして理想的な夫婦はないと思はれたに違ない。然るに、ブラウニングのエリザベスに對する求婚に頑として耳を假さなかつた唯一人の人は、彼女にとつて義理恩愛の最も深き父なのであつた。父がエリザベスの結婚に反對した理由は何等他に外的理由あつたが爲でない事は、後に至つて他の子女の婚姻に對しても彼が反對したに徴して明である。然し、又、特にエリザベスの場合に就てのみ父の心持を考へて見るならば、父は、彼女の誕生以來、數多

き子女の中で彼女のみ特を寳玉として深く愛し、凡そ愛と富とによりて與へ得る限りのものは喜んで與へたのみならず、彼の妻の死後胸に出來た空虚と寂寥とは、唯娘に對する愛と嘆賞とによりてのみ僅に醫されて居たのであつた。彼女は彼にとつて淋しき晩年を賑はす唯一の幸福の源泉、光輝ある偶像であつた。然るに今や、彼が多年の配慮と庇護との報ひあらはれて、エリザベスの名聲は次第に上り、其健康も亦漸く回復せんとする時に當つて、彼女が自分を捨てゝ、見知らぬ人の許に走らんとするを見ては、如何に娘の幸福の爲なりとは言へ、さう簡單に手離す事は堪へ難かつたに違無い。況んや熱情的に暴君的なるは以前からこの人の特徴であり、頑として決意を飜さゞる事はエリザベス自らも承け繼いだ所であるに於てをや。

父の反對に會つてエリサブスは全く人生の岐路に立たざるを得なくなつた。父を棄つべきか戀を斥くべきか、彼女の場合に於ては二者を同時に生かす事は全然許されて居ないのである。子たるの義務を廢棄する事は、果して人間としての生活を完了する所以であらうか。父に背いて戀人の懐に抱かれる事は、果して眞に幸福であらうか。而もまた、假に父の許に尼の如き心を抱いて留まるとしたならば如何であらうか。曾てはあきらめて居た一個の人間としての、女としての生活を營み「生の歡喜」を味はひ得る機會をそのまゝ逸し去つて、果して悔いないであらうか。父の許に留る事は廢人としての生活を肯定する事であり、戀人の許に走る事は復活せるもの、否、新に生れたるものとしての生を開始する事である。保守妥協の生に生くべきか、進取創造の生に就くべきか、父を捨てた事によりて嘗めざるを得ざる悔恨の情と、戀を捨てたが故に嘗めざるを得ざる悔恨と、その何れが果して大であらうか。彼女は年四十にして深くも惱み迷はざるを得なかつた。而も、眞に自己を生かさんには人は強くなくてはならない。強く生きんが爲には人は犧牲を拂はざる可からざる事を忘れてはならない。一尺四方の地を踏むにも人は數百の虫を蹂躙せざるを得ないといふ。されば、エリザベスが父を棄てるといふ事は、彼女が過去を絕縁する事、換言すれば一切のものを捨てゝ身一つになるといふ事である。彼女が一切のも

のを捨てるのは一切のものにも換へがたき一人の戀人を得んが爲に他ならない。小曲第三十五篇に於て彼女の歌へるは即ち這般の心境である。

「われ君がため一切を捨てなば、君もまたわがために一切のものたりたまふか。なつかしき同胞の睦語、子をつぎつぎに接吻るたらちねの御親を思ひこがれては、住みなれし家に似もつかぬ家などをいぶかしと思ふ事あらざるべきか。愛戀にうち克つ事も苦しけれ、悲哀に克つ苦しさぞこよなけれ……君われを愛したまふや。さらばその胸ひろびろとうち寛げて翅濡れたる君が鳩、ひしとばかりに抱きたまへ。」

ブラウニングのエリサベスに對する愛も、エリサベスのブラウニングに對する愛も、すべて相互の人格的價値に對する嘆賞に生れものである。嘆賞は「我」を空しうしたる刹那に感ずる靈の法悅である。それは無私至純の愛の謂に他ならたない。從つて、嚴密の意味に於て、愛するとは、心から不純なる我執的分子を除去して、對者の前に禮拜する事である。それはすぐれたる生命、秀でたる魂に對する禮拜なのである。されば愛の目的は畢竟愛する事自體に內存する。何等か他の理由に基き、他の目的の爲にするのは眞の愛ではない。エリサベスが小曲第十四章に於て『きみ若しわれを愛したまはば、たゞ愛のためにのみ愛してたべ。「われかの女をその微笑、その容姿、しとやかなる物言ひぶり……のために愛す」とのたまふなかれ。これらのものはうつろひやすく、かくて生れし愛も亦それにうちつれ失すべければ。……愛ゆゑにのみわれ愛でたまへ。』とうたへるは即ちこれ。ブラウニング夫妻が愛の創造と完成とに生き得たのは、彼等二人が互の運命を諸共に抱たんとした時、互に「我」を空しうしたが故であつた。まことに愛はおのれを空しうする事によりて却つておのれを擴大し充實する。われが「我」を去つて對者と同化する事は、やがて對者の生命をわれに吸收する事である。されば、愛は、無我無私の境地を通過する事によりて、はじめて、異なれる二つの靈の共鳴と抱擁とに達する。この抱擁より生ずるものは即ち擴大され充實されたる世界意識――生命感なのである。されば エリザベスはかゝる意味の愛の力を讚美し

て、小曲第十章にうたつて曰く——「さはれ愛こそは、如何に小さき愛なりとも、まこと美はしく受くるに価するものなれ。愛は火にして、「われはおん身を愛す」と言へば、見よわれは、たちまち君が眼のあたり姿かはりて赫灼たる光に身をばめぐらるる。いかに賤しき愛なりとも愛の心には何等賤しきものあらず。取るに足らざる生物も、かく愛すれば、神に容れらる」と。從つて、エリザベスにとつてかゝる愛に生きる事は彼女が小曲第十二章に歌へる樣に「大なる誇」なのである。

彼女はかくて男性にも稀なる決意と確信とを以て千八百四十六年九月十二日、土曜日の午前、マリルボン教會に於て、秘密にブラウニングと結婚したのであつた。それは彼等にとつて第九十一回目の會見であつた。他の弟妹を徒に父の不興の的に引入れる事を慮つて、何人にも告げず、唯腹心の女中ヰルスンのみを從へて家を出たのであつた。式を終つて家に歸ると直にどちらも感謝と歡喜とに滿ちた手紙を書いた。

かうした新らしい經驗の興奮の中にあつても、エリザベスは不日、手紙によつて父の前に一切を懺悔し其赦免を乞はうと思つて居た。父の立腹はもとより期して居た所である。然し何と言つても「私は彼を愛してゐます——彼は私の父なのですもの。——さうして兎に角彼は立派な素質を具へてゐますから」と十四日の夕方認めた彼女の手紙にもある樣に、斷ち難き恩愛の絆にからまれては思はず心を暗くする事もあつた。（然し頑迷一徹なる父は已に裏切つた娘を最後迄決して許さなかつた。娘夫婦の南歐に於ける幸福なる生活を耳にしても少しも喜ばなかつた。彼は臨終の時にもエリザベスの事は一言も口にしなかつた。）

新婚の二人が巴里經由で伊太利に向ふべく祖國英吉利の地を離れたのは彼等の結婚後一週間を隔てた九月二十日の事であつた。彼等はまづピイザに落着いたが、やがてフイレンツエに移つた。南歐羅巴の風光はいたく夫人の意に叶つたのみならず其温暖なる氣候は夫の愛の力と相俟つて、彼女の健康を全く一變した。こゝでは毎日午前中は、夫婦室を別にして創作に從事するのを常とした。趣味を同じうする明敏の友の多くもそこには出來た。ブラウニングの家はかくして伊太利

人は勿論、多くの南歐漫遊の文人墨客の巡禮地の如くなり、わけても亞米利加人の訪客が多かつた。千八百四十九年の三月九日には、男子が一人生れ、兩親の名を取りてロバト・バレツト・ブラウニングと命名された。彼等は時に佛蘭西に、時には英吉利に旅したが北歐の風に曝されて彼女はいつも健康を害して伊太利にと歸つて來た。晩年の彼女は伊太利の獨立運動に對して甚深の興味を抱く樣になり、その運動の成果と共に一喜一憂した。六十一年の六月になつて彼女は激烈な氣管枝炎に襲はれた。勿論今迄にもかうした事は度々あつたのだが、五十九年の戰爭、奈翁三世の伊太利に關する政策に對しての好意と反感、更に祖國に於ける妹ヘンリエツタの死、等、相次で起つた事件の爲に彼女は精神は多大の衝動を蒙むり、健康頓に衰ふるに至つた。誰の眼にも、今迄彼女がこんなにまで惡かつた事はないと思はれた程の病狀ではあつたが、而も彼女は死期至れる事を思はず、その死ぬる前夜も、彼女を見舞つた一人の女友と伊太利の政治に就て語つた程であつた。其夜彼女の枕邊には、十五年間獻身的に仕へた下婢が唯一人身護つてゐた。其夜は病人は何の苦しむ事もなく明けそめた。終焉の二時間許り前になつて病人は半ば恍惚狀態に陷つた樣に思はれたが、死のまぢかに迫つて居る事も意識しないで、夫の耳に甘くして神聖な愛の言葉を囁いた。ブラウニングはその抱ける妻の體の冷たくなつてしまふ迄彼女がこの塵の世を去つたとは思はなかつた。時に千八百六十一年六月二十九日朝四時半の事である。この衰へ果てた肉體を以てしては、到底永き餘命は望むべくもなかつたとは、死體檢案の醫師の言葉であつた。遺骸は遺族、英米伊國の人達に護られて七月一日の夕方其地の新敎徒墓地に葬むられた。彼女が住み馴れた館カアサ・グイデイの壁上にはフイレンツエ市役所の手によつて一葉の大理石板が掲げられ、其面には伊太利語にて「女性の心と學者の學識と詩人の靈識とを身に兼ね備へ其詩をして伊太利と英吉利とを結ぐ黃金の環たらしめし、エリザベス・バレツト・ブラウニングが創作と終焉の地。千八百六十一年謝意を表せんが爲にフイレンツエこの紀念標を置く」と記されて居る。

伊太利に於ける彼女の生活は僅十五年に過ぎなかつたが、この十五年こそ彼女をして最も生き甲斐あらしめたものであ

つた。當時の大批評家ラスキンをして、「この世紀の產みたる最大の詩歌」と叫ばしめたる、而して彼女の最も自信ある、一萬二千行に達する大作自叙傳的無韻詩『オーロラ・リイ』をはじめ、主として伊太利の時事問題を歌へる『國會の前』、其他死後に至つて『最後の詩集』に收められた數多の詩を書いたのも、伊太利に來てからの事である。

詩人としてのブラウニング夫人に就て多く語る事を得なかつたのは甚だ遺憾であるが、詩人としての彼女の聲名は、嚴密に言ふ時一にその「戀愛小曲集」に懸つて居る。彼女の詩材は廣く、汎ねく人と人との關係に觸れ、親子、夫婦、友人間の感情を限無く歌ひ出ては居るが、而も彼女の天才が遺憾無く發揮されて居るのは、一にこの戀愛詩に於てゞある。この意味に於てブラウニング夫人の眞面目は戀の詩人たる所に存すると言へよう。

彼女の詩は一般に甚だ多くの缺陷を有つて居ると言はれて居る。熱情に富んで不羈奔放に流れるのは、一面から言へば彼女の長所とも言ひ得ようが、而もそのため冗慢に流れがちに、技巧上多くの缺點を伴へる事は爭はれない。即ち、無理不自然な、或は拙劣な押韻——（尤も初期に彼女がこの點に關し一友に與へた手紙によると、我等に無理とも不自然とも見ゆる押韻は、實は彼女が細心の用意の下になれる試みだとの事ではあるが）——文法上の過誤、放恣なる新語多語の創造、等殆んど枚擧に遑が無いのである。彼女が小曲の創作に成功し得たのは、その定形が自ら彼女の放恣亂雜を抑制阻止し、却つて簡潔雄勁にして含蓄ある表現をそこに生ぜしめたに起因するであらう。

然しながら、今日我等にとつて最も興味あるは、詩人としての彼女よりも寧ろ一個の人間としてのブラウニング夫人にある。あらゆる障碍に敢然として抗し、生の充實に努め、自己の全成にその一生を献げた、その勇敢なる戰士的態度、その熱意と眞摯とにある。勿論ブラウニングの感化と影響とは人間としての彼女の全成に與つて大なるものであらう。然し彼女をしてよく彼女たらしめたものは、內に潑溂として燃ゆる至純なる生命の力であつた。彼女こそは亞米利加人ヒラアドの言ふ樣にまさしく、「眞珠の貝に封ぜられし火の靈」なのであつた。

（一九二四、七、二四、明石にて）

法學博士 河田嗣郎著

# 家族制度と婦人問題

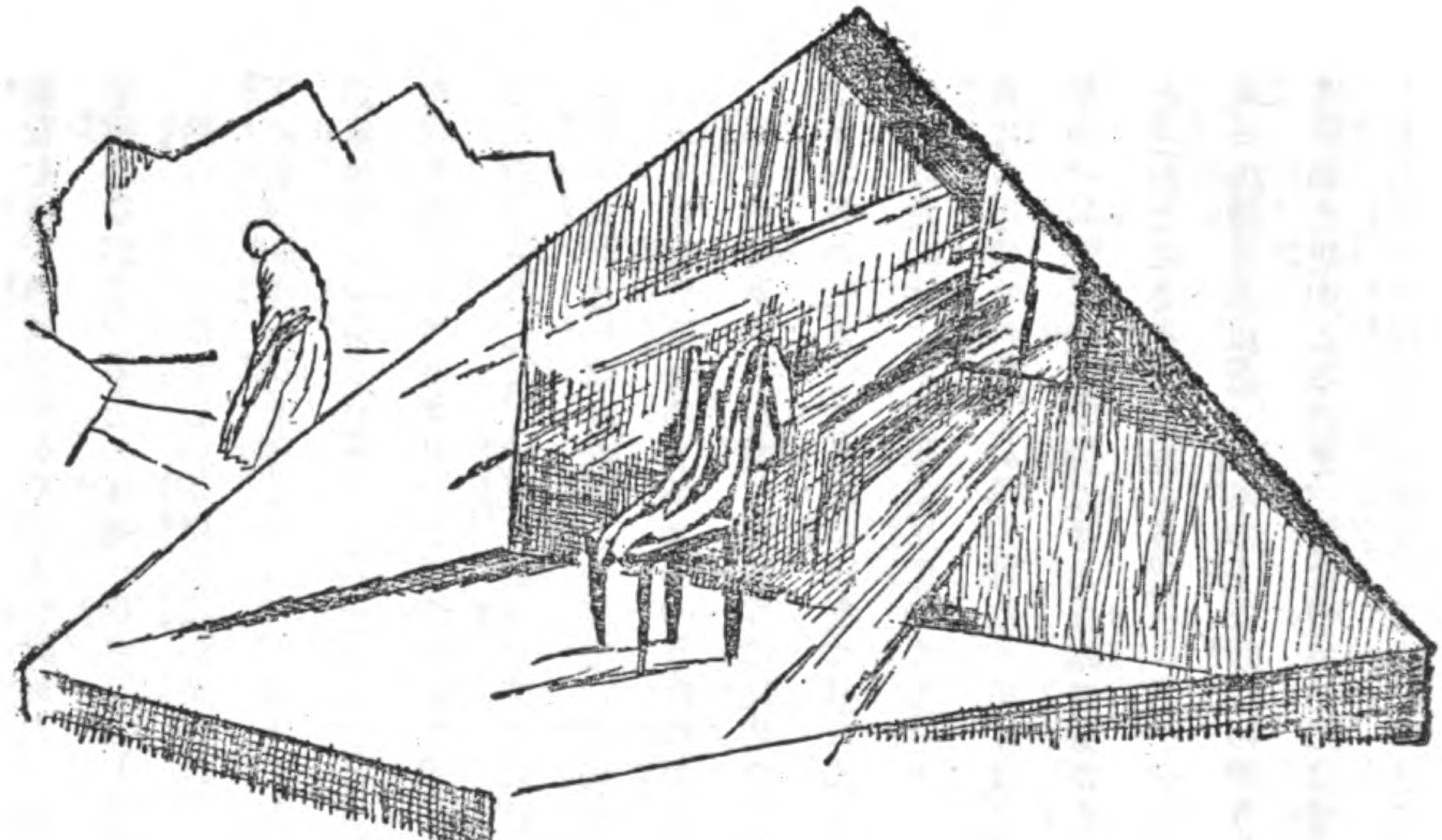
四六判 上製 定價二圓 郵送料十七錢

## 最新刊

私が『婦人問題』を著はして婦人解放論を唱へ當局の忌諱に觸れて絶版するの已むなきに至つたのは、明治四十三年のことであるから、最早一昔半となつた。當時はまだ時代が、思想的に幼稚で、今日では何でもない殆んどありふれた議論が、當局の忌む所とまでなつたやうな有樣であつた。然るに爾來時勢は躍進又躍進、今となつては啻に論議の上のみならず事實上に於ても大いに婦人解放の行はれつゝあるを祝さなければならぬ。然しまだその甚だ不徹底で、婦人その人にも反省と自覺の乏しきものあるを否み難い。私が玆に再びこの問題に關する本書を公にするも亦已み難き所である。

そして婦人問題は必ず家族制度の問題に關聯する。家族制度の問題が婦人問題に關聯すると謂ふてもよい。兩者を併せ叩くに依て初めて問題の眞相は披かるゝ。本書が兩者に關する解説と論議とを併せ收むる所以である。（著者）

發行所 東京市芝區愛宕下町 振替東京八四〇二番 改造社



# 春遠からじ（第四回）

ハッチンスン作

木村毅譯

三

突然、元氣のいゝ叫び聲と、熱りを立つた馬蹄の響きとを耳にして、セェバアは默想から我に返つた。

『あぶない！　ハイ、ドウ！　セェバア君、車を止めた、車を止めた！　君の自轉車を。』

彼はブレーキを締め、地面に足をついて飛び降りた。——と見ると自分は狹い小徑の中で跳躍する二頭の馬の間に板狹みにされてゐるのであつた。騎手達は、ぼんやりしながら自轉車を驅つて來る彼の樣子に眼をとめて、各々が兩方へ路を開いたのであつた。騎手達ははじめセェバアの方で車を止めてくれる者と思つてゐた。が、彼は平氣で、二人にすれ〳〵の所まで來るので、

止むを得ず急に手綱をぐつと引締めた。馬はからも不意に手綱と拍車を受けたことを怒り出したので、騎手の一人はそれを宥めながら、もとの本道へ戻さうとしてゐた。

路の一方には險しい切岸の堤が築かれてゐた。その方へ避けた騎手の馬は後足で立ち上つて、前足を堤にかけながら丁度郵便配達が扉を叩くやうに、ホト〱、ホト〱と、土に蹄を鳴らした。それに騎つてゐるタイバア卿は自分の愛馬が郵便屋の眞似をしてゐるのには氣も掛けないやうな風で、皮肉な微笑を見せながら肩越しにセェバアを見おろして言つた。『多謝、セェバア君。こいつは愉快でした。僕はこんな目に會ふのが好きでね。―― さあ來た、「戀な房」、こちらへ降りるんだ。さうして、元通りに歩いてくれ。』

「戀な房」と呼ばれた美しい栗毛の肥馬は、本道へ前足をおろし、機で、郵便屋の眞似はやめて、主に二本の後足でヒョコ〱と輕快極まるダンスのやうな格好をした。

馬はまだダンスを續けたさうに見えたが、騎手は巧みにその足並みを利用して、セエバアの眞正面へ馬首を向けた。馬がダンスの Das Seil の結びをつけてゐる時、タイバアはさツきと同じ弄ふやうな調子と、愛嬌笑ひと見せながら言葉をつづけた。『いよ〱以て感謝の至り。セェバア君。こんな目に會ふのは非常に肝臓のためいいんだよ。時に見て下さい、僕は片手でこれを止めるだけなんですよ。素敵でせう。外にはどんな手段も用ゐない。』馬はおとなしくなつて美しい鼻をセェバアに向けて慄はせると『音樂が止まつたと見えて、お前のダンスはいよいよ中止かね。お前の足並みは僕のそれとどんなによく合つたらう。』

『お馬鹿さんね。』二人の上で銀鈴のやうな響をもつた聲で笑つた。セェバアは默想からめざめて自轉車を降りた時、もう一頭の馬がゐるのを、目に留めるには留めたのだけれど、つい忘れてゐたのであつた。

その馬は切岸とは反對側の低い堤の上に飛び上つて、彫像のやうに無關心に佇立してゐた。これあつたがためにこの婦

人――タイバア夫人は路上で衝突の危險を遁れ得た、といふよりも寧ろさうなつた事が夫人を危險から救つたのであつた騎手も馬も、その朝の騎乘の目的地が恰もその堤でもあつたかのやうにして、且つ又生きた騎馬像――それはまことに美しい騎馬像であつたが――として何時までもそこを動かないもののやうにして、堤の上に立つてゐた。

『私達はこんな所へ乘り上げましたわ。』と、タイバア夫人は言つた。その聲は明晰で、美しい響き含んでゐた。『だけれど此處に上つてる私達の格好は素敵でせう。あんたもさう思はない、デリ・アンド・トムさん(馬の名)? 私達は誰も見返つて下さらないから、世界の涯へ飛んでつてもそれきりにされる所だつたのね。だけれど、私達は少しも氣にしてゐませんわ。ほら、ね、デリさん。マルコオ(マアクへの親しい呼びかけでつまりセエバアのことである)はお詫びをするため、本當に帽子を取らうとして居らつしやるでせう。さ、あなたも御挨拶なさい。』

彼女の馬はその言葉の意味が分つたかのやうに、首を振つた。夫人は手でそれを遮るやうな仕草を見せながら言つた。

『私達もそろ〳〵降りませうか。トニイさん(タイバアのこと)。あなたのお馬のダンスはもうお了ひ? いかゞマルコオ、あのダンスはお氣に召しまして? さあさ、降りませう。これは世界一の女騎手レデイ・タイバアが天下の名馬デリイ・アンド・トムに鞭打つて、千仞の絶壁を驅け下るの光景よ。』

デリイは朝風に嘶いて堤から飛び下りた。そしてその輕快とその正確とをそのまゝ足蹟として土に留めて遁かうとするやうなよく調つた歩度で、仲間の傍に歩みよると、又優雅な不動の姿勢を取つた。

## 四

かうして騎手は二人ながら、セエバアと向ひ合せて微笑みかけた。セエバアは自轉車を支へた儘、タイバア卿の夫妻の前に立つた。馬はセエバアの方へ向けて、その美しい「鼻を慄はせ續けてゐた。時には激しい」鼻息を吹くので、その柔

かで荒やかな鼻孔の奥まで見通すことが出來た。

此の騎手とその馬とは自分がかつて想像にも描いた事のない、活溌と優雅の相交つた感動の深い繪畫のやうだと思つた。

タイバアは今年三十二才、雅びた、人目をひく顔の特色であつた。その灰色の兩眼は非常に快活に、しかし惡戯さうに動いて、そのダイヤモンドのやうな閃きをまき散らす瞬きの中に、氣輕な、物に構はない、大膽な氣象を現はしてゐた。顔は肉が緊まつて、日に燒けたオリーヴ色をしてゐた。そして世間に向つて挑戰的に、『われ此處にあり、警戒せよ。』と呼號してゐるやうに見えた。併し、彼は殘酷な口をきく人だと思つてゐる者――主に婦人――もあつた。併しそれを璧に傷として殘念がる色はなく、寧ろその殘酷な口のきき振りも彼の男振りを增すものであるかのやうに、有頂天になつて噂をするのであつた。

夫人は二十八才、良人の日に燒けた顔色と、短かく刈つた頭とを補ふやうな顔色と頭髮とを持つてゐた。彼女はぬけ出た程に肌目が細かだつた。その皮膚はクリーム色のやうな色と輝きとを帶びてゐた。一寸みると纖弱さうだが、實際は非常に丈夫だつた。彼女は自分の子供は無かつたが、併し子供達は彼女を慕ひ寄り、彼女も子供達と戯れるのが好きだつた。あの子供特有の、じツと無心に見とれるやうな眼色で彼女を眺め、それから顔に觸れたり、撫でたりしたいと言ひ出すのであつた。彼等赤ン坊達の指と言へどもこの夫人の皮膚以上に絹のやうな柔かさを持つてゐるとは言へなかつた。彼女は又子供の時から髮は「あき〳〵する程うるさいものだ」と言つてゐた。で、彼女をさうも煩さがらすものを懲罰するやうに、髮はしツかりと結んでゐた。この艶々しい捲髮にも、子供達はその柔かい指を觸れたいと云つた。

ノナとは卽ち彼女の名であつた。

たゞ通りすがりに彼女に一瞥をなげてゆく行く人々からは、彼女の美人であることは否定せられるであらう。彼女の顔

は瓜實顔でも又はクラシツクのそれでもなく、寧ろ活潑な圓顔であつた。その皮膚の色と髪の艶とは充分魅力あるに拘はらず、彼女は美人とは言へなかつた。多くの人は言ふであらう。又實際に言つた。『いいや、いや、たゞ可愛い女なんだよ。たゞそれ丈けさ。』

けれどもセェバアに取れば彼女は、美人以上の遙かに多くのものだつた。

## 五

自轉車を支へながら立つたセェバアは、今肥馬に跨つてゐるノナを、又彼女の良人なるタイバア卿を、見ざること二年に及んだ。彼等夫妻は旅行に出てゐたのである。だから今、思ひがけなくも、雄々しい騎馬姿の彼女に出會ふと、胸に藏つてゐた思出の繪巻の所々が、驚くべき正確さと細かさを以て、思ひ浮んで來。たさうだ、あの頃チットボロウ選出の民選議員ハツデン・ホリデイ卿の令嬢、シューウェンズベリ宮のノナ・ホリデイが、タイバア卿と婚約が調ふたと云ふ噂がひろまると、若い男仲間はその話で持ち切つた。

『全く可愛い娘さね。』と、みんなは取沙汰したが、セェバアはそれを耳にする度に『馬鹿ツ！』と思つたものである。

『なに、可愛いもんか。』と、他の者が言つた。セェバアはその時も亦『馬鹿ツ！』と思つた。

『可愛いよ、可愛いよ！——いや、可愛いもんか、なんであの女が！——』彼は機嫌を惡くしてかうした論爭から逃げ出したものである。

ペニイ・グリインのゴルフ倶樂部にみんな集つてゐる時、丁度彼女の婚約の噂が傳つて來たので、場内は直ちに鼎の湧くやうな騷ぎとなつた。丁度その日は雨天だつたので、天幕が張つてあつたが、セェバアは雨を衝いてそこを飛出した。馬鹿ツ！彼女はたゞ可愛い丈けにとどまるもんかい。僕が彼女の顏の中に認め得るものを、奴等は彼女の顏の中に認める

事が出來ないんだらう。そして彼はかう考へた。

『だが、彼等は彼女を愛した事がない。今、噂にきいた事は彼等に取つては何でもないんだ。併し彼女は今朝その事を、僕に向つては自分の口から直接話した。……彼女は、その話が僕にどんな思ひをさせるかを知つてゐたのだ。……二人は何事も話しはしなかつたけれども……僕の見る彼女は、彼等の見るのと勿論違ふのだ。』

最近まる二ケ年は一目も見ず、又ゴルフ俱樂部の無駄話からは十年も經つた今日だが、セェバアはやはり人とは違つた眼で彼女を見てゐた。可愛いつて！……不思議な事に彼は天幕を飛出した時の雨の匂ひまで、今もありありと思出すことが出來る。……それは今彼女を見上げた時の空氣の薫りと、あやしくも似通ふてゐた。

彼が自轉車を支へて馬の前に立つた時、温かに慄へてゐる空氣の中へ撒き擴げられてゐる乾草と生垣を吹き過ぐる晩春の風とが、爽やかな香氣を漂はせた。又艶々しい馬の身體から發してくる甘い薫、馬具の金屬的な鋭烈な匂ひ、小さな嵐を思はせるやうな馬の鼻息の匂ひもそれに交つてゐた。

騎手と馬とが現身のまゝで描いてゐる力と美に充ちた此の眩い許りの調和は、さながらセェバアが呼吸してゐるこの温かい香氣の中から生れでて、香氣の胸の中にゆらめきながら支へられてゐるやうに見えた。それは恰も魔法使ひが火焰の中に藥草を投げこむと、忽ちに香氣ある雲が捲き起つて、その雲の中に物の影が現はれ出でて來た趣きと似てゐた。

雄々しくも型どられた力と美の精妙な調和。滑かな栗色に光る馬の皮膚。完全な藝術的比準を保つてゐる優しい四肢。輝やかしい弓形の首、高貴なる頭。天鵞絨のやうな鼻面。眩ゆい轡と鎖と締金。よく磨かれた馬勒と鞭と鞍。タイバア卿のいみじくも取つた姿勢。（もし彼が下馬したならば馬の形も崩れるであらうと思はれる位巧みに馬のシムメトリイをも保つてゐた）彼の容々たる風姿。その快活で美しい顏。そして彼女……

天鵞絨の鼻面にふくませた轡の音。戛々と路を踏む蹄。小止みもなく動く長き尾の空を切る音。鞍のひびき。馬が頭を

揺る度に一時に鳴り出すそれら凡ての器具の物音。遠音にきこゆる草刈機の音。いづこかには小鳥の鳴聲……。まさに呪文に依つて盡ひ出されたやうである。

## 六

挨拶は既に交はされ、セェバアの不注意に對する詫び言は笑つて、收められた。『全くここは猛虎とも言ふべき危險な場所ですね。君のこの郊外住宅は。』と、タイバアは言つた。

『僕のじやありませんよ。』とセェバアは答へた。

『ほほう。してみると君は、僕の持つてゐるのと同じ愛郷心をお持ちでないと見えますね。郷土に對する情熱的愛着は、僕の優雅な性質の一面をなすものだ。この教區の牧師ブウム・バグシ・ウ君がこの附近を僕に案内して呉れた時、僕が歡喜の餘り泣いたり、さう言つて僕を賞めてくれたんです。今でも僕は郊外住宅の後見者です。でなきや、監督と言ふか、副牧師と云ふか、兎に角さう言つた者の積りでゐます。本當ですよ。僕のやうなのは一體何と言つたらしいのかな。ノナ?』

『あんた?——あんたは高慢な貴族で、吸血鬼だわ。』ノナは明晰な、美しい聲で良人に答へた。『そして貴方は、獸的な先祖が人民から掠奪なすつた領地の上に生活して居らつしやる人です。さう言へばいいわ。私、昨日サアチライトに照らしてそれをお目に掛けたでせう。優雅だなんて仰有らない方がいいわ。優雅と言ふのは私のことよ。』

『あゝ、いや、神かけて、僕も優雅さ! 吸血鬼だつて! これはまあ、何と云ふ言ひ草だ。』

タイバアは、セェバアが思はず吹き出したほど、悲しげな、羞ぢたやうな顔色をした。それで今度はセェバアがノナに訊ねた。『なぜ優雅と云ふのはあなたの御獨占なんですね。え、タイバアの奥さん。』

ノナは彼の方へ向けて唇をとがらせて言つた。『マルコオ。奥さんなんて言ふのはよして頂戴よ。私達は。私がトニイ

（愛稱）を知る千年も昔から、お互にノナ、マルコオつて、呼び合つて居たんじやありませんか。それに私が結婚したからつて直ぐ――』

『では此の單に憎むべき一匹の吸血鬼にも、どうぞ家內と同じやうなお心易立てを願ひます。』と、タイバアは横から口を入れた。

『本當に、吸血鬼には特にお心易立てにね。ノナと呼ぶことを思出せばいいんです。あんまり四角張ると私達の間が氣拙くなつて了ひます。私が去る前お話しておいた通り、トニイがそれを氣にするなどとはお考へにならないでね。』

『そしてセェバア君』とタイバアが口を入れた。『高慢な掠奪者が氣にする位が、畢竟、何程の問題にならう。と言ふのが僕に對する君達の考へでせう。ね、セェバア君。どうぞ僕をば脚下に蹂躙して下さい。僕は有害なる封建制度の遺物さ。ええ、ノナ。』

『全くだわ。そしてマルコオ、あなたは今よりもつとひどいお馬鹿さんになるやうな事があつては駄目よ。』

『おやおや、君の方へと風向きが變りかけましたね。』と、タイバアは呟いた。『僕も亦馬鹿だつて、このサーチライト夫人は仰有るんですがね。』

彼はセェバアに、自分の諧謔よりも寧ろ、自分の妻とセェバアとの思ひがけない邂逅に、より深い興味を寄せてゐるらしいやうな印象を與へた。彼は正面からノナを見やうとして、その方へ少しく靴の向きを換え、耳を傾けたり、間に口を挾んだり、その眼を彼女の顏からセェバアの顏へ、又セェバアの顏から彼女の顏へと轉じたりした。そして或る嘲りを秘めてゐるやうに、美しい頭を輕く一方に傾しげ、兩眼は異樣に輝かせた。

奇怪なる心の動きよ！ 彼は一體如何なる嘲りを秘めてゐるのであらう。

『優雅つて言葉が――』と、ノナは良人の思惑には頓着なく話をつづけた。『どうして私獨占かつて、お訊きなすつたのだ

わね。』

『ええ、どうして貴女の獨占です。』と、セェバアは言つた。

『だつてデリ・アンド・トムの場合だつてさうですわ。』彼女は鞭で馬の耳を探ぐると、馬は、その優雅の例とされたことを知り、且つ誇るかのやうに、蹄で地を打つて、首を立てた。『私、馬のために優雅な名前を付けてやりたいと願つたのよ。そして私はいつも、物の呼名には二つの名詞を並べて付けると優雅になると云ふ意見を抱いてゐますの――』

『道理で僕の名は吸血鬼と馬鹿なんだね。』と、タイバアは悄氣たやうに言つので、みんなが笑つた。

『で、私はデリ・アンド・トムと云ふ名を付けたんですわ。』

それだけでは、優雅と云ふ言葉の獨占者となつた理由の説明にはならないと、セェバアは言つた。

『おゝ、マルコオ。あなたは洞察力の乏しい方だわね。昔からあなたはさうだつたわ。あのね、トニイと私とが何れか一つ言葉を見つけてそれを好くとするでせう。私達はそれをお互に自分のものとして、何に向つてども用ゐてゐるうちに、それは私達二人の中のどちらかの占有になつて了ふんです。で、優雅な私のものになつたのですわ。私はこの言葉が大變に好きです。まあ、さうした譯なのよ。優雅つて言葉も。――お分りになりまして。』

その時タイバアは、急にある言葉に興味を惹かれて、それの占有を希望すると言ひ出した。それは「血」と云ふ言葉だつた。『ねえ、果して僕が血を吸つて生活してゐるものとすれば――。』

『いや／＼。あゝ、身慄ひがするわ。トニイ。』

『元よりだ。僕はその最も獰惡な奴なのだ。僕は今からそれを實現しやうと思ひ立つたのだ。「血」は僕なのだよ。ノナ。血は、著作權所有、版權所有だよ――僕の。』

『さう。あなたがその名詞を愛着なさる限り、そして形容詞としてお用ひなき限り（血の形容詞bloodyは殘虐の意味それ故これは「只言葉を愛惜するのみで實際に殘虐なこ

とをしきへせねば」の意)それでもいゝわ。』と彼女は言つたので、みんな再び笑つた。

タイバアは皺を集めて左手を撫でた。『さう。動物には親切にするよ。それは又特に僕の美しい性癖の一つだ。僕とこの愛馬との間には完全な默會が存するものだから、馬は僕に向つて告げてゐます。君のことは何もかも見ぬいたつて。セェバア君。此奴は自分の思つてゐる事を脇腹から僕に告げます。僕の敏感な神經質な足にマルコニる(無線電信で通じるとの意味その發明者マルコニの名を動詞に用ゐてマルコオに掛けたのである)のです。僕はそれを書きしるして、サーチライト夫人に告げなければなりません。さうすれば僕の評判も少しは恢復するでせう。』――馬は彼の手を感じ、甘えたやうに跳躍し初めた。『どうぞ度々訊ねて居らしつて下さいさあもう歸宅の時刻だ。ノナは君にお目に掛るのを喜んでゐます。ねえ、ノナ。』そして再びおどけたやうな愚弄の顏色でノナからセェバア、セェバアからノナと、見遣り、見返しした。

『本當よ、マルコオ。』とノナは良人の言葉に同じた。『あんたは洞察力が鈍つてさへゐない時は全くいい人だわ。どうぞ來て頂戴ノーレスレップス(タイバアの邸地のこと)はいつもあなたの鬼門で、ひどい口をきいたり、痛手を負はしたりさせずには置きませんけれど。』

馬は再び靜まつた。そして首をセェバアの方へ伸ばし、彼を感じやうとするものゝやうに、彼に對してその鼻を慄はせた。セェバアは馬の美しい鼻面を撫でてやらうとして手を出すと、馬は無遠慮に頭をひつこめて、反り返つた。馬がいくら跳ね廻つてもタイバアはそれと完全な比準を保つて、少しも形を崩さず、肩越しにセェバアを笑つた。『此奴は君が何かを胸に企んでゐるとでも思つてゐるんですよ。セェバア君。君を陰謀家とでも疑つてゐるんだね。それが僕に分るとは不思議でせう。さあ、話せ、わが愛馬よ。僕がきいてやる。お前は機嫌を惡くしてるんだね。』

彼の微笑した兩眼に浮んでゐる光は、たしかに『君は何かを胸に謀んでゐる。君は陰謀家だ』とでも思つてゐるに適はしい嘲笑の光であつた。

馬はやがて元の位置に向きを換へた。それは馬自身の意志には反した事だつたが、足を動かした反動で自然にさうなつたのでもあつた。それにタイバアが如何に不思議に、馬のむら氣を抑へて自分の思惑に隨はすに巧みだつた事だらう。タイバアはその時ふと眼を後方に放つた。そこには草原が隣接して急な傾斜を作りながら、遥かに彼方の木立の繁みまで續ゐてゐた。併し道にゐたのでは、わづかに木々の頂きしか見る事が出來まい。彼の眼に遠くにある或る幻影の上に吸ひつけられた。彼は言つた。『これは素敵々々。スウパア爺さんがあしこにゐる。彼奴、僕を避けてゐたんだが、たうとう目付けたぞ。ノナ、お前は獨りで歸つてもいいだらう。僕はスウパアに話があるんだ。馬糧のことで彼の血を絞つてやらなきやならん。血よ！ わが言葉よ！ さあ來い！』

彼は驚くべき早さと器用な身のこなしで、馬首を向け換えた。『失敬、セェバア君。構はないね、ノナ。』彼は一瞥を閃めかせた。そして樂々と低い堤の上へと馬を乘り上げた。馬がましぐらに草原を驅けて行くと、彼は振り返つて手を振つた。それから生ける詩の如く、美しき幻影の如く、疾驅し去つた。ああ、運命の寵兒よ！

殘された二人は彼の後を見送つた。草原の涯に來ると彼は再び鞍の上からふり返り、快活に手を振つた。二人ともそれに答へて手を動かした。彼は草場を行きつくして、やがて眼界から消えた。

## 七

タイバアのみがその求めてゐた人を見つけ出した草原の涯にある谷の形は、遠くから見るとノアの方舟程の廣さがあつた。『あの人はどうして、あんなに人を見分けることが出來たのか知ら。』と、ノナは、谷の方を見つめて言つた。『私には人の影さへ見みない。あの人はまるで四羽の鷹の眼を合せたやうなんですわ。』

セェバアは言つた。『そして、何と言つたらいいか、から其の、センタウロス（ギリシヤ神話中の半人半馬の怪物）のやうに長驅して行きま

したね。』
　彼女はセェバアを見返して言つた。『あの人はあんな事なら何でも人並すぐれてよく出來るんですよ。それがトニイの特長です。何でもよい。そりや全く驚くやうですわ。』
　それはどうかすると惚氣とでも取れる言葉であつた。併し彼女はその厭味なく話した。いや單に發音しただけであつた。『さあ、私も參りませう。あんたは何う、マルコオ？　あんたもお出掛けの所なんでせう。あんたが途中で留つて、こんな無駄話をなすつて、いい筈はないと思ひます。あんたは怠け者ぢやなく、大變に熱心な勉强家でしたね。この勉强家と云ふのも私の言葉よ。』と言つた彼女は、セェバアが仕事に熱中した頃のある娛しい思出に耽るかのやうに、笑つた。
　彼もつりこまれて笑つた。二人には、皆がみなまで笑ふやうな事許りではなかつたけれど、共通の記憶が澤山にあつた。『今の僕は昔のやうな熱心な勉强家じやないらしいですよ。』
『あゝ、だけれど、私、あなたが大好きよ。マルコオ。』
　二人の間には最も僅かな沈默があつた。併しセェバアには隨分と長い沈默のやうに思へた。
　さきに口を切つたのは又彼女であつた。その調子は、彼女自身でも亦、沈默の長かつた事を意識してゐるやうな、そして努力してそれを繕つたやうなしどろな所があつた。
『メーベルさんの御機嫌はどう？』
『あれも丈夫です。そして郊外住宅のことに夢中になつてゐますよ。』
『あの方、さうでせうね。』と、ノナは言つた。
『いや、僕も夢中なんですよ。』と、セェバアは言つた。彼女の言葉の調子が、思はず彼をして挑戰的な答辯をさせて了つた。
　彼女は笑つた。『勿論、あんたはさうだと思つてゐたわ。マルコオ。では、さやうなら。』と言つておきながら、その愛馬

のデリ・アンド・トムが靜かな足取りで方向轉換のため一巡してゐる間に、又話しかけた。『あなたが略ズボンをお履きにならないのが、私、氣に入つたわ、マルコオ。私、略ズボンは大嫌ひよ』

彼は、しかし自轉車の方では「鎖なし」のを乘り廻してゐると言つた。

彼はそれを口ごもりながら言つた。もとはノナがよく、それと同じやうな口ごもつた調子で『私、あなたの其の鳶色の眼が大好きだわ。』と言つたものであつたが……

## 八

セェバアは又自轉車に乘つた。行くこと一丁餘り、少し上りになつた所で彼は、大きな木が三對車に乘せられ、二匹の巨きな馬に依つて曳かれてゐるのと出會つた。通りすがりに温かいその生き物の匂ひが漂ふて來たので、彼はわれ知らず別れたノナの事を思ひ出した。

彼は矢のやうに乘り進めて行つた。わけわけも無く次やうな詩の一句が思ひ浮べられた。

　これぞげに百千なる
　船卸しせし面なりしや

ああ、セェバアにも、向上心と、夢と幻影とを抱いた昔があつた。……

丁度その時、チッドボロウへ向つて下る坂の頂上にさしかゝつた。左右に擴がる市の上に聳えた會堂の尖閣も脚下に見えた。

『キングス・クローズの家々の家賃は年八十磅です。トウラア夫人はそれを一軒借りやうとして居らつしやるんですつて。』……今朝メーベルの言つた言葉が又思ひ浮ぶ。

# 第二章

## 一

事務室へ入つてみても用事は僅かしかなかつた。セェパアはそれを片付けてから、暫くの間は空虚な心で、自分の發行した書籍の並んでゐる本箱を見つめながら坐つてゐた。それから著作中の『英國』の原稿を取上げて頁を繰つてみた。彼は、もしノナが此れを見たら何と言ふであらうかと思つた。彼はノナに向つてこの話がしたかつた。

トワイニングが入つて來た。

トワイニングがセェパアの室に入つて來ることは滅多にないのであつた。セェパアも亦トワイニングの室に入つて行く事が年に二度とは無かつた。それは二人の仕事が掛け違つてゐたし、それに言葉にこそ出さなかつたが、二人の間には反感に似たものがあつた。トワイニングはセェパアよりも年上であつた。數へて見れば二つしか年上ではなかつたが、顔付きや、様子や、事務の經驗の上では、餘程の年齢のやうに見えた。彼は、セェパアがチットボロウ學校へ入つた時、少年店番としてこの商會に入りこんだ。セェパアがケムブリッヂに在學してゐた頃には、或る注文の一組の机を非常に粗雜に手早く仕上げて、特別に社長フォーチュンの眼にとまり、書記頭に抜擢せられた。セェパアが此の商會へ入つて來た時には現在の地位の見習らひに擧げられ、セェパアの父が退隠すると直ぐ、正式に今の地位についた。彼はセェパアを素人として見てゐた。然るに此の勝手も知らなきや、充分叩きこまれてもゐない素人がやがては彼と同等の地位に出世するだらうと云ふ事實は、内心ひそかに彼を狼敗せしめた。けれども表面は少しの敵意も見せずに、この事實は飲みこんでゐた。彼はセェパアに向つてはいつも懇切に應待しやうと努めてゐるやうであつたが、それが却つてセェパアをして打ち解けさせないやうにして了つた。彼がセェパアに執つた態度は、彼もセェパアも共に同僚として頑固な老雇主の下で働いてゐる者で、二人は一緒に歡びも、悲しみも、今後の計畫も相談し合へる仲間だと言ふやうな調子であつた。セェパアはこれに

同じなかつた。彼は最初からトワイニングに向つて、フォーチュンの下風に立つ者としてでなく、同位置に立つて働いてゐる者と云ふやうな印象を與へた。彼は、トワイニングが二人きりの時によく示すやうな課業をなまける生徒のやうな風を共にする事を拒んだ。トワイニングはこれを『旋まがり』と呼んだ。彼は又、セェバアが初めて此の商會へ入つて來た時、食事をするにチッドボロウ中第一のいい所を案内してやるつもりでゐたが、セェバアは學校の舍監と一緒に寄宿舍でよく食事をした。トワイニングは此れを、あまりによそ〳〵し過ぎると思つた。

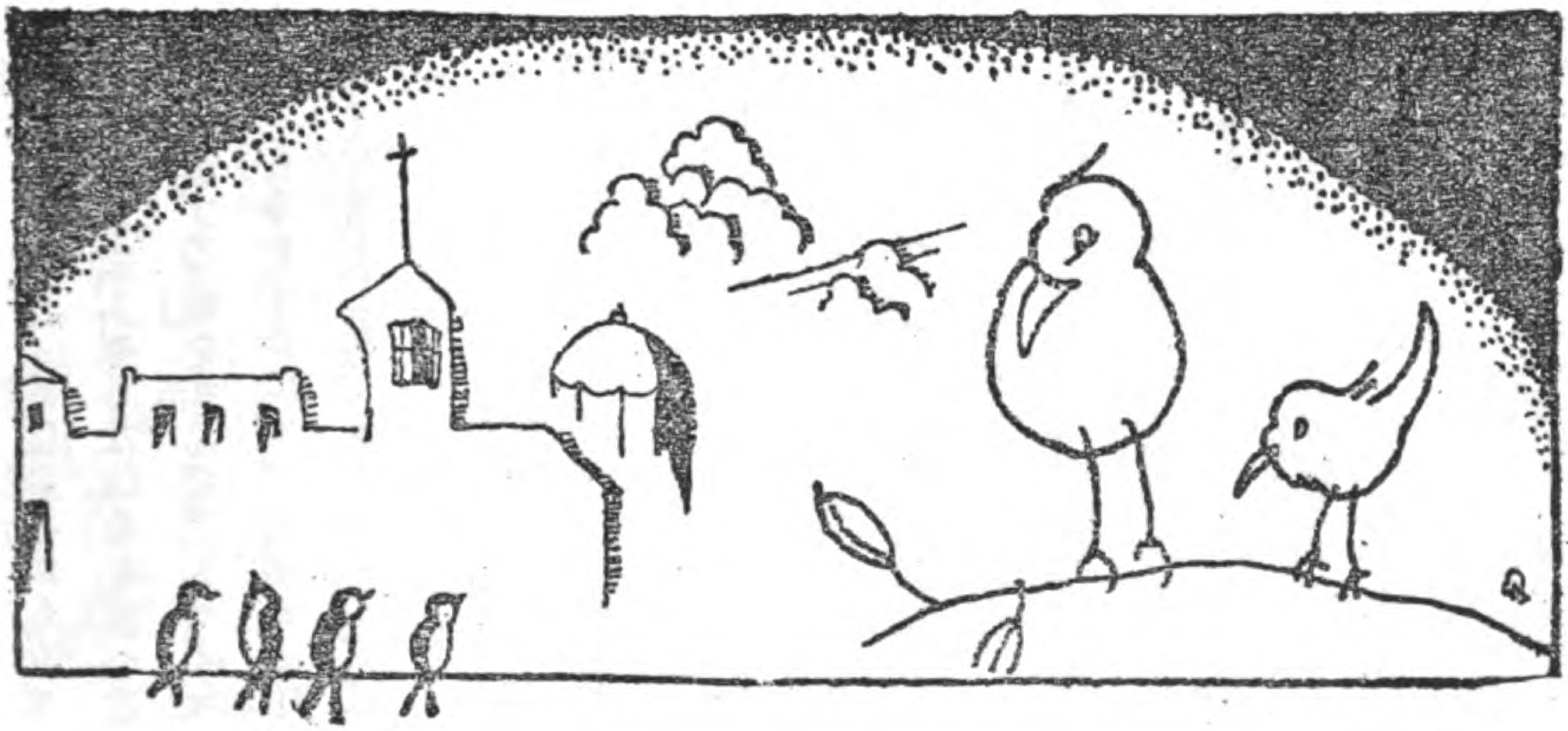
トワイニングは中背の、痩せた、髪の黒い男であつた。彼のよく剃刀をあたつた顔には深い皺が縦横に刻まれてゐて、丁度剃刀があまり勝手に動きすぎて切つたのではないかと思はれるやうな、厳つい表情を與へてゐた。彼は身を持するに甚だ窮屈さうで、話しぶりも亦咽喉笛が硬化しかゝつてゐるのではないかと思ふ程窮屈だつた。話をしてゐない時には深く呼吸の練習でもしてゐるやうに、鼻孔に騒音を立てゝ、息を吸ひこむ癖があつた。彼は結婚してゐて、しかも頗る御自慢の息子が一人あつた。それは十八才で、ある辯護士の事務所へ務めてゐた。

彼は室へ入つて來ると、ピタリと戸を閉め切つた。手には一葉の用箋を持つてゐた。

夢中になつてゐたセェバアは、それを迎えて『やあ』と聲を掛け、ある言葉を書きこんでペンを投げ捨てた。『何か、僕に御用?』――彼は椅子に凭れ掛り、眉をひそめながら自分の前の原稿を見つめて言つた。

『いや、お忙しいやうなら別に此れと言つて……。たゞ、一寸立ち寄つて見たのさ。』と、トワイニングは言つて、手にしてゐる紙片をひろげ、まだ何か言ひ足さうとするやうにそれを眺めた。併し別に何も言はず、セェバアの椅子の傍に立ちながら同じやうに原稿をのぞきこんだ。『それは例のあの本だね。』

『うむ』と、セェバアは自分の思想を散らすまいと努力するやうに言つた。がトワイニングの顔を見ると折角の思想も逃げて了つた。彼の耳にはトワイニングの鼻の騒音が入つて來た。そして時も時とて原稿を書かうとしてゐる矢先きに彼が椅子の傍へやつて來て　鼻を騒がせ初めた事が大いに癪にさはつた。



# 鼻（童話）

廣津和郎

## 一

朝が來て、お日樣が空に昇り、それが次第に高くなつて、いつの間にかお晝になり、やがて今度は西の方へ傾き出して、夕方になり、たうとう夜になつてしまつても、それでも兩の瞼が縫ひつけられでもしたやうに、誰ひとりとして眼をさます者もなく、したがつて雨戸を繰つてその日の家業に就くものもない村――若しさういふ村がどこかに在つたとしたら、おお！ それは何と云ふ莫迦げた、何と云ふ不思議な村でありませう。

山奥に、村と云ふ程でもない小さな村がありました。その村では昔から、檀那寺の鐘が時計の代りになつてゐました。そんな草深い田舎のことですから、時計と云ふものを持つてゐるのは、僅に村長さんとお寺の和尚さんとの二人ぐらゐのものでした

が、生憎、村長さんの時計は、もう大分前から狂つてゐるので、そこからは幾つも山を越えた遠い遠い町まで、修繕にやつてありました。

で、お寺の和尚さんは、降つても照つても朝と晩とには、本堂の裏山の鐘樓に登つて行つて、時の鐘を撞きました。村の人々は、毎朝々々、和尚さんの撞き出すその鐘の音で眼をさましました。ゴオン、ゴオンと鐘の響が、山や谷や林にこもつて鳴り擴がりますと、それ朝が來た！と云ふので、豆腐屋は石の臼で大豆をひき始めます。八百屋は芋や大根を店に並べ始めます。鍛冶屋はふいごをぶうぶう吹いて、鐵を燒き始めます。

それが長い間のその村の習慣になつてゐました。

『わしの村の鼻低和尚は生き時計だ……』

『さうだ、わしの村の鼻低和尚は生き時計だ！』

村の人々は口々にさう云つて、和尚さんに感謝してゐました。云ひ忘れましたが、その和尚さんは大變鼻が低くつて、まるで柿のへた見たやうな恰好に、顔の眞ん中にぺちやんとくつついてゐました。『鼻低和尚、鼻低和尚』みんなはかう綽名してゐました。

『いくら鼻が低くつても、わし等に取つては、二人とない有難い和尚さんだ。和尚さんが怠け者だつたら、わし等は家業も出來やしない』

鼻の特別低いことを笑ひながらも、村人たちは寄ると觸ると、和尚さんを賞めてゐました。いや、和尚さんを賞めながらも、その鼻の低いのを笑つてゐた、と云つた方がほんたうかも知れません。

それが或朝のこと、その朝はどうした事かお寺の鐘が鳴りませんでした。朝ばかりではない。お晝になつても、夕方になつても、晩の鐘の鳴る時になつても、それは終に鳴りませんでした。習慣と云ふものは恐ろしいもので、朝晩その鐘の

音によつて、起きる時を知らされ、寝る時を知らされてゐた村民達は、その鐘が鳴らないとなると、誰ひとり眼をさますものがありませんでした。家々の雨戸は朝から晩まで閉され通しで、村中が森閑と寝しづまつてゐました。

用事があつてその村に來た者があつても、いやにしんと寝しづまつてゐるとは思ひながら、そこが田舍で暢氣なものですから、格別氣にも止めず、

『又、明日來よう』

さう呟きながら歸つて行きました。

通りすがりの旅人等は、

『おやおや、この村では昨日お祭でもあつたものに違ひないな。餘つ程騒ぎ疲れたと見えて、よく寝くさつてゐるわい』

そんな風に笑ひながら過ぎて行きました。

そのうち、夜が更けて、翌日の朝になりました。が、お寺の鐘はそれでも鳴りませんでした。そしてその二日目もたうとう、前の日と同じく、誰一人起き出る者もなく、森閑として暮れてしまひました。

終に三日目となりました。

一人の强盜がその村に逃げ込んで來ました。それは恐ろしい强盜で、遠くの町で人を四人とか斬り殺し、十人とか傷つけ、その上澤山のお金を奪つて逃げて來たのです。その後から大勢の警官が追跡して、村に這入つて來ました。

『あの强盜を捕り逃がしたら大變だ、どんな恐ろしいことを仕出かすかも知れない！』と云ふので、警官達は四方に分れて、村の出入口に網を張つて、蟻一匹だつて逃がすものかと云ふ意氣込で、嚴重に固めてしまひました。けれども、警官だけでは萬一逃がさないもと限らないと云ふ不安があるので、村の人々に總出になつて貰つて、その强盜を捕へようと云ふことになりました。

その時になつて初めて警官達は、村中に人ッ子一人の姿も見えないのに氣がつきました。太陽がかんかん照つてゐるのに、どの家もどの家も雨戸を閉めて、ぐうぐう寢込んでゐるのを發見しました。

『これは妙だ！』

と一人が叫びました。

『まさか村ぢゆう殘らずの人間が、昨日今日の間に死に絶えてしまつたわけでもあるまい』

ともう一人が不思議さうに、首を傾げて云ひました。

『とにかくかうしてゐても仕方がない。愚圖々々してゐたら、強盗を逃がしてしまふから、我々みんなで一軒づつ叩き起して歩かうではないか』

一番年をとつた警官が云ひました。

『さうだ、さうだ、それが好からう』

そこで衆議一決して、警官達は八方に駈け出して行つて、一軒一軒叩き起し始めました。

『強盗が逃げ込んだのだ、強盗が逃げ込んだのだ、早く起きろ、早く起きろ！』

さう怒鳴りながら、破れんばかりに戸を叩いて歩きました。

『ナニ、強盗？ それは大變だ！』

『へえ、へえ、起きます、起きます。もう夜が明けましたかな？』

『うるさいな。一體誰だい、お寺の鐘が鳴らないうちから、人の寢てゐるのを喧ましく邪魔するのは？』

などと寢とぼけた人達が、いろいろな事を呟きながら、それでも十分と經たない間に、村ぢゆうがみんな眼をさましました。――三日ぶりで

『强盗が逃げ込んだのだから、みんな加勢をして吳れ！』

と警官達が怒鳴りました。

『强盗！强盗！』

『それや大變だ！』

村ぢゆうの人々は何も彼も放り出して、往來に飛び出しました。忽ちの中に、村の中が人でいぱいに埋まりました。かうなつては、どんなに機敏な奴だつて、もう逃れる隙はありません。それだのに、何處にどう姿を隱したものか、肝心の泥棒の姿はさつぱり見つかりません。そのうちに。奇妙な事件が持上りました。と云ふのは、之れまで村ぢゆうの人々が、

『泥棒は何處だ？』

『强盗を逃がすな……』

と喚いてゐたその喚き聲が、氣がついて見ると、平生とはまるで違つたとてつもない變な聲なのです。ふわつと何處かへ聲の尻が消えて行つてしまつたやうな。それはそれは賴りない覺束ない聲なのです。どうしてそんな聲になつたものやら、誰にも解りませんでした。

するど、一人の人間が、頓狂な聲で、突然、

『おや、わしの鼻がない……』

と叫びました。すると、あつちでも、こつちでも、

『おや、わしの鼻もない……』

『わしの鼻もない……』

とみんなが叫びました。

『鼻がない！』

『鼻がない！』

『わしも！』

『お前も！』

『ああ、鼻は何處へ行つた？』

『鼻を返せ！』

『口惜しい！』

『情ない！』

『どうしよう、妾はお嫁に行かれないわ！』

『わあッ！』

『わあッ！』

『わ………』

『………』

何とも彼とも云はれない大騷ぎです。さうなると、もう泥棒どころの騷ぎではありません。みんなは急になくなつた鼻を押へながら、泣く、喚く、怒鳴る、まるで村ぢゆうがひつくり返つたやうな大騷動です。この騷ぎには流石の警官達も手の出しやうがありませんでした。唯茫然とあきれ返つて、こつちへ迂路々々あつちへ迂路々々、人波に揉まれて、帽子は飛ばされる、洋服は破かれてしまふ、今にも泣き出さんばかりの顔をしてゐるだけで、さて何とも思案のしようがありま

せん。

すると、その時、何處で誰が叫び出したものか、こんな聲が聞えて來ました。

『和尚が鼻を盗んだのだ！』

『鼻は和尚のところにある！』

『寺に行け！』

『寺に行つて鼻を取戻せ！』

## 二

そこで、村ぢゆうの人間が、崩雪を打つてお寺に押し寄せました。本堂は勿論、寺の境内が人で埋まつて、内へ這入れないものは、松の樹の枝に昇つたり、お墓の頂邊に突つ立つたりしましたが、それでも未だ人々の波は往來まで溢れてゐました。そして口々に、

『鼻を戻せ！』

『和尚を殺せ！』

と怒鳴つてゐました。

和尚さんはその騒動の中で、庫裡の座敷に蒲團を敷いて、しづかに鼾をかいて寢てゐました。が、その和尚さんの鼻を見たら、氣の強いものは氣絶しても無理ではないでせう。

何故と云ふのに、あんなに低い、柿のへたのやうな和尚さんの鼻が、どうしたと云ふのでせう。長いも長いも、太いも太いも、鼻の附根から延びて、先づ本堂の屋根を突き破つて、裏山の鐘撞堂に突き當つて、そこに吊してあつた何百貫す

るか知れない重い釣鐘を、その先に引つかけて、そのまま遙か雲の上までずうつと延びて行つてゐるではありませんか。

成程、これでは、二日も三日もお寺の鐘が鳴らなかつたのも、決して無理ではありません。

そして和尚さんは眼をつむつたまま、時々にやりにやりと笑つて、

『フ、ウ、鼻がのびた、低い鼻が延びた、わしの鼻が延びた』

と寢言見たやうな事を云つては、又すやすやと靜かな鼾をかいてゐます。

これはただ事でない、と流石に村長さんが氣がつきました。

『一同の者、靜かにせい！ いくら泣いたつて喚いたつて、鼻は戻つて來はしない！ 靜かにしろ！』

さう云つて、みんなの騷ぎを鎭めて置いて、それから本堂の屋根の上に這ひ上つて、一同を見下ろしながら、一場の訓話を試みました。

『もうし、諸君、これはただ事ではありません。何故ただ事でないかと云へば、諸君は日頃から和尚さんの鼻の低いのを常に笑つてゐた。それで佛樣が御立腹遊ばされたのです。あのやうな信心深い和尚さんを嘲笑ふとは不屆至極な奴だと云ふので、それで諸君の鼻をもぎ取つて、和尚さんに與へたのであります。――この上は、みんな眞妙にして、心から日頃の罪を佛樣及び和尚さんに詫びなければなりません』

もう聲一つ出す者はなく しんと靜まり返つてしまひました。さう云はれて見ると 村長さんの被仰る通り、佛樣の罸かも知れない と村中の人々は、雲の中に隱れてゐる和尚さんの鼻を、恨めしさうに見上げてゐました。その中に雲が霽れ渡つて來ました。仰ぎ見る雲の霽れ間に、何年も何年も見慣れた釣鐘が中空高くピカピカ光つて見えました。それが丁度鼻の頂邊に後光がさしてゐるやうに見えるのです。

すると靜まつた群衆の中から、ふとかう叫ぶものがありました。

『強盗はあすこにゐる。あの釣鐘の中に強盗が逃げ込んでゐる！』

振返つて見ると、それは學校の先生で、先生は何時持ち出して來たものか、眼に望遠鏡を當てながら、しきりと、

『ほれ、あすこにゐる、あすこにゐる！』

と叫んでゐました。

警官が望遠鏡を借りて眺めますと、なるほど和尚さんの鼻の一番先の釣鐘の中に、たしかに人間の姿が見えてゐます。

『うん、さうだ、確にあれに違ひない』

と一人の警官が云ひました。

『だが、どうしたら捕まへることが出來ようか？』

他の一人が高い空を振仰いで、口惜しさうに云ひました。

『登るんだ！』

若い警官の一人が敢然としてから叫びました。

『登るんだ！　和尚さんには氣の毒だが、この鼻に登るより仕方がない！』

『よし、登らう』

『さうだ、登らう』

と云ふより早く、十人ばかりの警官達は、サアベルを片手に握つて、本堂の屋根を足臺にして和尚さんの鼻によぢ登ることになりました。

## 三

扨て警官達は、ぞろ〳〵蟻が這ふやうに、段々高く和尚さんの鼻をよぢ登つて行きました。下で見てゐる村の人達は、しつかり賴むぞ！ 滑り落ちるな！ あれあれ危い、危い！ と口々に警官達を勵ましたり、心配したりしてゐました。十分經ち、二十分經ちする中に、たうとう警官達の姿は、まるで豆粒ほどの大きさになつてしまひました。

『もう直き恐ろしい强盜を捕まへて下りて來るだらう！』

村の人々は自分達の鼻の事も、和尚さんのことも忘れてしまつて、手に汗を握り、今か今かと眼の痛くなるほど、空を見つめてゐました。と、一人の警官が和尚さんの鼻を傳はつて、するすると矢のやうに滑り落ちて來ました。下りて來た！ 泥棒は捕まつたのか！ と思ふ間もなく、續いて殘りの警官達もするすると滑つて落ちて來ました。そして口々に、

『上の方へ行けば行く程、太陽に近いので、鼻が汗をかいてゐて、とても登れない。ツルツル滑つてどうする事も出來ない』

さう云つて、息をせいせい切つてゐるのです。

鼻が汗をかいてゐて滑る。さう聞けば成程尤もな事で、どうする事も出來ません。警官も群集も思案にくれてゐました。

『退いた退いた！ 俺が一番强盜を驚かしてやらう！ 驚いて落ちて來ないものでもないから』

さう云つて、その時、群集を掻き分けて現れて來たのは、佐吉と云ふ獵師でした。見ると佐吉は鐵砲を提げてゐました。

『佐吉、和尚さんの鼻を打つなよ』

『鼻を氣をつけろよ』

さう云ふ聲を聞きながら、佐吉は『合點だ！』とうなづいて、鐵砲に彈丸をこめ、ぢつと狙ひをつけてゐましたが、やがてズドンと一發放ちました。と遙か中空でゴオンと鳴るのがかすかに聞えて來ました。彈丸はたしかに釣鐘に命中した

のです。續いて又一發、するとやはりゴオンと微かに鳴ります。更に又一發、すると更に又ゴオン……

『わあッ！』

群集は一齊に聲を揚げました。

けれども肝心の泥棒は、鐵砲の彈丸の通らない釣鐘の奥に這入り込んでしまつて、姿を見せません。大膽な奴と見えて、その位のことで驚いて落つこちては來ないのです。獵師の佐吉は、今は狙ひも定めずに、滅多打ちにズドンズドンと鐵砲を放ち始めました。

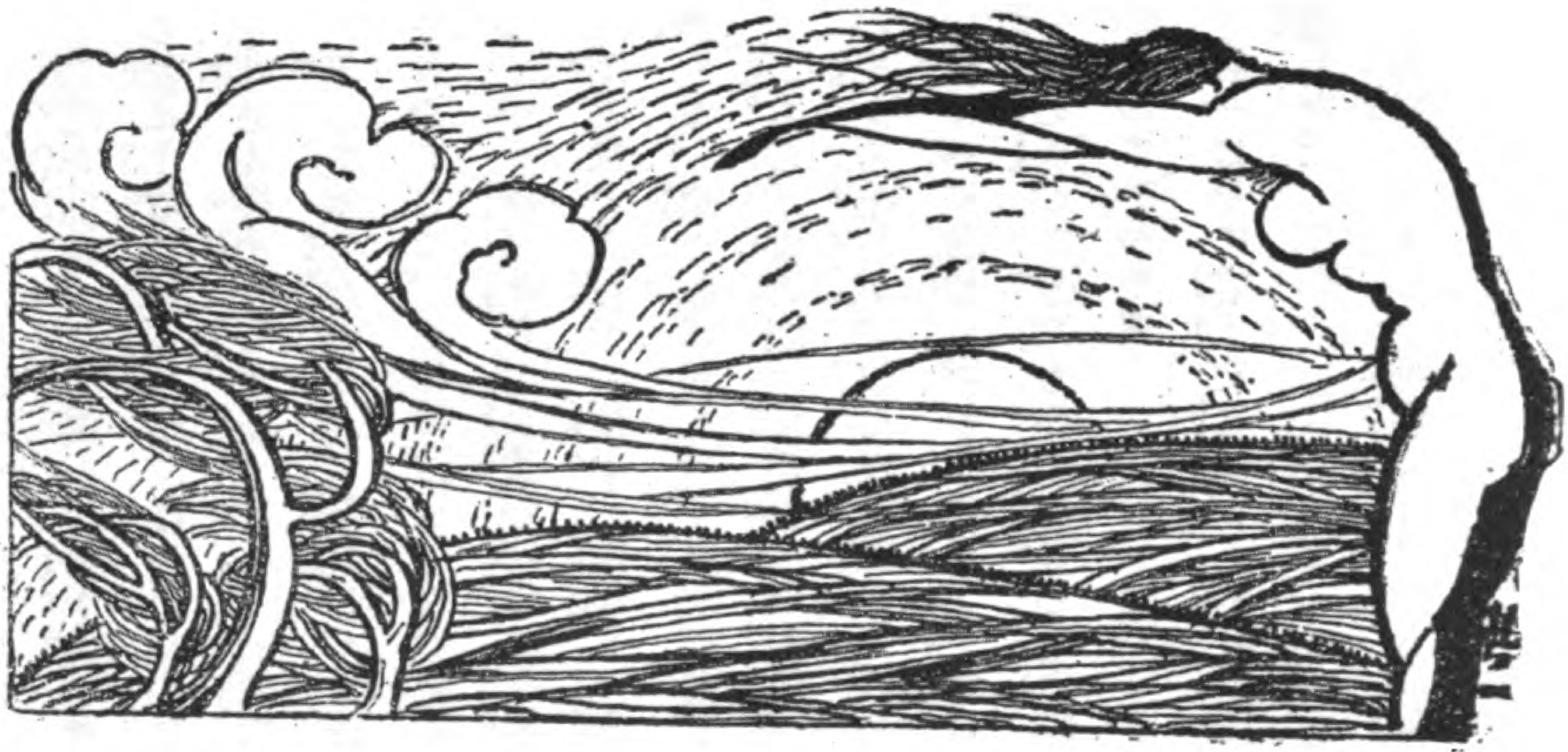
鐘は中空で悲しげに、ゴオンゴオンと呻きつづけました。さうしてゐる中に、佐吉の放つた彈丸が、誤つて和尚さんの鼻に命中したものか、それとも釣鐘の重みでだんだん鼻が曲つて來たものか、長い長い和尚さんの鼻が、飴のやうに次第〳〵に曲つて來ました！

それを眺めてゐる人々は顏色を變へて、あれよあれよと驚き騷いでゐる中に、釣鐘を引つかけた和尚さんの鼻は、空に大きな圓を描きながら、轟然とした大きな唸りを發して、村の上へ落ちて來ました。群集はあつと叫んで、蜘蛛の子を散らすやうに四方八方へ逃げ散りました。どしんと云ふ大きな響と共に、釣鐘も鼻も、大地の上に落ちて來ました。

その時でした。和尚さんが眼をさまして、自分の鼻に觸つて見て、寢とぼけたやうに、

『やれやれ、高くなつたと思つたのは、あれは夢だつたかな』

と呟いたのは。――（終）



# 女の客（入選）

小林信

## その一

夕食を濟ました所へ、玄關に訪れる女客の聲を訊いて、妻のくみ子が起つて行つた。

玄關では、妻と來客との落着いた挨拶が交はされた揚句、來客は座敷に通つたらしい氣配で、妻は茶の間へ戻つて來た。

「あなた、吉岡さんの里惠さんと仰言る方が見えましたのよ。」

恁う云つた妻の顏には、歷然と、不愉快な困惑の情が往來してゐた。

啓一はその妻の顏を見ると、欝然として、わざと大きく首肯き乍ら、「ヱゝりや珍らしいお客だね。」と急いで座敷へ出て行つた。

「やあ久潤ですね。良く來ましたね。」

彼は幾分か大迦沙に恁う挨拶し乍ら、眞實に久しぶりに見る吉岡家の人を疑つと眺め遣つた。

「突然に晩くから上りまして。久しぶりで當地の方へ出て參りましたものですか

ら、是非一度お訪ね致し度いと思ひまして。」

二三年前に、未だ眞の子供子供した學生で、袴杯を着けて居た里惠が、もう全然女らしく出來上つて、磨かれた姿で彼の前に丁寧な挨拶をしてゐるのだつた。

「皆さん御丈夫でお變りも……一向に御無沙汰して居りますが。」

且つては里惠ちやん、秋原さんと云ひあつて、鬼事の仲間入りをさせられたり、混齒擲興や毬投げのお相手に引張り出されたりして、一緒に三度三度の膳に向つて居た里惠さんと、始めて、改まつて對座して居る自分も、老ひたものだと、つくづく感じ乍ら、里惠の物慣れた容子を眺めた。

間もなくお茶やお菓子を型通りに運んで來た妻の妹は、慇懃な挨拶の下で、ちろりと里惠の頭の先から膝頭までを見濟して、襖の陰に消えた。啓一は直ぐに夕飯の支度を、里惠の爲に命じた。

二人の子供達が、襖の陰から半分覗くやうにしては隱れた。里惠は慣れた手附きで一寸手招きして、傍に置いた手提袋の中から化粧紙に包んだ手頃のものを子供達に渡した。彼は其の間に一寸起つて、茶の間の方へ行つて見た。

妻は妙に眉根に皺を寄せて、子供の貰つて來た紙包みを、恰も汚ないものでも觸るやうにして見た。子供達は、折角自分達の貰つて來たものを歡喜んで呉れない母親を、不平相にして、其の紙包みを其處に放り出した儘、又座敷の方へ駈けて行つて了つた。

啓一はその容子を立停つて眺めて居たが、投げ出すやうに「お汝も出て來て話したら如何だい。」と云ひ捨てゝ座敷へ引返した。

座敷では黑い支那服で、風を入れ乍ら、里惠が所在なく子供達を相手にして居た。二人共「おばちやん」「おばちやん」と云つて話して居た。其の度に、里惠は寸時羞痒つたい顏を彼の方へ向けて笑つた。

「博史さんは學校面白いでせう。如何那事をお習ひするの。」

「僕二年の級長だよ。惡い事をする奴なんか帳面に附けるの。」

博史も、里惠も、啓一も笑つた。小さい方の英美迄が、口をもぐもぐさせて笑つた。笑が止むと、里惠は彼に話頭を向けた。

「あのお母樣やお妹樣は、お國へでもお歸りになりまして。」

「否、妹は今近江の方へ行つてますので、母も其方へ行つてます。ある英國人の仕事を助けて働いてゐますよ。却々面白いと云つてます。」

緣側の障子を開いて、妻の妹が膳を運んで來た。その後から着換へ迄した妻が、靜かに這入つて來て、悶苦しい挨拶の後、「何にもムいませんで。」と云ひ殘して、子供達を引張つて出て行つた。啓一は、此の恩人の娘であるといふよりも、もつと打解けた親しい氣持で向ひ合つて居る里惠に對して、妻のあんまりな他所々々しさが、氣の毒にも思はれ、氣恥づかしくも思はれた。

里惠は妻が襖の外に隱れると、彼に對して怨ずるやうな調子で云つた。

「まあ、私お客樣に上つたんぢやないんですのに、恁那にして戴くと、もう來られませんわ。皆さんの召し上つた後のもので、お腹丈け塞がしてさへ戴ければよろしかつたんですのに。」

「僕もさう云つたんだけれど、妹が歸つて來た積りで、殘りものを食べて貰つたらつてね。」

里惠は沈默つて居た。

「彼奴が、如何も變屈なんでね。僕もほとほと閉口しますよ。矢張り僕達の如な關東人は、西京育ちの女は堪らない。」

彼は眞實の事、左樣思つて居た。西京の女の中でも、殊に自分の妻は變屈に術が掛つて居ると思つた。それが普段は別

に堪まらないとも思はないからこそ、斯うして子供の二人迄も出來て了つたものゝ、里惠の如な、快活な明けつ放しな女性に打つつかると、急に妻のいちいちと内氣な、その辯妙に腹の底の確固した所が、彼の鼻先へぶら下つて來た。

里惠は鉢のものに箸を染め乍らも、色々な新らしい話題を持つて來た。彼は久しぶりに、なだらかな調子で誰でもが容易にその中に這入つて行ける種類の雜談を、悠然とした氣持で交はした。それに、里惠の昔乍らのあどけなさで大きな聲を出して笑つたりするのが、此の家には珍らしく明るい味を漂はせるやうに思つた。

膳を下げさせてからも、彼等は緣側に椅子を持ち出して果物を剝き乍ら、肩の凝らない話に笑つた。

話の中には、彼が大學に入學つた年の夏休みを、里惠の一家と上州の山の中で暮らした時の事だの、その時には未だ此の世の人であつた里惠の從兄の事等が、何時の間にか主題になつて居た。其の里惠の從兄と云ふのは、彼よりも二つ三つ若かくつて、未だ高等學校の生徒だつたが、彼とは此の上もない親友だつた。彼が緣もゆかりもない里惠の父親から學資を手傳つて貰つて大學を卒業する樣になつたのも、其の人からの口添へであつた。義妹が風呂の案内に來た。が彼も里惠も、又話し續けた。彼には里惠の家で暮らした二年間の月日が、一番懷かしく思ひ返へされた。それから彼も學校を卒業して、軈て戀人を喪つて、今の妻と世間普通な結婚をして了つた。併し、結婚後の彼の生活は蠟を嚙むやうに味氣なく過ごして來た。この破滅的な、自分の結婚生活を、内に省る事ももう此頃では殆ど失くなつて了つて、毎日機械的に子供達の爲の生活を繰り返してゐたけれど、里惠の如な古い追憶の中の人が、未だ昔の儘の如な若々しい姿で、自分の前に坐つて居るのを見ると、急に未練らしく過去の夢が湧き返へつて來た。

「でも眞實に大きくなつたもんだなあ。僕がお爺さんになつた事は解らないけれど、貴女方のやうな女が變つて行くのは實に早いものだね。」

彼は云ひ乍ら、眞實に大きくなつたと云ふよりも、全然女になり切つて了つた里惠の豐かな胸の邊りに思はず眼を止め

た。

緣側傳ひに妻が聲を掛けた。わざわざ彼を呼んで、妻は彼に風呂の催促をした。彼は、思ひ附いたやうに大きく返事をして、「どうぞ御緩除。」といふ里恵の聲を殘して妻と一緒に湯殿の方へ下りて行つた。

「子供達は。」

彼は湯壺に浸つて、腕の邊りを擦り乍ら聲を掛けた。子供達はもうお湯に這入つて寢たと云ふ事だつた。浴衣の儘で彼が座敷に戻つて來た時、里恵はぽつ然と一人取殘されて、暗くなつた庭を眺めて居た。

「おゝ、一人だつたの。さあ一浴び浴びてらつしやい。」

云ひ乍ら、彼は妻を呼ぶのも面倒に思つたので、自分で先に立つた。

「やつぱりこれ丈け年齢を取つたんだ。」抔と一人で思ひ乍ら、始めて來た家に、女同志の知合を持たない里恵の爲に、細ま細まと世話を燒いて、浴衣を出すやうに子守女に命じて置いて座敷の緣側に戻つて來た。

「里恵さんはお幾つ位。」

妻が座敷の押入から客蒲團を出し乍ら訊いた。さあ幾つ位かなあ。彼もさう考へ乍ら自分の年齢を繰つて見た。

「もうあの人も廿三四かなあ。早いもんだ。」

妻に答へるともなく云つて、妻の後姿を見遣つた 彼の妻は未だ三十には足りなかつた。

妻はそれつきり沈默つて了つた。彼も沈默つて居た。二人丈けでは是と云つて話す事もない仲であつた 三十に足りない妻は、美しく粉飾り、温順しく家の中に引籠り、紋切形な毎日の雜事をさへ繰返して居ればいゝ質の女であつた。

妹に手傳はせ乍ら、妻が里恵の爲の床を、座敷の中央に取つて了つた時、里恵は無造作な束ね髪を、湯氣で光らせた儘、白粉氣も取つて了つて、廣袖の湯上り姿に彼女の着物や帶を抱へて來た。そして茫然と立つて居た妻の前で、低く腰

を折つて「ありがたうムいました。」と小さく云つた。が妻は應へるのか應へないのか、輕く會釋して、彼女特有の曖昧の笑顏を作つた丈けで、座敷を出て行つた。彼は妻の妙に怖ぢけた應酬を見るに堪へなかつたので、苛々と子守女を呼んで、里惠の持ちあぐんで居る着物の仕末をさせた。そして、彼は先に降りた庭の暗闇から里惠を呼んだ。

里惠は敷石の上に揃へてあつた妻の草履を、一寸躊躇ひ乍ら穿いて降りて來た。その夜は星も光らず、重く澱んだ雨雲の低い夜で、外には一向に風がなく蒸すやうな暑さが去り切らなかつた。それでも植込の大きな葉の繁みに、しつとり露が置いて居た。

「滅切りお暑くなりましたわね。」

近寄り乍ら里惠は曰つた。

「梅雨だと云ふのに雨も降らないで、餘計に暑いですね。」

「オーイ。庭へ出て來たら如何だい。」

手持不沙汰な彼は恁う呼んだ。が妻の返事はなくて、子守女が緣側へ手をついて、妻が入浴中である事を告げた。

彼も里惠も瞬時沈默つた。が却つて樂な氣持で、彼は闇に見えない里惠の方へ心持顏を向けるやうにして、近々と並んで立ち乍ら、里惠の今爲てゐる研究の話を、彼が若者であつた頃に眺めて居た里惠を思ひ返し乍ら、ぽつぽつした調子で話した。彼ももう一度あの大學構内の池の端の樹蔭を歩いたり、何となく重苦しくはあるが、莊重な學徒の氣持を强ひるやうな、づつしりした厚ぼつたい壁に圍まれた廊下の曲り角を歩くやうな氣持にまで引入れられて、震災後全くその面影を失くして了つたと云ふ大學の話抔を訊きつ語りつくした。

「僕や正ちやん――里惠の死んだ從兄――が通つてる時分に、とてもあの敎室に女の姿を見よう抔とは空想もしなかつたがね。それが里惠さん抔迄が、あのごつごつした建物の中でノートを取るなんて世の中になつたんだからな。」

冗談の中にも彼は自分乍らの感慨に浸つて云つた。それにつけても、あの柔らかな甘い感じの小娘だつた里惠が、如何して學問の道を選び歩んで來たどらうと、里惠の一家とは細まごまとした交渉を續けずに來た十年近くの月日を振返つて引き戻すやうにし乍ら、傍にぼんやりと、樹立の奥を眺めて立つてゐる里惠を忘れて立ちつくした。

其頃の里惠は、彼女が病身だつたと云ふせいもあるけれども、餘り學問抔を好まない小娘のやうに思はれた。算術の六づかしい問題抔を學校から貰つて來ると、必ず女關脇の彼の室へ、そつくりその儘投げ込んで置いて、自分は舞の手を稽古したり、琴の前に坐つたりした。殊に秋から冬にかけての三ケ月程は、咽喉を痛めたり風邪を引いたりして、殆んど學校へ行く日が無かつたにも關らず、彼女は普通の其の年頃の子供の持つ樣な、學校に對する強い執着もなければ、學校を欠席する事抔を寧ろ樂しみに思つてゐるやうにさへ見えた。彼女には、云はゞ學校は彼女の生活の上に何の歡喜でもなければ、生き場所でも無かつた。それよりも彼女には、安易で快い病床があり、親切で魅惑的な男性の群があり、愛撫で包む兩親の膝があつた。彼女の生活は恐らく、退屈する事を知らずに大人の中で過ごされて行つた。それのみか、煩るさい、嚳嬌で多端だつたやうに思はれるのであつた。從つて彼女は早熟だつた。てんで子供の遊び友達も無い程、子供らしい遊び事の一つも知らない程に早熟だつた。其頃は、彼はよく此の里惠を連れて散歩抔に出掛けた。里惠は袖の長い縮緬友染の袷抔を着て、彼の他愛ない愛撫の的になつた。

さうした追憶の流れは彼をいつしか十年前の懷かしかるべき吉岡家へ連れて行つた。彼が寄寓して居た頃の吉岡の家は、何事にもあり餘る程の生活をして居た。彼はその家で、生れて始めての都の風に浸み、後にも先にもたつた一度の戀をした。彼の戀人は里惠の姉さん友達である、或る退職將校の一人娘で、若くて死んだ程の娘だけに、何處か弱々しい寂しい翳のある姿が、一層彼の心を引きつけた。彼は、よく里惠の小さい掌に大事な戀人への手紙を托した。彼女は一寸羞恥を見せて微笑み乍ら、狹い懷に確固と挾んで、ぽこぽこした千代田草履で、其の家の裏木戸を潜つた。稚く美しい文

使ひは、その裏木戸を潜ると直ぐ垣近い離れ座敷で人形の着物をでも縫つて居たであらう戀人と華やかに笑ひ乍ら、戀人を連れて彼の所へ歸つて來る。彼と戀人とはいつも此の稚い諧謔者を中にして、川邊りに腰掛け乍ら他愛もない話に興じたり、些時の間の快い沈默を樂しんだりした。學校の仕事に極めて冷淡な彼女は、恁那事になると、丸い眼を輝かせて、よく立ち廻つた。土埃や白堊の粉に混みれて、薄汚くなつた子供達の大勢の群、味も素氣もない先生の講義は彼女には堪らなく嫌らしかつた。それに引替へて、美しく豐潤な若い男女の、甘苦いやうな空氣の中で、綺麗な着物に着換へて愛撫されてゐるのは、早熟な彼女に取つて決して退屈な事では無かつたらしい。彼女の周圍の空氣は何時もそんな調子だつた。其の中で成長した彼女は、誰の眼にも早く美しい娘になり、早く美しい妻になつて、世の中から消えて行く人にしか思はれなかつた。勿論、彼女の兩親は、彼女がさうした幸福にすらすらと這入つて行く事を、何の逡巡もなく望み、又それを信じ切り、さういふ道を拓いて遣る事に腐心して居た。彼等は傍で見て居て、寧ろさうした兩親の心遣ひを笑止な程に思つて居たのだつた。

「内部へお這入りになりませんか。」

里惠が云つた。彼は吃驚して彼女の方へ歩いた。その時、十一時の氣笛が、程近い工場で鳴つた。

「大分更けた。今日は疲れてるでせう。さあ上つてお茶でも呑んで暇みませうかね。」

二人は前後して縁側へ上がつた。妻のくみ子が、綺麗に化粧して、冷たい紅茶を持つて來た。そして些つと彼を疑ふやうな眼で見乍ら、彼と里惠とを等分に見て、曖昧な微笑を彼女自身丈けが得心して居る形で投げて居るのを認めた。彼も里惠も妙に沈默りこくつた儘、其の冷たいのを啜つた。

「今度はづつと此方に御逗留で厶いますか。」

妻は里惠が「夏休みになつたので。」と云つた詞を妙に氣にして居て、柔らかな調子で遠廻しに彼女の逗留を迷惑に思ふ

氣持を訴へて居る如に思はれた。

「はあ、もう暫く此方に居りまして、少し京都の先生に伺はなければならない事もありますので。」

彼女も却々上手に曖昧に逃げた。妻の訊き度いと思ふのは其那事では無かつた。只一言「お宅では今晩丈け。」と云ふ言質を捉へれば用が濟むのだつた。遂々三人とも曖昧に各自の床に這入つた。

## その二

彼はいつも寢る時間を過ごして了つたので床に這入つてからも却々寢附かれずに雜誌を讀み續けた。二人の子供は安らかに伸びきつて熟睡を樂しんで居るかの如くに見えた。

妻が蚊帳の中に這入つて來た時も、彼はわざと知らん顏をして居た。妻が里惠の事に就いて、何か云ひ出さうとして居るのを彼は脊中の邊りでむづむづと感じて居た。

彼は暫くすると雜誌を伏せて、妻にも子供達にも脊を向けた。相變らず妻の眼がぱつちりと瞠かれた儘、自分の脊中の邊りに止まつて居るやうに思ひ乍ら。

「里惠さんは如何して來なさつたんでせう。」果して妻は彼に迫つて來た。彼の脊中から。彼は瞬間、妻のさうした夫に對する如何にも女らしい取越苦勞を可愛想に思つた。けれど、其の調子に含まれた妙な嫌味が、彼を素直な同情から遠さけて了つた。

「何しにつてお汝、學校の休暇で東京からの歸りだつて云つたぢやあないか。…………。矢張り里惠さんは若いね。大きくなつたけれど子供つぽい可愛いさは拔けないね。」

妻は沈默つて了つた。彼もその儘沈默つて、掛蒲團をすつぽりと被つて了つた。彼は妻の微かな溜息を聽いた。それが妙に小耳にこびり附いて、彼の全身を壓迫した。が彼は其の壓迫を拂ひ除ける樣に、蒲團をばたばたと打つて、又蒲團に

理まるやうにした。

普段は二人の子供にかまけて了つて、夕方が來ればそゝくさと子供と一緒に蚊帳の中へ這入つて了ふ妻の、思ひ掛けなく綺麗に淡化粧さへ施した顔が、異状に彼を捉へて來た。

妻は矢張り京女の美しさを老ければ老ける丈け婀娜に表はして來た。其處には、男を魅するやうな働き掛ける何物も無かつたけれど、時折は鼻に出る程の根に持つた洗練の美しさが、湛へられて居た。其の美が二人丈けの、倦怠を含んだ平穏の中には、殆んど子供といふものゝ陰に隱れて了つて居たけれど、恁うして二人の間の平穏に少しでも小波の立つ様な時には、必ず明瞭とした姿を表はして、彼の眼の前に迫つて來た。女同志の持つ微妙な葛藤を、彼は面白いものだと思つた。それは嫉妬とか競争とか云ふやうな、對抗的な形に固まつたものではない。それ程の强さも意識も恐らく女の女性同志の中には藏して居ないものなのでは無いか。あの六月の夜の興趣を添へて飛び交ふ螢の光が、彼等の本能的な生殖機能の具であるやうに、女同志は、全く何の故とも知らず、自分の本能を意識せずに、彼女等の自然に與へられたものを示しあつてゐるのではなからうか。そして未婚者と未婚者との間には、如何しても掩ひ隱す事の出來ない異ひが明瞭と見られる。里惠の美しさは如何にも若い。そして無邪氣だが、それ丈け淺くて弱い。迫つて來るものが無い。そして、自分の妻は老け、落着き、底意ある美である丈けに迫つて來る蠱惑がある。技巧的な誇張で、凝つと見据ゑ乍ら迫つて來る。其の時にはもう子供の影等は、彼女の心を領しても居らないやうに見える。唯彼女、男性に對する彼女があるばかりだ。母親としての美は全く影を潜めて了ふ。それは彼女の未だ若い處かも知れないけれど、彼女の眞實の美しさは、もう恁うした女としての蠱惑にあるのではなくて、已に母としての平穏な、靜謐な、何物にも換え難い强味にあるのでは無からうか。それにしても彼女は何故、此の何物にも恐れる事の要らない强味を悟らないのだらう。

彼は寢られぬ位に、彼の周圍を廻るこの二人の女同志の捲き起こした、異様な雰圍氣を様々に解釋したり、理屈づけた

りして、一人戯れて居た。まだ寝附いて居ない妻は、時々明瞭と、彼に訴へるやうな溜息を吐いた。彼は幾度か悩まされた。蒲團を撥ね除けて、妻の傍へ行かうかと迄した。併し、彼も亦何故にともなく執拗に我を張りとほして、何時か夢心地に陥ちて行つた。

## その三

啓一は未だ陽のさゝない庭を彼方此方歩いた。二人の子供達も其の後について廻つて、他愛もない事を繰り返し繰り返し尋ねたり喋舌つたりした。彼は二人の子供と話し戯れ乍ら、僅かな曉の間の凉を追ふやうにして、朝顔の芽を摘んだり、大きく咲いた向日草を剪つて瓶に挿したりして、今日一日の日曜の落着きを楽しんだ。

「お早うムいます。」

彼の後に、最う全然り着換へして、薄化粧した里恵が、笑み溢れるやうな眼をして立つて居た。二人の子供達は、些時の間、妙に吃驚して眺めたが、直ぐに昨日の事を思ひ出したやうにして、駈けて行つて取縋つた。

「やあ、えらい早いでしたね。緩除りと寝んでれば好いのに。」

彼は片手に持つた如露の水を、足許の草花に撒き乍ら云つた。

「今日は何處ぞへ行つて見ませうかね。幸ひあんまり暑くないやうだから。」

里恵は彼の詞に直ぐは答へようともせず、二人の子供達と戯れて居た。小さな方は、もうすつかり懐いて了つて、物珍しく自分の相手になつて呉れる人を、隙間もなく眺め渡し乍ら、其の膝の辺りに取付いて何か頻りに話して居た。里恵は其の片詞を聴き分け兼ねて、心から可笑し相に身體を揺すつて笑つた。

「お父さん。僕達もお約束。」

兄の啓史が傍から待ち構えて聲を掛けた。

「おゝさうだね。坊やとは何處へ行くお約束だつたかね。」
彼は里惠の方へ輕い笑顔を向け乍ら、博史に應へた。
「寫眞機持つてくんでせう。ほら、母さんもみんなで方々撮るんでせう。」
「とうちやん僕も。」
小さいの迄が、急に頭を捻ぢ向けて曰つた。
「あゝさうかさうか。ぢや此の小母ちやんもみんなで行かうね。母さんに御飯はつて訊いてらつしやい。」
啓一は又急に出澁つたり、わざと大袈裟に子供達の着換へを面倒がつたりするであらう妻の様子をふいと思ひ浮べ乍ら、さり氣なく子供を妻の方へ遣つた。それと殆んど入れ違ひに義妹が朝餉の報知に來た。
茶の間には仰々しく里惠の分を別にした膳が家族の者の食卓に隣つて拵へてあつた。里惠はふつと其の膳に眼を遣つた瞬間、抑へ切れない不愉快の色を、ほんの僅か顔に上せたが、直ぐに溢れるやうな笑顔に變へて、妻の方へ丁寧な挨拶をした。妻も丁寧に受けて、一寸啓一の顔をながし見乍ら、里惠を其の膳の前に招じた。
「其那に他人行儀にしちや變だね。里惠さん此方へいらつしやい。」
彼は幾分の不愉快を妻に當て附けて、突慳貪に膳のものを食卓の上に移した。
里惠は迷惑想に、併し快よげな笑ひを浮べて、二人の子供達の相手になり乍ら、低聲で何か云つて食卓の方へ來た。
「まああなた、あんまり失禮ですわ。子供達と一緒では。」
「なあに、子供達の方がよつぽどのお友達だよ。ね。」
子供達は、一寸妙な顔をして父に頷いた。妻は苦々しく笑つて、仕様事なしに飯をつけた。啓一は誰にともなしに、客に對する禮儀と、他所々々しくする事とは全然別だと云ふやうな事、親愛の表現を誤つてはならないと云ふ事等を、彼が

獨逸に行つて居た二年間の彼地での家庭生活の狀を引いて話し續けた。其那話は、彼の妻にとつては幾度か訊き古した話なので、妻は里惠の手前、外に表せない鬱憤をぢつと噛み堪へて、默々として訊いた。

里惠は妙にてれた食卓の上の空氣を、中心に引き戾す術もなく、唯子供の相手になつた。子供達は行儀よく食べた。子供によくある癖の選り好みもあまり無いらしく、大人の食べるものを何でも一人前に食べ、決して喋舌つたり、子供同志喧嘩をしたりしない事も、此の嚴しい母の躾けらしく思はれた。

一寸した行き違ひから白けた朝餉が濟むと、子供達は父の命令で洋服に着換へた。が妻のくみ子は「頭痛がするから。」といふ口實で、彼等の散策に加はらなかつた。彼等は妻に送られて門を出た。二人の子供は無邪氣に笑ひ興じ、喜んで啓一と里惠との先に立つた。

里惠は皮肉なくみ子の笑ひを背中に浴びて、迷惑とも極まり惡さともつかない氣持で啓一と並んで歩いた。啓一自身にも、此の一寸羞痒つたい氣持を遣場に困つて、コツコツとステツキの先を突き乍ら沈默つて先に立つ子供等の後姿を視た。

急に子供達は振向いて、門に立つ母親を見て手を上げた。それで啓一も里惠も、まだくみ子の門脇に立つて居るのを知つた。

「さよなら。――つて云つて御覽。」

啓一は漸く子供の方へ氣を紛らして云つた。子供達は直ぐに、もう一度振向いて元氣よく「さよなら――つ」と聲を揃へて云つた。

「母さんもう這入つちやつた。」

博史の云つた詞が彼等には妙に強く響いた。啓一は解放されたやうに里惠の方へ眼を遣つて、改めて行く先を相談するやうにした。

「お午頃から京都の方へ出度いと思ひますから。」

斯う里恵はなだらかに云つて、彼が遠方迄行かうとするのを暗に制した。

彼等は軈て、小さな子供達の手を引いて、里恵の幼い時に縁の深い宇治川畔を興聖寺の方へ歩いた。敬一にも里恵にも行き慣れた追憶の道を、一人一人の想念に思ひ耽り乍ら沈默り勝ちに歩いた。彼等の心の外に、置いてきぼりにされた二人の子供ばかりは、何の屈托もなささうに戯れ乍ら、川縁を覗いたり、發電所のトロッコの道を渡つたりして歩いた。

興聖寺の坂道を登つて、唐門に立つた里恵を撮つたり、二人の子供を石垣に腰掛けさせてうつしたりして、お寺を出たのは、もう十一時少し廻つてゐた。彼は里恵と話す事にももう興が湧かなかつた。里恵は里恵で、何を考へ續けてゐるのか、彼とも子供とも離れて、一人でに急ぎ足になつて行つては、思ひついたやうに振向いて子供達の名を呼んで立止つた。

敬一は矢張り縁の遠い人を案内してゐる空虚な退屈に陷ちて行つた。そしてかういふ自分に何の係りも持たない若い女性の爲に、一寸でも興味のある親し味を抱いたり、妻の氣持を亂させたりした事が、例へその罪の或る所は妻自身の揑造した一人事であるにしても、焦燥とした氣羞づかしさを彼自身に感じ出した。さうなると、もう彼は其の氣持を凝つと内に堪へて居る事は出來なかつた。

「私お午前に京都迄廻り度いと思ひますから、電車の處で失禮させて戴きます。奥さんにも御挨拶申上げるのが眞實なんですけれど。」

突然に、里恵は彼を待つて言つた。そして兩手に引かれた子供達に「さよなら」をして居た。もう電車の停留所も近かかつた。彼も電車で一緒に其邊迄出掛けても好いと思つて、洋服迄着換へて出たのだつたけれど、色々な感情が、その素直な態度を制した。

「さう、ちや送ると好いんだけれど、子供達が面倒だから、でも、でも、一寸もう一度家へ寄つたら如何、さう急がなく

ても。」
實際其那氣持で、怎う附け足して置き乍ら、彼は「里惠は僕の心を悉皆吞み込んで居るすだ。」と云ふやうな、變な引け目を感じた。

「えゝ眞實に上つて御挨拶しなければ濟まないんですけれど、如何ぞ宜しく仰言つといて下さいませな。」

里惠は半ば眼を落して言つた。彼も結局荷の降りた樣な氣がして、電車の停留所で別れる事にした。

「ぢやどうぞお故里の皆樣によろしく、もし京都にでも來られる事があつたら、是非寄つて下さい。」

「ぢや、奥樣に呉れぐれもよろしく、博史さんも英美ちやんもさよなら、母さんによろしく。」

里惠は念を入れて怎う繰り返した。そして丁度出ようとする京都行きに急いで乘つた。電車が動き出した時、車の中の里惠も、柵の外に立つた子供達も、手を擧げあつた。

彼は沈默つて見送つて、稍急ぎ足に家の方へ歩いた。家へ歸つてからも、妻も彼も變に押沈默つて儘で居た。

博史も英美も、折角の今日の樂しみが、棒に振られた形になつて了つたのを、別に口に出して駄々を捏ねるのでも無かつたが、何となく不滿に思つてゐるらしく、一人、一人で沈默り勝ちに庭で積木いぢり等を始めた。

突然に來て、又突然に去つて行つた若い女性の殘して行つた空氣は、彼にも妻にも同樣に重い壓迫となつて、家中に妙なこだわりを持つたのは事實であつた。

妻は沈默つて起上つて晝の支度に臺所の方へ降りて行つた。――完――

一三、八、一九、



# 避暑地（入選）

本多たけ

嫂の安産を知らせに従兄が東京から來て二三日海に浸つて歸つて行つた翌日だつた。修次は従兄が來る前に其の手紙が來なかつたのを本當にいゝ都合だと思つた。

パラ〳〵とした雨が午前中に何度も來て水に入る程の暑さでもない其日彼は退屈凌ぎに新聞を開けたり伏せたりして居た時思ひがけなくお鈴からの手紙を受取つた。全くそれは思ひがけない事に違ひなかつた。今迄に唯の一度も無い事だ。たそがれの海が見たいから失禮かも知れないが近い内に御邪魔に上る。とした簡單な手紙に過ぎなかつたけれど修次には何か異常な事が起つて來るやうな氣がしてならなかつた。それを受取つた時傍に幼い姪達が居なかつたのを彼は喜びもしたが又姉に何と云つて其事を話さうかと考へた。子供達が居た方が却つて氣輕に姉に話が出來るであらうにと思つた。お鈴が何だ。以前自分の家で使つて居た女

中ではないか。自分がお鈴に對して持つ感情は何もない。又お鈴が自分に對して何かしらの心持を抱いて居る筈はない。明らかにない事だ、彼はかう思つて自分の心をしづめようとして部屋の中を歩き廻つた。

二階で遊んで居た子供達は一時にがや〳〵と下りて來た。修次は手紙を窓の傍に放つておいて風呂場へ行つた。一人で考へて見たかつた。自然と姉に其の手紙が知れゝばいゝと願つた。お鈴が考へてためらつてやうやくその手紙を出したにちがひないと彼は思つた。そして其の迷つて居た時には從兄が此處に來やうとして居た時だと思つて彼は或る感動にハツとした。もう一人で風呂場に考へても居られなかつたので此方から進んで行こうといふやうな心で姉と姪達の所へ出て來た。

『失戀詩人が來ますよ姉さん』

姉の顏を見るといきなり彼は斯んな笑談を云つて見た。何だか云ひ過ぎたやうな赤い顏にも成つた。失戀詩人。彼はたつた今その語を考へついたのであつた。否考へる間もなく口から出て了つたのに驚いた。

『まあ……』

靜代は弟の相變らずの笑談に笑ひながらお鈴の手紙を讀んで居た。

『必と何かいゝ詩でも作らうなんて野心が起つたのでせう。而しお鈴のやうな人は羨ましいな。そして――』

修次は次の語が云へなかつた。姉が讀み終つて封筒を下においた時其の語を聞いて彼の顏を見上げてゐた子供達はお鈴の來る事を非常に喜んだ。半月近くも兩親の下を離れて別莊に來て居る子供にとつては海へ入る事はもう大分倦いて居た。何に彼につけてお父樣お母樣といふ語が出た。修次の從兄が來た時には夢中になつて玄關へかけ出して行つた程喜ばれた。從兄が歸る時は子供達を說き伏せるので靜代と修次は泣きたい程に成つた。殊に其の從兄は父母の次に子供達に好かれて居たので修次は後を追ふ一番幼い姪を抱いて夢中で海岸への道を驅け出して行つた。一日立つとそれでも子供は幾分

か諦めて從順に遊んで居た。

其處へ今近い日にお鈴が來ると聞いて子供達は昨日の事を忘れて跳ね廻つて喜んだ。夜も從順しく靜代や修次の云ふ事を聞いて床に入つた。朝も元氣よく床を離れた。食事の度毎に修次にお鈴の來る日をたづねた。

一日おいて翌日お鈴は日中を此の別莊へ來た。子供達の賑やかな笑ひ聲と共にお鈴の晴々した聲を耳にして修次は玄關へ出て來た。玄關の前で砂いぢりをして遊んで居た子供達は通りに馬車の止つたのを耳敏く聞きつけて門からかけ出してお鈴を迎へたのであつた。

『やあゐらつしやい……』

修次が氣輕に聲をかけた時お鈴は暑さうな赤い顏で丁寧に挨拶をした。彼女がバスケットを持つて玄關へ上らうとすると修次はそれを受取つて風のよく通る窓の下へ提げて行つた。靜代も出て來て人懷し氣に彼女を迎へた。子供達はお鈴が風呂場へ行つても後から追いて來た。

『此の間ね孝兄ちやんが來たのよ』

お鈴のする事を目ばたきもせずに見て居た四人の中の一番大きい子が云つた。

『おや、そうで御座いますか？』

お鈴ははつとした。

『鈴は今日歸るの？』

二番目の綾子が一生懸命にといふやうな顏で問ふた。

『いゝえ、明後日歸ります。今日も明日も綾子さんや坊ちやんと海へ行きませう』

『え、皆で海へ行きませう。鈴妾ねもう此處位迄入れるのよ。坊ちやんも此の間孝兄ちやんが來た時一緒に入つたの。お

臍の所位行つたのよ。ね勉さん。鈴も入れる？』

『まあそうですか。皆様もう御上手でせうね。鈴なんか少しも入れないんですもの。修兄ちやんともゐらつしやるのでせう』

『坊ちやんね修兄ちやんも恐いの、もつと〳〵深い所へ連れてつちやつたの。』

お鈴が身體を拭き終へてもなほ子供達の嬉し氣な元氣な聲は止まなかつた。

『皆まあすつかり鈴が氣に入つたのね。其處は狹いから此方の廣い所へ出ていらつしやい。勉さんも綾子さんもいゝお友達が來てね……』

靜代は縁側から聲をかけて皆を呼んだ。

浴衣に着換へるお鈴を待つて子供達はすぐに海に行かうと云ひ出した。

『だつて鈴は今汽車や馬車へ乘つて來て疲れて居るから少し休んでお晝から行きませう』

お鈴が只微笑して居るのを靜代や修次は一心に子供達をなだめて居た。綾子は如何しても承知しなかつた。姉のみどりが叱る眞似をしてもお鈴の肩をゆすぶつて泣聲になつて居た。

『えゝ行きませう。ね皆さんで行きませう。その代りちきに歸つて來るのですよ。そしてお晝から又叔母樣や修兄ちやんと御一所にまゐりませう。今は一寸入つて來るだけね。』

皆は大喜びで海水着を着ると云つたのをお鈴は其の儀でなければ行かないと云ひ切つて四人の手を引いて出て行つた。

お鈴にとつてはすべてが一年振りの事であつた。そして去年も一昨年もそれは主人のお供をして來たので自由に海に入る折も無かつたやうであつた。今年は主人に頼まれないのを幸に、自由な二三日を海邊で持ちたいと思つて來た。修次の思つた通り海の詩も書けたら書かうと思つた。波の音に耳をすまして聞入る自分を見出したくも思つた。而してそれよ

りもなほ彼女の欲して居た事は東京を離れたかつたのだ。夏の好きな彼女にとつて夏の暑さはそれ程不快なものではなかつた。街の中の彼女の家にも汗を冷やす位の涼風の過ぎる日はあつた。避暑といふものは海邊よりも山よりも我家にあると信じてゐる彼女は今來た海邊の家が必ず涼しいものとは思へなかつた。又東京を離れたかつた。二三ヶ月も前から願つた事ではあつたが家の事情がそんな餘裕を彼女に與へなかつたのだ。せめて二三日でもいゝ東京の地を離れる事が出來れば。そんな氣持で彼女は此處迄動いて來た。

宮家の別莊の間の道を子供達の騷ぐ歩調に合せてお鈴も自分が十五六の時代に返つたやうな氣持で海岸へ降りて行つた。子供と一緒に騷ぐだけでも今の彼女には淋しい喜びであつた。

砂の上には所々に海水帽が見えた。水に入つて居る人の方が多かつたけれど、お晝間近かなので大きなタオルを肩に歸つて行く群も大分あつた。海水帽の周圍から強い日はお鈴の肩や腰や足を照りつけた。而し風は大變に涼しかつた。かなりに大きな波のうねりは絶間なく後から後から續いて來た。

『お姉樣、今日は少し波が荒いのでせう。

『さうね、昨日は靜かだつたのよ。それに日曜日だつたから大變にぎやかだつたの。』

四人の子供は下駄をぬいで了つた。お鈴も一所に乾いた砂の上に下駄をおいて久しぶりでおづ〳〵と水に足を入れた。彼女を中心に五人手を連ねて波を追ひかけたり逃げたりした。

ジャ〳〵と足が入つて行く所で一番末の明子の手を引いて追ひかけつこをして遊んだ。額や顎ににじみ出た汗を拭つて彼女は子供達に歸る事を促した。彼女自身も歸りたくはなかつた。もつと波に戯れて居たかつたが餘り暑かつたのと、靜代や修次に迎へに來る世話をかけまいと思つたのとで子供達を急がせた。其時又綾子一人が駄々を云ひ張つた。お鈴は綾子の駄々に驚きもしたが四人の中では如何してか綾子が一番可愛く思はれるやうであつた。やうやくの事で泣き出しそ

うな綾子を納得させて今度は少し廻り道をして歸つて行つた。お鈴は綾子が容易に人になつくと共に一番强い我儘者である事を思つた。手のかゝる子供だけに又樣々な苦しみを其の綾子の爲に我身に負はせて見たくも思つた。

『さ早くかへりませうね。叔母樣やお兄ちやんが待つてゐらつしやるでせう。早くゐらつしやらないと明子さんに負けますよ。』

お鈴は綾子に向つて何度も斯う云はなければならなかつた。お鈴の手に下がるやうにして歩き遊つて居る綾子を機嫌よく歩かせる事は暑い暑い日中に物倦い程不快にも思はれた。終には默つてぐん〳〵と綾子の手を引いて元氣に行く三人の後から追ひついて歸つて來た。

『さあ暑かつたでせう。皆が遅いから兄ちやん今迎ひに行かうと思つて居た。』

『綾子さんが歸るのいやだつて鈴の云ふ事を聞かないの。路路ぐず〳〵云つて鈴が手を引つ張つて來たのよ。ね坊ちやんも明子さんもおとなだのに……』

みどりは姉らしく二人を省みて玄關へ入つて行つた。

お鈴は子供達の世話をしながら其處で一所に膳に向つた。東京の家ではお鈴と子供達の間には何となく主人と召使ひの心持があつた。又靜代や修次に對しても主人の弟妹だと云ふ感じが離れなかつたけれど、今お鈴は誰も彼もが同等の友人のやうに思はれた。修次はお鈴が森田の家へ女中に來て一年後に上京して來た主人の弟であつたし、靜代はお鈴が主人の家を下つて後に上京して來た妹であつた。お鈴が初めて森田の家へ上つてからもう六年も過ぎて居た。斯んな事がお鈴をして主人を離して靜代や修次を見る目を自分と同等に思はせるのだつた。

晝食後暫く休んで居た間に東京の色々の話が三人の口を傳はつた。靜代の口から、從兄の孝三が嫂の出産を知らせに來て二三日遊んで歸つた事がお鈴にははつきりと告げられた。

『まあそうで御座いますか、御嬢様で御座いますか。御坊ちやまで御座いますか？』
お鈴は一言でも多く何か云はなければならなかつた。自分の心の激しい動揺を抑ゆるには、そして丁寧な言葉遣ひをした。
『だつて、たしかそうね修次さん。孝三さんは女つて云つたでせう。』
修次は黙つて頷いて庭の方へ目を向けて了つた。
『奥様も御子様も御丈夫で御座いますか？』
『えゝ大變輕かつたやうよ。』
靜代はまだ出産といふものを其の場合に居た事がなかつたのでそれ限りで口を結んで了つた。お鈴もそれ以上此の話題では何も云ふ事がないので黙つて了つたが二人の前に坐つて居るのが何となく氣不味く成つて來た。孝三が來た事はそして彼女と入れ代りの有様になつた事は他から考へて大變いゝ具合であつたに違ひなかつた。お鈴もそれでよかつたとは思ふものゝ矢張孝三と入れ代りになつた事が大變悔いられた。
『修兄さん海へ行きませうよ……鈴と一所に。』
風呂場で水悪戯をして居た四人の子供は其時一度に部屋へ馳け込んで來た。
三人はお互に救はれたやうな氣持でホツとしてすぐ海邊へ行く事が決行された。
『小母さんに留守を頼んで行きませう』
靜代は緣側傳ひに續いて居る隣りの部屋の人に斷りに行つた。其處は夏冬の此の別莊に來る間の留守番の夫婦が一間を使つて居た。去年お鈴が來た時とは人が變つて居たのでお鈴は昨日一度挨拶に行つた限りだつた。
今度は皆が海水着を身につけた。靜代は弟よりも小さい身體だつた。紫地の派手な海水着がピツタリと身體につい

て痛々しい程にも思はれた。眞白に生地をかくした白粉は彼女の年を五ツ六ツも若く見せた。お鈴が最初に主人の家で靜代を見た時は若い美しい人だつた。其後半年程過ぎて、朝に夕に近くの教會へ行くと聞いてからの靜代は急に夏から秋の終りに來たやうな變化をお鈴に思はせた。白粉と頬紅との香は消えて髪迄が無造作に束ねられてあつた。其の變化に驚ろいたが今又以前の靜代を見るやうな思ひがした。去年も斯のやうな若さを見せて海邊では青年達の間に話を持出されて居た。

お鈴だけは浴衣の儘で皆の後になり先になり綾子と勉の手を引いて行つた。彼女は如何しても海水着を着やうとはしなかつた。肥つて居るのが氣が引けたのと又浴衣の袂から身體を吹き拔ける潮風が欲しかつたのとで靜代や修次が海水着を出して來て色々にすゝめたが遠慮といふ氣持を少しも持たずに斷つて了つた。

『去年、一昨年だつたか皆で妙な格好で寫眞を寫したね、家にあるけれど皆面白い風をして居るね……』

海邊に近い別莊の松原の横手を通る時、修次は後から來るお鈴を待つやうに歩調を徐めて斯う云つた。

『あゝさうで御座いましたね。皆樣海水着をお召しに成つて。――本當に面白い格好でしたね、乳母さんが帽子を被つて綾子樣を抱つこして――』

『さうだあの時の乳母やの格好が一番振つて居る。たしか宏も居たね、宏が皆の中で一番よく寫れて居た。今年もあの人が來て居て又寫して上げませうと云つたのだが姉さんが如何しても駄目なのさ。四五日前に歸つたやうだ。』

『さうで御座いますか？矢張り此の前の所に來て居らしつたのですか？』

お鈴は可成り輕々しい氣持に成つた。幸三と此の修次とを比べて見ると鈴は何時も修次の氣輕な性質を美しい所だと思つた。お鈴は自分の周圍の人々から成るべく善い所を見出さうとする性質を持つて居た。少し位の缺點を見せられてもそれを善い方に持つて行つて了はうとする性質だつた。一時は可成りの敬意を持つて見て居た主人を或る一事から疑ひ初め

た時お鈴はそれを悔いた。誰人にも必ず美しい所があるに違ひない。それを見出さなければ愛といふ心は持てないのだ。彼女はそう思つて世の人を見る自分の目を何度も洗ひ清めやうと努めた。

修次は幸三よりはるかに面白い青年に思はれた。すべての挙動にユーモアな所が多かつた。恐らくは誰でもがそう見た事であらう。而しお鈴は自分だけが幸三の美點を知り盡して居るやうで嬉しくもあつた。外に表現れない幸三の性格にはお鈴の共鳴する所が多かつたのでそれはお鈴のみの物であつたかも知れない。或る嬌態を修次の前で無雑作にする彼女は其の嬌態を幸三の前では心に持つて居た。

お鈴が奉公して居た頃の朋輩がまだ一人勤めて居るのがあつた。彼女がお鈴に向つて、幸三よりも修次の方が女性といふものに憧れて居ると云つた事をお鈴は思ひ出した。思へば、そうも思へる事であつた。お鈴は又其の朋輩から修次が嫂の友人の妹で暫く世話をして居た人に或る心持を持ち懸けた話も聞いて居た。其爲にか早速に其の人は修次の兄や嫂の世話で嫁いて行つて了つたとの話も聞いた。もし修次の心を失戀と云へるならば自分を如何見て居る事だらうとお鈴は思つた。而し今の場合そんな事を考へるのは止やうと彼女は又思ひ返した。お鈴から見た修次は少くも過去の事を忘れて居るかのやうであつたので。

波の音がいよ〱近く成つた。路を曲ると海はすぐ目の下に展がつた。眩ゆい日の反射が小道を來た皆の目を射た。波は荒かつた。去年富士を眺めた邊りに目をやつたお鈴は只其處に重なり重なつた強者のやうな雲のみを見た。一番小さい明子の手を取つてヒタ〱な水に足を入れながらお鈴は靜代や修次の姿を見失ふまいと水の面を眺めて居た。波間に見え隠れする赤や青の帽子と、日の前に起つたり伏したりする波の態度とは彼女の心を無限の中へ引込ませて行くやうであつた。水に身を入れては砂に横たはりに來る人々の肩から両腕は氣持よく焼け色に成つて居た。丈高な外人と、肥大た彼の夫人らしいのとが、砂から身を起して波に近づいて行くのもあつた。此處の海岸は驛から一里以上も離れて居るので一日

の遊び客といふよりか別荘の人々が多かつた。從つて子供達には玩具やタオルを持つた女中がついて居た。お鈴も他からそう見られる事を承知して居た。

　而し彼女の心にはそれ等の日に負けまいとする思ひがあつた。彼女は遠慮なくすべてを観やうとした。强烈な日光にさへも平然として瞼を上げて居た。少し海に馴れて來ると彼女の心は何時しか靜代達とはなれて了つた。明子を自分の思ふ方向に歩かせて見た。餘り人の居ない彼方の砂地へと心を急がせても見た。何かしらが自分の心に訴へて來そうに思へてお鈴は落ついて居られなかつた。又寄せては退く波の樣々や、派手やかな人魚の群や、それだけでは物足りないやうな心がお鈴の全身をおそつて來た。今は彼女は明子を抱かゝへて水の中へ入つて行つた。踵迄來た水は波の來る毎に增して行つた。水に入り馴れない彼女には膝の邊りへ來ると何となく恐ろしい氣がした。寄せ來る波は如何に小さなものでも恐怖的な魅力を以て彼女に迫つた。其の波に自放的に彼女は浸つて居た。幾分か氣分が落ついて來た事を知つてお鈴は水にヒタヒタ音を立たせて人々の居る方へ來た。靜代も修次も三人の子供達も砂地に身を埋めて居た。明子と共に走るやうに其處へ行つたお鈴に子供達は一度に聲をかけた。

『鈴、何處へ行つて居たの。明子ちやんも。』

　お鈴は子供達に笑顔で答へて其處へ坐ると急に全身が疲れて來たのを感じた。傍の子供達の手を取るのも、砂を掴む事さへ物うく思はれた。肩だけを日に避けて燒きつける暑さにも動かずに居た。砂も中々に暑かつたが風は波の上を渡つて氣持よく彼女の着物の間を通り拔けて過ぎた。も一度水へ入ると修次が云つた時、お鈴だけは殘つて居た。幾分か休まれた身體を起して砂の上に山や穴を作つて居た彼女は時々波と共に逃げて來る子供達を迎へた。お鈴にとつて其の遊びの時間はかなりに長いものであつた。輝く波頭は彼女の目には倦いたやうに思はれて來た。

　靜代が歸ると云つた時は彼女は束縛から脱れ得た程に心持が輕く成つた。歸り道では皆疲れたやうに默つて居た。馱々

子の綾子も大分疲れたらしく何も云はずに歩いて居た。

三時間位居た事と思つたその時間も家へ歸つて來て見るとやうやく一時間半位なものであつた。留守の間に隣りの人が風呂の火をたきつけてくれたのでもう微溫湯に成つて居た。彼女は其の疲れた身體で大きな火箸に眞赤に成つた薪をはさんだ。お鈴は奉公して居る時何時も風呂番をした事を思ひ出した。此の別莊の馴れない薪の火風呂もお鈴には最初ではなかつた。それだけ懷しい氣がして火箸持つ手を動かした。

夕食をすませた時又彼女は海へ行かうと思つた。

彼女は此處へ來る目的であつた夕べの海を見に行こうと子供達を誘つた。靜代と修次は疲れたからとて四人の子供を連れてお鈴は海岸へと向つた。子供達を喜ばせる爲に彼女は自分の妹が學校で敎へられた唱歌を歌つて歩いた。此の六月迄語學の稽古をして居た彼女は又其のリーダーの中の面白い話を簡單に語つたりした。

無邪氣な子供達は彼女の非常な慰めと成つた。

其の子供達にもやがては浮世の荒波が來るのかと思ふと自分の世界が餘りに苦悶なだけに憐れな氣がした。もうすでに暮れやうとして居る砂地に彼女は身を横たへて水平線の邊りに眼を見やつた。子供達も同じやうな形をとつて砂を手に摑んで居た。あい色に暮れる海よりも多少淀んだ色を帶びた日の夕方の海は悲壯な感じをお鈴に抱かせた。それは美といふものではないかも知れぬ。或る勇大な壯大な感じがする。やつぱり美の極點だ。色どられた美以上、淸められた美以上のたそがれの海の美だ。お鈴は斯んな事を思つて身動きもしなかつた。山に入る日は砂地から汀から寄せ來る波頭から順に夜の影次を增して行つた。岸の方が暗がりに成り、次いで水平線に迄その闇が擴がるともう陸も水も夜の中で溶けこんで了ふ、お鈴はふと幸三の事を思ひ出した。學校の夏休みを故郷へ歸るといふ前、丁度それは一月半程も前に逢つた切りの幸三の事を思ひ出した。そして自分が來た前に遊んで歸つたといふ事も思ひ出した、靜代も修次も又お鈴自身も幸三の事

を話出さずに避けて居たので皆忘れて居たかのやうではあつたが、少し落ついた時が來ると彼女は物淋しさにおそはれそうで苦しかつた。東京を少しでも離れやうとした事も他人の中へ入つて心持を變へて見たく思つての事であり、それ故に海邊のたそがれをも憧れて此の地に來たお鈴であつたのだ。所が此處へ來るとすぐに幸三の行を聞かされて了つた。海の美や子供達の間で僅かながらも心の平和を恢復したいと願つて來た彼女は到底此處に居ても落つけさうもなかつた。海は憬れた程に美しかつた。子供達はいゝ慰めであつた。而しなほ彼女の心は充たされなかつた。自づと淚が頰を傳つてお鈴は暗の中に星のまたゝく空を見上げて嘆息した。

　其處此處に浴衣の群が動いて居た。風は肌寒い程に吹きまくつて居た。夜の波は白い横腹を見せてドーツと砕けて行つた。お鈴には夜の海は何となく恐ろしく思はれた、起上るのさえ恐ろしく成つて來たので追ひかけて來るやうな波に追いてかへらうとした。

『今歸るの？』

　お鈴が不意なのを驚く間に修次は五人の前に立つて居た。

『アラツ、何時ゐらつしやいましたの。』

　其の聲には驚きの調子だけしか無かつた。

　修次は少し前にお鈴が耐えかねる思ひを空に嘆息した頃彼女の後に來て居たのだつた。失戀詩人として考へて居たお鈴が愉快氣に子供達と遊んで居るのを見た修次は何だか裏切られたやうな感じがした、幸三とお鈴との親し味がどの位の程度迄進んで居るか修次には凡そ解つて居た。從兄の日常を思ふとお鈴が如何に深く彼の心に入つて居るか又あれ程に女に戀されたならと修次は羨ましいとさへ思つて居た。而し其の二人は今は避けられて居た。若人の戀が害のみの事を知つて森田の主人は幸三とお鈴とを成るべく逢はせまいと苦心した。お鈴の家へ直接に話さうかともしたがお鈴の親しかつた朋

聲の眞心からの頼みに縋てを彼女に一任して了つた。

お鈴は人々の自分に對する心遣を皆知つて居た。而しそれかと云つて幸三への心持は如何する事も出來なかつた。彼女は又修次の受けた心の傷手も同情して居た。又それはほんの一時の輕い戀心であつたかも知れないが其の當時は如何に修次も苦しんだ事であつたらう。其の心持を通り越して來た今こそ修次には從兄の心持もお鈴の心持も僅かながらも汲み取る事の出來る自分のやうな氣がした。

夕闇の中にお鈴の苦悶の聲を聞くやうな思ひで修次は默つて了つた。人々の前では心から愉快氣にして居るお鈴の胸の思ひに誘はれて云はうとした笑談も口を出ずに了つた。「命短し戀せよ乙女……」從兄がよく此の歌をオルガンで彈いて居た事を修次はフト思つた。お鈴が森田の家へ來た時には何時でも此の歌を聞くやうな氣がした。幸三の彈くオルガンの傍に立つて只其事のみに全心を傾けて居るかのやうなお鈴を時々修次は見て居た。それだけに今の二人の苦しみは如何に深いものだらうと思つた。

『兄ちやん皆をお迎ひに來たのよ』

しばらくして修次は子供達に斯う云つた。

『皆さんもう歸りませうね。兄ちやんがわさわさお迎ひに來て下すつたのだから早く歸りませうね』

お鈴はみどりと綾子の手を引いて元氣よく云つた。五人は公園の方へ步いて行きながら又小聲で唱歌を唄つた。坂道や自然石の大きなのを見るとお鈴はスロープだのグレートストーンだの云つてみどりに敎へて居た。

『お孃樣、お兄ちやんの事は何とおつしやるか御存じ？』

『ミスター修次、ミスター幸三』

みどりは得意氣に答へた。すぐ後から綾子も姉の口眞似をして云つた。

『ミスター幸三兄ちやん』

笑ひながら云つた此の聲がかなりに大きかつたので修次は思はず振返つて見た。子供達の元氣な顔だけが明るく見えてお鈴の立つて居る所は木陰で燈火を遮ぎられてあつた。修次はそれを機會にお鈴に話しかけた。

『鈴はまだお稽古に行くの？』

『いゝえもう六月限りで止めて了ひました』

『如何して、ぢやもうちつともしないの？』

『いゝえ今度は一人でして見やうかと思つて居ります。それに何だか餘り氣が落つかないので暫く休んで居たいのです………』

『もう大分行つたんだらう。リーダーをして居るの？』

『えゝさうで御座います。行初めてから二年以上に成ります。リーダーも五迄行つたのですが今度一人でゆつくり讀み返して見たいと思つて。』

『鈴のやうに歌や詩が自由に詠めたらいいね、今日ももう何か詩が出來たのだらう……』

お鈴は赤い顔をして笑つた。小説を讀む事さえまれにしかない修次が斯んな事を云ふのは何だか意外だつた。二人はそれ限り默つてましつた。修次は此のお鈴と同樣に文學に入つて行つた從兄を考へて居た。以前から親しい二人が其處に又共鳴し合ふ感激を進行させて行く事を羨ましく思つた。お鈴は忘れやうとした幸三の事ばかり胸に浮んで仕方がなかつた。今は片時も幸三の事を思つて居なければ淋しくて耐えられないやうにさえ成つて了つた。子供達は時々思ひ出したやうに修次やお鈴に話しかけた。そんな時彼女は救ひ主を見出し得たかのやうに子供達の話の中へ入つて行つた。家の近くへ來た時彼女は滿月に近い月を森の上に仰ぎ見て子供達に示しながら

『十五夜お月さん御機嫌さん』

と聞きおぼえの歌を口ずさんだ、彼女はそれだけしか知らなかつたので何度もく子供達と繰返して歌つて門を入つた。

翌日は大變に涼しい日であつた。冷々する風が絶間なく風鈴の音を立てゝ居た。波の反響が裏の森に當つてはサ…ッと退いて行つた。往來の馬車馬の立髪は勢よく風になびいて過ぎた。如何かすると强い風が來て窓ぎはの青桐の葉を落しては吹きつけた。

お鈴は午前中に帽子も被らずに子供達の手を引いて海岸へ下りて見た。波は昨日よりはるかに高く海草の或る物が其の横腹に躍り上つて居るのが見えた。時々砂が巻き上げられて彼女等の身邊に當つたり飛んだりした。其の荒れ氣味の濱邊にも日に焼け切つた男の群が砂の上に横たはつて居た。お鈴のやうにたゞ立すくんでゐる女達もあつた。到底水に入る事は出來なかつたが彼女は何となく落つい氣持になれた。物凄い波は彼女の全心を傾注させるのに充分であつた。彼女は夕暮の海よりも悲壯な或物の此の朝の波の色や形の上に見たと思つた。何の思ひもなく彼女は只凝つと立ちつくした。子供達は一度二度來た强い風は恐れて歸らうとお鈴を促した。促されて彼女は氣づいたやうに子供達の恐怖に充ちた顔に强い愛着を感じた。一人一人撫めるやうにして自分の頰をすり寄せた後、フト彼女自身も耐え難い恐怖に慄いて急ぎ足に子供を歩かせた。

波の音が聞えなく成つた頃には森の反響が彼女の耳に傳はつて來た。其日は遂にそれ限り海へ行かなかつた。夜にはなほ激しく森は鳴つた。晝の間は見えなかつた入道雲が所々に輝く星の間を上から森の上へと急ぎ足で走つて居た。

翌朝おだやかな海に入つたお鈴は晝後間もなく馬車に乗つた。晴れた水面はギラくと邊りを反映して居た。

『さやうなら皆さんによろしく』

『さやうなら、又東京でお目にかゝりませう』

靜代も修次も子供達の後に立つてお鈴を見送つた。
馬車にはもう三人の乘客があつた。二三丁過ぎた時又其處で二人連れが乘つたので殆ど一ぱいに成つた。其處にお鈴は前の方に腰かけなければならなく成つたので又丁寧に靜代達の方へ頭を下げた。子供達は兩手を振つて居た。修次は手にした團扇を高く上げて振つたので馬車の中の人は皆一度に笑つた。道はゆるやかな勾配をつけて右へと曲つて居た。見送つて居た人々は小さく成つて靑い團扇だけがゆれて居るやうにお鈴には見えた。

『さやうなら』

彼女は口の中で又云つた。それに答へて彼方からも聲が來たやうに思はれた。
富士は晴れた空に雄姿を現はして居た。強い日光に霞んで居た江の島も次第に近く明瞭りと草と土の色を見せて來た。それが馬車の窓を次から次へとのぞいて行つた。彼女はわくわくした心で今は歸つて行く我家の事のみ考へて居た。落ついた時を得やうとして來た海邊も結局は我家よりよい所ではなかつた。

我家へ　我家へ、

お鈴は二日離れて居た我家が此の上もなく新らしく懷しくもの丶やうな氣がして自づと微笑まれるのであつた。

# 選後に

（第二回募集小説を讀みて）

島崎藤村

今月は當選作として左の二篇を取ることにしました。

『女の客』　小林信

『遊び地』　本多たけ

『女の客』はずつと以前に情人に死別れた夫が今の妻と世間並な結婚をして、結婚後の家庭も次第に蠟を嚙むやうに味氣ないものとなつて來たが、それを内に省る事も殆んど失せ果てたほど毎日機械的に子供達の爲の生活を繰り返して居るといふ行き詰つた空氣が描き出してあります。そこへこの家の主人に取つては以前の恩人の娘で、二三年前まではまだほんの子供々々した女學生らしい袴などを着けて居た人が遙かに女らしく出來上つた姿で、しかも亡き情人の文遣ひまでしたことのある忘れ難い記憶をもつて、訪ねて來ることが書いてあります。この『女の客』を妻から夫の魂を奪ひ去るほどの家庭悲劇の女主人公でもなく、またそれほど夫の眼をあけに來るやうな左樣いふ意味の訪問者でもないのです。むしろこの『女の客』は快活な、明け放しな性質で、妻さへ悦んで迎へて呉れるなら、家庭の人達の友として數日を共に語り、

共に眠り、またこゝろよく別れを告げて行くやうな訪問者であるのです。ところが妻はこの客を悦ばない。そこからこの作に描かれてあるやうな一種の家庭の空氣が醸し出されて居ます。これはアトモスフェアを描いた短篇と言つていゝ。それほどこの作に出て來る人物は皆働いて居て、妻の妹でも、二人の子供達でも、無駄がなく描けて居ると思ひます。しかしこの多望な作者にも何か進歩のさまたげとなるやうなものがありはしないかと氣づかはれるのです。例へば作者は、『女の客』にあるやうな淋しい家庭の主人公が以前に情人に死別れて居ることを語りながら、どうして世間並の結婚をするやうになつたか、その大切な心持を語ることを忘れて居るやうです。さういふ男でも世間並の結婚をしたとは誰でもが傳へ得る報告であつて、あながちこの作者を待ちますまい。何か作者には一種の先入主となつたものがあつて、容易に他の報告を受け入れるやうな習慣を養つたのではありますまいか。熱心もあり、誠實もあり、行き屆いた筆づかひもあるが、どうも新鮮を缺くやうです。思ふに作者は自分の先入主となつたもの——例へばこれまで受けた教養といふやうなものと、眞に純粹なものを求めやうとする心と、その二つの矛盾に苦しんで居るやうな人でもありませうか。『三十に足りない妻は、美しくかざり、おとなしく家の中に引籠り、紋切形な毎日の雜事を繰返してさへ居ればいゝ質の女であつた。』とある言葉なぞも説明に過ぎるやうです。よく見たら、そのいぢ〳〵と内氣な、變屈な、何の思慮もなしに家庭の人となつて、二人までも子をなしたといふその細君こそ實際憐まるべき婦人の一人でありませう。

『避暑地』は可憐な趣に富んだ短篇でした。この作者には、自分の書いたものがこれでも創作と言へるだらうかと顔を紅めながら筆を執つて居るやうな、はにかんだところがあつて、その謙遜が先づ讀むものゝ心をひきます。この作の中に、

『お鈴は自分の周圍の人々から成るべく善いところを見出さうとする性質を持つて居た。少しぐらゐの缺點を見せられてもそれを善い方に持つて行つてしまはうとする性質だつた。一時はかなりの敬意を持つて見て居た主人を或る一時から疑

ひ初めた時、お鈴はそれを悔いた。誰人にも必ず美しい所があるに違ひない。それを見出さなければ愛といふ心は持てないのだ。彼女はさう思つて、世の人を見る自分の眼を何度も洗ひ清めようとつとめた。』

とした一節があります。『避暑地』に出て來るお鈴といふ娘はその洗ひ清めた眼でもつて、曾て奉公して居た家の人達をある海岸の避暑地の方へ見に行き、今は以前のやうな奉公人としてゞなく、同等の友人を見るやうな輕々とした離れた心で、舊主人の弟にあたる青年やその妹やそれから舊主人の子供達なぞをもう一度見直すといふところに、この作の特色がよく出て居ます。眼につくかず〳〵の缺點はあるにしても、さういふ缺點を忘れさせるほどこの作には好いところがあつて、樂しい心持は讀んだ後までも殘りました。海水浴の描寫なぞにも、この作者の眼はしのよく利くところがあらはれて居ると思ひました。

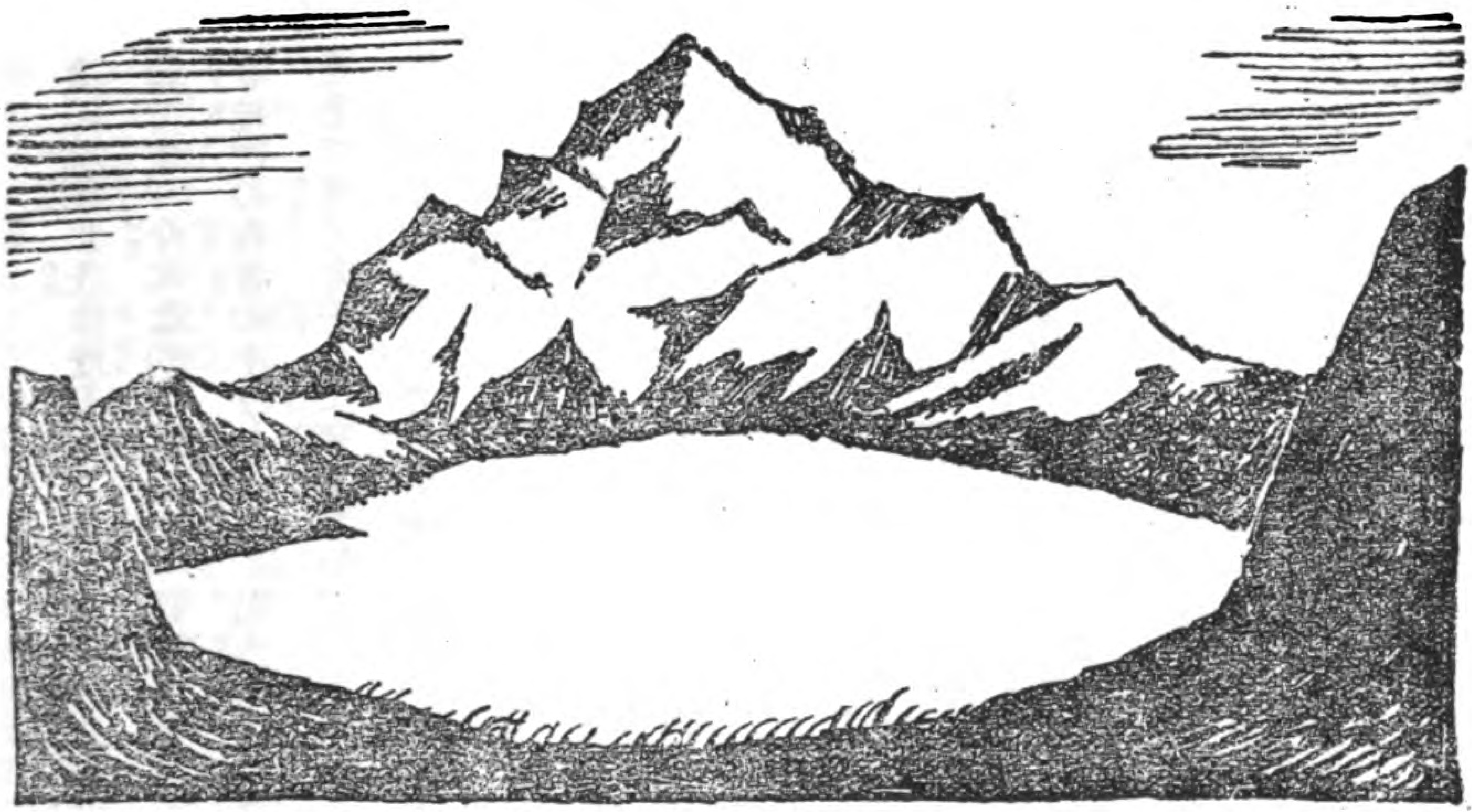
私は自分で自分に尋ねて見ました。もしこの『避暑地』を書いた作者のやうな人がもつと學問したら奈樣なものでせうかと。おそらくこの作者がもつと修業を重ねて行つて、幾多の書を讀み、幾多のすぐれた作に接し、いかに多くの作家が自己を適當に言ひあらはすことに腐心したかを知つた後で、もう一度『避暑地』のやうな作に筆を執る時があるとしたら、作者はこの作に半分無意識で書いて居るやうなかず〳〵の不適當な言葉を自分で訂正するやうになつて行きませう。そこで私は又、自分で自分に尋ねて見ました。もしこの作者がそんなに學問して、自分で自分の缺點に氣づき、それを補つたり整へたりすることを知つた曉に、果してもう一度この『避暑地』のやうなものを書くことが出來るでせうかと。それにつけて私の胸に浮ぶのは樋口一葉さんのことです。一葉さんは中島歌子といふ歌人を師としたことがあると言ひますから、歌の方の素養はあつた人でせうが、それでも小説の試作を初めた時分には隨分間違つた字を書き、圖書館通ひなどをして勉強した時代もあつたといふくらゐで、學問といふことにかけては當時大學の文科に居た上田敏さん達には及ばなかつたと思ひます。ところが、あまり學問したこともない一葉さんが『たけくらべ』のやうなものを書いて出るのに、せつ

せと本を讀んで居る若い友達の間にはまだ創作らしい創作も生れて來ないといふので、そのことが靑年時代の私達の間によく話題に上りました。そこで創作と學問とは別物だ、學問は反つて創作の邪魔になるとまで言ひ放つた人もあつたくらゐです。今になつて思ふと、邪魔になるくらゐの學問はまだほんとうの學問には成つて居なかつたのです。矢張私は『避暑地』の作者のやうな人に、出來るだけ勉强することを勸めたい。出來るだけ多く讀書もして頂きたい。多くを知つて、そして多くを忘れて頂きたい。

今月集まつて來た作の中で、『女の客』と『避暑地』の外に、注意すべき作と思つたのは左の十一篇でありました。

『琉球の夏』　池宮城　美登子
『心の破片』　岡野　創
『ある不幸な心』　伊東　喜能子
『中に立つ者』　雨宮　靜子
『困惑』　高行　紀子
『ある乙女の手紙』　上野　久美子
『螢』　金子　梅
『結ばれしもの』　内藤　けい
『死に脅ゆ』　竹内　多仁子
『秋霽の頃』　草路　千代子
『都まで』　齋藤　ちかゑ

右のうち、『琉球の夏』は作者の心の形見とも言ふべき作でした。作の出來不出來は別にしても、讀むものゝ心に迫つて來る力はありました。猶、この作に書いてあるやうな男女の關係や、『結ばれしもの』に取扱つてある同性愛に就いては言つて見たいこともありますが、又の折としませう。



# わが生ひ立ち

佐藤春夫

## 學校

その年ごろのすべての子供たちがさうであるやうに、私も學校といふものに就ては憧憬を持つてゐたやうに思ふ。それにも拘らず、學校は私には少しも愉快なところではなかつた。私は私の生涯に於て學校から敎へられたものは何一つないといふ反抗的な氣持を、私の知つてゐる限りのあらゆる學校に對して抱懷してゐる。外のことは今言はないとして、小學校に於ては、私はそこではたゞ口を利いてはいけないといふ悲しい時間をあとへあとへ與へられたにしかすぎないと思ふ。

先生の敎へるすべての事は私にはみんな知つてゐることばかりであつた。五ツと五ツとを加へて幾つになるかといふばか〳〵しい問題の爲めに、私は

一時間ものをいつてはならないのである。片假名を一ツ覺えるために私は一時間ぢつと眞正面を見つめてゐなければならないのである。そのやうないやな時間を私に與へた先生といふのは、子供の目にもすこぶる愛嬌のない顏つきの小男であつた。顏つぺたに大きな瘤があつた。さういふ外貌がその人の心持を氣むづかしくしたかも知れない。大へん恐ろしいきびしい先生であつた。

私はどうも、この先生に憎まれてゐたのぢやないかといふ氣がする。もしさうだとすると外に理由はないから、きつとそれは私があまりその先生の顏を、教室でしげじげと見つめすぎたからであつたかも知れない。でも私は無言の行をする間さうでもするより外に仕方がなかつたのである。

私の頭のなかには不斷に動いてゐる何ものかがあつて、私はそれを一つ一つ表現しないではゐられない。私の表現慾はどうも異常であつたらしい。誇張ではなく、教室に於ける私の一時間は、ものを言ひたいといふ劇しい衝動との苦鬪の爲めに費された。私は鬱屈した。死ぬほど苦しかつた。それに、今ごろ、家ではお母さんがどうしてゐるだらうかといふ心配がふと私の胸に浮ぶことがあつた。私は自分の外に自分のやうな苦行をしてゐる生徒がないのが不思議であつた。私はさういふ仲間をさがさうと思つて右顧左眄した。私はよそ見をする行儀の惡い生徒といふことになつた。私はいつもぼんやりとしてゐる。先生がものを問ひかけても、いつも問はれたことが解らない。とんちんかんな返答をする。

そのころ、私がどんなことを考へてよくぼんやりとしてゐたかといふと、例へば、學校には塔がある。塔と言つてもただ三階だが、そこのてつぺんには大きな太鼓がある。いつも朝と晝と授業の始まる時刻には、そこらに散ばつてゐる生徒たちに合圖するために、小使がその大太鼓をたたく。その太鼓が一たいどれぐらゐ大きいだらう？といふ事。それからその三階は晝間でもうす暗くつてそこの天井には蝙蝠が巢を吸ひつけて巢喰つてゐるといふ話であるがそれは果してほんとうであらうか？といふ事。さう言へば夕方などにその三階のあたりをよく蝙蝠がうろ〳〵飛んでゐたのを見たことがあつ

たやうに思ふ事。そのうす氣味の惡い三階へ、惡いことをする生徒が時々ひとりで留め置きを喰はされることがあるさうだが、本當だらうか？本當に違ひない。現にそこに蝙蝠が巣喰つてゐたといふのは留め置きを喰つた生徒が見て來てみんなに敎へたからわかつたのではないか。私はさういふおそろしいところへひとり取殘されて、そこで夕方になつてくることを考へてみる。遠くの方で梟が嗚くのだ。一たい梟といふ鳥は、お母さんの話によると、夜どほしひとりでゐるのがさびしいから

弟子欲しく〳〵

と言つて啼くのだといふが、子供が、本當に夜中に泣いたからと言つて、梟が、その子を自分の弟子にしようと思つて搜しに來るなどゝいふことは信じ難い事である……。

あだかも夜になつたかのやうな心ぼそい氣持がする。しかも私のまはりは本當は明るい晝間で、先生はしきりに五ツと五ツとで幾つになるかと言つて叱鳴つてゐるのである。先生は私の名を指す。私は「梟の話は嘘です」と答へようと思つて、氣がついて默つてゐる。先生は長い竹の鞭で黒板をぴしやりとたゝいて「何度言つても解らないのですかツ！」と叫ぶ。

……窓の外は明るい。その日向に、何だか知らないがピカ〳〵と非常に光るものがある。一たい何だらう？、早く時間がすむといゝ。そこへ行つてあれの正體を見なけやならない！突然、私の耳はひつぱられて、「何故よそを見るのですツ」と先生の聲がガアンといふほどひゞく。

私はその外には何も積極的ないたづらをした覺へはすこしもない。ただ私の注意が散漫になり勝ちであつたのである。しかしその罪は私にはない。先生は私の注意を換起するやうなことは一言も言はないのが惡いのでる。五ツと五ツとで幾つになるか、そんなことを私は兩片をひろげて數へなければならないほど馬鹿ではない。そんなことはもうとつくに濟ん

だものと思つてゐるのに先生はいつまでも五ツと五ツとを繰返すのである。

先生はなぜ、私の耳をひつぱる代りに、「あそこに光つてゐるものはあれは何ですか？」と私に質問させてくれないだらうか……

お父さんもお母さんも、私の品行點がなぜ滿點でなかつたかを知らない。私の學業がなぜ優等でなかつたかを知らない。――ただ不思議に思つてゐる。何故かといふのに私は入學以前に、已にひとりでいろ〳〵の子供らしい書物を讀むことも出來たし、また父がやつてゐることを見覺えて私は自分で並べた十七文字を短冊に書きもした。さうして五ツと五ツとはおろか、五十と五十とを加へることも、家庭でならば一口で答へることが出來たのである。それ故、私の父と母とは、私が優等の生徒になれないのは、私があまりに人見知りをして先生の問ひに對してきつぱりとものが言へないのがその原因だらうと信じてゐたらしい。――それも本當に違ひない。私は學校では休みの時間にも誰とも遊ばないほど內氣でもあつた。

それでも私は一年慣れるうちに、學校の椅子の座り心地が不安でなくなつて來た。二年目から私はともかくも頭角を表はした生徒になつた。

私は、しかし、小學校生活に就ては直接にこれと言ふほどの深い思ひ出を持つてはゐない。それ故、私は小學校生活は子供にとつてはその生活のほんの無駄な一部分だと言ふ考を發表してもいいと思つてゐるくらゐである。さうして私のその時代に於て、直接に學校と關聯のあることで今鮮やかな印象として私に思ひ浮べ得られるものは、入學の第一日に、母につれられて櫻のある校門をくゞつた事と、私は小さな子供で、皆が一列にならんだ時、私は脊の低い方から數へて七八番ぐらゐだつたのを、つまらなく數へて見たことゝ、敎室の前にあつた大きな木犀の木と、それから始めて唱歌の時間になつて、私たちは本敎室からずつと遠い唱歌室へ行つた事。その敎室はひつそりとした竹藪のなかにあつて、そこで歌

をうたふのは皆にとつて樂しかつたことである。——私は私が最初に敎はつた唱歌を今思ひ出す。

「からす、からす、勘三郎、親の恩をば忘るなよ」

といふのであつた。まさしくクラッシックの感じを帶びてゐるであらう——二十六年の事である。また、私たちの小學校時代を通じて一番度々歌つたのは、

「煙も見えず雲もなく………」

と云ふ軍歌である。——これを口ずさむ時にいつでも私の心臟は幼くなるのを覺える。

## 性癖

私は人と口を利くのが嫌であつた。友だちは——今思ひ出せるやうな友達は一人もなかつた。また、特別なたのしみといふものを私は持たなかつた。土の上や紙の上や石版の上へ繪を描いたけれども、それとてもただほんのなぐさみ以上に熱中することはなかつた。畫題は多く鎧武者や、金モールの服の軍人や、軍艦であつた。それは偶然に殘つてゐるものによつてわかるので、私の記憶のなかに生きてゐるのではない。さういふ畫題のことを考へたり、また前に記したやうな軍歌を好んだとすれば、私は自分で氣づかないうちにやはり軍國の小國民らしい空氣に染つて育つたやうでもある。——ともかく私には特別の好きな事はなかつた。しかし私は、ひとりで默つてゐることが樂しかつた。どこでもいゝ、何でもいいちつと見つめてゐると、私にはとりとめのない面白いものや、考がそこから湧き出して來るやうな氣がした。私はものを見つめる癖があつて、それが人々には私を陰氣な子供と思はせたらしい。しかし私自身はその時、樂しんでこそは居たけれども格別さびしいやうな氣持は少しもしなかつた。それどころか私は自覺的に無用なことをしやべる人間を多少いやしむやうなつもりがあつた。私は子供らしさの少しもない子供を想像する。さうして私は人々から無邪氣なものとし愛せ

られたやうな覺えは全くない――父母の愛だけは別として。私は萬人をして自づとほほ笑ませるやうな平和の使ではなかつたと見える。

友達は無かつたのに、私には敵があつた。どうしたわけであつたか、私は困つたことに實に下劣な敵をひとり持つことになつた。私よりは二つ三つ年上の、貧乏な家の子で、近所のガキ大將であつた。そいつが學校ではもとより・その行きかへりにでも見つけ次第私をなぐりつけた。彼がどうして私をそんなに憎んだか、私には今でもその理由がわからない。ただ私がいかにも弱さうな子供で、しかも外の同じ種類の子供のやうに彼に向つておべんちやらを言はないといふことだけが不都合ならしいのである。それよりもただ私の顏がその子の反感を衝動的に呼ぶかとも思へた。それ程に理由なく唐突なのであつた。私はその子の目から逃げまはつてゐた。狼に追かけられる兎を私は經驗した。さういふ厭はしい日が二年ぐらゐはつづいた。そのうちに敵は私のことをいつかだん／＼に忘れてしまつた。私は惡夢からのがれたやうに吻としたけれども、しかし、その恨を私の方では忘れなかつた。私はいつかあの謂はれのない暴虐に報ひてやらうといふ念に燃えてゐた。私は恩怨をなかなか忘れないといふので、家庭でも意地張りな子供らしくない子供といふことにされてゐた。一旦、怒つたりすれば私はなかなか解けなかつた。この點で私の次の弟の温順で、こだはりのないのが私と比較してよく賞讃されてゐた。

ずつと後のことになるが、私が十三か四になつた時であつた。私は自分が強くなつたといふ自信を得た――どうしてだか知らないそんな氣がしたのだ。或る日、私は私の舊敵が私の家の庭の一隅へ裏口から入つて來て、子守をしてゐるのを見た。私はつか／＼と彼の方へ歩み寄つた。それから私は彼に數年來の私に對する仕打を詰問した。その理由を訊ねた。彼は答へることも出來ずに、呆然としてゐた。もうそんな日の事は忘れてゐたのかも知れない。しかし私は叫んだ――

「さあ！　今までの仇を取つてやる。背中の子供をおろせ。撲り合ひをしよう」

私の敵の脊中から幼い子供を下して、それを安全な場所へ置くと、身輕になつた敵に對して、私は不意に彼の面へ唾をはきかけた。挑戰しておいて私は、彼の胸倉をとつて石垣の隅へ押しつけた。それから三つほどつゞけざまに撲りつけた。——今はつきりと光景を思ひ出したが、秋の日の照つてゐるひつそりとした午後のことであつた。目に涙を溜めた敵を見て私は、それを突放した。それからその場から立去つた。數年來の怨を私は心ゆくまでに晴した。たゞその私のなかに悔があつた。それは私の家の庭であつたが爲めに彼があんなに弱かつたのぢやないか。自分の領地のなかで威張つた私は卑怯ではないだらうかといふ反省であつた。そこで私はその次の機會に、町の中で彼を呼びとめた。それは、この間は自分の家であつたから、こゝでもう一ぺんやり直さうと言つたのである。彼は私の戰挑には應ぜずにそのまゝ一散に逃げてしまつた。私は外の子供たちがそんなに怖れてゐた喧嘩好きの小僧を一朝で征服してしまつた。聞けばこの時私の相手であつた男は、今は大阪の築港のなかで舟から舟へ、自分も小舟に乘つて餅を商つて暮してゐたさうであるが、人と喧嘩ばかりするので今は自分ではその商賣も出來ずに自分の家内にやらせてゐるといふ噂である。

私がそんなに強くなつたのは、今も書いたとほり十三四になつてからの事で、——さうだその年ごろになつて私の性情は一變したやうに見える。例へばアンデルセンの「即興詩人」のなかの、おとなしく、うぶで、正直な主人公アントニオのやうであつた私は、後に磊落で、機敏、アントニオとは正反對なベルナルドオのやうな少年に轉化したのである。

アントニオのやうであつたころの自分を私はもつと書く筈である。さうしてそれは小説といふよりは、一篇の童話であらう。

# 校正室より

□近頃何處に參りましても—小學校でも、中學、女學校乃至は高等學校、大學——家庭——でも忠義とか、孝道とかをどう云ふ形式で教授してよいか、昔風な、教科書的な忠孝、節義はどうしても現代の生徒、學生が受付けてくれず困まつて困まりぬいて居られる不平が總ての階級の家庭や學校に滿ち溢れています。本社はとの點に心憂してゐまして長谷川氏及土田氏に忠義、孝道の近代的觀念の解釋を求めました處、兩氏とも喜んで執筆して下さいました。

□長谷川氏は社會と國家との觀念を明確にされた世界的學者です。國家がなくとも社會は存在し得ると組織的に論斷されて偉大なる業績を擧げられた世界的學者です。氏の今回の新概念の解釋の論文は國民の誰もが必讀すべき國民的大文字だと思ひ、どなたにも敢えて其一讀をお勧めする次第であります。

□本月號に發載すべき筈の懸賞當選文「農村婦人の生活」は、應募者多數のため、その銓衡に時間がかかり過ぎ締切りに間に逢はず、遺憾ながら十一月號で發表することにいたしました。隨つてその當選者は意外に澤山ある筈であります。農村婦人に世人がいかに趣味を有し、農村の救援にいかに國民が心を痛めて居るかが判りましてお互に同慶に存じます。

□芥川龍之介氏の「僻見」はと三ケ月休みます。それは氏が靜養してウント讀書したい希望からです。そのかはり數ケ月經てば同氏の異色の大文字が見られることと今から樂みに翹望してゐます。

□それから本月號は讀むべき文字が隨分多くあります。「美術の秋」、「榊」、女性の誰もが一讀さるべき有益にして趣味多き讀みものです。現代の女性にして美術の批評が出來ぬ方は女性としての嗜みなき人と稱されるやうになつたことでも近代女性の傾向が分明いたします。

□その他、有島、廚川、安成三氏が逝兒のことにつき執筆して下さいました。各家庭の讀みものとして非常に興味ある記事と思はれる。御一讀下さい。

□本誌五十二頁に十二月の懸賞募集があります。ぜひ一讀して下さいませ。


**女性改造定價表**

| 冊數 | 定價 | 郵稅 |
| --- | --- | --- |
| 壹冊 | 七十錢 | 貳錢 |
| 六ケ月分 | 四圓 | 郵稅共 |
| 一ケ月分 | 八圓 | 郵稅共 |

**註文の注意**

◇增大號其他定價變更に依る前金拂込み不足は不足金の拂込みを待つて發送す
◇註文は凡て前金とす。
◇前金切れの際は發送を停止す
◇外國發送の註文は些部郵稅實費を申受く(但し支那を除く)
◇見本は發送せず
◇郵便切手代用は壹割増のこと
◇拂込みは振替によらるるが最も便利なり

本誌廣告料 一頁 一等百圓 二等七拾圓

◎本社廣告取次所 博報堂 正路喜社 日本電報通信社

(九月號定價七十錢)

大正十三年九月十三日印刷納本
大正十三年十月一日發行

編輯兼發行人 東京市芝區愛宕下町一ノ一 平田貫一郎

印刷所 東京市本區新町一ノ一三 秀英舍

發行所 東京市芝區愛宕下町一ノ一 改造社 電話高輪四九九三 振替東京八四〇二

野口源三郎著

# オリンピアの旅

定價貳圓五拾錢　送料十七錢　四六判上製

## 新刊發賣

あらゆる事が競爭そのものとも云ふべき現代社會に於て、苟くも優勝者たらむとするものが其の心膽を練るに、近代的競技ほど好適のものはない、國際競技が年と共に盛になり、文明國民の凡てが各優秀な選手を之に送る事に熱中するも無理はない。實に現代の競技は單なる體育ではない、新しい紳士道――現代的武士道は之に依つて修業され、オリンピアは此の紳士道を發揮する場所である。

著者野口氏はオリンピック大會の出場選手であつて、日本出發より英米を經て歸還する迄の彼の旅行記が本書である。流麗達意の文、能く、接觸する風景、人物を描寫してある。新時代の青年紳士に此の一書をお薦する。

東京芝區愛宕下町

**改造社**

振替東京八四〇二

十二版

# 吉田絃二郎著

# 芭蕉

四六判上製

定價壹圓六拾錢

送料十七錢

俳聖芭蕉の晩年を流れた思想は何故もつと人間らしき生涯を送らなかつたかの悔恨の涙であつた。吉田氏はその風格にあこがれて彼が臨終の胸を掠めた淋しき人生觀に筆を及ぼし、そしてその弟子「路通」を配して傾向的に二人のニヒリストを描く、芭蕉研究の盛なる今日、先づ第一に奬めたきは氏が感激にあふれた本書である。「芭蕉」篇以外氏の近作中の特に秀れたる數篇を附す。

東京芝區愛宕下町
改造社
振替東京八四〇二

佛人 ジョルジュ・サンド著

田沼利男譯

# 鬼火の踊り

定價壹圓八拾錢 四六版寫眞三葉入

送料十七錢 三百卅三頁

## 最新刊

「獸的文學」にウンザリして何をか仰望止まざる、現下の日本の文壇に農村小說「鬼火の踊り」の一書を贈る。藝術と自然、詩と現實が本書の場合に於て一致し、そして世にも奇しき雙生兒の生ひ立ちを注意深く觀察し、敎育者の眼も及ばざる同性の生ひ立ちを、そして彼等が歌ふた田園の牧歌を、同性愛の持つ纖細な感情を、そして敬虔な南佛農夫の純眞さを經緯として織り出された上品にして情熱に富める小說です。著者は寫實派のバルザックに對して理想派の代表作家ジョルジュ・サンドである。本書は滔々淫猥に走る我國讀書界に對して一大衝動を與へるクランカルな作物であるし、旁々、農村問題の喧囂さるゝとき第一に讀まれなくてはならぬ有益な、そして趣味ある田園文學の隨一である。

東京市芝區愛宕下町

改造社

振替東京八四〇二

勝部謙造著

# ディルタイの哲學

定價壹圓八拾錢
送料十七錢

## 五版

彼は極めて平凡なる日常茶飯事を通じて、極めて深遠なる哲學を解き、趣味ある文辭にて精神科學、自然主義的世界觀、自由觀念論的世界觀、客觀觀念論的世界觀を明にした。此點に於て他の追隨の出來ぬ世界の一大天才だ。彼は哲學的思索の形態を捨てて所謂概念の核心を捉へ得た哲人だ。本書の第五篇藝術論に於て美學、詩學、創作の心理を說いた所など現代人の琴線に強く麗しく響く。世界に特立したる此人の哲理を說くに、我哲學界の少壯勝部氏は第一の適任者である。

東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二



イージーおしめ
決して衣服や蒲團を汚さず
外出にも絶對御安全!!
到る處の藥店にあり
特長
◎伸縮自在の純ゴム製おしめカバーにして體裁頗る上品◎大小便は決して漏れず、赤ちやんの衣類は常に清潔◎着脱に手数がからず、洗濯はたゞ水をかける計りで齋麗になります力サ張らず旅行携帶に便利
イージーおしめ定價
別製 小形 七〇銭 八〇銭
大形 八〇銭 九〇銭
純ゴム特製 一圓十銭 一圓卅銭
◎振替口座東京一三〇〇二番
直接發賣元へ御注文の節は送料十二銭添へ前金に御願ひ致します。代金引換は送料二十四銭切手御前送下さい。
發賣元
東京向島寺島町玉ノ井驛前
大和ゴム製作所
電話墨田局四二一、一〇三三、一〇三四番


三越の十月
秋の御支度は三越に限ります
秋爽かに、十月の好季節が參りました
三越では、今秋の新しい流行服飾や實
用向の家庭用品など、豐富に取揃へま
した。秋の御支度は品が良く、値段の
廉い三越へ御用命の程偏に願上げます
三越呉服店
東京市駿河町

大正十一年九月十三日第三種郵便物認可
大正十三年十月一日發行（毎月一回一日發行）
大正十三年九月十三日印刷納本




十月號

定價七拾錢（送料二錢）

東京秀英舍印刷